

医療の高度化に伴う看護系大学の高大接続問題 —看護職志望者の適性と大学入試—

平成 22～26 年度 日本学術振興会科学研究費補助金 基盤研究 (B)
(課題番号 22390405)

研究成果報告書

平成 27 (2015) 年 3 月

研究代表者 倉元 直樹

東北大学高度教養教育・学生支援機構 准教授

目次

はじめに	1
研究組織	5
第 I 部 大学調査	
序 章 第 I 部の構成 倉元直樹 (東北大学)	7
第 1 章 看護系大学の入試構造に見る高大接続問題 金澤悠介 (岩手県立大学)・倉元直樹・小山田信子・吉沢豊予子 (東北大学)	9
第 2 章 大学調査 (インタビュー) 倉元直樹 (東北大学)・金澤悠介 (岩手県立大学)・ 小松恵 (独立行政法人国立病院機構仙台医療センター附属仙台看護助産学校)・ 小山田信子・吉沢豊予子 (東北大学)	23
第 3 章 大学調査 (質問紙調査) の概要 倉元直樹 (東北大学)	27
第 4 章 看護系公立大学入学者の学校選択——大学調査 (質問紙調査) から—— 鈴木幸子 (埼玉県立大学)	59
第 5 章 看護系の学校に進学した男子学生の状況 西川浩昭 (静岡県立大学)	65
第 6 章 看護・保健学系高等教育機関の進学地域移動と進学動機 木村拓也 (九州大学)	79
第 7 章 選抜試験・カリキュラムの遡及的分析 小山田信子 (東北大学)	85

第Ⅱ部	高校調査	
序章	第Ⅱ部の構成 倉元直樹（東北大学）	93
第1章	高校調査（質問紙調査）の概要 倉元直樹（東北大学）	95
第2章	看護系志望者の適性と大学入試 西川浩昭（静岡県立大学）・倉元直樹（東北大学）・奥裕美（聖路加国際大学）・ 小山田信子（東北大学）	139
第3章	高校教員からみた看護系進学希望者の特徴 西郡大（佐賀大学）	151
第4章	看護系志望の高校生に求められる学力・適性に関する 高等学校進路指導教員の意識 倉元直樹（東北大学）	165
第Ⅲ部	海外調査	
	台湾大学における看護教育カリキュラムと入試について 吉沢豊予子・倉元直樹（東北大学）	183
付記		211

はじめに

本研究は「医療の高度化に伴う看護系大学の高大接続問題——看護職志望者の適性と大学入試——」と題する。日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（B）による助成を受けて実施してきた。助成期間は平成22年度から平成26年度までの5年間である。平成25年3月にそれまでの研究成果を取りまとめて中間報告書を刊行した。

本報告書は、5年間の研究成果を取りまとめた研究成果報告書である。

I 研究目的¹

本研究は、看護系専門職の養成が四年制大学中心へとシフトしていく中、如何にして優秀な人材を看護系大学に惹きつけていくことができるか、その方策を探ることを目的として行ってきた。まず、高校段階で理系・文系のコース分けが進む中、その双方の適性が必要となる看護系大学の入試形態が複雑な様相を呈していることを明らかにした。看護系専門職を志す高校生は進路選択の上で難しい判断を迫られ、看護系学部は入試制度の狭間で相対的に不利な立場に置かれていると考えられる。現状の教育制度の下、看護職志望の高校生が身につけるべき適性・能力はどのようなものか、さらに看護系大学ではどのような入学者募集戦略が可能なのか。看護教育学、統計学、教育接続論といった学際的なアプローチにより、具体的にその要因を解明し、看護系大学のための入試戦略モデルの構築を試みることにした。

我が国の看護専門職業人の養成は伝統的に専門学校・短大が担ってきたが、近年、急速に看護系教育機関に占める四年制大学のウェイトが大きくなり（以後、「四大化」と表現する）、入学者ベースでは既に三年制の養成所に次いで2番目のシェアを占めるようになってきている。直接的には平成4（1992）年制定の「看護師等の人材確保の促進に関する法律」の影響だが、背景には医療の高度化がある。看護専門職に求められる専門性は多岐にわたり、知的、精神的にも身体的にもタフであることが要求されるようになってきている。事実上、大学入学後に全ての事柄を一から教育するのは不可能なので、看護専門職への志向性や適性を備えた人材確保が重要である。ところが、現実にはそれが難しい。それは後期中等教育（高校）の多様化に主な原因がある。

¹ 中間報告書からの再録。

看護教育の四大化が進んだ時期は、大学進学率が飽和状態に達した時期でもある。小中学校の教育内容が削られる中、以前は大学に進学しなかった層を進学させるため、高校では理系・文系のコース分けが早期化するようになった。看護系志望者も早い段階で文系・理系のいずれを選ぶべきかの意思決定を迫られる。ところが、看護専門職は文理双方の高い資質が要求される。多くの分野では当該分野が理系、文系のいずれに属するのか、少なくとも歴史的な経緯によって明確に分かれてきた。一方、看護系大学の場合には急速な四大化によって分野としての位置づけが明確に打ち出せないまま、各個別大学の事情で入試形態が混沌としている。その結果、四年制大学看護系志望者にとってキャリア・パスが描けない状況ができています。すなわち、現状では優秀な人材を他の分野に流出させている可能性も高い。

期せずして看護専門職養成は高大接続問題の渦中に投げ込まれ、制度の狭間で苦戦せざるを得ない構図となった。意欲と資質の高い受験生を惹きつけるには、個々の大学が努力して看護の魅力を伝えようとするだけでは十分ではない。受験生が自然と看護専門職に向かえるようなキャリア・パスを作る必要がある。すなわち、他の分野を凌駕するような看護系大学特有の大学入試戦略の構築が必要となっている。

適切な大学入試戦略を構築するには大きな障壁がある。大学入試は社会的に重要な割に認知度が低いため、大学入試研究の専門家養成が進んでいない。そのため、結果的に多くの誤った信念が流布している。多くの大学では不適切な情報に踊らされ、学生募集に無用のエネルギーを注ぐ状況に陥っている。効果的な大学入試戦略の構築には、海外を含めた事例の収集だけでなく、教育制度の歴史的分析、評価や測定に関わる統計的分析、入試場面における技術的問題の分析、選抜や学生募集活動の効果の適切な評価など、学際的な検討が必要である。中でも、当事者である受験生や高校教育の実情を把握し、意見をすくい上げることが最も重要である。それと大学側の認識、求める資質、適性、学力と実質的な制約条件をすり合わせたとき、初めて現実的な解決法を見出すことが可能となる。

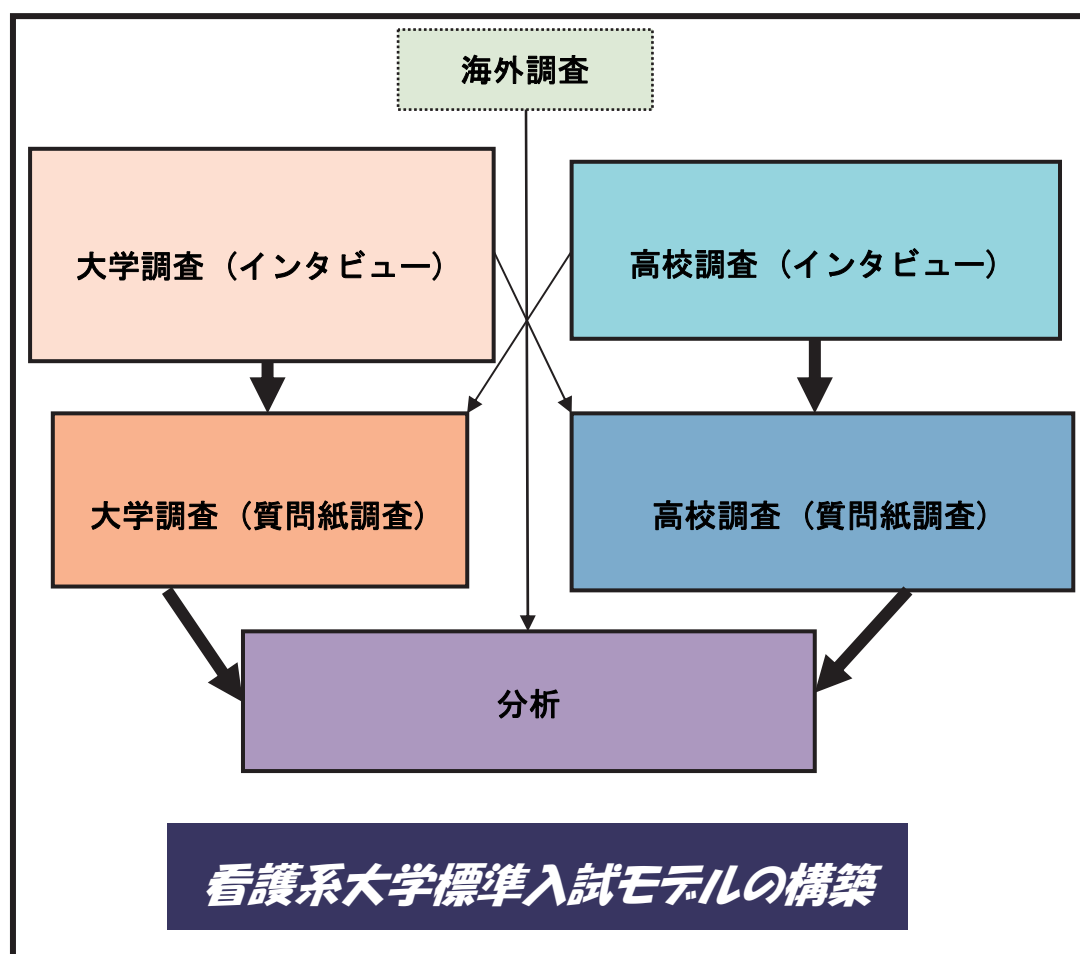
医療の高度化の中で、看護専門職に高い意欲と資質を持った人材を集めることは社会的にも急務である。本研究では、主として四年制大学を念頭に、学生がどのような進路選択を経て看護専門職を志すようになるのか、その典型的なプロセスを明らかにすることを試みる。その上で、進路決定の障壁となっている問題を析出し、現状の教育制度の限界を踏まえた上で、分野としての看護系に高い資質を持った受験生を惹きつけるための標準的

な入試モデルを見出すことを試みる。さらに、各大学の個別性を加味して個別大学として取るべき入試戦略の指針を明らかにすることを目指す。

II 研究計画概要²

看護学系で学ぶ学生に求められる資質・適性・学力と志望する受験生意思決定プロセスを見出すために、「看護系大学、および、看護系の専門学校に対する調査」と「主として看護系大学を志望する高校生に対する調査」を基軸とした。文献調査や海外の事例なども参考に、設置者や大学の立地条件等の要因を加味しながら、四年制大学における看護教育の前提となる高校時代のコア・カリキュラムを見出すことを試みる。最終的に大学入試制度の枠の中で実現可能な標準入試モデルについて検討する。

研究計画の概念図は以下のとおりである。



² 中間報告書からの再録。

Ⅲ 研究成果報告書概要

本報告書では、研究プロジェクトとして推敲してきた研究成果について、当初の研究計画にしたがって成果を取りまとめた。第Ⅰ部が「大学調査」、第Ⅱ部が「高校調査」、第Ⅲ部が「海外調査」である。

第Ⅰ部の「大学調査」は、本研究プロジェクトにおいて2010（平成22）～2011（平成23）年度に実施した、看護系大学、および、看護学校（看護師学校養成所3年課程、看護専門学校）の学生を対象とした「質問紙調査」を中心に、関連する論考をまとめたものである。一部、既出の学術研究発表、論文、中間報告書の内容を含む。

第Ⅱ部の「高校調査」は、本研究プロジェクトにおいて2013（平成25）年度に実施した高等学校進路指導担当教員を対象とする「質問紙調査」を中心に、関連する論考をまとめたものである。一部、既出の学術研究発表、論文の内容を含む。

第Ⅲ部の「海外調査」は、台湾調査時収録した資料を日本語に翻訳したものである。なお、原語の資料は中間報告書に採録した。

研究代表者： 倉元 直樹

東北大学高度教養教育・学生支援機構 准教授

研究組織¹

研究代表者：

倉元 直樹 (東北大学高度教養教育・学生支援機構・准教授)

研究分担者：

吉沢 豊予子 (東北大学大学院医学系研究科保健学専攻・教授)

小山田 信子 (東北大学大学院医学系研究科保健学専攻・准教授)

柳井 晴夫² (聖路加看護大学大学院看護学研究科・特任教授 [～H25.12])

西川 浩昭 (静岡県立大学看護学部・教授)

木村 拓也 (九州大学基幹教育院・准教授)

西郡 大 (佐賀大学アドミッションセンター・准教授)

鈴木 幸子 (埼玉県立大学保健医療福祉学部・教授 [平成 22 年度は連携研究者])

連携研究者：

金澤 悠介 (岩手県立大学総合政策学部・講師)

研究協力者：

奥 裕美 (聖路加国際大学・特任准教授)

小松 恵 (独立行政法人国立病院機構仙台医療センター

附属仙台看護助産学校・教員)

¹ 所属・肩書は研究期間終了時点 (2015 [平成 27] 年 3 月末) のもの。

² 故人 (2013 [平成 25] 年 12 月 21 日逝去)。

研究経費（直接経費）

平成 22 年度 260 万円

平成 23 年度 290 万円

平成 24 年度 180 万円

平成 25 年度 170 万円

平成 26 年度 220 万円

合 計 1,120 万円

第 I 部 大学調査

序 章 第 I 部の構成

倉元直樹（東北大学）

第 I 部は表題の通り、本研究プロジェクトにおける「大学調査」に関わる論考を集めたものである。本章以外に 7 章から構成されている。

第 1 章「看護系大学の入試構造に見る高大接続問題」は本研究プロジェクトのプロローグと位置付けられる。看護専門職養成課程の多様な養成ルートの中で、4 年制大学の急速な量的拡大が何をもたらししているのか、主として看護系大学の入試科目の類型化を目指して分析した論考である。「大学入試研究ジャーナル」誌に掲載済みの論文を再録したもので、中間報告書にも採録されている。

第 2 章「大学調査（インタビュー）」は、第 3 章以降の「大学調査（質問紙調査）」のパイロットスタディな位置づけの研究である。日本教育心理学会第 52 回総会において「看護系志望の高校生に求められる学力・適性に関する研究 (2)」と題して研究発表を行った際の研究発表論文集から再録したもので、中間報告書にも採録されている。

第 3 章「大学調査（質問紙調査）の概要」は、平成 22 (2010) ～23 (2011) 年度に看護系大学や専門学校に通う学生を対象に実施した、本研究プロジェクトによるアンケート調査における基礎集計についてまとめたものである。高校時代の履修履歴については、やや詳しい分析を行った。なお、章末に本研究プロジェクトの調査に使用された 4 ページから成る調査票のサンプルを採録した。

第 4 章「看護系公立大学入学者の学校選択——大学調査（質問紙調査）から——」は、同調査から、特に設置者別の学校選択に関する要因を抜き出し、とりわけ公立大学に焦点を当て、他の校種と比較して特徴を描いたオリジナルの論考である。

第 5 章「看護系の学校に進学した男子学生の状況」は、同調査から、特に少数派に属する男子学生に関するデータに焦点を当てて、その特徴について分析を加えたオリジナルの論考である。

第 6 章「看護・保健学系高等教育機関の進学地域移動と進学動機」は、大学ポートレート準備委員会が公表しているデータと本研究の大学調査（質問紙調査）を合わせて、進学に伴う地理的移動に進学動機を絡めて分析したオリジナルの論考である。

第 7 章「選抜試験・カリキュラムの遡及的分析」は歴史学的な視点から、看護専門職養成機関の入学者選抜と我が国における明治期の産婆（助産師）養成機関のカリキュラムという 2 つのテーマについて考究した論考である。なお、後半の明治期の産婆教育カリキュラムに関する論考は、本来であれば、日本行動計量学会第 42 回大会における研究発表に該当するものであり、第 II 部第 2 章に位置づけるべきものである。ただ、前半部分の論考と合わせると内容的な側面から「大学調査」に該当するものと考え、第 II 部第 2 章から切

り離してここに採録することとした。

第1章 看護系大学の入試構造に見る高大接続問題

金澤悠介（岩手県立大学¹）・倉元直樹・小山田信子・吉沢豊予子（東北大学）

本稿は看護系大学の入試構造を明らかにするために、1) 平成20(2008)年度までに開設された看護系大学の入試科目、2) 昭和41(1966)年時の看護学校(各種学校)の入試科目について分析した。その結果、現在の看護系大学の入試は、(A) 大学ごとに多様な入試科目を課すものの、(B) そこで課される入試科目は大学の属性に強く関連している、という構造を持つことが明らかになった。以上の結果を踏まえ、看護系大学の入試構造がはらむ高大接続問題について考察を加えた。

1 問題と目的

1.1 高大接続問題としての看護師養成制度

看護師等の看護専門職業人の養成システムは複線的、かつ、極めて複雑な構造となっている。看護師に関して言えば、高校卒業を基礎資格として、直接看護師資格を得られる学校を修了し、国家試験を経て看護師資格を得るとというのが一つのルートである。もう一つの養成ルートは准看護師を経由するものである。准看護師資格は義務教育終了後に2年課程の准看護師養成所、または、高等学校の衛生看護科を修了し、各都道府県で実施されている試験に合格すると取得できる。学歴が中学卒の場合には准看護師として一定期間業務に従事したのち、2年課程の看護師養成所に入学、国家試験を経て看護師資格を得る。

我が国における医療関係専門職の養成システムは、資格の種類によって考え方が異なっている。医師、歯科医師は大学における6年制課程で養成されてきた。薬剤師は4年制課程の修了が基礎資格であったが、平成18(2006)年度からは6年制となった。いずれにせよ、これらの専門職の養成は、最初から大学で行われることが前提とされてきた。それに対して、看護専門職業人の場合は「近代的な医療制度の創始以来、看護師の供給は需要者である病院や医師によってなされてきた(井本, 2009)」ことが特徴だとされている。従来は、准看護師を経て看護師資格を得るルートも含め、専門学校・短大が看護専門職業人養

¹ 発表時の所属は立教大学。

成の中心を担ってきた。

ところが、現在、准看護師養成数は急激に減少している。さらに、准看護師を経ずに直接看護師資格を得る養成ルートにおいても、四年制大学（以後、必要に応じて「四大」と記す）のウェイトが急速に大きくなりつつある。短期間の間に、近い将来、看護師の学歴は四大卒が標準となる可能性もあるのではないかと思わせるほど、看護系大学は急激に拡大している。加えて、看護師養成制度においても、四年制大学が標準となりつつある。2009年7月9日に「保健師助産師看護師法」の一部が改正され、看護師の国家試験の受験資格の1番目に大学が明記された。これは、国家試験の受験資格として、四年制大学卒業が基本となることを明確に打ち出したものといえる。以上をまとめると、看護専門職業人の養成は、需要者による「自給自足体制（井本，2009）」から、他の医療系専門職種と同様に一般の高等教育機関（特に四大）による養成に大きくシフトしているのである。

その結果、従来、専門学校が中心となって担ってきた看護師養成の諸問題を大学教育の中でどのように再配置できるのか、ということが看護系大学に共通に課せられた課題となっている。このような変化に伴い、派生して新たな問題が出現した。それは、高等学校における教育と看護専門教育をいかにスムーズに接続するのか、という高大接続の問題である。言うまでもなく、入学してくる学生の履修経験や学力水準が、入学後の教育内容を規定する大きな要因となるからである。

高大接続問題が目に見える顕著な形で現れるのが大学入試場面である。すなわち、看護系大学の量的拡大に伴って生じてくる高大接続問題に適切に対応できるような、大学入試の在り方を探るのが本研究の大きな探求課題である。本稿ではこの課題を遂行する端緒として、看護系大学の入試の現状とその構造を明らかにし、過去の制度との比較も含めて、その特徴を見出だすことを目的とする。

1.2 看護系大学の量的拡大

金澤・倉元・小山田・吉沢（2010）は、平成4（1992）年に「看護師等の人材確保の促進に関する法律（以下、「人材確保法」と略記）」が制定されたことにより、看護師養成の四大化が進んだことを示した。人材確保法は、急速な高齢化の進展や医療環境の変化に対応するために、国や地方自治体といった行政や個々の病院に、看護師の養成及び確保を促進するための措置を講ずることを求めたものである。法律が直接的に看護専門職業人養成の

四大化を明記しているわけではない。しかし、時期的に見て、看護系大学はこの人材確保法の制定直後から急増しているのは事実である。

人材確保法以後の看護師養成機関数の経年的推移を述べると以下のようなになる。大学数に関して言えば、平成 4 (1992) 年には、看護系大学はわずか 14 校しか存在していなかった。ところが、平成 20 (2008) 年には 168 校になり、その数は急激に増加している。また、3 年制課程の学校養成所 (専門学校) はその数を大きく変化させることはないものの、2 年制課程の学校養成所 や短期大学の数は減少の一途をたどっている。

看護系大学の増加に伴い、入学者数も急増している。平成 4 (1992) 年の段階では 1,000 人にも満たなかった看護系大学への入学者は、平成 20 (2008) 年には約 15,000 人を数えるまでに至った。平成 19 (2007) 年以降は大学入学者数が准看護師免許取得者を対象とする 2 年制課程の看護師養成所への入学者数を上回り、3 年制課程の看護師養成所に次いで 2 番目に大きな看護師養成ルートとなっている。結果的に、現在では、入学者ベースで算出した場合には大学で養成される看護師が全体の 2 割以上を占める状況となっているのだ (以上、金澤他, 2010)。

1.3 看護師養成問題と大学入試

大学における専門領域としての看護学は、文系、理系の双方の知識が必要な分野である (柳井・石井, 2007)。明確に文理のいずれかの一分野として位置付けるのは難しい。一方、たび重なる教育改革の結果、高等学校の普通教育では、多くの高校生が高校入学直後という極めて早い段階で自らの進路を文系、理系のいずれのトラックに定めるのか、選択に迫られる状況となっている。実質的に、文系と理系では履修内容が著しく乖離していることを考慮すれば、新たに大学教育の枠組に加わった看護学系統の専門領域にとっては、文系、理系のいずれにスタンスを取るかが課題となる。それによって、入学してくる学生の学習履歴が全く異なるからである。

そこで、本研究では、このような看護系の専門教育の四大化によって新たに生じた高大接続の問題に着手する端緒として、看護系大学の入試の実態と構造を解明することを試みることとした。

2 看護系大学の入試構造

2.1 分析方略

看護系大学の入試構造を明らかにするために、本研究では以下のような分析方略をとる。まず、金澤他（2010）と椎名他（2010）の研究をもとに、看護系大学の入試の現状を確認する。これら2つの研究は、平成20（2008）年までに開設されている看護系大学でどのような入試科目が課されているのかを明らかにするために、既に分析を加えてきた。

本稿では、それに加えて、現在の看護系大学の入試の特徴をより明確に把握するために、過去の看護師養成機関の入試の特徴を明らかにすることを試みる。ここでは、昭和41（1966）年における看護学校（各種学校）の入試の特徴を明らかにする。本稿の分析では、特に過去の看護師養成機関の入試との差異、ないしは、共通性について検討することを通じて、現在の看護系大学の入試の構造を把握することを目指す。

看護師養成の環境的条件という点で、昭和41（1966）年時と現在の状況の間には二つの大きな違いがある。

第一の違いは、看護師養成の主体と看護師養成機関の多様性に関するものである。昭和41（1966）年では、看護師を養成する主な機関は看護学校であり、それ以外の機関はそれほど優勢でなかった。すなわち、入試科目の設定などについては独自の意思決定が可能であり、他の専門分野との関係などをデリケートに配慮する必要はなかったと思われる。一方、現在の状況では、四大化した看護系の専門分野の入試は大学入試制度の一部に組み込まれている。総合大学の場合には、大学としての入試制度の枠組の制約を受けざるを得ない。また、それに加え、看護学校や短大など、看護師を養成する大学以外の機関も多様に存在している。

第二の違いは、看護師養成機関に入学する学生の学習履歴の多様性に関するものである。それは、この2時点の高校の教育課程の違いに由来する。昭和41（1966）年における普通科高校のカリキュラムでは、必修科目が相対的に多く、また、現在の多様化が進んだ状況ほどには文理分けも進んでいなかったと思われる。現在は、選択科目の比重が大きい上に早期の文理分けも進んでおり、結果的に、学習履歴の多様性が大きくなっていると考えられる。

現在の看護系大学と昭和41（1966）年時の看護学校の間で、入試のありようが大きく異

なるのであれば、その違いこそが現在の看護系大学入試の特徴であるといえる。一方、学校種別や時代状況の違いにもかかわらず、2つの時代間でその入試の構造が変わらないのであれば、そこには看護師養成に関わる教育内容から導かれる入試の構造の特徴が見出されることになると思われる。

2.2 看護系大学の入試の実態

金澤他（2010）は、ホームページなどの公表情報によって、2008年度現在で看護系大学協議会に所属する168大学の看護系学部の最も募集人員が大きい入試区分について、その入試科目を調査してきた。加えて、設置者や規模などの大学の属性や一般入試や推薦入試の募集定員に関わる情報も調査した。そして、各大学の入試のタイプを明らかにするために、以下の分類カテゴリーを設けた。

(1) 理系型

高等学校在学時に標準的な理系コースを履修していなければ、原則として、解答できない入試科目を課すものを「理系型」入試科目として分類した。

(2) 文系型

高等学校在学時に標準的な文系コースを履修していれば、原則として、解答できる入試科目を課すものを「文系型」入試科目として分類した。

(3) 理系+文系型

一般入試の学科科目が「理系型」とも「文系型」とも選択できるものは「理系+文系型」入試科目として分類した。

(4) 個別学科なし型

センター試験では学科を課すが、個別試験では学科試験を課さないものを「個別学科なし」に分類した。

センター試験で課す学科科目に応じ、「個別学科なし」に二つの下位分類を設けた。一つ目は「理系型」であり、これはセンター試験で理科2科目を課すものである。二つ目は「文系型」であり、これはセンター試験で理科1科目を課すものである。

(5) 面接・小論文のみ型

国語や理科などの学科科目を課すことなく、面接や小論文といった方法で学生を選抜するものを「面接・小論文のみ」に分類した。

表1 各入試のタイプの度数分布表

(2008年度の看護系大学の入試)

	度数	相対度数
理系	19	11.4
文系	73	43.7
文系+理系	19	11.4
個別学科なし(理系)	19	11.4
個別学科なし(文系)	33	19.8
分類不能	4	2.4
合計	167	100

以上の基準で各大学の入試科目を分類したところ、結果として163校が分類可能となった¹⁾(表1)。看護系大学の約45%が「文系型」入試科目を課している一方、それ以外の入試形態もまんべんなく存在していた。「理系型」、「理系+文系型」、「個別学科なし(理系)型」の入試科目を課す大学はそれぞれ約1割存在している。また、「個別学科なし(文系型)」の入試科目を課す大学も約2割存在する。加えて、「面接・小論文のみ型」に該当する大学が1校もなかったことも特筆すべきことである。入試科目という観点から見れば、看護系大学は理系にも文系にも開かれた、非常に多様な入試形態を有していることがわかる。入試科目の多様性にかかわらず、看護系大学の入試では何らかの形で学科科目が課されるという共通性もある(金澤他, 2010)。

さらに、入試の形態と大学の属性・募集定員の特徴との関連を見るために、多重対応分析²⁾を行った(図1)。

第1次元のイナーシャは0.443であり、プラスからマイナスに向かって「文系-理系」を分ける次元と考えられる。第2次元のイナーシャは0.254であり、プラスからマイナスに向かって「公立以外-公立」を分ける次元と考えられる。

多重対応分析の結果をまとめると以下のようになる(椎名他, 2010)。

- (1) 「理系型（含：文系+理系）入試」を課す傾向にあるのは大規模国立大学である。
これらの大学は入学者の大部分を一般入試により選抜する傾向がある。
- (2) 「個別学科なし型入試」を課す傾向にあるのは、公立大学である。これらの大学は、センター試験で理科を課し、二次試験では面接や小論文などの試験を課す傾向がある。
- (3) 「文系型入試」を課す傾向が高いのは、近年設立された私立大学である。これらの大学は入学者の多くを一般入試ではなく、AO入試などで選抜している。また他のタイプの大学に比べ、入学に必要とされる学力的ハードルが低い。
- (4) 入試のタイプと大学の所在地の間には強い関連は見られない。

第2次元: ｲﾝｰｼﾞﺎ = 0.254

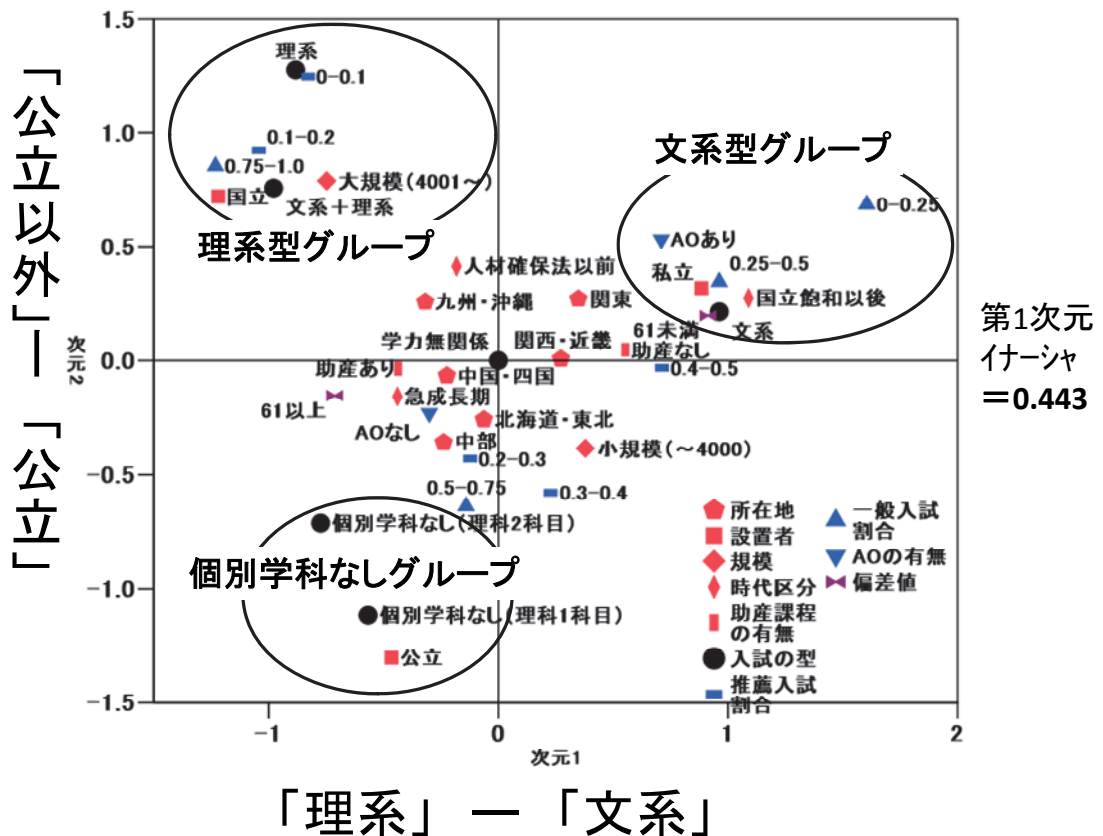


図1 多重対応分析の結果

以上の分析結果から、看護系大学の入試科目のありようは次の3点にまとめられる。

- A. 看護系大学は非常に多様な入試科目を課している。文系の学生に対応している大学が半数を占めるものの、理系の学生のみが対応可能な大学も約1割存在する。
- B. 学科試験を一切課さない「面接・小論のみ」という入試形式をとる大学は基本的には存在しない。
- C. 各大学が課す入試科目のタイプはその大学の属性と関連している。「理系型」の入試科目は大規模国立大学で課されやすく、「個別学科なし」型の入試科目は公立大学で課されやすい。また、「文系型」の入試科目は新設の私立大学で、相対的に学力レベルが低いところで課されやすい。これは、どのような入試科目を課すのかということについて、大学の属性や学力レベルに応じて、棲み分けが生じていることを意味している。

2.3 過去の看護師養成機関の入試科目の特徴

以上の分析結果を踏まえ、過去の看護師養成機関の入試のありようを分析することを通じて、現在の看護系大学の入試構造の特徴をより明確に理解することを目指す。

本研究が分析対象とするのは、昭和41(1966)年11月15日号の『蛍雪時代』に記載されている看護学校である。この号には国公立あわせて135校の入試の情報が記載されている。しかし、入試情報が記載されていない看護学校も59校存在することから、ここでの分析結果は多少割り引いて評価する必要がある。

まず、当時、看護学校がどのような入試をしていたのかを確認する。なお、現在と高校のカリキュラムが大きく異なるので、ここでは2.2で用いた分類を用いなかった。ここでは、現在と昭和41(1966)年と大差ないと考えられる、教科を分析対象とすることにする。

表2は、135校のうち、各教科を入試に課している割合を求めたものである。国語・数学・理科を9割以上の看護学校が入試に課していることが分かる。また、英語を入試に課している看護学校は8割近く存在した。一方、社会を入試に課している看護学校はほとんど存在しない。

表 2 各教科を入試に使用している学校の割合（1966年の看護学校の入試）

国語	97%
数学	96%
理科	93%
英語	84%
社会	7%

表 3 入試に使用された教科数の度数分布表（1966年の看護学校の入試）

教科数	度数	相対度数
2	2	1%
3	34	25%
4	94	69%
5	6	4%
総計	136	100%

次に、当時の看護学校が入試に課していた教科数を確認すると、その教科数は 3 もしくは 4 であったことが分かる（表 3）。先の入試に使用される教科の分析とあわせて考えると、大多数の看護学校で、国語・数学・理科・英語の 4 教科が入試で利用されていたことが分かる。また、国語・数学・理科という 3 教科は当時の看護学校にとっては必須のものであったということもわかる。『蛍雪時代』に入試情報が記載されていた 135 校の看護学校に関していえば、どの学校もほとんど同じような教科を入試に課していたのである。

現在の看護系大学においては、各大学の課す入試科目はその大学の属性と深く関連している。では、昭和 41（1966）年時の看護学校でも、入試で課される教科と学校の特性は深く関連していたのであろうか。前節の分析から、大学の設置者と入試科目とは強く関連していることが判明したので、ここでも設置者と入試で課される教科や教科数の関連を分析する。まず、設置者と入試で課される教科の関連であるが、どの教科も設置者とほとんど関連していなかった。つまり、設置者によって、入試で課される教科が大きく変化するという事態は見受けられなかった。また、設置者と教科数の間にもほとんど関連は見られなかった（図 2）。

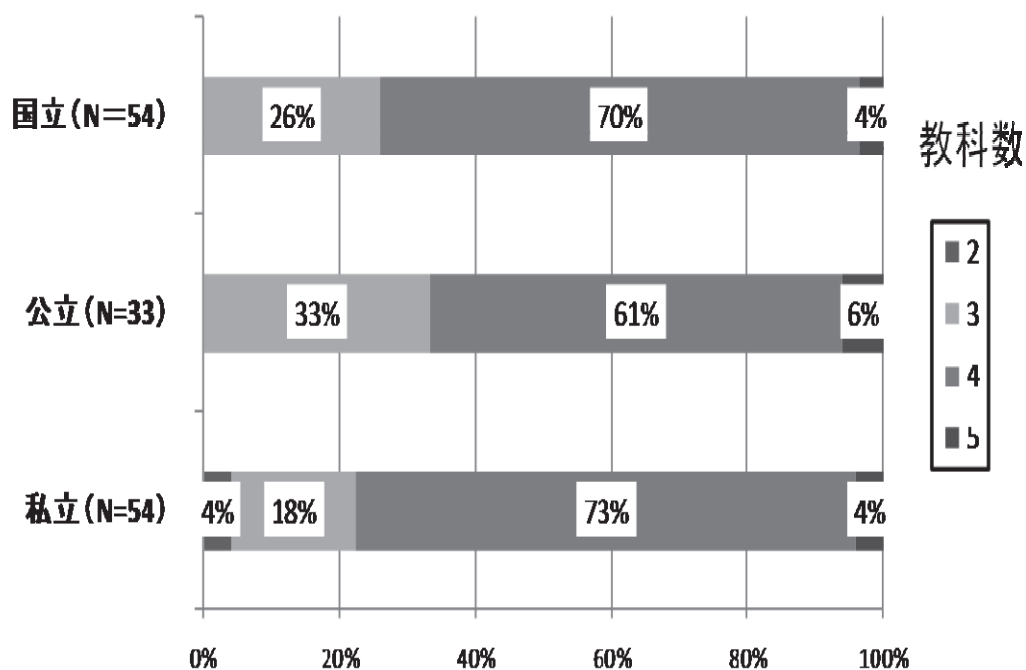


図 2 設置者と教科数の関係 (1966 年の看護学校の入試)

以上の分析結果から、昭和 41 (1966) 年時における看護学校の入試のありようは次のようにまとめられる。

- A. 当時の看護学校はほとんど同じような教科を入試に課していた。ほぼ全ての看護学校で国語・数学・理科という 3 教科が入試で課されていた。加えて、大多数の看護学校の入試で国語・数学・理科・英語の 4 教科が利用されていた。
- B. 設置者により、入試で課される教科が大きく変化するという事はなかった。分析対象となった 135 校に関していえば、入試教科について、設置者による棲み分けは存在しなかった。

3. 考察

大学と各種学校という校種の違いやデータの制約を割り引いて考える必要はあるものの、

過去の看護師養成機関の入試のありようと比較することで、現在の看護系大学の入試構造が非常に明確になる。昭和 41 (1966) 年の看護学校の入試は、(a) 各学校ともほとんど同じような教科を入試で課し、その結果、(b)入試で課される教科と学校の属性はほとんど関連していないのに対し、現在の看護系大学の入試は、(A) 大学ごとに多様な入試科目を課すものの、(B) そこで課される入試科目は大学の属性に強く関連している、という構造を持っている。

大学ごとに多様な入試を課すということは、文系・理系の受験生双方に進学のチャンネルが開かれている、という点では、一見、望ましい状況と考えられるかもしれない。しかし、見方を変えれば、文理双方にも対応可能な入試構造であるがゆえに、学習履歴がかなり異なる学生が看護系大学に入学していることになる。さらに、大学の属性によって、そこで課される入試科目が大きく変化するという事を考えると、大学間でも入学してくる学生の質が大きく異なる可能性がある。看護師養成機関は、「保健師助産師看護師学校養成所指定規則（以下、指定規則）」により、課すべき教育内容と単位数が定められている。許されるカリキュラムの自由度の幅は狭いと考えるを得ない。学習履歴や学力面で多様な学生のニーズに応じた柔軟なカリキュラムを構成していくことは至難の業と考えられる。

一方、昭和 41 (1966) 年時の看護学校はほとんど同じような教科を入試で課していた。その結果、看護師養成機関に入学してくる学生の学習履歴の差異はそれほど大きくはなかったはずである。このように考えると、看護系大学に現在入学してくる学生は、昭和 41 (1966) 年に看護学校に入学した学生と比べても質的に大きな幅を持った集団であると考えられる。

高等学校から看護専門教育への接続を考えた場合、過去の看護学校に比べ、現在の看護系大学が置かれた状況は複雑である。過去の看護学校のほとんどが国語・数学・理科の 3教科を入試に課してことから、文理双方の知識、技能を幅広く学習することを前提として意識づけられた学生を獲得できていた可能性がある。また、昭和 41 (1966) 年頃の大学・短大進学率は 16.1% (女子は 11.8%) であったのに対し、平成 20 (2008) 年度ではそれが 55.3% (女子は 54.1%) に達している。当時の看護学校の位置づけが各種学校であったとしても、現在と比べれば、一定程度以上の水準で高校教育の内容を修得していた層が進学していたと推測できる。

看護師養成が四大化している背景には、医療の高度化という事情が存在する。また、将

来、大学院を経て医療系の分野において研究や教育を行う指導的な人材の養成も期待されている。新しい時代の要請を背景とした現在の看護専門教育において、前提として文理双方の知識が必要とされることを考慮すると、看護系大学の入試において、大学ごとに入試科目が大きく異なる状況はどのように考えるべきだろうか。大学ごとに入試科目が大きく異なることにより、看護専門教育との接続が容易な学生を多数選抜できる大学もあれば、接続がスムーズに行えない学生が多数入学する大学も出てくることが予想される。井本(2009)は、「看護師養成課程を新設した私立大学の中には、医学部や附属の病院等を持たない大学も多い。看護師の需要者である医療機関を母体としないこうした大学は、看護師需要よりも、入学定員確保のため受験生のニーズにより鋭く反応する。」と指摘している。このような大学側の経営的な事情が、結果として現在の多様な入試形態に反映されているとするならば、看護専門職養成という目的にとっては好ましいことではない。看護系の医療専門職を志す若者の学習のインセンティブを高め、養成カリキュラムを高校以下の教育とスムーズに接続させていくためには、専門学校による看護師等の養成を前提とした指定規則のあり方も含め、看護系大学のカリキュラムポリシーを整備する必要がある。それと同時に、看護専門職業人を目指す子どもたちが高校時代に履修科目の選択で難しい意思決定を迫られないために、その基礎としてある一定の学習履歴のイメージを醸成していくことが望ましい(金澤他, 2010)。看護系大学への進学を志す高校生がどのようにして進路選択をしていくのか、そのプロセスを分析することが今後の研究課題として挙げられる。

近い将来、従来からの看護師養成機関も含めて看護系専門職養成機関の役割を整理した上で、今後の看護専門職養成の基礎となる入試制度のプロトタイプを設計していく必要があると思われる。

注

- 1) ここで分類できなかった大学は、ホームページに入試科目の情報が記載されていない、もしくは一般入試や推薦入試の募集人員の情報が記載されていないものであった。
- 2) 多重対応分析は、複数の質的変数を対象に、各変数のカテゴリー間の関係やケース間の関係を主として二次元空間上で把握する多変量解析法である。多重対応分析の詳細については、大津(2003)・大隅他(1994)を参考のこと。

付記

本研究は日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 (B)「医療の高度化に伴う看護系大学の高大接続問題 ―看護職志望者の適性と大学入試―(研究代表者 倉元直樹)」に基づく研究成果の一部である。

参考文献

- 井本佳宏 (2009). 「看護師 ―その自給自足的養成体制のゆくえ―」橋本鉦市編著『専門職養成の日本的構造』玉川大学出版部, 84-103.
- 金澤悠介・倉元直樹・小山田信子・吉沢豊予子 (2010). 「看護系大学の量的拡大に伴う大学入試設計の問題 ―実情把握のための基礎分析―」『東北大学高等教育開発推進センター紀要』 5, 15-27.
- 大隅昇・L・ルバル・A・モリノウ・K・M・ワーウィック・馬場康維 (1994). 『記述的多変量解析法』日化技連出版社.
- 大津起夫. (2003). 「社会調査データからの推論：実践的入門」甘利俊一・竹内啓・竹村彰通・伊庭幸人編『言語と心理の統計学―ことばと行動の確率モデルによる分析― (統計科学のフロンティア 10)』岩波書店.
- 椎名久美子・當山明華・デメジャン・アドレット・木村拓也・吉村宰・倉元直樹・金澤悠介 (2010). 「個別大学のアドミッションセンターで入試研究を行う上での問題点の認識及び解決策の共有化について(2) ―平成 20～21 年度『個別大学アドミッションセンター教員を中心とする大学入試研究会』発表要旨集』『大学入試センター研究紀要』 39, 43-58.
- 柳井晴夫・石井秀宗 (2007). 「看護系大学において必要とされる教科科目・資質能力・スキルに関する調査研究」『聖路加看護学会誌』 11, 1-9.

[出典：金澤悠介・倉元直樹・小山田信子・吉沢豊予子 (2011). 看護系大学の入試構造に見る高大接続問題, 大学入試研究ジャーナル, No.21, 49-57, 2011年3月.]

第2章 大学調査（インタビュー）

倉元直樹（東北大学）・金澤悠介（岩手県立大学¹）・
小松恵（独立行政法人国立病院機構仙台医療センター附属仙台看護助産学校²）・
小山田信子・吉沢豊予子（東北大学）

問題と目的

医師や薬剤師等，他の医療系専門職とは異なり，看護系専門職の資格を得るには様々な養成ルートが存在する．近年の変化として，従来から主に専門学校・短大が担ってきた看護専門職業人の養成が，平成4（2002）年の「看護師等の人材確保の促進に関する法律（人材確保法）」の制定を契機に急速に四年制大学へと移行しつつあることが挙げられる．

大学側から見た場合，この変化は看護専門職養成教育を大学教育の枠組みに迎え入れることを意味する．看護学教育のディプロマ・ポリシーは国家試験の存在によって，必然的に一定の方向付けがなされる．カリキュラム・ポリシーのレベルでは，看護師養成所がクリアすべき基準を定めた「保健師助産師看護師学校養成所指定規則」の存在が立ちほだかる．従来の教育制度が専門学校に即した仕組みであることから，自由度と多様性に富んだ大学の教育風土と整合しない面があり，議論を呼んでいる状況がある．

アドミッション・ポリシーの問題はさらに混沌としている．金澤他（2010）は看護系大学を対象に入試科目を調査し，その内容を分類した．その結果，看護系大学の入試科目は極めて多様にばらついていることが分かった．この状況は大学に進学して看護専門職を志す高校生にとっては悩ましい．大学の看護学教育の基礎としてどのような学力や適性が求められているのか，イメージが描きにくいからだ．文系・理系のコース分けが早期化する中，コース選択の時点で進学先候補と考える大学のステータスや求められる学力水準，気持ちに変化した場合に可能な進路など，多様な要因を総合的に判断する必要に迫られていることになる．

本研究では，この問題に対するパイロットスタディとして，国立A大学の看護学系コースに在学中の学生を対象にインタビュー調査を行い，看護学系等への進学を決めるプロセスとそれに影響を与える要因に関して分析を行った．

¹ 発表当時の所属は立教大学。

² 発表当時の所属は東北大学。

方 法

本研究では、東北大学医学部において研究倫理審査委員会の承認を受け、平成 21 年度に国立 A 大学の看護系の専攻に在籍中の学生を対象に調査協力者を募った。その結果、18 名が調査に応じた。そのうち、本発表の分析に利用したのは 15 名分のデータである。第 3 著者と第 4 著者がインタビュアーとなり、半構造的、自由回答的方法により、インタビュアーの研究室等、プライバシーが保護される環境で 1 対 1 の対面式でインタビューを実施した。時間は平均 20 分程度を要した。

インタビュー終了後、録音されたデータはテキスト化された。データ分析には第 5 著者も加わった。内容分析的手法を用いて、発話内容からその意味を文脈に沿って掘り下げて解釈した。本研究のテーマに関連する部分が抽出され、同質なものがまとめられて「サブカテゴリー」に分類され、さらに「カテゴリー」として集約された。なお、一人の調査協力者の発話の中に複数回現れた場合、重複して数えられている。

結 果

進学理由は、表 1、表 2 のように 2 つに大別された。

表 1 は「A 大学を選んだ理由」と解釈できるカテゴリーである。表中にサブカテゴリーの内容とそこに含まれる要素の種類、さらに出現頻度を示した。構造は比較的単純で、「総合大学としての A 大学」であることの出現頻度が高い。

表 1. A 大学を選んだ理由

カテゴリー	サブカテゴリー (種類)	頻度
1 家族・地元志向	本人の希望 (4)	21
	親の希望 (1)	
2 A 大学であること	総合大学 (7)	38
3 オープンキャンパスに魅せられて	オープンキャンパス (4)	18
4 高校の意気込み	A 大学が進学目標 (1)	7
5 学力の折り合い	学力が見合っていた (3)	14

表 2 は「看護を選んだ理由」に関わる内容である。表 1 と比較すると、多様性に富む内容が上がっている。中でも、進路選択としての看護系の選択に関する発話頻度が高いことが目立っている。

表 2. 看護を選んだ理由

カテゴリー	サブカテゴリー (種類)	頻度
1 あこがれ	家族・本人の病気体験 (1)	27
	家族・親戚からの情報 (1)	
	小さい頃から (2)	
2 中学・高校の体験授業	出前授業 (1)	20
	体験授業 (3)	
3 進路としての看護の選択	調べた (1)	39
	医療系がいい (1)	
	高校に入って (1)	
	文系・理系 (1)	
4 学力との折り合い	医療系の中での関心 (1)	18
	学力との折り合い (4)	
5 適性・資格	資格 (1)	7
	家族 (1)	
	性格・気持ち (1)	

考 察

本調査の分析から、看護系への進路選択の経路として概ね四種類程度の主要なパターンが識別できそうだ。一つは幼少から看護職に憧れてきたタイプである。本調査では少数派であった。次に、看護系への関心が中学・高校の進路学習の中で強化されてきたケースである。さらに、大学進学が前提で、その中の学科選びとして看護に行きつくケースがある。本調査ではこの内容の出現頻度が最も高かった。最後に、本来の志望は別だったが、学力的問題で妥協したケースが存在する。

本研究の調査結果から、大学への進学を前提とした進路探索の中で、看護系の分野が選択肢の一つと考えられる傾向が強いことが示唆された。専門学校が大部分を占めていた時代とは違って変わり、現在、看護系分野は大学の学科選びのプロセスに組み込まれている。看護系を志す高校生のためには、必要な教科科目、適性に関して一定の具体的なイメージを描くことができる制度を構築する必要があるだろう。

一方、看護系の学生全体を考えたとき、A大学の学生が特殊な集団である可能性も考慮する必要がある。今後は、質問紙法などを用いて、より広い対象に調査を行う予定である。

[出典：倉元直樹・金澤悠介・小松恵・小山田信子・吉沢豊予子 (2010). 看護系志望の高校生に求められる学力・適性に関する研究 (2), 日本教育心理学会第 52 回総会発表論文集, 727, 早稲田大学, 2010 年 8 月 27-29 日開催]

第3章 大学調査（質問紙調査）の概要

倉元直樹（東北大学）

1. 概要

本調査は、科学研究費基盤研究(B)「医療の高度化に伴う看護系大学の高大接続問題－看護職志望者の適性と大学入試－」の大学調査（質問紙調査）として、看護系大学および看護専門学校（3年制の看護師養成所）に学ぶ学生を対象に実施したものである。

2. 調査の目的

実際に看護系大学や専門学校に進学した学生が、どのような学習履歴を持ち、どのようなプロセスで進路決定をしているのか、また、どのような要因が進路決定に影響を及ぼしているのか、といった問題について明らかにすることを目的とする。

3. 倫理的配慮

東北大学高等教育開発推進センター¹倫理委員会に研究計画を提出し、承認を得るとともに、東北大学大学院医学系研究科倫理委員会にも質問紙調査の計画を提出し、承認を受けた。回答者には、文書、または、口頭によって研究目的を伝えるとともに、匿名が保証されること、協力が任意であること等を伝え、記入済み調査票の提出によって説明を了承したと理解することとした。

4. 調査票

章末資料のとおり。なお、章末に記載した調査票は平成23年度調査のものである。平成22年度調査から一部、形式を変更した部分があるが、本質的にはほぼ同一の内容である。

5. 調査協力機関

看護系国立大学3校、公立大学3校、私立大学5校、看護専門学校7校。

6. 調査実施時期

平成22年度調査：2010年7月～2011年1月

平成23年度調査：2011年11月～2012年4月

平成23年度調査においては一部の学年で平成24年度に入ってから調査を行った機関がある。学年コホートを合わせるために想定入学年度で学年を表記する。想定入学年度とは、

¹ 当時。現在は東北大学高度教養教育・学生支援機構に引き継がれている。

留年をせずに当該学年に達したという前提で遡及的に算出した入学年度である。

7. 回収率等

平成 22 年度調査：調査票配布数 820 通，回答者数 643 名，回収率 78.4%（表 1-1）

平成 23 年度調査：調査票配布数 2,048 通，回答者数 1,437 名，回収率 70.2%（表 1-2）

表 1-1. 平成 22 年度調査実施状況

コード	機関	設置者	学年	実施時期	実施方法	配付数	回収数	回収率
S1	専門学校	病院	1,2 年生	H22/7 月	回収箱	59	56	94.9%
P1	大学	私立	1,2 年生	H22/9 月 (2 年生) H22/10 月 (1 年生)	返送用封筒	155	87	56.1%
L1	大学	公立	1~3 年生	H22/10 月	回収箱	125	120	96.0%
S2	専門学校	病院	1,2 年生	H22/10 月	個別封筒	156	135	86.5%
P2	大学	私立	1~4 年生	H22/11 月頃	?	128	128	100.0%
L2	大学	公立	1 年生	H23/1 月	返送用封筒	124	104	83.9%
A1	大学	国立	2 年生	H23/1 月	返送用封筒	73	13	17.8%
平成 22 年度調査合計						820	643	78.4%

表 1-2. 平成 23 年度調査実施状況

コード	機関	設置者	学年	実施時期	実施方法	配付数	回収数	回収率
A1	大学	国立	2 年生	H24/2 月	一括回収	73	59	80.8%
L1	大学	公立	1 年生	H24/1~2 月	一括回収	54	54	100.0%
A2	大学	国立	1,2 年生	H24/1~2 月	一括回収	120	113	94.2%
A3	大学	国立	1 年生	H24/3 月	一括回収	69	68	98.6%
A3	大学	国立	3 年生	H24/4 月	一括回収	71	70	98.6%
A3	大学	国立	1 年生	H24/4 月	一括回収	70	69	98.6%
L2	大学	公立	1 年生中心	H24/1 月	個別封筒	122	69	56.6%
P5	大学	私立	1 年生	2012/2 月	一括回収	94	38	40.4%
P5	大学	私立	3 年生	2012/4 月	一括回収	92	43	46.7%
P5	大学	私立	3 年生	2012/3 月	一括回収	61	48	78.7%
P5	大学	私立	4 年生	2012/2 月	一括回収	68	63	92.6%
P4	大学	私立	1, 2 年生	H24 年 1 月頃	一括回収	120	120	100.0%
P3	大学	私立	1, 2 年生	H23/12 月	回収箱	227	112	49.3%
L3	大学	公立	1~4 年生	H23/12 月	個別封筒	252	146	57.9%
S3	専門学校	公立	1~3 年生	H23/12 月	一括回収	120	112	93.3%
S6	専門学校	病院	1~3 年生	H24/3 月	個別封筒	120	37	30.8%
S5	専門学校	病院	1~3 年生	H23/12 月	個別封筒	120	75	62.5%
S4	専門学校	病院	1~3 年生	H23/12 月	一括回収	120	72	60.0%
S7	専門学校	医師会	1 年生	H24/2 月	一括回収	75	69	92.0%
平成 23 年度調査合計						2,048	1,437	70.2%
合計						2,868	2,080	72.5%

8. 結果の概要

8.1. プロフィール

8.1.1. 性別

全体として回答者の約 9 割が女子であった。

表 2. 男女別回答者数

	国立大学	公立大学	私立大学	専門学校	全体
男	26	38	85	55	204
女	364	453	552	499	1,868
合計	390	491	637	554	2,072

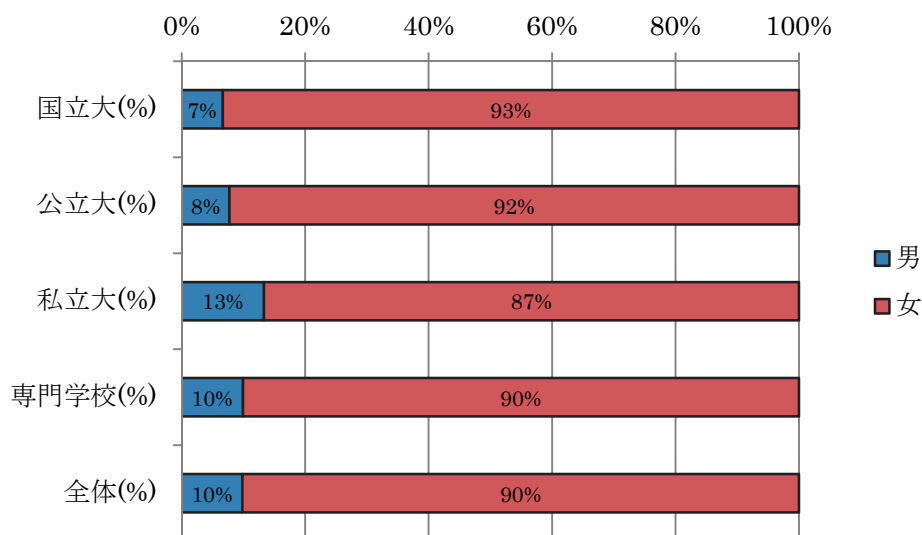


図 1. 男女比 (%)

8.1.2. 居住形態

全体として 6 割程度が自宅生である。国立大学は自宅外生の比率が高く、逆に 6 割強が自宅外生となっている。

表 3. 回答者数

	国立大学	公立大学	私立大学	専門学校	全体
自宅	146	319	367	330	1,162
自宅外	234	158	255	200	847
合計	380	477	622	530	2,009

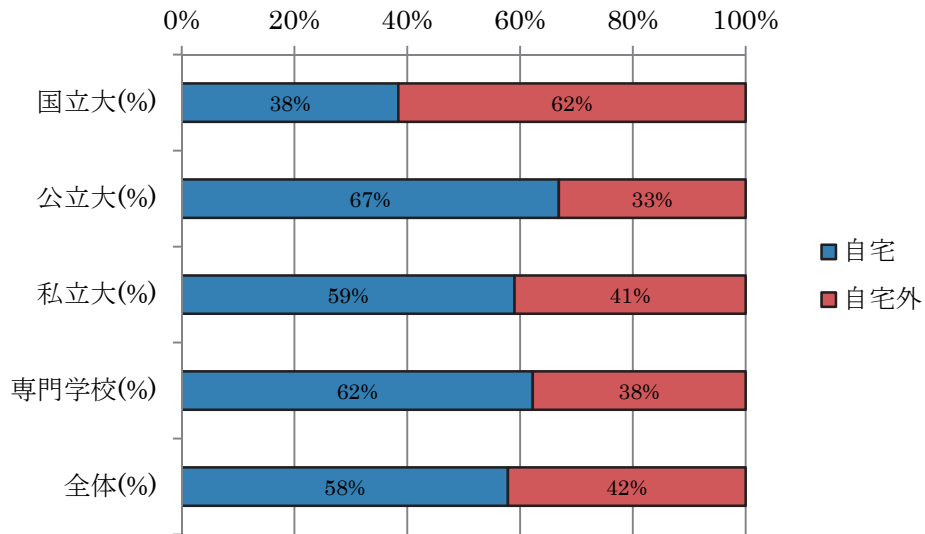


図 2. 自宅/自宅外比 (%)

8.1.3. 年齢

表 4. 年齢区分別回答者数

	国立大学	公立大学	私立大学	専門学校	全体
10歳代	153	234	207	164	758
20-24歳	158	139	306	203	806
25-29歳	3	8	6	40	57
30歳代	3	9	9	35	56
40歳以上	0	1	1	6	8
合計	317	391	529	448	1,685

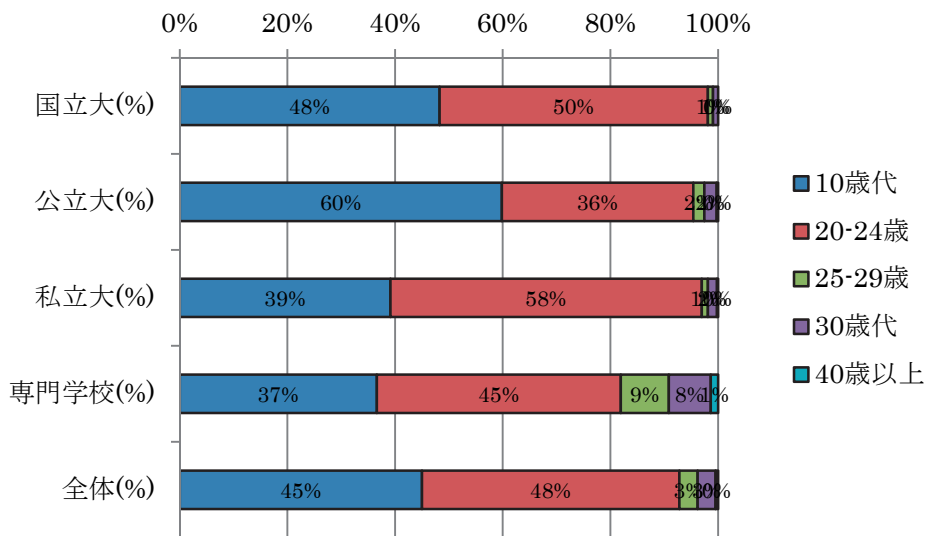


図 3. 年齢区分構成比 (%)

専門学校に所属する回答者には 20 代後半以上の学生が 2 割近くいた。大学の回答者はほとんどが 20 代前半までの学生であった。

8.1.4. 入学年度コホート

調査対象となった期間によって、構成が著しく異なっている。平成 22 年度調査で 4 年生に調査を行った私立大学、平成 23 年度調査で平成 24 年度になってから 1 年生に調査を行った国立大学があった。主として平成 21～23 年度入学者が中心のデータ構成となっている。

表 5. 入学年度コホート別回答者数

	国立大学	公立大学	私立大学	専門学校	全体
H19	0	0	55	0	55
H20	1	57	92	1	151
H21	12	85	103	228	428
H22	185	213	240	203	841
H23	123	131	146	122	522
H24	69	0	0	0	69
合計	390	486	636	554	2,066

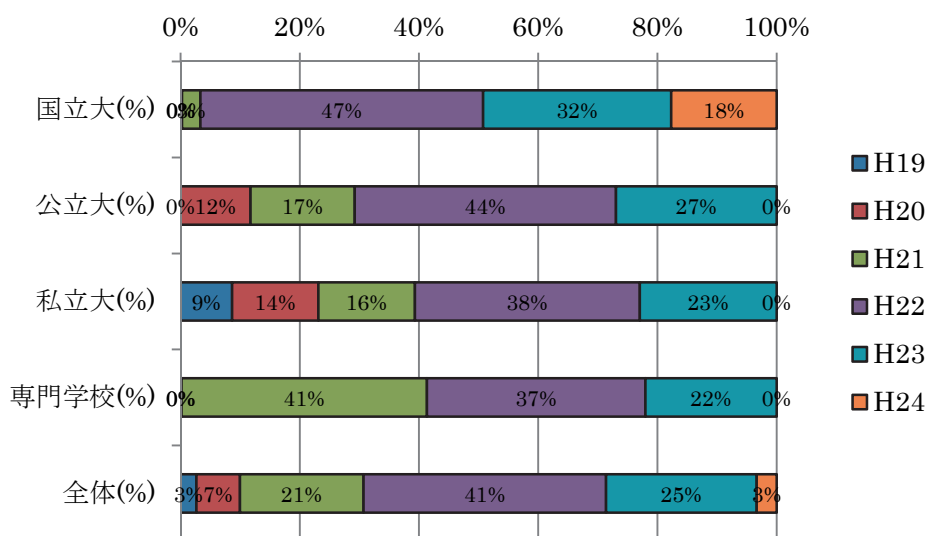


図 4. 入学年度コホート構成比 (%)

8.1.5. 専門

調査対象者は全員が「1. 看護」の学生である。

8.1.6. 現浪

全体の86%が現役であった。浪人は国立大学では1割を超えていた。専門学校では2割強が「その他」に分類される学生であったが、おおむね、社会人等の経歴を持つ学生だと推測される。

表 6. 現役・浪人別回答者数

	国立大学	公立大学	私立大学	専門学校	全体
現役	334	446	584	402	1,766
浪人	47	20	23	25	115
その他	8	25	26	114	173
合計	389	491	633	541	2,054

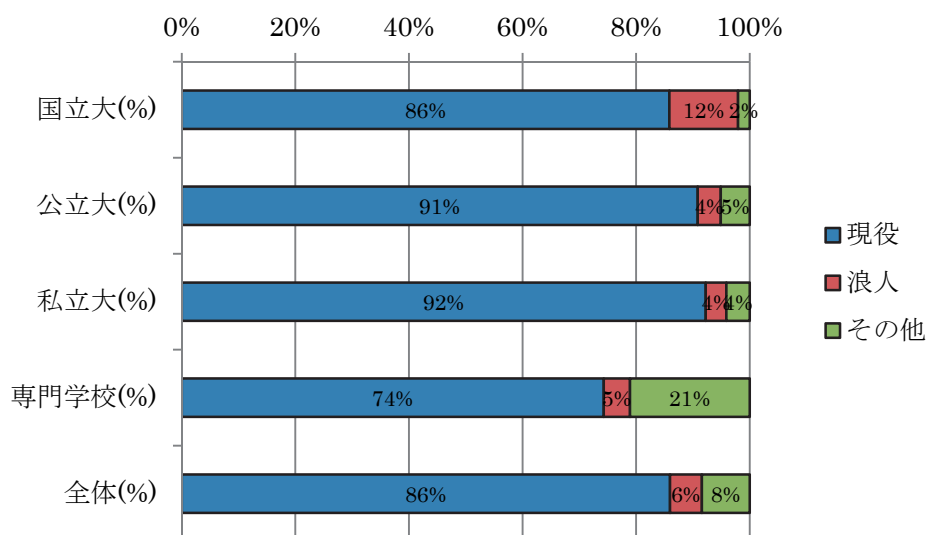


図 5. 現役/浪人等構成比 (%)

8.1.7. 出身高校

全体としてみれば、回答者の4分の3ほどを公立高校の出身者で占めている。専門学校と国立大学で公立の出身者が8割を超えているのに対し、私立大学では逆に4割近くが私立高校の出身者である。

表 7. 出身高校設置者別回答者数

	国立大学	公立大学	私立大学	専門学校	全体
国立	15	3	4	5	27
公立	318	379	391	469	1,557
私立	55	106	237	70	468
その他	1	3	2	2	8
合計	389	491	634	546	2,060

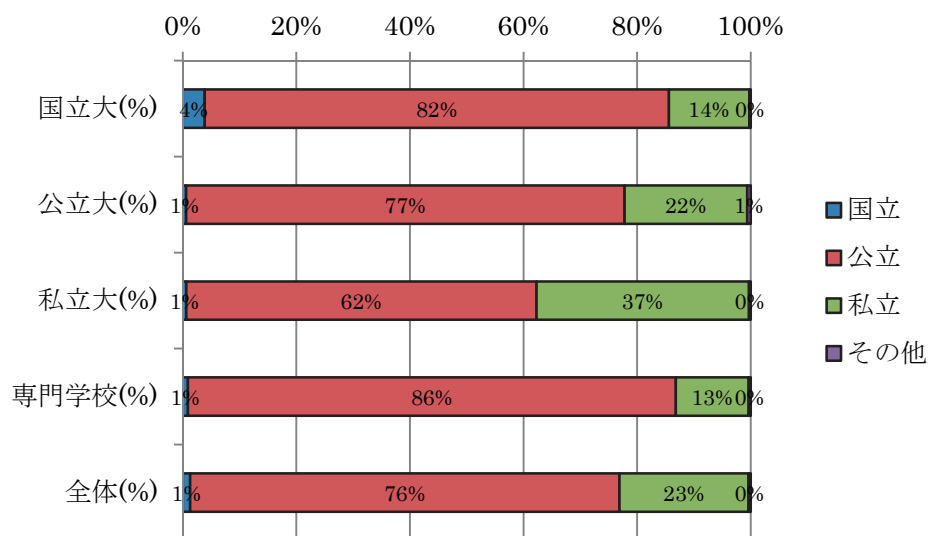


図 6. 出身高校設置者構成比 (%)

8.1.8. 高校時代の課程・コース・類型等

表 8. 高校時代の課程・コース・類型別回答者数

	国立大学	公立大学	私立大学	専門学校	全体
普通科(文系)	35	168	216	203	622
普通科(理系)	326	266	308	271	1,171
理数科	21	14	12	5	52
総合学科	1	21	45	23	90
その他	6	18	50	43	117
	389	487	631	545	2,052

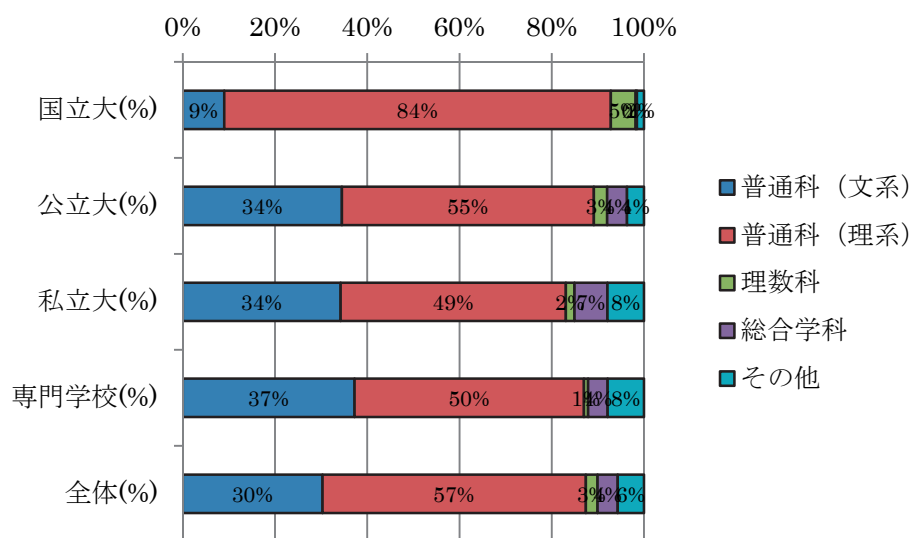


図 7. 高校時代の課程・コース・類型構成比 (%)

全体として 6 割弱が理系，3 割程度が文系の出身で，それ以外が 10%程度である。ただし，国立大学では 8 割以上が理系の出身であり，他と比較して理系の割合が著しく大きく
なっている。

8.2. 進学先の決定と入試

8.2.1. 入試の区分

全体の 2/3 が一般入試で入学した学生である。国立大学と専門学校では約 4 分の 3 を一般入試による入学者が占めている。公立大学と私立大学では約 3 割程度が推薦入学による入学者である。それ以外の入試区分で入学した者は 1 割に満たない。

表 9. 入試区分別回答者数

	国立大学	公立大学	私立大学	専門学校	全体
一般入試	290	311	385	403	1,389
推薦入試	74	159	191	113	537
A〇入試	18	0	26	0	44
社会人入試	7	9	3	34	53
編入試験	1	12	10	0	23
その他	0	0	21	3	24
合計	390	491	636	553	2,070

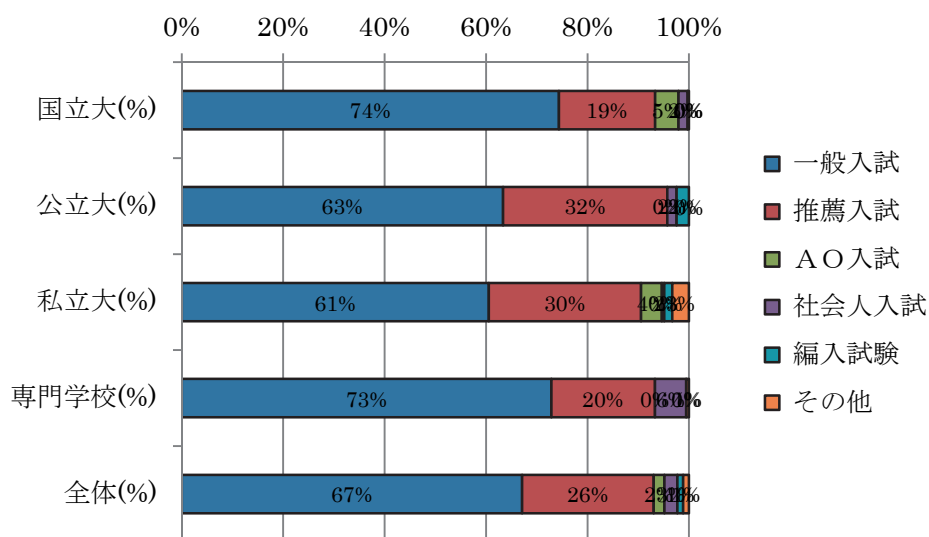


図 8. 入試区分構成比 (%)

8.2.2. 志願を決めた時期

志願を決めた時期は比較的均等にばらついている。専門学校では「その他」との回答が15%あるが、社会人等を経験して入学した回答者と推察される。

表 10. 志願を決めた時期ごとの回答者数

	国立大学	公立大学	私立大学	専門学校	全体
高校入学前	47	66	111	68	292
高校1年	55	67	51	37	210
高校2年	78	100	124	74	376
高校3年（～7月）	66	106	130	100	402
高校3年（センター前）	51	61	115	110	337
高校3年（センター後）	62	53	60	24	199
高校卒業後	19	18	19	58	114
その他	12	19	26	81	138
合計	390	490	636	552	2,068

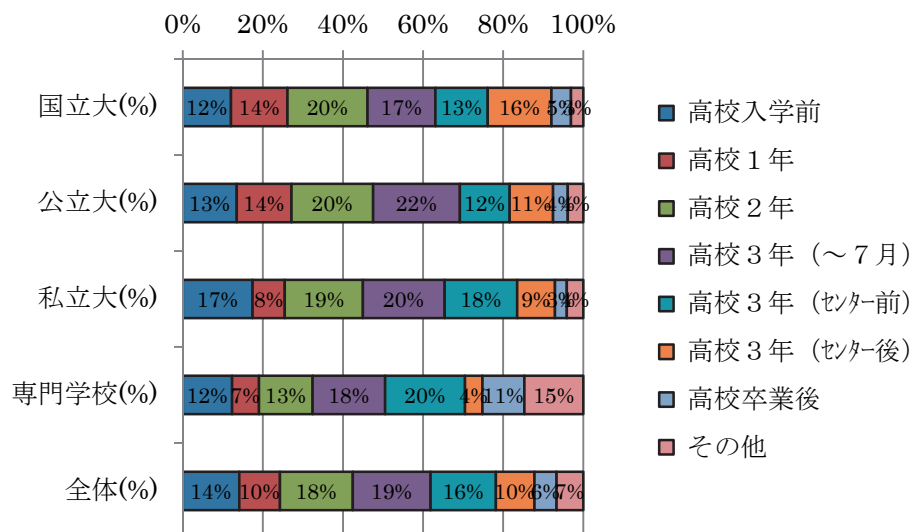


図 9. 志願決定時期の構成比 (%)

8.2.3. 他校受験

全体として、他校を受験した者としなかった者の割合はほぼ半々であった。

表 11. 併願校あり/なし別回答者数

	国立大学	公立大学	私立大学	専門学校	全体
あり	186	246	256	234	922
なし	201	241	375	315	1,132
合計	387	487	631	549	2,054

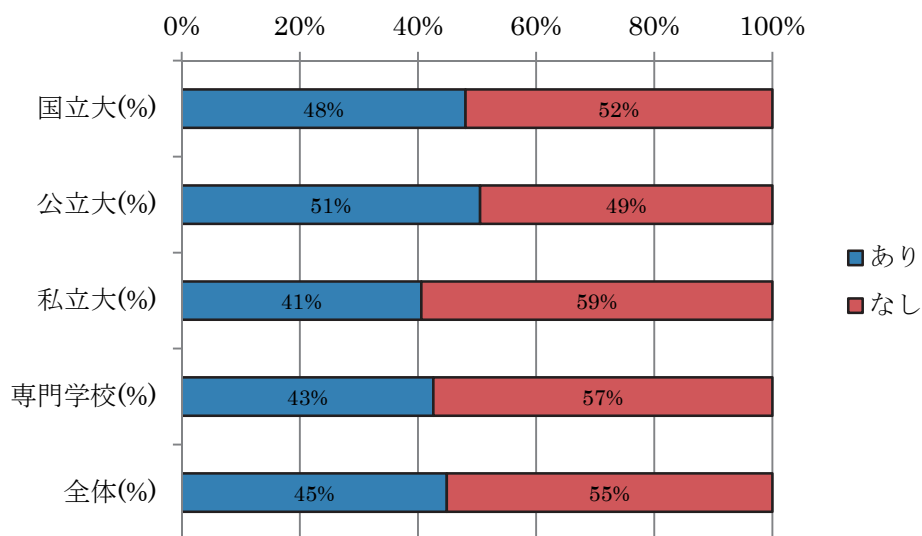


図 10. 併願校の有無に関する構成比 (%)

8.2.4. 併願校の種別

表 12. 併願校の校種別回答者数

	国立大学	公立大学	私立大学	専門学校	全体
看護系大学	123	95	211	74	503
非看護系大学	52	34	30	10	126
看護系専門学校	51	35	78	167	331
非看護系専門学校	1	6	5	4	16
合計	227	170	324	255	976

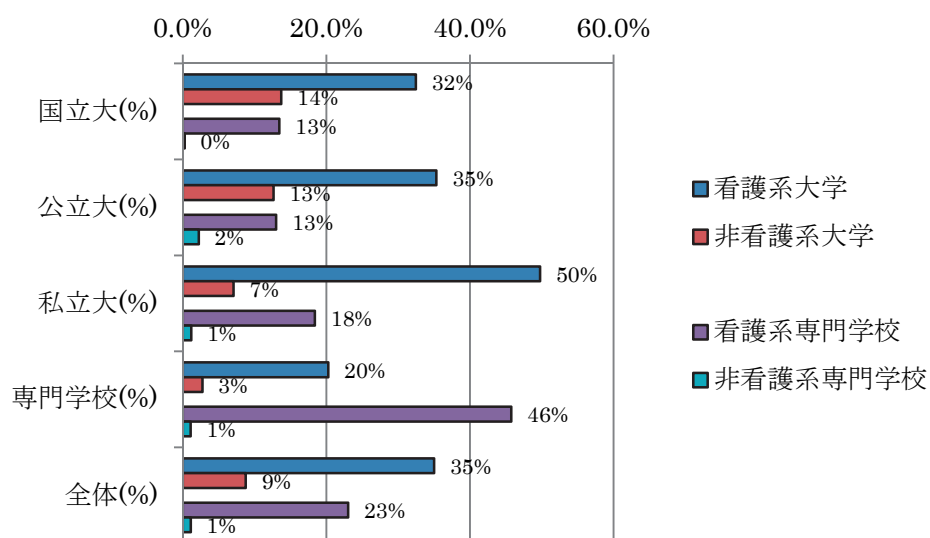


図 11. 併願校の校種構成比 (%)

平成 22 年度調査と平成 23 年度調査ではこの設問に関する尋ね方，集計の仕方が違って
いる。「大学」「専門学校」「看護系」，「非看護系」の区別が可能なのは，平成 23 年度調査
となっている。したがって，この部分に関する数値は平成 23 年度調査対象者数に基づく。

看護系大学の学生は大学，看護系専門学校の学生は専門学校を併願先として選ぶ傾向が
強かった。大学では非看護系の併願校を挙げた者も 1 割前後存在していたが，非看護系の
専門学校への併願は極めて稀であったことがうかがえる。

8.2.5. 志望順位

全体として約 7 割の回答者が現在の所属が第 1 志望だったと回答した。公立大学の第 1
志望率が高く，8 割近くに達している。第 3 志望以下よりは，第 2 志望だった率が高かった。

表 13. 志望順位別回答者数

	国立大学	公立大学	私立大学	専門学校	全体
第 1 志望	271	383	395	380	1,429
第 2 志望	72	66	90	112	340
第 3 志望以下	46	41	143	60	290
合計	389	490	628	552	2,059

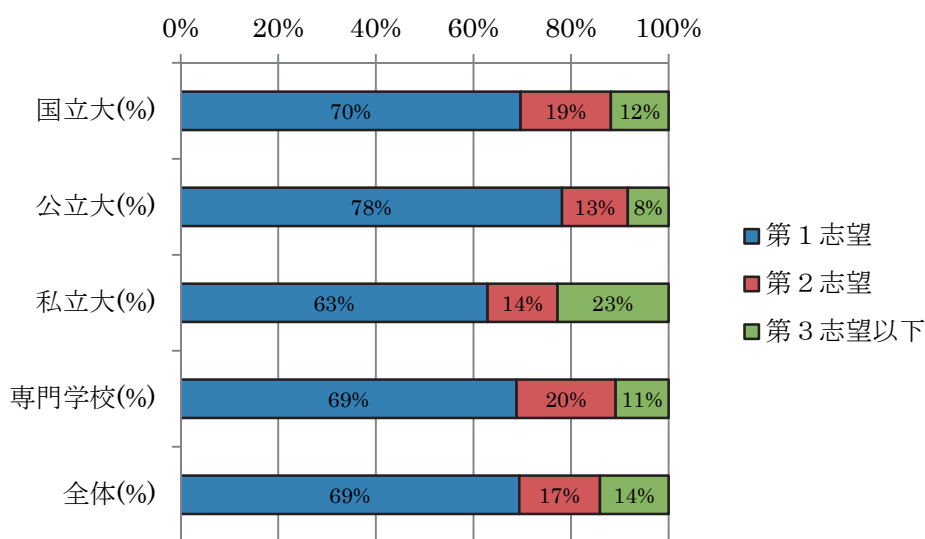


図 12. 志望順位構成比 (%)

8.2.6. 志望検討分野

全体として約半数の回答者が看護系以外を検討していなかった。特に専門学校では約4割の回答者しか他の分野を検討した経験がなかった。逆に、国立大学では2/3、公立大学では約6割の回答者が他の志望分野を検討した経験を持つ。検討した分野は設置者によって特徴が分かれ、国立大学では「医学」「薬学」、公立大学では看護以外の「医療技術系」「文系」が多かった。

表 14. 志望検討分野別回答者数

	国立大学	公立大学	私立大学	専門学校	全体
医学	84	56	57	28	225
歯学	16	8	17	8	49
薬学	81	55	54	32	222
医療技術系	57	91	48	48	244
理系	54	48	27	20	149
文系	29	90	68	36	223
資格系	7	15	21	36	79
看護専願	129	198	335	340	1,002
合計	392	493	639	556	2,080

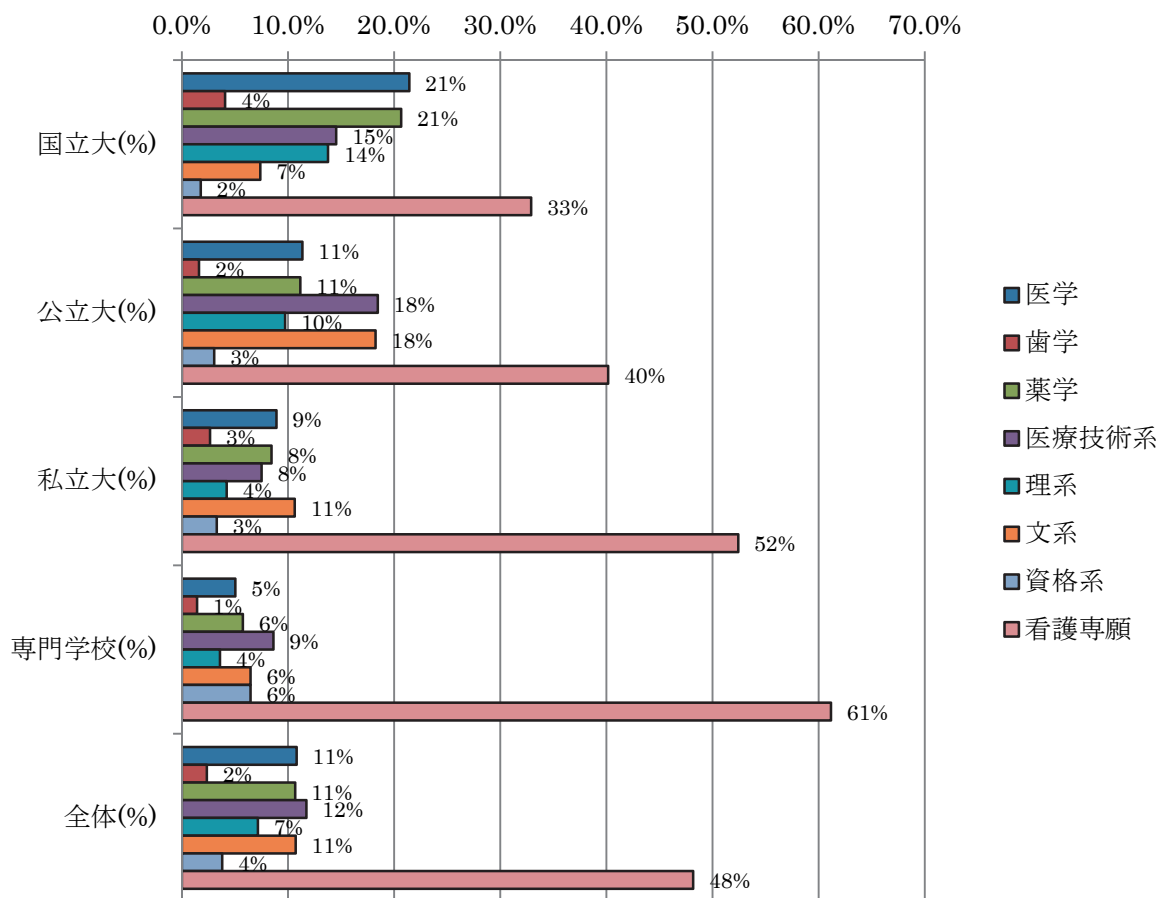


図 13. 志望を検討した分野として挙げられた比率 (%)

8.2.7. 受験先の決定への影響力

設置者校種の違いによらず、受験先を決定したのは「自分」と回答した者が最も多く、6割から 2/3 程度に達していた。それ以外では、「親」が「教師」の 2 倍近い数値となった。

表 15. 志望検討分野別回答者数

	国立大学	公立大学	私立大学	専門学校	全体
親	69	103	158	102	432
先生	57	63	72	60	252
自分	250	306	368	370	1,294
その他	10	18	25	18	71
合計	386	490	623	550	2,049



図 14. 最大影響力保持者構成比 (%)

8.2.8. 志願決定理由

「志願を決定した理由」については、「1. 全く重要だと感じていなかった」～「5. かなり重要だと感じていた」という 5 段階評価の形式でデータの収集を行い、それぞれ「1」～「5」と得点化して分析を行った。表 16 に各校種、および、全体の平均値、全体の標準偏差を示す。また、図 15 に全体の平均値が高い順に並べたグラフを示す。「5. 将来、就職ができそう」「4. 将来の職業が明確」「1. 資格が魅力的」「2. 将来の仕事に興味・関心」「3. 内容への興味・関心」「6. 収入の金額が十分」といった、進路の具体性、明確性、将来性に関連する項目が上位に並んだ。その反面、「19. 入試の地方会場」「20. 併願のしやすさ」といった受験環境に関する項目は理由として高く評価されていなかった。

校種による違いが顕著だった例として、「14. 学費」の理由は私立大学で低く、「16. 自宅からの通学」は国立大学で低かった。

表 16. 受験を決めた理由平均値

平均値	国立大学	公立大学	私立大学	専門学校	全体	全体標準偏差
1. 資格 (理由)	4.44	4.53	4.41	4.45	4.46	0.87
2. 仕事関心 (理由)	4.42	4.45	4.40	4.36	4.40	0.86
3. 内容 (理由)	4.31	4.35	4.28	4.24	4.29	0.89
4. 職業明確 (理由)	4.49	4.45	4.37	4.56	4.47	0.84
5. 就職可能 (理由)	4.55	4.58	4.31	4.57	4.49	0.84
6. 収入 (理由)	3.97	3.93	3.86	4.17	3.98	1.05
7. 地域 (理由)	3.08	2.83	3.07	3.24	3.06	1.25
8. 大学立地 (理由)	3.28	3.27	3.28	3.32	3.29	1.17
9. 学生生活 (理由)	3.48	3.58	3.50	3.35	3.48	1.12
10. 教育内容 (理由)	3.57	3.58	3.65	3.54	3.59	1.03
11. 研究内容 (理由)	2.82	2.54	3.06	2.85	2.83	1.16
12. 評判 (理由)	3.51	3.53	3.48	3.42	3.48	1.07
13. 施設 (理由)	3.52	3.74	3.72	3.71	3.68	1.04
14. 学費 (理由)	3.83	4.36	3.13	4.23	3.85	1.18
15. 生活費 (理由)	3.36	3.34	2.97	3.64	3.31	1.25
16. 自宅通学 (理由)	2.85	3.54	3.36	3.65	3.39	1.50
17. 合格可能 (理由)	4.22	4.01	3.64	3.79	3.87	1.12
18. 入試科目 (理由)	3.99	3.96	3.65	3.72	3.81	1.12
19. 地方会場 (理由)	2.09	2.25	2.62	2.66	2.44	1.30
20. 併願 (理由)	1.95	2.17	2.78	2.71	2.46	1.32

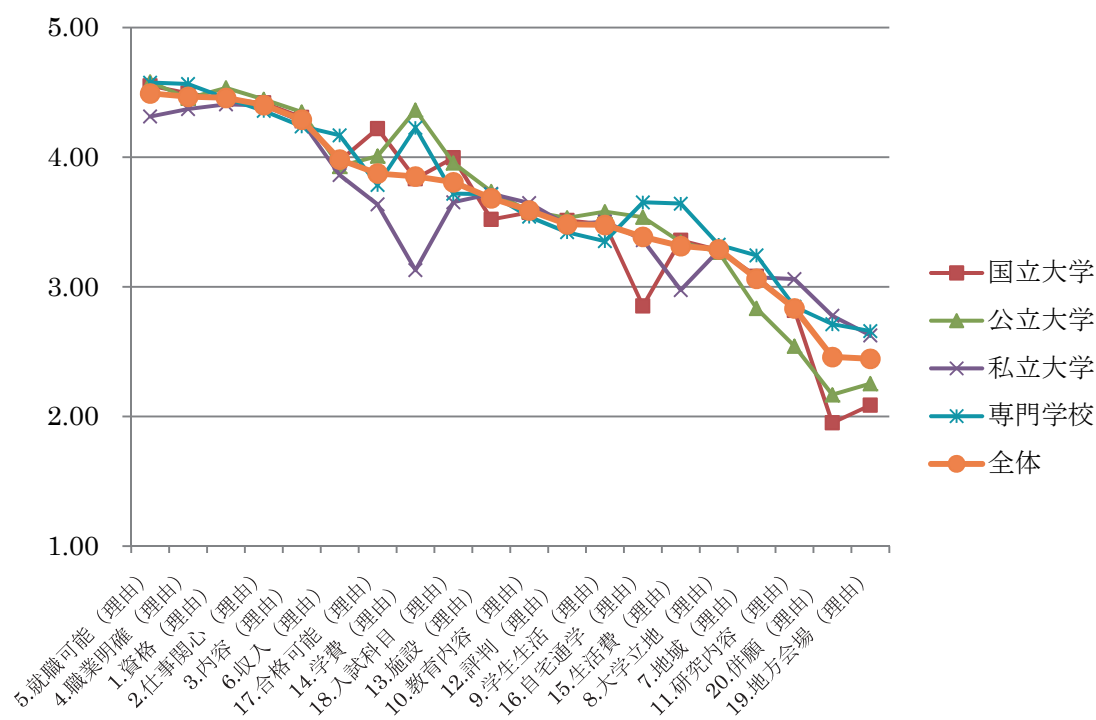


図 15. 受験を決めた理由平均値 (高い順)

8.3. 高校時代の学習履歴

8.3.1. 文理分けの時期

全体として3/4の回答者が文理分けの時期を高校2年としていた。国立大学ではその比率が9割近くに達している。

表 17. 文理分けの時期別回答者数

	国立大学	公立大学	私立大学	専門学校	全体
高校入学	34	33	37	33	137
高校2年	334	366	432	384	1,516
高校3年	14	67	75	73	229
文理一緒	3	15	67	56	141
その他	2	9	13	5	29
合計	387	490	624	551	2,052

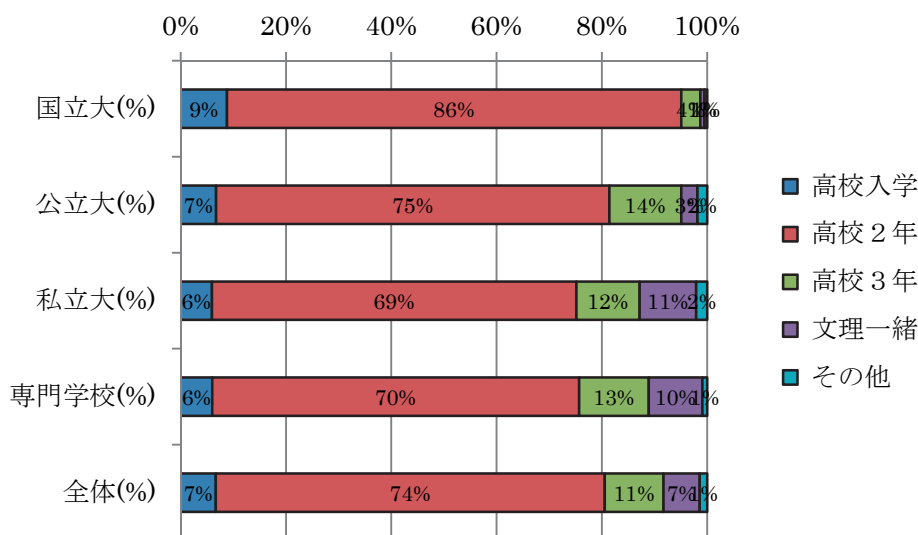


図 16. 文理分けの時期の構成比 (%)

8.3.2. 文理選択時の入試科目に関する知識

入試に関する知識があった上で文理を選択した回答者は半数に満たなかった。半数以上の回答者は入試科目の知識を持たずに文理選択を行っていた。

表 18. 文理選択時の入試科目に関する知識別回答者数

	国立大学	公立大学	私立大学	専門学校	全体
はい	196	210	262	246	914
いいえ	189	275	349	286	1,099
その他	3	5	8	10	26
合計	388	490	619	542	2,039

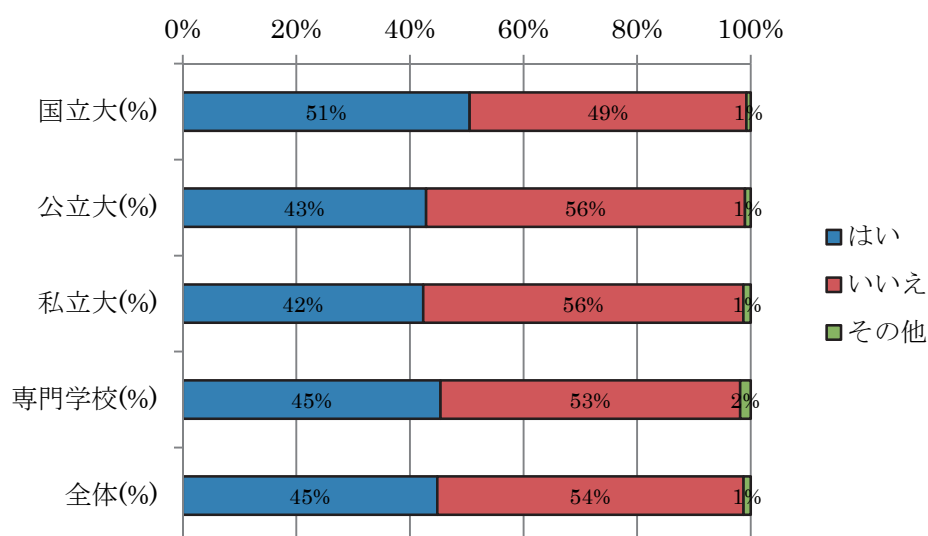


図 17. 文理選択時の入試科目に関する知識の有無構成比 (%)

8.3.3. 履修経験

8.3.3.1. 分析対象者の選定

履修経験については、「高校時代に現在の指導要領で学んだ」ことが前提になるので、分析対象者となる回答者をスクリーニングして選ぶこととした。調査実施時の高等学校学習指導要領は 2003 (平成 15) 年度から実施されたものであり、現役生であれば 2006 (平成 18) 年度入学者から学んでいる。したがって、平成 22 年度調査においては、特殊なケースを除き、おおむね 23 歳以下が対象となる。

学年換算すると、平成 22 年度調査においては 1 年生の 4 浪～4 年生の 1 浪までが対象となる。平成 23 年度調査に置いては、年度内に実施された場合には 1 年生は 5 浪、2 年生は 4 浪、3 年生は 3 浪、4 年生は 2 浪までが対象となる。平成 24 年度調査分は 1 年生の 6 浪～4 年生の 3 浪までが、分析対象となる。

表 19. 分析対象外/分析対象別回答者数

	国立大学	公立大学	私立大学	専門学校	全体
対象外	12	34	57	138	241
分析対象	380	459	582	418	1,839
合計	392	493	639	556	2,080

具体的には入試区分が「社会人入試」の者は分析から除外することとした。「一般入試」「推薦入試」「AO 入試」で「現役」「浪人」のうち、平成 22 年度調査では 24 歳以上、平成 25 年度調査では 25 歳以上を除いた者とするが、年齢が条件に合うものは「編入」による入学も含むこととした。年齢が未記入のものは調査対象者とした。

入試区分が未記入の者は除外することとした。

大学では 9 割以上，特に国立大学では 97%が分析対象者となったが，専門学校では約 4 分の 1 が分析対象外となった。

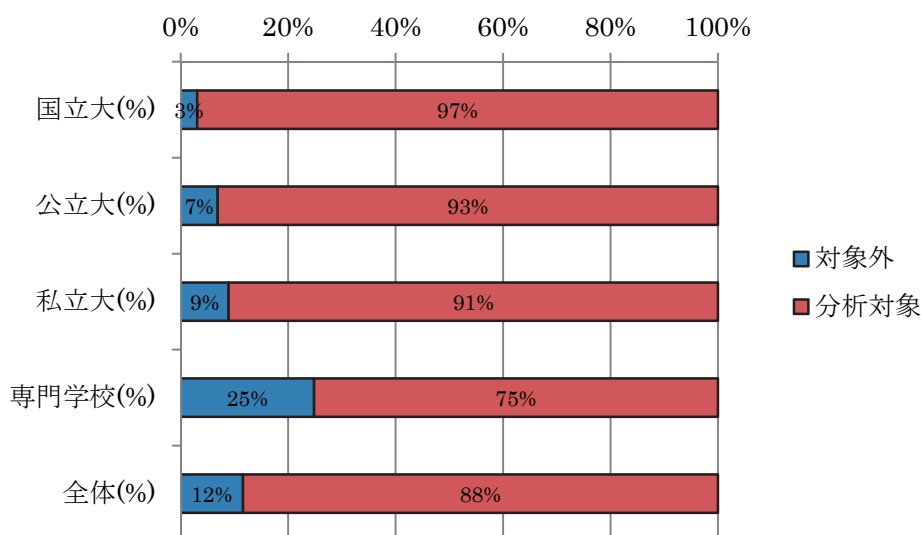


図 18. 分析対象外/分析対象構成比 (%)

8.3.3.2. 受験勉強経験率

「受験勉強をした」経験があると答えた者の比率について分析を加えた。

表 20 が当時の高等学校学習指導要領の下での各科目に関する受験勉強経験率である。また，図 19 は全体の受験勉強経験率を棒グラフとして示したものである。「国語（現代文）」「数学Ⅰ」「数学 A」「英語Ⅰ」「英語Ⅱ」の比率が 80%を超えている。次いで「国語（古文）」「数学Ⅱ」「数学 B」「生物Ⅰ」「英語（リーディング）」「英語（ライティング）」が 70%近くに達している。「国数英」のいわゆる主要 3 教科以外では，「生物Ⅰ」のみが多く看護系学生が受験勉強を行った科目となっている。

図 20 は全体として受験勉強経験率が高かった順に科目を並べた折れ線グラフである。国立大学とそれ以外に目立った違いが見られている。「数学Ⅱ」「数学 B」は国立大学ではほとんどの学生が受験勉強をした経験を持つが，公立大学では 70%台，私立大学と専門が高では 50%台に止まっている。「化学Ⅰ」は国立大学では約 9 割が受験勉強経験を持つが，公立大学では 5 割弱，私立大学と専門学校では 4 割弱にとどまっている。「化学Ⅱ」は国立大学では約 3 分の 2 が受験勉強を経験している一方で，私立大学と専門学校では約 4 分の 1，公立大学では 2 割以下の者しか受験勉強の経験がない。「生物Ⅱ」も国立大学では約 6 割が受験勉強を経験しているのに対し，公立大学では約 3 割強，私立大学では 4 割強，専門学校では約 3 分の 1，公立大学では 2 割弱の者しか受験勉強の経験がなかった。

図 21～25 は多重対応分析を用いて、全体、および、教科ごとに履修状況の様相を図示した図である。「A1」～「A3」は国立大学、「L1」～「L2」は公立大学、「P1」～「P5」は私立大学、「S1」～「S7」は看護専門学校を表す。なお、縦軸、横軸の意味はそれぞれの散布図によって異なっている。

表 20. 受験勉強経験率 (%)

科目	国立大学	公立大学	私立大学	専門学校	全体
1. 国語(現代文)	95.0%	93.2%	75.7%	84.9%	86.2%
2. 国語(古典)	95.0%	92.6%	49.4%	54.0%	70.9%
1. 世界史 A	3.5%	2.9%	3.9%	4.9%	3.8%
2. 世界史 B	11.2%	7.9%	6.9%	5.0%	7.6%
3. 日本史 A	7.9%	6.0%	5.7%	5.0%	6.1%
4. 日本史 B	23.2%	21.9%	11.6%	9.7%	16.2%
5. 地理 A	11.7%	7.6%	6.0%	4.2%	7.2%
6. 地理 B	51.8%	31.1%	12.7%	11.2%	25.3%
1. 現代社会	18.4%	39.1%	19.3%	17.3%	23.7%
2. 倫理	8.1%	11.0%	5.6%	6.8%	7.8%
3. 政治・経済	7.9%	19.0%	11.9%	13.6%	13.3%
1. 数学 I	98.4%	96.9%	73.8%	86.8%	87.8%
2. 数学 A	98.4%	96.3%	71.5%	82.9%	86.0%
3. 数学 II	97.6%	75.3%	56.2%	59.7%	70.5%
4. 数学 B	97.3%	74.0%	54.0%	54.4%	68.2%
5. 数学 III	26.1%	10.8%	8.9%	8.4%	12.9%
6. 数学 C	22.1%	9.7%	6.5%	7.5%	10.9%
1. 理科基礎	18.5%	10.7%	22.1%	21.6%	18.4%
2. 理科総合 A	17.5%	9.1%	16.9%	17.4%	15.2%
3. 理科総合 B	13.7%	8.7%	23.4%	20.1%	16.9%
4. 物理 I	20.7%	12.2%	6.1%	7.9%	11.2%
5. 物理 II	15.1%	7.1%	3.7%	5.5%	7.4%
6. 化学 I	90.5%	47.8%	37.9%	37.0%	51.2%
7. 化学 II	66.2%	19.2%	24.1%	25.2%	32.0%
8. 生物 I	77.9%	81.8%	68.1%	58.0%	71.3%
9. 生物 II	60.7%	26.7%	43.1%	33.9%	40.5%
10. 地学 I	0.8%	1.3%	2.0%	2.2%	1.7%
11. 地学 II	0.8%	0.9%	1.3%	2.8%	1.4%
1. 英語 I	97.1%	94.7%	78.9%	83.6%	87.8%
2. 英語 II	96.3%	92.6%	73.3%	71.3%	82.5%
3. オーラルコミュニケーション	57.7%	46.1%	39.4%	30.1%	42.8%
4. リーディング	84.8%	79.5%	59.0%	49.5%	67.4%
5. ライティング	86.4%	77.9%	58.0%	50.0%	67.2%
6. 英語以外の外国語	1.1%	1.6%	1.1%	1.3%	1.3%

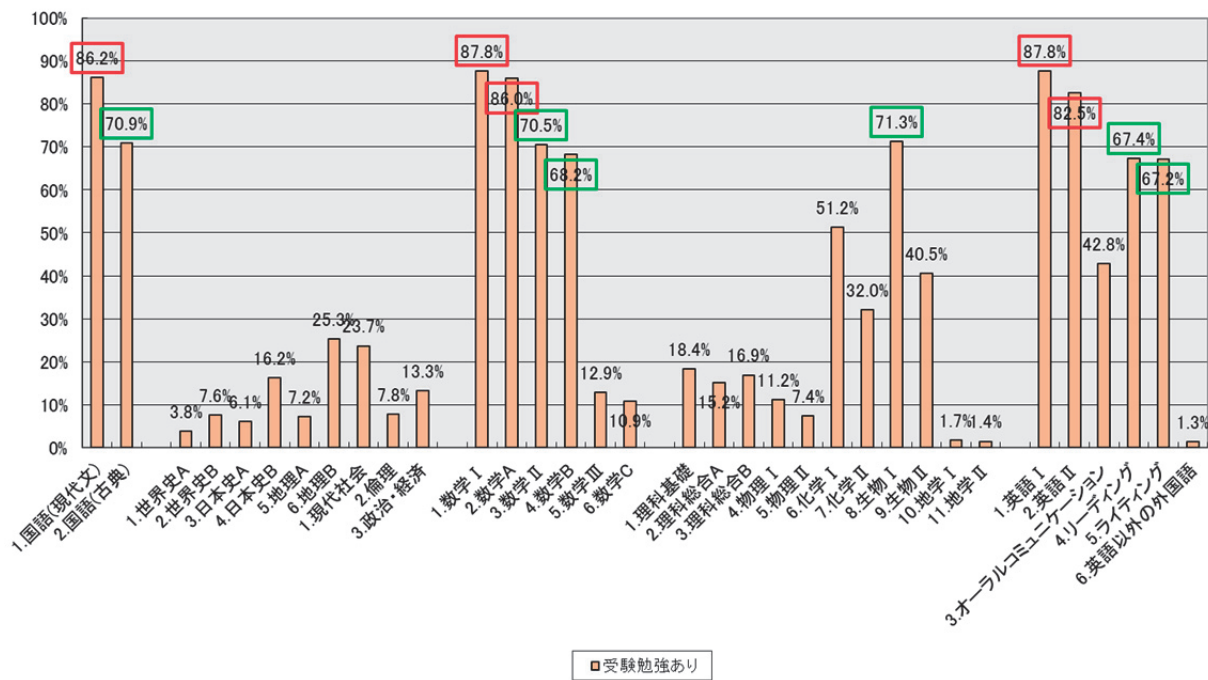


図 19. 科目別受験勉強経験者率 (%)

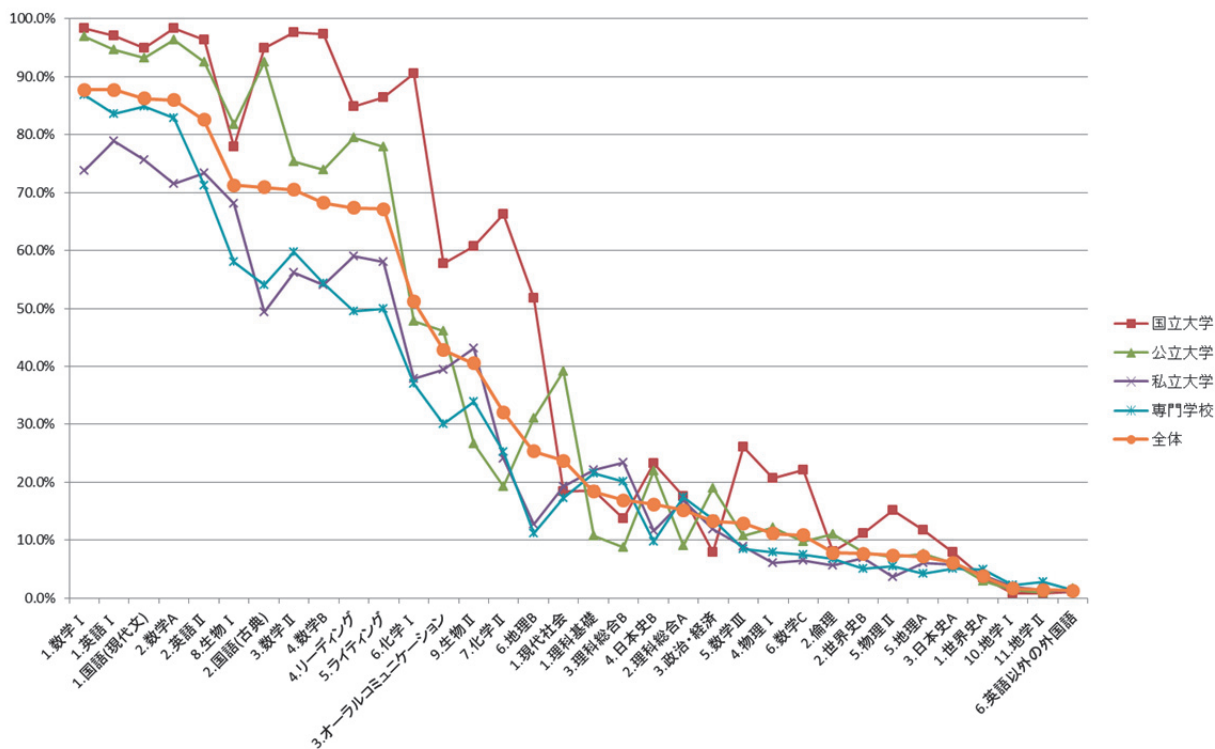


図 20. 科目別受験勉強経験者率 (全体で高い順) (%)

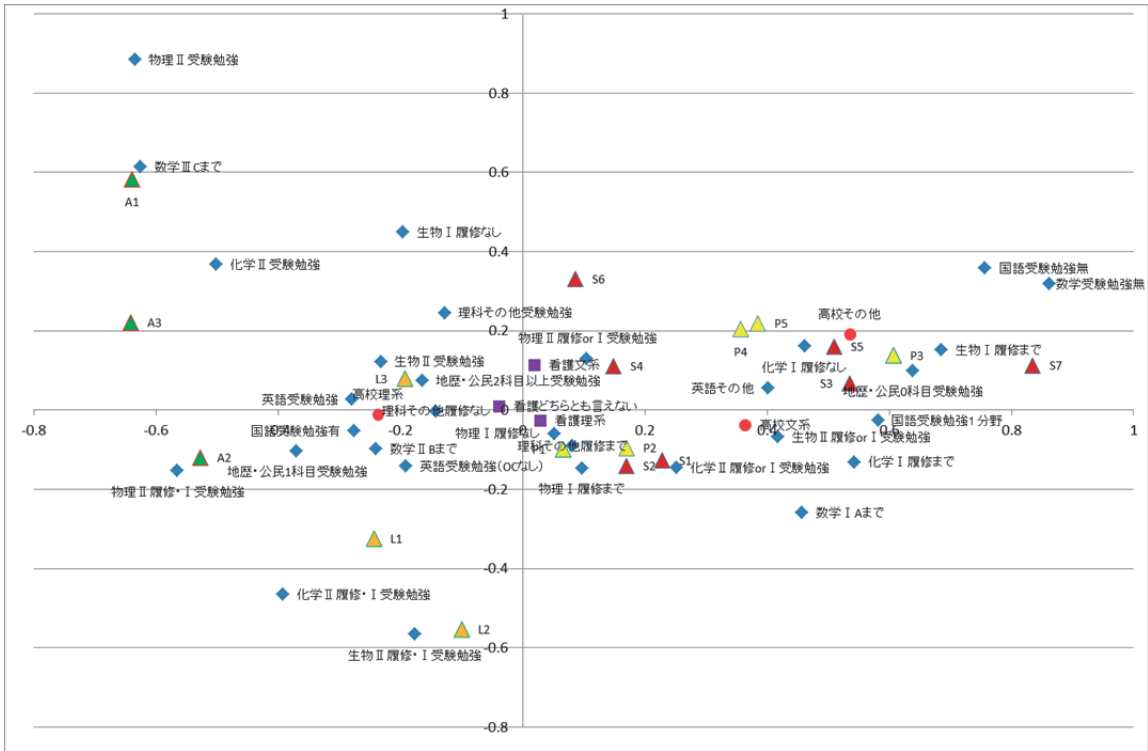


図 21. 「全教科・科目」の布置

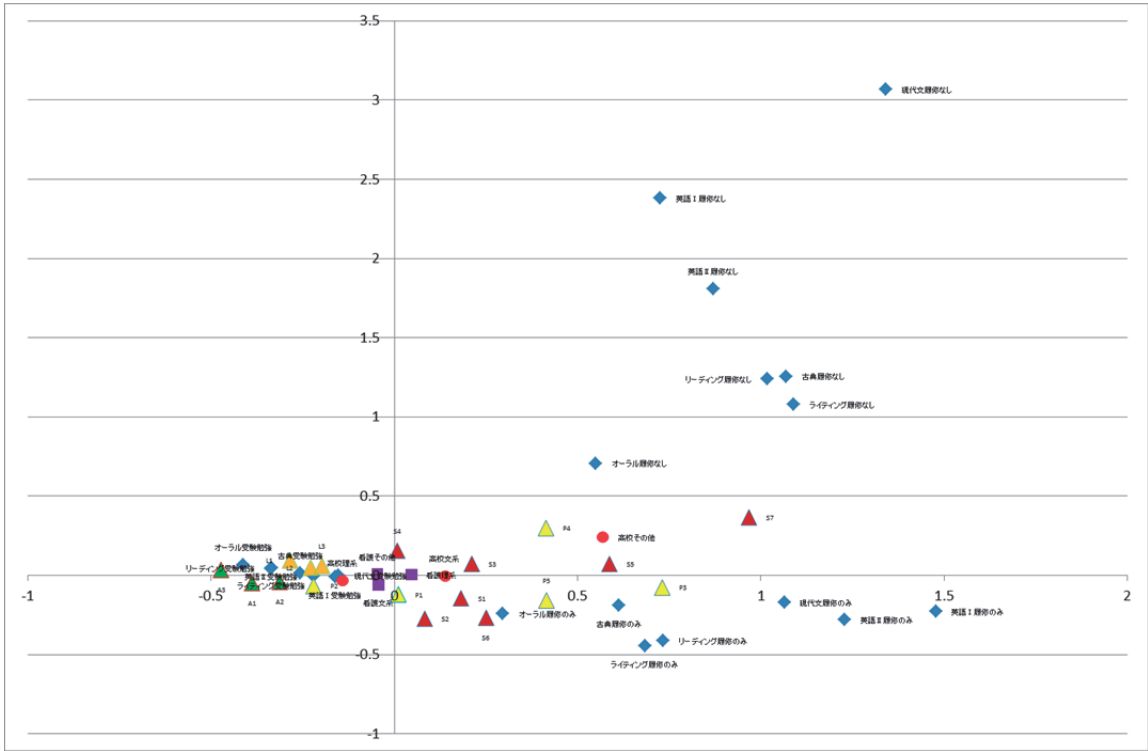


図 22. 「国語」「英語」の布置

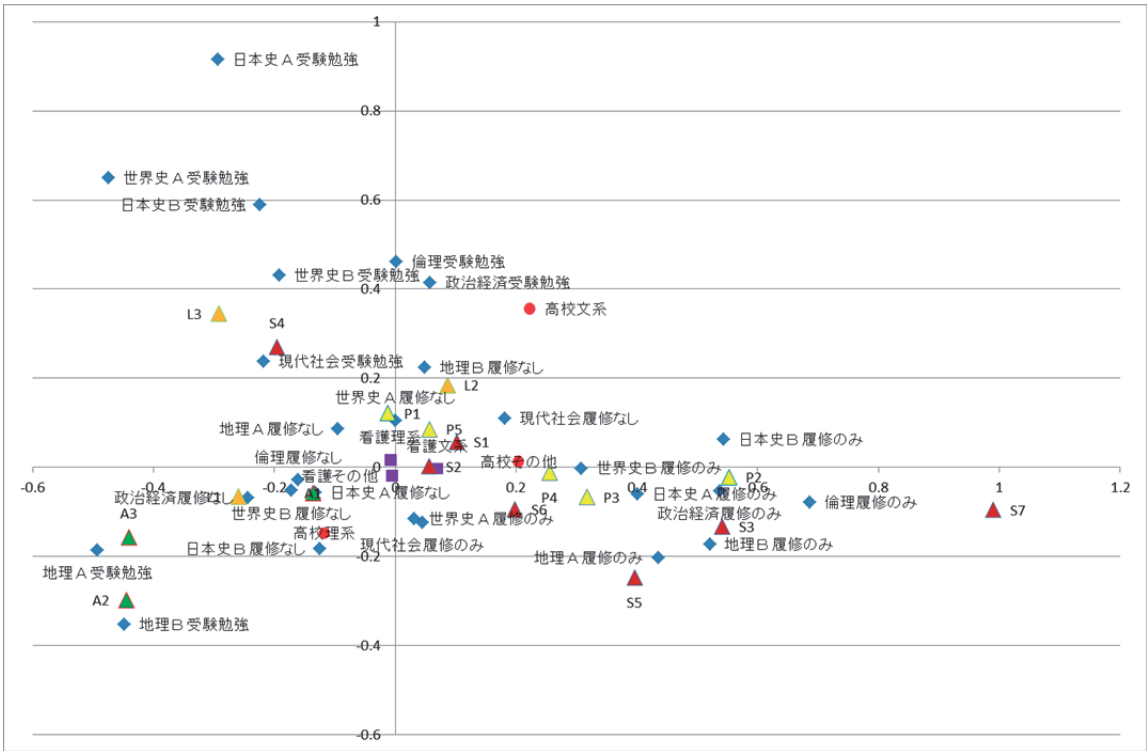


図 23. 「地理歴史」「公民」の布置

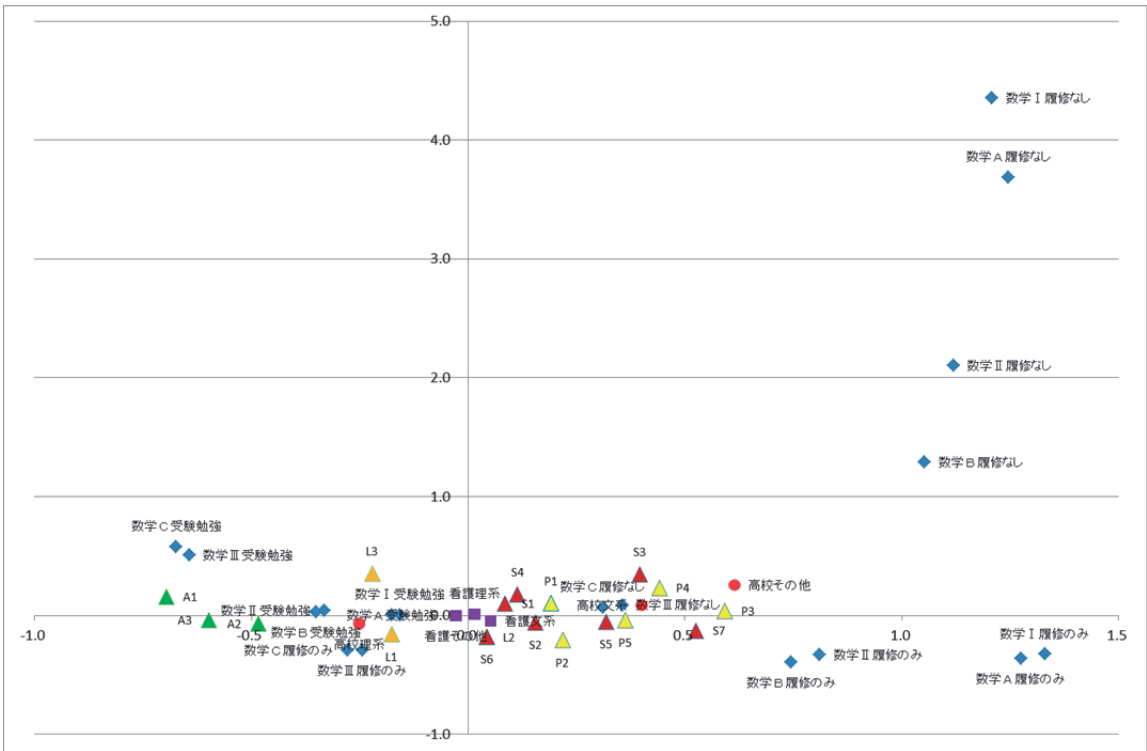


図 24. 「数学」の布置

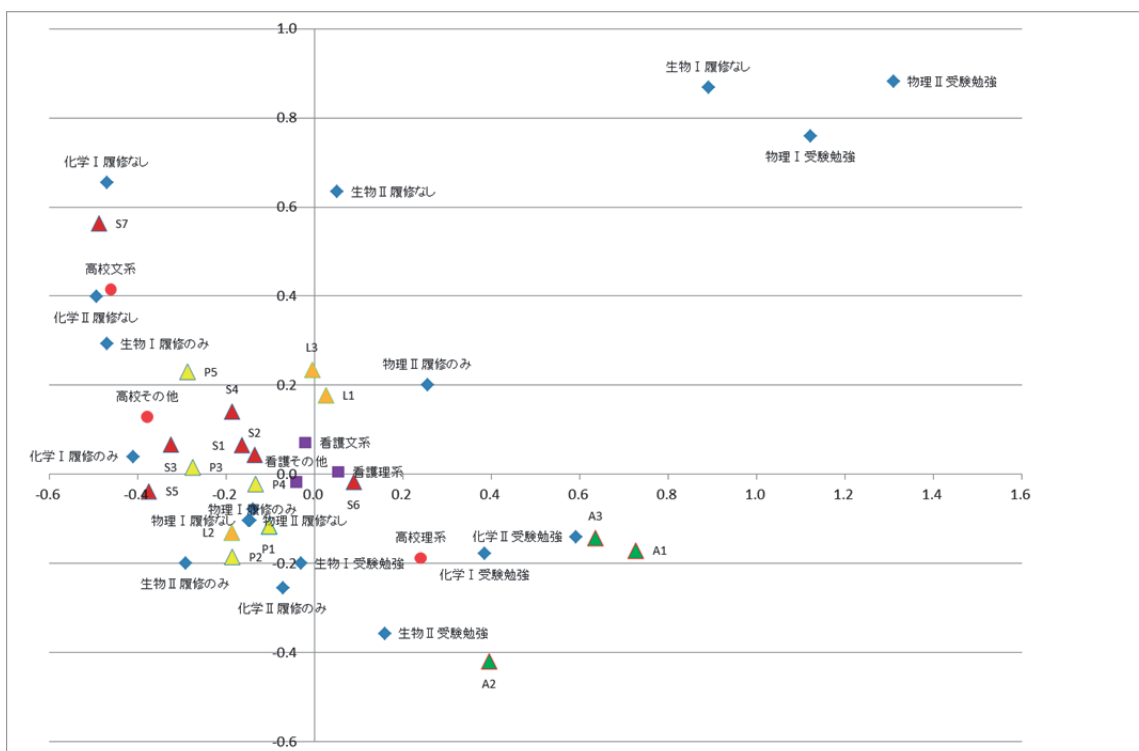


図 25. 「理科」の布置

8.3.4. 看護を「理系」と感じるか「文系」と感じるか

基本的に看護（あなたの専門）を「文系」と感じている者は1割弱程度であった。「理系」がやや多いが、「理系」と「どちらとも言えない」で二分される。

国立大学が「理系」と感じる者の比率がやや低いが、それ以外はほぼ半数が「理系」と回答している。

表 21. 看護に関する感じ方別回答者数

	国立大学	公立大学	私立大学	専門学校	全体
理系	165	238	297	269	969
文系	34	27	66	53	180
どちらとも言えない	182	221	235	214	852
その他	3	3	9	6	21
	384	489	607	542	2,022

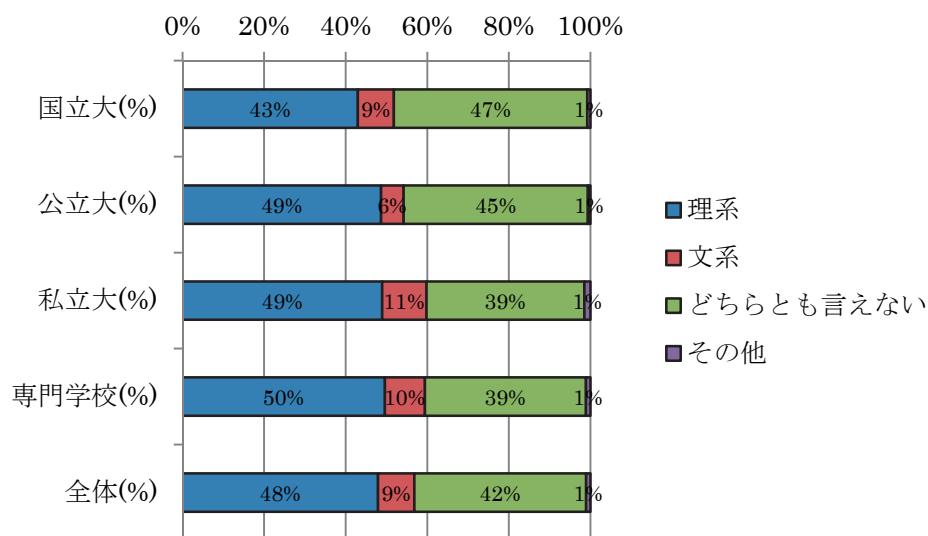


図 26. 看護に対する感じ方構成比 (%)

8.4. その他

8.4.1. 適性度

高等教育学力調査研究会（2002）の項目を利用して、専門に対する適応の度合いについて「1. あてはまらない」～「3. あてはまる」という3段階評定の形式でデータの収集を行い、それぞれ「1」～「3」と得点化して分析を行った。

おおむね、回答者は「適性がある」と感じており、校種間の違いもほとんど見られなかった。

表 22. 「適性度」の平均値

平均値	国立大学	公立大学	私立大学	専門学校	全体	全体標準偏差
1. 性格（適性）	2.25	2.24	2.25	2.19	2.23	0.61
2. 興味（適性）	2.59	2.63	2.60	2.57	2.60	0.61
3. 能力（適性）	2.25	2.22	2.22	2.20	2.22	0.57
4. 得意科目（適性）	1.94	1.80	1.95	1.82	1.88	0.70
5. 職業（適性）	2.67	2.71	2.72	2.74	2.71	0.55
6. 生き方（適性）	2.35	2.37	2.36	2.40	2.37	0.62
7. 誇り（適性）	2.56	2.53	2.56	2.55	2.55	0.62
8. 再選択（適性）	2.07	2.13	2.17	2.22	2.16	0.70

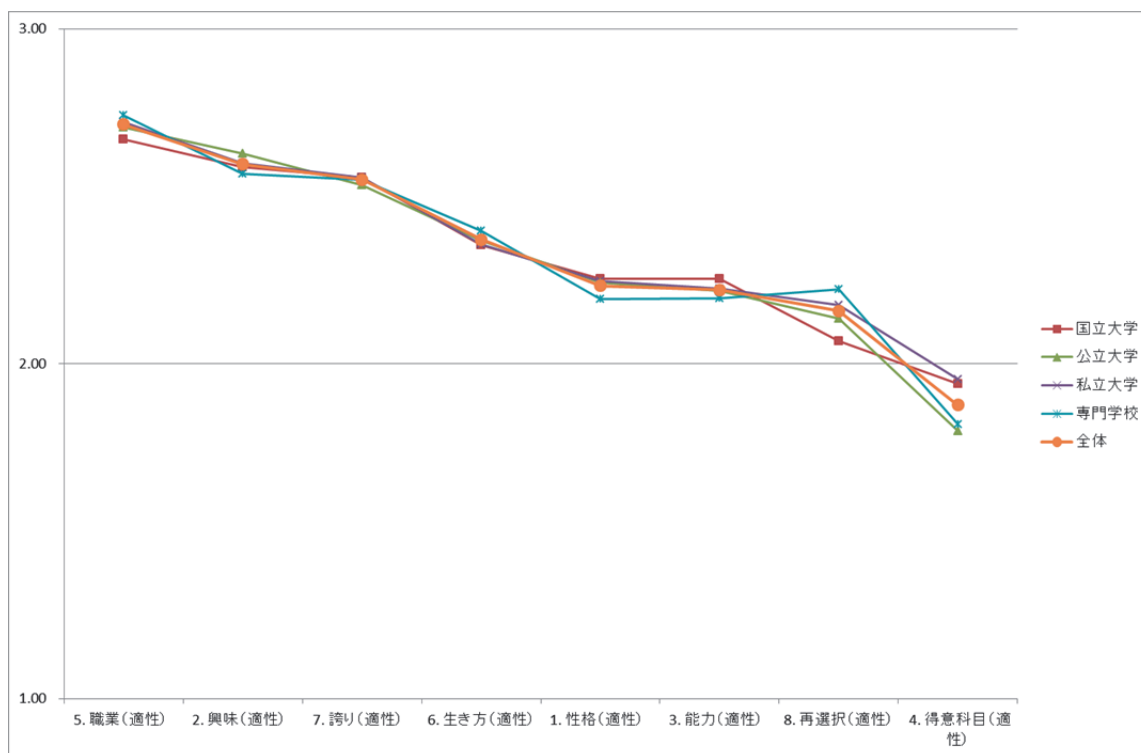


図 27. 適性度 (平均値が高い順)

8.4.2. オープンキャンパスの影響

オープンキャンパスへの参加率は全体として 5 割弱であるが、参加した場合には「決め手」あるいは「参考」になったと回答した者の比率が高かった。

公立大学では、相対的に参加した者の比率が低く、4 割強であった。

表 23. オープンキャンパス参加/不参加および影響度別回答者数

	国立大学	公立大学	私立大学	専門学校	全体
決め手	15	47	70	47	179
参考	114	200	179	156	649
関係薄い	24	30	28	19	101
全く無関係	2	3	7	2	14
参加しなかった	223	204	315	312	1,054
合計	378	484	599	536	1,997

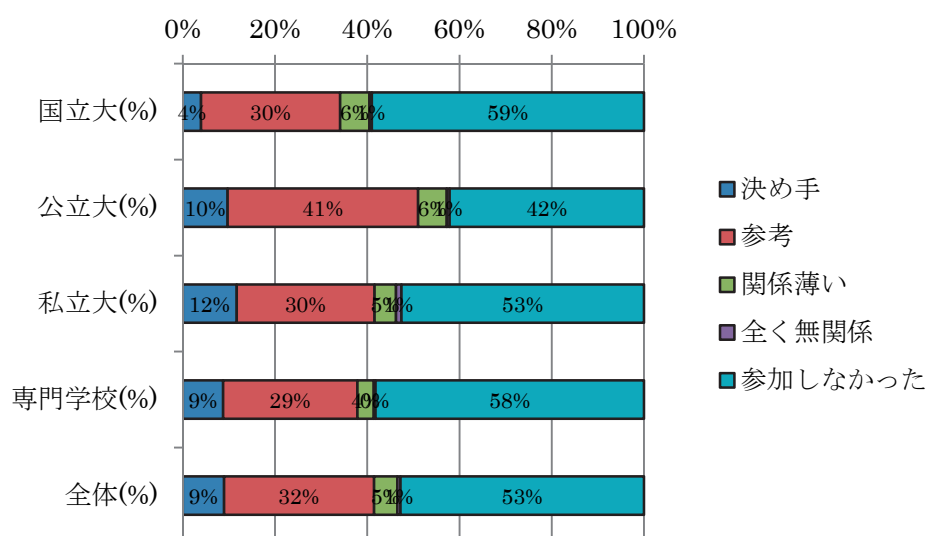


図 28. オープンキャンパス参加/不参加および影響度構成比 (%)

8.4.3. 身近な医療関係者

身近に医療関係者がいない学生は全体として 3 割強、残りは誰かしら医療関係者が近くにいる環境であった。身近な医療関係者は全体としては「親戚」「友人」「親」の順であるが、専門学校では「親」と答えた率が低く、2 割強であったのに対し、私立大学では約三分の一に達していた。

表 24. 身近な医療関係者の存在に関わる回答者数

	国立大学	公立大学	私立大学	専門学校	全体
祖父母	16	18	26	21	81
親	105	112	205	119	541
兄弟姉妹	72	85	111	96	364
親戚	146	154	225	206	731
親しい知人	71	62	96	92	321
友人	103	151	187	187	628
その他	3	5	5	12	25
いない	120	165	187	167	639
合計	392	493	639	556	2,080

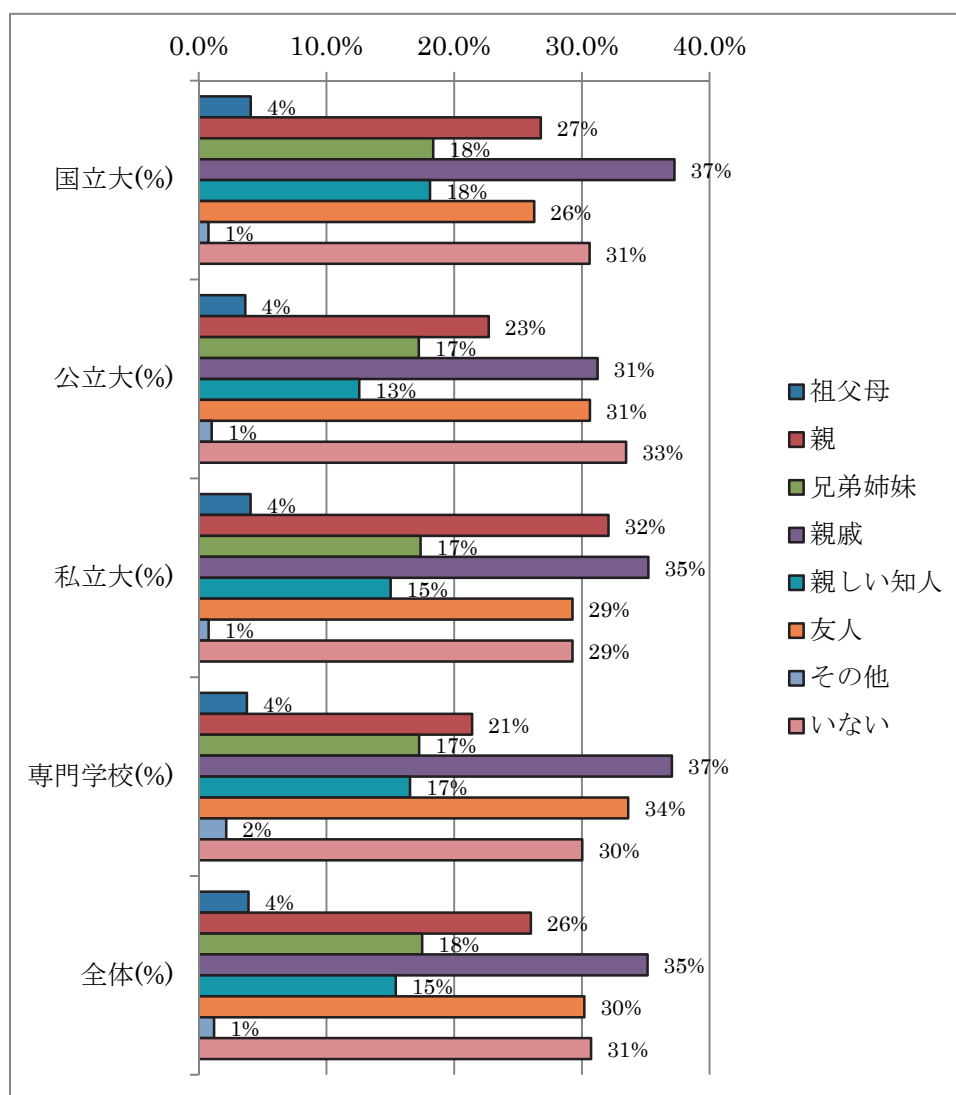


図 29. 身近な医療関係者として存在する比率 (%)

8.4.4. 将来希望する進路

表 25. 将来希望する進路別回答者数

	国立大学	公立大学	私立大学	専門学校	全体
教育・研究	10	21	28	21	80
医療技術	332	413	530	478	1,753
専門以外	8	16	20	13	57
その他	26	37	29	20	112
合計	376	487	607	532	2,002

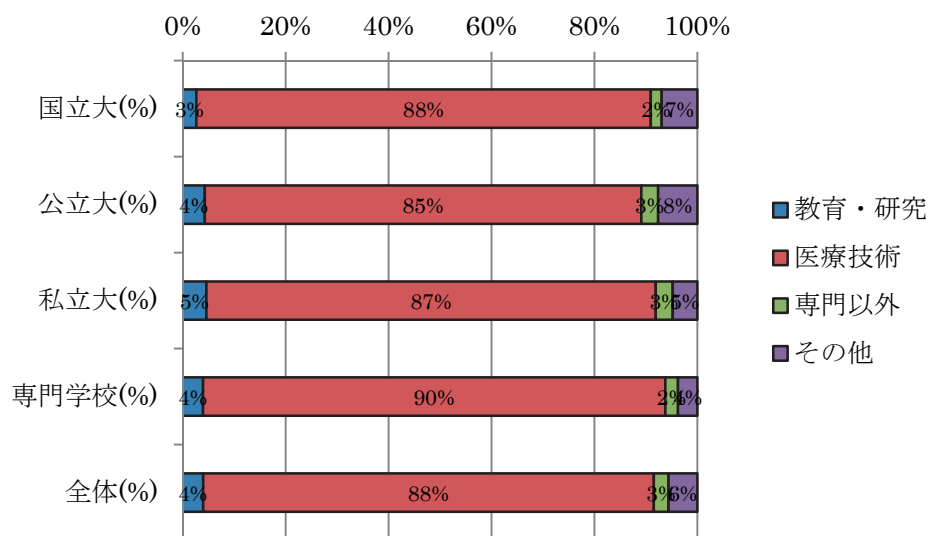


図 30. 将来希望する進路の構成比 (%)

全体として9割近くが、将来、「医療技術者」としての進路を希望すると回答した。「看護」以外の進路という者がほとんどいないと同時に、「教育・研究」という回答も少ないという結果であった。

参考文献

高等教育学力調査研究会 (2002). 『大学生の学習に対する意欲等に関する調査研究』平成12, 13 年度文部科学省教育改革の推進のための総合的調査研究委託報告書 (研究代表者 柳井晴夫)

平成23年度 進路決定に関するアンケート

科学研究費基盤研究(B)「医療の高度化に伴う看護系大学の高大接続問題 ―看護職志望者の適性と大学入試―
研究代表者 倉元 直樹 (東北大学)

この調査は看護師などの医療技術者や医療科学者を養成する分野に進学した学生の皆さんが、どのようなことを考慮して進路を決定しているのかを明らかにすることを目的としています。これからの入試や教育の改善に役立つ基礎資料として活用するために、回答にご協力ください。

なお、結果は統計的に処理されますので、プライバシーは守られます。その他、皆さんにご迷惑をお掛けすることは一切ありませんので、率直にお答えください。

I. プロフィール

以下の質問について、**あてはまるところに一つだけ** ○を付けてください。「その他」を選んだ場合や記述式の回答項目については、カッコ内に内容を具体的に記述してください。

- a. 性別: 1. 男 2. 女 b. 居住形態: 1. 自宅(実家) 2. 自宅外 c. 年齢 ()
d. 学年等: 1. 1年生 2. 2年生 3. 3年生 4. 4年生 5. その他 ()
e. 専門: 1. 看護 2. 放射線 3. 検査 4. 理学療法 5. 作業療法 6. その他 ()
f. 学校の種類: 1. 国立大学 2. 公立大学 3. 私立大学 4. 専門学校 5. その他 ()
g. 現浪: 1. 現役 2. 浪人 (浪) 3. その他 ()
h. 出身高校: 1. 国立 2. 公立 3. 私立 4. その他 () i. 高校の所在地: 都道府県名 ()
j. 高校時代の課程・コース・類型等: 1. 普通科(文系) 2. 普通科(理系) 3. 理数科
4. 総合学科 5. その他 ()

II. 進学先の決定と入試

- a. あなたが入学した入試の区分はどれですか? **あてはまるところに一つだけ** ○を付けてください。
1. 一般入試 2. 推薦入試 3. AO入試 4. 社会人入試 5. 編入試験 6. その他 ()
- b. 現在所属している専攻(学科)に志願することを決めた時期はいつ頃ですか? **あてはまるところに一つだけ** ○を付けてください。
1. 高校入学前 2. 高校1年 3. 高校2年 4. 高校3年の4~7月
5. 高校3年の8月以降センター試験以前 6. 高校3年のセンター試験以降
7. 高校卒業後 8. その他 ()
- c. 現在所属している専攻(学科)以外にどこかを受験しましたか? **あてはまるところに一つだけ** ○を付けてください。「2」に○をした場合には、**さらに () の中からあてはまるところにいくつでも** ○を付けてください。
1. 他に受験したところはない
2. 他に受験したところがある
(1. 看護系の大学 2. 看護系の専門学校 3. 看護系以外の大学 4. 看護系以外の専門学校)

d. 受験の時期、現在所属している専攻（学科）は第1志望でしたか？ あてはまるところに一つだけ ○を付けてください。

1. 第1志望だった 2. 第2志望だった 3. 第3志望以下だった

e. 現在所属している専攻（学科）以外に、受験科目や志願手続きを調べるなど、自分の進路の候補として具体的に検討した分野はありますか？ あてはまるところにいくつでも ○を付けてください。

1. 医学 2. 歯学 3. 薬学 4. 所属している以外の医療技術系（具体的に_____）
 5. 医歯薬系以外の理系分野（具体的に_____） 6. 文系分野（具体的に_____）
 7. 専門学校の資格系分野（具体的に_____） 8. 他に検討した分野はない

f. 受験先の決定に際して最も影響力が大きかったのは、下記のうちのどれですか？ あてはまるところに一つだけ ○を付けてください。

1. 親の意見 2. 高校・予備校などの先生の見解 3. 自分の意見 4. その他（_____）

g. 現在所属している専攻（学科）への受験を決めた理由として、以下のような点はどの程度重要だと感じていましたか？ それぞれについて、例にしたがい、あてはまるところに一つだけ ○を付けてください。

1. 全く重要だと感じていなかった 2. あまり重要だと感じていなかった 3. どちらとも言えない
 4. 少しは重要だと感じていた 5. かなり重要だと感じていた

[例]

将来、外国で仕事ができそうかどうか | 1 2 3 4 5
 | — + — + — + — + — |

- | | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | | | | | | |
|-------------------------------------|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|--|
| 1. 取得できる資格の種類が魅力的であること | | — | + | — | + | — | + | — | + | — | |
| 2. 将来の仕事に興味・関心があること | | — | + | — | + | — | + | — | + | — | |
| 3. 専門で学ぶ内容への興味・関心があること | | — | + | — | + | — | + | — | + | — | |
| 4. 将来の職業がはっきりしているかどうか | | — | + | — | + | — | + | — | + | — | |
| 5. 将来、就職できそうかどうか | | — | + | — | + | — | + | — | + | — | |
| 6. 将来、見込まれる収入の金額が十分かどうか | | — | + | — | + | — | + | — | + | — | |
| 7. 将来、暮らしたいと思っている地域で暮らせそうかどうか | | — | + | — | + | — | + | — | + | — | |
| 8. 大学や学校がある地域や場所が魅力的かどうか | | — | + | — | + | — | + | — | + | — | |
| 9. 楽しい学生生活が送れそうかどうか | | — | + | — | + | — | + | — | + | — | |
| 10. 所属する専攻（学科）の教育内容 | | — | + | — | + | — | + | — | + | — | |
| 11. 所属する専攻（学科）の教員の研究内容 | | — | + | — | + | — | + | — | + | — | |
| 12. 大学や学校の評判、社会的評価 | | — | + | — | + | — | + | — | + | — | |
| 13. 施設・設備が充実しているかどうか | | — | + | — | + | — | + | — | + | — | |
| 14. 学費の安さ | | — | + | — | + | — | + | — | + | — | |
| 15. 生活費の安さ | | — | + | — | + | — | + | — | + | — | |
| 16. 自宅から通えるかどうか | | — | + | — | + | — | + | — | + | — | |
| 17. 合格可能性の高さ | | — | + | — | + | — | + | — | + | — | |
| 18. 入試科目の内容 | | — | + | — | + | — | + | — | + | — | |
| 19. 入試の地方会場が自宅近くに設けられていたかどうか | | — | + | — | + | — | + | — | + | — | |
| 20. 他に受験したところとの併願しやすさ | | — | + | — | + | — | + | — | + | — | |

III. 高校時代の学習履歴

- a. 文系、理系に最終的に分かれたのはいつからですか？ **あてはまるところに一つだけ** ○を付けてください。
 1. 高校入学時 2. 高校2年進級時 3. 高校3年進級時 4. 文系、理系に分かれてはいなかった
 5. その他（具体的に_____）
- b. 大学や専門学校の入試科目について具体的に知った上で、文系か理系かを決めましたか？ **あてはまるところに一つだけ** ○を付けてください。
 1. はい 2. いいえ 3. その他（具体的に_____）
- c. 以下に示す教科・科目について、どの程度勉強しましたか？それぞれについて、**あてはまるところに一つだけ** ○を付けてください。なお、よく覚えていない場合には、何もつけずに（ ）の中に○をしてください。
 1. 履修していない 2. 履修したが、受験勉強はしていない 3. 受験勉強をした

		1	2	3	?
(国語)	1. 国語 (現代文)	— + —			()
	2. 国語 (古典)	— + —			()
(地歴)	1. 世界史 A (2 単位)	— + —			()
	2. 世界史 B (4 単位)	— + —			()
	3. 日本史 A (2 単位)	— + —			()
	4. 日本史 B (4 単位)	— + —			()
	5. 地理 A (2 単位)	— + —			()
(公民)	6. 地理 B (4 単位)	— + —			()
	1. 現代社会	— + —			()
	2. 倫理	— + —			()
(数学)	3. 政治・経済	— + —			()
	1. 数学 I	— + —			()
	2. 数学 A (単元選択)	— + —			()
	3. 数学 II	— + —			()
	4. 数学 B (単元選択)	— + —			()
	5. 数学 III (理系)	— + —			()
(理科)	6. 数学 C (理系・単元選択)	— + —			()
	1. 理科基礎 (全分野)	— + —			()
	2. 理科総合 A (物理・化学分野)	— + —			()
	3. 理科総合 B (生物・地学分野)	— + —			()
	4. 物理 I (文系理系共通)	— + —			()
	5. 物理 II (理系)	— + —			()
	6. 化学 I (文系理系共通)	— + —			()
	7. 化学 II (理系)	— + —			()
	8. 生物 I (文系理系共通)	— + —			()
	9. 生物 II (理系)	— + —			()
	10. 地学 I (文系理系共通)	— + —			()
(外国語)	11. 地学 II (理系)	— + —			()
	1. 英語 I	— + —			()
	2. 英語 II	— + —			()
	3. オーラルコミュニケーション	— + —			()
	4. リーディング	— + —			()
	5. ライティング	— + —			()
	6. 英語以外の外国語	— + —			()

- d. あなたが「履修しておけばよかった」あるいは「高校時代にもっとしっかり勉強しておけばよかった」と思う教科・科目があれば、**いくつでも**挙げてください。

(_____)

- e. あなたが学んでいる専門の内容は、本質的に「理系」だと感じますか？あるいは「文系」だと感じますか？
あてはまるところに一つだけ○を付けてください。

1. 理系 2. 文系 3. どちらとも言えない 4. その他 (具体的に _____)

IV. その他

- a. 以下の質問それぞれに (1: あてはまらない 2: どちらともいえない 3: あてはまる) で回答してください。

所属する専攻 (学科) への適性度

	1	2	3
1. 自分の性格にあっている	———+———		
2. 自分の興味・関心にあっている	———+———		
3. 自分の能力を生かすことができる	———+———		
4. 高校時代の得意科目を生かすことができる	———+———		
5. 希望する職業につくことができる	———+———		
6. 自分の求めている生き方ができる	———+———		
7. 現在の専門を学んでいることを誇りに思う	———+———		
8. 新しく自分の専門を学び直せるとしてもやはり現在の専門を選ぶ	———+———		

- b. あなたは、現在所属している専攻 (学科) のオープンキャンパスに参加しましたか？また、参加した場合、オープンキャンパスへの参加は、あなたが入学した専攻 (学科) への志望の決定にどの程度の意味がありましたか？カッコ内の選択肢に**一つだけ**○をつけてください。

1: 参加しなかった

2: 参加した (1: 決め手となった, 2: 参考になった, 3: あまり関係がなかった, 4: 全く無関係)

- c. あなたの家族・親戚・親しい人で医療関係者、または、医療関係者をめざしている人はいますか？また、いる場合、カッコ内の選択肢に**いくつでも**○をつけてください。

1: いない

2: いる (1: 祖父母, 2: 親, 3: 兄弟姉妹, 4: 親戚, 5: 親しい知人, 6: 友人, 7: その他 [具体的に _____])

- d. あなたが将来希望する進路は何ですか？**あてはまるところに一つだけ**○を付けてください。

1. 教育・研究者 2. 病院等の医療技術者 3. 今の専門とは異なる職種 (具体的に _____)

4. その他 (具体的に _____)

最後に、このアンケートについて感じたことがあれば、自由にお書きください。

ご協力ありがとうございました。

第4章 看護系公立大学入学者の学校選択

——大学調査（質問紙調査）から——

鈴木幸子（埼玉県立大学）

1. はじめに

大学進学率の向上、とりわけ女子の進学率の向上の一方で18歳人口が減り各大学では受験生確保が大きな課題となっている。看護師養成所としては看護系大学が増え続け、看護職を志す高校生の選択肢として3年制の専門学校、短期大学あるいは4年制大学と多様な選択が可能になった。選ばれる看護系大学となるには、受験生がどのようなことを考慮して大学を選んでいるのかを把握し、対策を講じる必要がある。本稿では、相次いで専門学校や短期大学から大学化してきた公立大学に焦点化して考察する。

2. 目的

看護系学部、看護専門学校に進学した学生がどのようなことを考慮して進路を決定しているのか、大学／専門学校別、大学の設置主体別（国立／公立／私立）に明らかにし、とくに公立大学の受験生確保に向けて示唆を得る。

3. 方法

調査用紙は無記名自記式とし、調査内容は年齢、性別、学校種別、設置主体、入試区分等の属性と進学先の決定要因、高校時代の学習履歴、所属する専攻への適性度等である。

調査は平成22年から23年度に看護系国立大学3校、公立大学2校、私立大学5校、看護専門学校7校において、授業担当の教員を通じて学生に研究の主旨と倫理的配慮を説明の上調査用紙を配布し、提出をもって同意とみなした。回収は集合調査法の場合には一括回収、留め置き法の場合には回収箱、または個別郵送で回収した。研究代表者所属施設の倫理委員会の承認を受けて調査を実施した。

4. 結果

調査用紙の配布数は2868票、回収数2080票、回収率72.5%であった。学校の設置主体が無記入の11票と無記入が多い1票を除く2068票を有効回答とした。設置主体別の内訳は、国立大学392、公立大学493、私立大学634、専門学校549であった。

1) 対象の属性

対象の属性を大学と専門学校別にみると、性別割合には差がないが、大学は専門学校に比べて自宅外生が多く、現役生の割合が多く、出身高校は私立高校が多く、普通科理系が多く、社会人入試の割合が少なかった。（表1）

2) 大学／専門学校別の進学先決定要因

大学では「文系」や「医学」「歯学」「薬学」など他の医療系の分野を検討したものが10数%見られ、他分野を「検討しない」が46%であったが、専門学校では「検討しない」が65%と多かった。（図1）

表 1. 対象の属性

表1.対象の属性	大学		専門学校		p値
	実数	(%)	実数	(%)	
年齢(平均±標準偏差)	20.1±2.4		21.9±4.8		a 0.000
性別					
男性	150	(9.9)	54	(9.9)	b 0.835
女性	1366	(90.1)	493	(90.1)	
居住形態					
自宅	829	(56.2)	326	(62.2)	b 0.018
自宅外	647	(43.8)	198	(37.8)	
入学時					
現役	1362	(90.1)	397	(74.3)	b 0.000
浪人	89	(5.9)	25	(4.7)	
その他	61	(4.0)	112	(21.0)	
出身高校					
国立	22	(1.5)	5	(0.9)	
公立	1089	(72.0)	463	(85.9)	b 0.000
私立	396	(26.2)	69	(12.8)	
その他	6	(0.4)	2	(0.4)	
高校時代の課程・コース					
普通科文系	421	(28.0)	200	(37.1)	
普通科理系	898	(59.6)	268	(49.7)	b 0.000
理数科	47	(3.1)	5	(0.9)	
総合学科	66	(4.4)	23	(4.3)	
その他	74	(4.9)	43	(8.0)	
入試区分					
一般入試	986	(65.0)	396	(72.5)	
推薦入試	423	(27.9)	113	(20.7)	
AO入試	44	(2.9)	0	0.0	b 0.000
社会人入試	19	(1.3)	34	(6.2)	
編入入試	23	(1.5)	0	0.0	
その他	21	(1.4)	3	(0.5)	

a: Mann-WhitneyのU検定 b: χ^2 検定

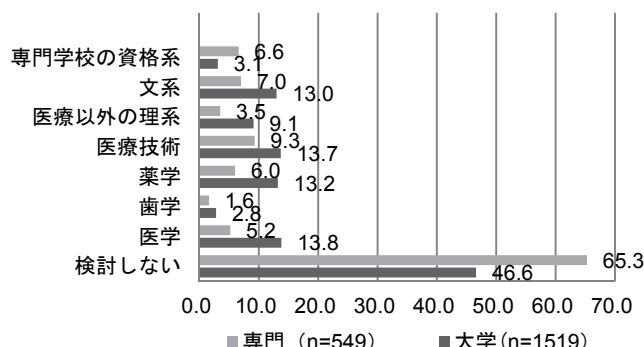


図 1. 大学/専門学校別 進学先として検討した分野 (%)

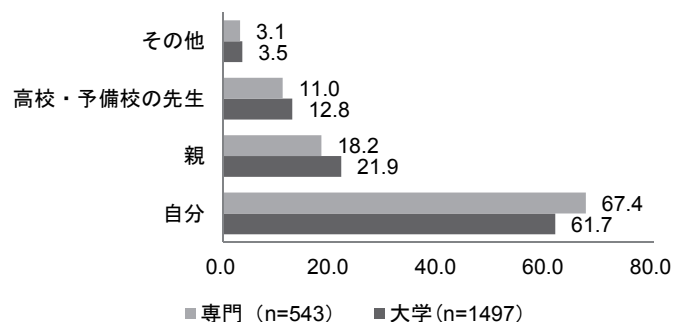


図 2. 大学/専門学校別 最も影響力を及ぼしたもの (%)

進学先決定に最も影響を及ぼしたものは、大学、専門学校ともに「自分」が多いが、大学では「親」「高校・予備校の先生」が専門学校より若干多い傾向があった。(図 2)

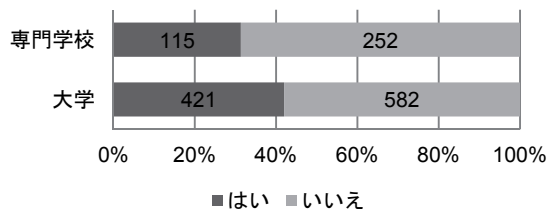
受験を決めた理由では大学/専門学校ともに資格や就職が主な決定理由となっていたが、より強く「就職」を意識しているのは専門学校であり、「楽しい学生生活」や「合格可能である」は大学の方が重要と考えていた。「学費の安さ」「生活費の安さ」「自宅から通える」は専門学校の方が重視していた。(表 2)

表 2. 大学/専門学校別 受験を決めた理由

(1: 全く重要だと感じていなかった~5: かなり重要だと感じていた)

	大学		専門学校		p値
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	
取得できる資格	4.5	0.9	4.5	0.9	0.812
将来の仕事に興味	4.4	0.8	4.4	0.9	0.714
学ぶ内容に興味	4.3	0.9	4.2	1.0	0.495
職業がはっきりしている	4.4	0.9	4.6	0.8	* 0.000
就職できそう	4.5	0.9	4.6	0.8	* 0.003
将来の収入が十分	3.9	1.1	4.1	1.0	* 0.000
将来、希望の地域で暮らす	3.0	1.2	3.2	1.3	* 0.000
学校の場所	3.3	1.2	3.3	1.2	0.481
楽しい学生生活	3.5	1.1	3.4	1.2	* 0.004
学科の教育内容	3.6	1.0	3.5	1.1	0.242
教員の研究内容	2.8	1.2	2.8	1.2	0.895
学校の評判	3.5	1.0	3.4	1.1	0.193
施設・設備の充実	3.7	1.0	3.7	1.1	0.234
学費の安さ	3.7	1.2	4.2	1.0	* 0.000
生活費の安さ	3.2	1.2	3.6	1.2	* 0.000
自宅から通える	3.3	1.5	3.7	1.5	* 0.000
合格可能である	3.9	1.1	3.8	1.2	* 0.040
入試科目	3.8	1.1	3.7	1.2	0.078
入試の会場	2.4	1.3	2.7	1.3	* 0.000
併願しやすさ	2.4	1.3	2.7	1.4	* 0.000

*: p<0.05 Mann-WhitneyのU検定



χ^2 検定 p=0.000

図 3. 大学/専門学校別 親が医療関係者の者(実数)

大学では専門学校よりも親が「医療関係者」である

割合が有意に高かった。(図 3)

表 3. 大学/専門学校別 適性度

(1:あてはまらない 2:どちらともいえない 3:あてはまる)

	大学		専門学校		p値
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	
自分の性格にあっている	2.3	0.6	2.2	0.7	0.062
自分の興味にあっている	2.6	0.6	2.6	0.6	0.116
自分の能力を生かせる	2.2	0.6	2.2	0.5	0.179
得意科目を生かせる	1.9	0.7	1.8	0.7	* 0.030
希望する職業につける	2.7	0.6	2.8	0.5	0.247
求める生き方ができる	2.4	0.6	0.4	0.6	0.262
専門の学びに誇りがある	2.6	0.6	2.6	0.6	0.760
学び直してもまた選択	2.1	0.7	2.2	0.7	* 0.014

*: p<0.05 Mann-WhitneyのU検定

3) 大学設置主体別の属性の違い

表 4. 大学設置主体別の属性

	国立	公立	私立	p値
	実数 (%)	実数 (%)	実数 (%)	
年齢(平均±標準偏差)	19.7±1.9	20.0±2.8	20.3±2.4	
性別				
男性	26 (6.6)	39 (7.9)	85 (13.4) **	
女性	366 (93.4)	453 (92.1)	547 (86.6)	
居住形態				
自宅	148 (36.7)	316 (66.2)	365 (59.2) **	
自宅外	234 (61.3)	161 (33.8)	252 (40.8)	
入学時				
現役	335 (85.7)	446 (90.7)	581 (92.4) **	
浪人	47 (12.0)	20 (4.1)	22 (3.5)	
その他	9 (2.3)	26 (5.3)	26 (4.1)	
出身高校				
国立	15 (3.8)	3 (0.6)	4 (1.5)	
公立	320 (81.8)	379 (77.0)	390 (61.9) **	
私立	55 (14.1)	107 (21.7)	234 (37.1)	
その他	1 (0.3)	3 (0.6)	2 (0.3)	
高校時代の課程・コース				
普通科文系	36 (9.2)	169 (34.6)	216 (34.4)	
普通科理系	327 (83.6)	266 (54.5)	305 (48.6) **	
理数科	21 (5.4)	14 (2.9)	12 (1.9)	
総合学科	1 (0.3)	21 (4.3)	44 (7.0)	
その他	6 (1.5)	18 (3.7)	50 (4.9)	
入試区分				
一般入試	291 (74.2)	313 (63.6)	382 (65.0)	
推薦入試	75 (19.1)	158 (32.1)	190 (30.1)	
AO入試	18 (4.6)	0	26 (4.1) **	
社会人入試	7 (1.8)	9 (1.8)	3 (0.5)	
編入入試	1 (0.3)	12 (2.4)	10 (1.6)	
その他	0	0	21 (1.4)	

** : χ^2 検定 p<0.01

所属する学科(専)への適性度については、「興味にあっている」「希望する職業につける」などが大学・専門学校ともに高値だった。

大学の方が高校時代の「得意科目を生かせる」が高く、専門学校の方が「学び直してもまた選択」の得点が高かった。(表 3)

国立大学 392 名、公立大学 493 名、私立大学 634 名について設置主体別に集計した。

3 群で比較すると国立は浪人比率が高く、普通科理系や理数系の割合が高く、一般入試の比率が高かった。公立は自宅生が多く、普通科文系の比率は市立と同程度で 3 割程度おり、推薦入試比率が最も高かった。私立は男子比率が最も高く 13.4% であり、現役比率が最も高く、私立高校出身が最も多かった。(表 4)

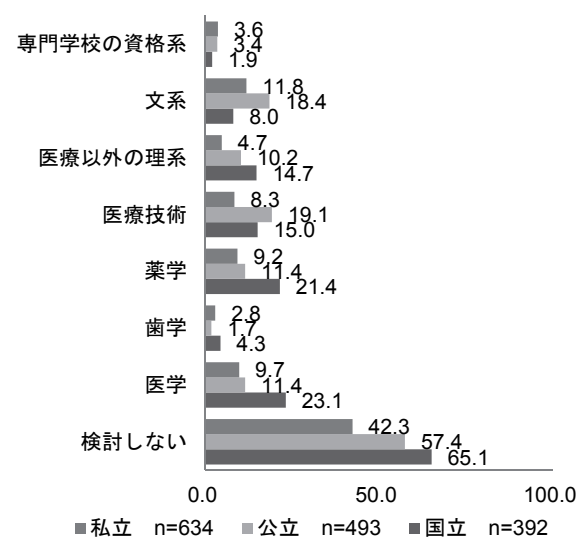


図 4. 大学設置主体別 進学先として検討した分野 (%)

進学先として検討した分野は私立では「検討しない」が半数以下と少ないが、国立、公立では半数以上と多くなっている。国立では「医学」「薬学」分野を検討した者の割合が多い傾向があり、公立では「医

療技術」「文系」分野を検討した者が比較的多い傾向があった。(図4)

4) 大学設置主体別の進学先決定要因

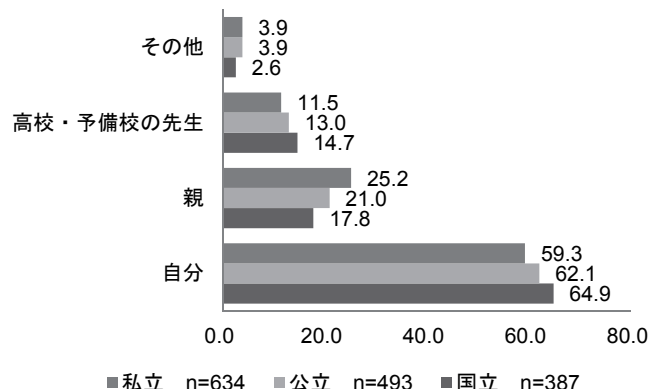


図5. 大学設置主体別 最も影響力を及ぼしたもの (%)

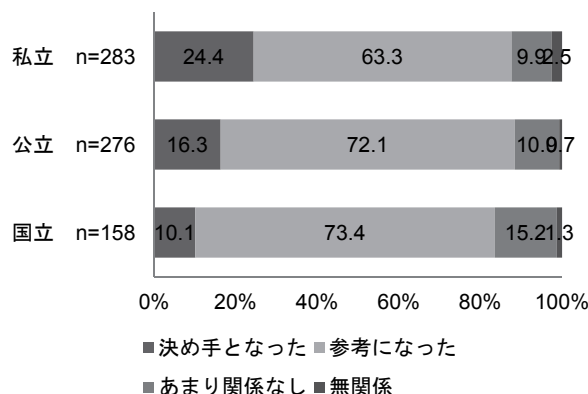


図6. 大学設置主体別オープンキャンパスの影響度 (%)

表5. 大学設置主体別 受験を決めた理由

(1: 全く重要だと感じていなかった~5: かなり重要だと感じていた)

	国立		公立		私立		p値
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	
取得できる資格	4.4	0.9	4.5	0.8	4.4	0.9	* 0.030
将来の仕事に興味	4.4	0.9	4.5	0.8	4.4	0.9	0.712
学ぶ内容に興味	4.3	0.9	4.4	0.9	4.3	0.9	0.231
職業がはっきりしている	4.5	0.8	1.5	0.9	4.4	0.9	0.203
就職できそう	4.6	0.8	4.6	0.8	4.3	0.9	* 0.000
将来の収入が十分	4.0	1.0	3.9	1.1	3.9	1.1	0.323
将来希望の地域で暮らせる	3.9	1.2	2.8	1.3	3.1	1.2	* 0.001
学校の場所	3.3	1.1	3.3	1.2	3.3	1.2	0.999
楽しい学生生活	3.5	1.0	3.6	1.1	3.5	1.1	0.456
学科の教育内容	3.6	1.0	3.6	1.0	3.6	1.0	0.767
教員の研究内容	2.8	1.1	2.6	1.1	3.1	1.1	* 0.000
学校の評判	3.5	1.0	3.5	1.0	3.5	1.1	0.630
施設・設備の充実	3.5	1.0	3.7	1.0	3.7	1.0	* 0.003
学費の安さ	3.8	1.1	4.4	0.9	3.1	1.2	* 0.000
生活費の安さ	3.4	1.1	3.4	1.3	3.0	1.2	* 0.000
自宅から通える	2.8	1.5	3.5	1.5	3.4	1.4	* 0.000
合格可能である	4.2	1.0	4.0	1.0	3.6	1.2	* 0.000
入試科目	4.0	1.1	4.0	1.1	3.7	1.1	* 0.000
入試の会場	2.1	1.1	2.2	1.3	2.6	1.3	* 0.000
併願しやすさ	2.0	1.1	2.2	1.2	2.8	1.3	* 0.000

*: p<0.05 Kruskal-Wallis検定

表6. 大学設置主体別 適性度

(1: 当てはまらない 2: どちらともいえない 3: 当てはまる)

	国立		公立		私立		p値
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	
自分の性格にあっている	2.3	0.6	2.2	0.6	2.3	6.1	0.948
自分の興味にあっている	2.6	0.6	2.6	0.6	2.6	6.1	0.370
自分の能力を生かせる	2.3	0.5	2.2	0.6	2.2	0.6	0.865
得意科目を生かせる	1.9	0.7	1.8	0.7	2.0	0.7	* 0.001
希望する職業につける	2.7	0.6	2.7	0.6	2.7	0.6	0.138
求める生き方ができる	2.4	0.6	2.4	0.6	2.4	0.6	0.784
専門の学びに誇りがある	2.6	0.6	2.5	0.6	2.6	0.6	0.865
学び直してもまた選択	2.1	0.7	2.1	0.7	2.2	0.7	* 0.035

*: p<0.05 Kruskal-Wallis検定

大学設置主体別に見た、最も影響力を及ぼしたものは、「自分」が最も多く約6割であったが、私立は「親」が、国立は「高校・予備校の先生」が影響力を及ぼしている割合が他より高かった。(図5)

オープンキャンパスの参加者の影響度は「参考になった」が最も多く7割程度を占めるが、私立では「決め手となった」が他に比べて多い傾向があった。(図6)

受験を決めた理由は、「資格」や「興味」「就職」が上位であったが、公立では「資格」「学費」「自宅から通える」が、私立では「研究内容」「入試会場」「併願」などが他に比べると多い決定理由となっていた。(表5)

大学設置主体別の適性度では、「得意科目を生かせる」「学び直してもまた選択」の得点が私立で高かった。(表6)

5. 考察

大学では専門学校に比べて医療系の他分野や文系も合わせて進学先として検討している。受験を決めた理由の平均得点が高い上位には「資格」「興味」があるが、次いで浪人を避けるために「合格可能」や「入試科目」が重要なので、看護系大学だけに絞って検討しているわけではなく公立大学で「検討しない」は57.4%で、残りの40数%は「文系」も含めた他分野を検討していることになる。看護の職域が拡大し、生活の場でも臨床でも多くの他職種と連携しながらの看護実践が求められている現状を考えると、看護が連携する福祉、教育など周辺分野に興味関心がある高校生が増えてくるのは現実的な流れである。

公立大学学生の受験を決めた理由では「資格」「学費」「自宅から通える」が国立、私立よりも多かった。また、国立、私立に比べて推薦入試での入学が多く、自宅生比率が最も高かった。公立大学に期待される使命として地域への貢献があり、卒業後にその地域で看護職として就業することが期待されていることから、推薦入試は受験生のニーズである「自宅から通える」ことと大学の期待である「地域貢献」の双方の要求に合致した方策である。看護系大学協議会の報告¹⁾では大学に看護職の継続教育や共同研究、地域住民向けの健康教育などを推進する附属研究・研修機関を持っている割合は公立大学が42.2%であり、国立17.1%、私立32.1%に比べて公立大学が最も多い。公立大学のポリシーに基づく地元密着型の大学のありかたと教育を見えやすく、オープンキャンパスなどで伝えていく広報活動も必要である。

6.おわりに

看護系公立大学では国立大学、私立大学に比べて、進学先として「医療技術」「文系」の他分野を検討した者が多く、受験を決めた理由では「資格」「学費」「自宅から通える」が多かった。公立大学では卒業後の地域での活躍と地域の看護の発展までを見通して受験生確保や入試の対策を立てることが重要である。

本調査は、科学研究費基盤研究(B)「医療の高度化に伴う看護系大学の高大接続問題 ―看護職志望者の適性と大学入試―」研究課題番号22390405 研究代表者 倉元直樹 の一部として実施した。

文献

- 1) 日本看護系大学協議会データベース整備・検討委員会：『看護系大学の教育等に関するデータベース報告書』・2012年度状況調査, 日本看護系大学協議会ホームページ, <http://www.janpu.or.jp/wp/wp-content/uploads/2013/12/H24SurveyResults.pdf> (2015.3.4 閲覧)

第5章 看護系の学校に進学した男子学生の状況

西川浩昭（静岡県立大学）

【はじめに】

看護系大学は毎年新設校が認可されており、2014年度には234校となっている。それに伴って学生定員も増加の一途をたどっている。その反面、18歳人口の減少の影響を受け、定員割れを起こす学校も現れ始め、学生の確保は各学校において、重大な問題となっている。看護系の学校においては、女子学生が占める割合が多いが、女子学生については、もはや学生数の増加は困難であり、今後、学生数増加のためには男子学生の増加を目指す必要があり、各学校としては大きな課題となっている。そうした点を鑑み、ここでは男子学生の特質について検討する。

【方法と対象】

本プロジェクトで行った看護系大学生・専門学校生を対象とした調査結果のうち、編入学制度および社会人入学制度で入学した者を除外した1,994名を分析対象とした。男女別にクロス集計を行い、 χ^2 検定により有意性検定を行った。

【結果】

1) 進学先について(表1)

進学先に関する集計結果を表1に示した。男女間で有意差が見られ、女子学生が国公立大学に多いのに比べ、男子学生では私立大学の割合が高くなっている。専門学校については、男女で割合に相違はない。

表1 所属校

	性別		合計
	男	女	
国立大学	36 (19.1%)	545 (30.4%)	581 (29.4%)
公立大学	39 (20.7%)	427 (23.8%)	466 (23.5%)
私立大学	66 (35.2%)	358 (20.0%)	424 (21.4%)
専門学校	47 (25.0%)	463 (25.8%)	510 (25.7%)
合計	188	1793	1981

$X^2=26.3(df=3)$ $p=0.000$

2) 現役・浪人の状況について(表2)

現役・浪人別の集計結果を表2に示した。男女間で有意差が見られ、女子学生の9割弱が現役であるの
に比べ、男子学生でも現役の割合が最も多いがその値は女子よりも少なく、浪人の割合が高くなっていた。

表2 現役・浪人の状況

	性別		合計
	男	女	
現役	146 (78.0%)	1601 (89.7%)	1747 (88.7%)
浪人	22 (11.8%)	91 (5.1%)	113 (5.7%)
その他	19 (10.2%)	92 (5.2%)	111 (5.6%)
合計	187	1784	1971

$$X^2=23.2(df=2) \quad p=0.000$$

3) 志望決定時期について(表3)

現在の所属への志望を決めた時期について表3に示した。男女間で有意差が見られた。男女とも最も割合が高かった回答は「高校3年の4～7月」であったが、その他の回答をみると、女子学生が高校入学前・高校1年次と比較的早い時期から志望を決めていたのに対し、男子学生では高校1年までに決めていた者は少なく、逆に高校卒業後が11.8%と高くなっており、高校在学中でも遅い時期、さらには卒業後に進路変更して志望校を決めた傾向が伺えた。

表3 現在の所属校に志願することを決めた時期

	性別		合計
	男	女	
高校入学前	15 (8.0%)	271 (15.1%)	286 (14.4%)
高校1年	10 (5.3%)	197 (11.0%)	207 (10.4%)
高校2年	36 (19.3%)	337 (18.8%)	373 (18.8%)
高校3年の4～7月	44 (23.4%)	356 (19.8%)	400 (20.3%)
高校3年の8月以降 センター試験以前	28 (15.0%)	308 (17.1%)	336 (16.9%)
高校3年のセンター 試験以降	19 (10.2%)	177 (9.8%)	196 (9.9%)
高校卒業後	22 (11.8%)	76 (4.2%)	98 (4.9%)
その他	13 (7.0%)	75 (4.2%)	88 (4.4%)
	187	1797	1984

$$X^2=35.1(df=7) \quad p=0.000$$

4) 現在の所属の志望状況(表4)

現在の所属が受験時のどの志望順位であったのかということについて表4に示した。男女で有意差が見られ、女子学生では第1志望の割合が高いのに比べ、男子では第3志望以下の割合が高くなっていた。

表4 現在の所属の志望順位

	性別		合計
	男	女	
第1志望	111 (60.4%)	1245 (69.6%)	1356 (68.8%)
第2志望	33 (17.9%)	297 (16.6%)	330 (16.7%)
第3志望以下	40 (21.7%)	247 (13.8%)	287 (14.5%)
合計	184	1789	1973

$$X^2=9.5(df=2) \quad p=0.009$$

5) 医学部医学科への志望(表5)

現在の所属である看護学以外の志望先として医学があったか否かについて表5に示した。統計的には有意ではなかったが、男子の方が医学も志望していた者の割合が高くなっていた。

表5 看護以外の志望先としての医学の有無

	性別		合計
	男	女	
なし	145 (84.8%)	1501 (88.6%)	1646 (88.3%)
あり	26 (15.2%)	193 (11.4%)	219 (11.7%)
合計	171	1694	1865

$$X^2=1.8(df=1) \quad p=0.177$$

6) 受験先の決定への影響(表6)

受験先の決定に影響が大きかったものについて表6に示した。男女間で有意差が見られ、男女とも最も多かったのは「自分の意見」であったが、女子では「親の意見」が22.1%、「高校・予備校の先生」が13.1%を占めていたのに比べ、男子ではこれらの割合が低くなっており、「自分の意見」の割合が高くなっていた。

表6 受験先の決定に最も影響が大きかったもの

	性別		合計
	男	女	
親の意見	28 (15.2%)	393 (22.1%)	421 (21.5%)
高校・予備校の先生	15 (8.2%)	233 (13.1%)	248 (12.6%)
自分の意見	131 (71.2%)	1099 (61.8%)	1230 (62.7%)
その他	10 (5.4%)	53 (3.0%)	63 (3.2%)
合計	184	1778	1962

$$X^2=12.4(df=3) \quad p=0.006$$

7) 現在の所属への受験を決めた理由としての重要度(取得可能資格)(表7)

取得できる資格が現在の所属を受験した理由としてどの程度重要であるかということについて表7に示した。男女間で有意差が見られ、女子では「かなり重要だと感じていた」者が63.6%を占めていたが、男子では同理由が最も多いことは同じであるが、その割合は53.5%と低く、代わりに「どちらとも言えない」、「少しは重要と感じている」が多くなっていた。

表7 受験理由としての重要性(取得資格)

	性別		合計
	男	女	
全く重要だと感じていなかった	2 (1.1%)	29 (1.6%)	31 (1.6%)
あまり重要だと感じていなかった	4 (2.2%)	56 (3.1%)	60 (3.0%)
どちらとも言えない	27 (14.8%)	123 (6.9%)	150 (7.6%)
少しは重要と感じていた	52 (28.4%)	442 (24.8%)	494 (25.1%)
かなり重要だと感じていた	98 (53.5%)	1135 (63.6%)	1233 (62.7%)
合計	183	1785	1968

$$X^2=17.8(df=4) \quad p=0.001$$

男女とも、「全く重要だと感じていなかった」、「あまり重要だと感じていなかった」はいずれも少なかった。

8) 現在の所属への受験を決めた理由としての重要度(将来の仕事への興味・関心)(表8)

将来の仕事への興味・関心が現在の所属を受験した理由としてのどの程度重要であるかということについて表8に示した。男女間で有意差は見られなかったが、女子では「かなり重要だと感じていた」者が58.5%と最も多く、男子でも同理由が最も多くなっていたが、その割合は49.1%と低く、代わりに「少しは重要と考えていた」が多くなっていた。男女とも「全く重要だと感じていなかった

た」、「あまり重要だと感じていなかった」と回答した者の割合は低くなっていた。

表8 受験理由としての重要性(仕事の興味・関心)

	性別		合計
	男	女	
全く重要だと感じていなかった	3 (1.7%)	27 (1.5%)	30 (1.5%)
あまり重要だと感じていなかった	7 (3.9%)	44 (2.5%)	51 (2.6%)
どちらとも言えない	17 (9.4%)	155 (8.7%)	172 (8.8%)
少しは重要と感じていた	65 (35.9%)	515 (28.8%)	580 (29.4%)
かなり重要だと感じていた	89 (49.1%)	1046 (58.5%)	1135 (57.7%)
合計	181	1787	1968

$$X^2=6.7(df=4) \quad p=0.154$$

9) 現在の所属への受験を決めた理由としての重要度(専門で学ぶ内容への興味)(表9)

専門で学ぶ内容への興味が現在の所属を受験した理由としてのどの程度重要であるかということについて表9に示した。男女間で有意差は見られなかったが、女子に比べて男子では「かなり重要だと感じていた」と回答した者の割合が少なくなっていた。他方、男女とも「全く重要だと感じていなかった」、「あまり重要だと感じていなかった」と回答した者の割合は低くなっていた。

表9 受験理由としての重要性(専門で学ぶ内容)

	性別		合計
	男	女	
全く重要だと感じていなかった	4 (2.2%)	29 (1.6%)	33 (1.7%)
あまり重要だと感じていなかった	6 (3.3%)	51 (2.9%)	57 (2.9%)
どちらとも言えない	29 (15.9%)	194 (10.9%)	223 (11.3%)
少しは重要と感じていた	66 (36.3%)	605 (33.9%)	671 (34.1%)
かなり重要だと感じていた	77 (42.3%)	906 (50.7%)	983 (50.0%)
合計	182	1785	1967

$$X^2=6.8(df=4) \quad p=0.147$$

10) 現在の所属への受験を決めた理由としての重要度(将来の職業)(表 10)

将来の職業がはっきりしているかという点が現在の所属を受験した理由としてどの程度重要であるかということについて表 10 に示した。男女間で有意差が見られ、「かなり重要だと感じていた」と回答した者の割合は男女でほぼ等しいが、女子では「少しは重要と感じていた」と回答した者の割合が高かったのに対し、男子では「どちらとも言えない」と回答した者の割合が高くなっていた。男女とも「全く重要だと感じていなかった」、「あまり重要だと感じていなかった」と回答した者の割合は低くなっていた。

表 10 受験理由としての重要性(将来の職業の明白性)

	性別		合計
	男	女	
全く重要だと感じていなかった	4 (2.2%)	20 (1.1%)	24 (1.2%)
あまり重要だと感じていなかった	6 (3.3%)	52 (2.9%)	58 (2.9%)
どちらとも言えない	24 (13.2%)	116 (6.5%)	140 (7.1%)
少しは重要と感じていた	32 (17.6%)	479 (26.8%)	511 (26.0%)
かなり重要だと感じていた	116 (63.7%)	1119 (62.7%)	1235 (62.8%)
合計	182	1786	1968

$$X^2=17.5(df=4) \quad p=0.002$$

11) 現在の所属への受験を決めた理由としての重要度(将来の就職の可能性)(表 11)

将来、就職できそうかという点が現在の所属を受験した理由としてどの程度重要であるかということについて表 11 に示した。男女間で有意差は認められず、男女とも「かなり重要だと感じていた」と回答した者が最も多く、以下「少しは重要だと感じていた」、「どちらとも言えない」が続いていた。男女とも「全く重要だと感じていなかった」、「あまり重要だと感じていなかった」と回答した者の割合は低くなっていた。

表 11 受験理由としての重要性(将来の就職の可能性)

	性別		合計
	男	女	
全く重要だと感じていなかった	4 (2.2%)	24 (1.3%)	28 (1.4%)
あまり重要だと感じていなかった	5 (2.8%)	33 (1.8%)	38 (1.9%)
どちらとも言えない	16 (8.9%)	125 (7.0%)	141 (7.2%)
少しは重要と感じていた	49 (27.2%)	430 (24.1%)	479 (24.4%)
かなり重要だと感じていた	106 (58.9%)	1173 (65.8%)	1279 (65.1%)
合計	180	1785	1965

$$X^2=4.3(df=4) \quad p=0.373$$

12) 現在の所属への受験を決めた理由としての重要度(将来の収入)(表 12)

将来、見込まれる収入が現在の所属を受験した理由としてどの程度重要であるかということについて表 12 に示した。男女間で有意差は認められず、男女とも「かなり重要だと感じていた」、「少しは重要だと感じていた」と回答した者の割合がほぼ等しくなっていた。他方、「あまり重要だと感じていなかった」と回答した者も男子で 7.7%、女子で 6.3%存在していた。

表 12 受験理由としての重要性(将来の収入)

	性別		合計
	男	女	
全く重要だと感じていなかった	7 (3.9%)	52 (2.9%)	59 (3.0%)
あまり重要だと感じていなかった	14 (7.7%)	112 (6.3%)	126 (6.4%)
どちらとも言えない	39 (21.5%)	316 (17.7%)	355 (18.1%)
少しは重要と感じていた	59 (32.6%)	627 (35.1%)	686 (34.9%)
かなり重要だと感じていた	62 (34.3%)	678 (38.0%)	740 (37.6%)
合計	181	1785	1966

$$X^2=3.3(df=4) \quad p=0.509$$

13) 現在の所属への受験を決めた理由としての重要度(学校の地域の魅力)(表 13)

学校のある地域や場所が魅力的かどうかという点が現在の所属を受験した理由としてどの程度重要であるかということについて表 13 に示した。男女間で有意差が見られ、女子では「少しは重要と感じていた」と回答した者が最も多かったが、男子では「どちらとも言えない」が最も多く、「全く重要だと感じていなかった」、「あまり重要だと感じていなかった」の 2 選択肢とも男子が女子より高い割合になっていた。

表 13 受験理由としての重要性(学校の地域の魅力)

	性別		合計
	男	女	
全く重要だと感じていなかった	21 (11.6%)	144 (8.1%)	165 (8.4%)
あまり重要だと感じていなかった	40 (22.1%)	287 (16.1%)	327 (16.6%)
どちらとも言えない	55 (30.4%)	504 (28.2%)	559 (28.4%)
少しは重要と感じていた	36 (19.9%)	571 (31.9%)	607 (30.9%)
かなり重要だと感じていた	29 (16.0%)	280 (15.7%)	309 (15.7%)
合計	181	1786	1967

$$X^2=14.1(df=4) \quad p=0.007$$

14) 現在の所属への受験を決めた理由としての重要度(教育内容)(表 14)

現在、所属している専攻の教育内容が現在の所属を受験した理由としてどの程度重要であるかということについて表 14 に示した。男女間で有意な差は認められず、男女とも「少しは重要と感じていた」が最も多かったが、次いで「どちらも言えない」が多く、「かなり重要だと感じていた」は男子 18.6%、女子 19.3%、と男女とも 2 割以下であった。

表 14 受験理由としての重要性(教育内容)

	性別		合計
	男	女	
全く重要だと感じていなかった	6 (3.3%)	72 (4.0%)	78 (4.0%)
あまり重要だと感じていなかった	18 (9.8%)	166 (9.3%)	184 (9.3%)
どちらも言えない	58 (31.7%)	530 (29.7%)	588 (29.8%)
少しは重要と感じていた	67 (36.6%)	675 (37.7%)	742 (37.7%)
かなり重要だと感じていた	34 (18.6%)	344 (19.3%)	378 (19.2%)
合計	183	1787	1970

$$X^2=0.6(df=4) \quad p=0.961$$

15) 現在の所属への受験を決めた理由としての重要度(研究内容)(表 15)

現在、所属している専攻の教員の研究内容が現在の所属を受験した理由としてどの程度重要であるかということについて表 15 に示した。男女間で有意な差は認められず、男女とも「どちらも言えない」が最も多く、「全く重要だと感じていなかった」は男子 11.5%、女子 16.2%、「あまり重要だと感じていなかった」は男子 16.9%、女子 22.1%と高い割合になっていた。

表 15 受験理由としての重要性(研究内容)

	性別		合計
	男	女	
全く重要だと感じていなかった	21 (11.5%)	290 (16.2%)	311 (15.8%)
あまり重要だと感じていなかった	31 (16.9%)	394 (22.1%)	425 (21.6%)
どちらも言えない	67 (36.7%)	615 (34.4%)	682 (34.7%)
少しは重要と感じていた	44 (24.0%)	344 (19.3%)	388 (19.7%)
かなり重要だと感じていた	20 (10.9%)	142 (8.0%)	162 (8.2%)
合計	183	1785	1968

$$X^2=8.3(df=4) \quad p=0.080$$

16) 現在の所属への受験を決めた理由としての重要度(学校の評判)(表 16)

現在、所属している大学・学校の評判・社会的評価が現在の所属を受験した理由としてどの程度重要であるかということについて表 16 に示した。男女間で有意差が見られ、女子では「少しは重要と感じていた」と回答した者が 37.4%と最も多かったが、男子では「どちらとも言えない」が 34.9%と最も多くなっていた。

表 16 受験理由としての重要性(学校の評判・評価)

	性別		合計
	男	女	
全く重要だと感じていなかった	12 (6.6%)	84 (4.7%)	96 (4.9%)
あまり重要だと感じていなかった	31 (16.9%)	209 (11.7%)	240 (12.2%)
どちらとも言えない	64 (34.9%)	510 (28.6%)	574 (29.2%)
少しは重要と感じていた	51 (27.9%)	668 (37.4%)	719 (36.4%)
かなり重要だと感じていた	25 (13.7%)	315 (17.6%)	340 (17.3%)
合計	183	1786	1969

$$X^2=12.9(df=4) \quad p=0.012$$

17) 現在の所属への受験を決めた理由としての重要度(施設・設備の充実)(表 17)

現在、所属している大学・学校の施設や設備が充実していることが現在の所属を受験した理由としてどの程度重要であるかということについて表 17 に示した。男女間に有意差が見られた。男女とも選んだ選択肢の順位は同じであり、「少しは重要と感じていた」と回答した者が最も多かったが、それに次ぐ回答である「どちらとも言えない」は、男子 31.1%に対し女子 25.7%、「かなり重要だと感じていた」は、男子 15.8%に対し、女子 24.3%と差が見られた。

表 17 受験理由としての重要性(施設・設備の充実)

	性別		合計
	男	女	
全く重要だと感じていなかった	9 (4.9%)	60 (3.3%)	69 (3.5%)
あまり重要だと感じていなかった	23 (12.6%)	148 (8.3%)	171 (8.7%)
どちらとも言えない	57 (31.1%)	459 (25.7%)	516 (26.2%)
少しは重要と感じていた	65 (35.6%)	685 (38.4%)	750 (38.1%)
かなり重要だと感じていた	29 (15.8%)	434 (24.3%)	463 (23.5%)
合計	183	1786	1969

$$X^2=11.9(df=4) \quad p=0.018$$

18) 現在の所属への受験を決めた理由としての重要度(学費の安さ)(表 18)

現在、所属している大学・学校の学費の安さが現在の所属を受験した理由としてどの程度重要であるかということについて表 18 に示した。男女間で有意差が見られ、男女とも「かなり重要だと感じていた」と回答した者が最も多かったが、女子では「少しは重要と感じていた」(27.3%)、「どちらとも言えない」(20.1%)の順であったのに比べ、男子では「どちらとも言えない」(27.3%)、「少しは重要だと感じていた」(20.2%)の順であり、重要だと感じていない者の割合も高くなっていた。

表 18 受験理由としての重要性(学費の安さ)

	性別		合計
	男	女	
全く重要だと感じていなかった	14 (7.7%)	87 (4.9%)	101 (5.1%)
あまり重要だと感じていなかった	23 (12.6%)	158 (8.9%)	181 (9.2%)
どちらとも言えない	50 (27.3%)	359 (20.1%)	409 (20.8%)
少しは重要と感じていた	37 (20.2%)	486 (27.3%)	523 (26.6%)
かなり重要だと感じていた	59 (32.2%)	693 (38.8%)	752 (38.3%)
合計	183	1783	1966

$$X^2=14.1(df=4) \quad p=0.007$$

19) 現在の所属への受験を決めた理由としての重要度(自宅からの通学可能性)(表 19)

現在、所属している大学・学校への自宅からの通学可能性が現在の所属を受験した理由としてどの程度重要であるかということについて表 19 に示した。男女間で有意な差は見られず、男女とも「かなり重要だと感じていた」者が最も多かったが、「全く重要だと感じていなかった」者と「少しは重要と感じていた」者の割合がほぼ等しくなっていた。

表 19 受験理由としての重要性(自宅からの通学可能)

	性別		合計
	男	女	
全く重要だと感じていなかった	38 (20.8%)	337 (18.9%)	375 (19.0%)
あまり重要だと感じていなかった	22 (12.0%)	198 (11.1%)	220 (11.2%)
どちらとも言えない	36 (19.7%)	289 (16.2%)	325 (16.5%)
少しは重要と感じていた	38 (20.8%)	370 (20.7%)	408 (20.7%)
かなり重要だと感じていた	49 (26.7%)	593 (33.1%)	642 (32.6%)
合計	183	1787	1970

$$X^2=3.8(df=4) \quad p=0.438$$

20) 現在の所属への受験を決めた理由としての重要度(合格可能性の高さ)(表 20)

現在、所属している大学・学校への合格可能性が現在の所属を受験した理由としてどの程度重要であるかということについて表 20 に示した。男女間で有意差が見られた。女子では「かなり重要だと感じていた」(37.7%)、「少しは重要だと感じていた」(31.6%)と高い割合を示していたが、男子ではそれらのわりあいは 29.0%、27.3%と低くなっており、「どちらとも言えない」以下と回答した者の割合が高くなっていった。

表 20 受験理由としての重要性(合格可能性)

	性別		合計
	男	女	
全く重要だと感じていなかった	16 (8.7%)	68 (3.8%)	84 (4.3%)
あまり重要だと感じていなかった	21 (11.5%)	115 (6.4%)	136 (6.9%)
どちらとも言えない	43 (23.5%)	367 (20.5%)	410 (20.8%)
少しは重要と感じていた	50 (27.3%)	564 (31.6%)	614 (31.2%)
かなり重要だと感じていた	53 (29.0%)	672 (37.7%)	725 (36.8%)
合計	183	1786	1969

$$X^2=20.6(df=4) \quad p=0.000$$

21) 現在の所属への受験を決めた理由としての重要度(入試科目)(表 21)

現在、所属している大学・学校の入試科目が現在の所属を受験した理由としてどの程度重要であるかということについて表 21 に示した。男女間で有意差が見られ、男女とも「少しは重要と感じていた」が最も多くなっていたが、それに次ぐ回答としては、女子では「かなり重要だと感じていた」であったのに対し、男子では「どちらとも言えない」であった。また、男女とも 10%以上の者が「重要だと感じていなかった」と回答していた。

表 21 受験理由としての重要性(入試科目)

	性別		合計
	男	女	
全く重要だと感じていなかった	15 (8.3%)	82 (4.6%)	97 (4.9%)
あまり重要だと感じていなかった	16 (8.8%)	139 (7.8%)	155 (7.9%)
どちらとも言えない	45 (24.9%)	365 (20.5%)	410 (20.9%)
少しは重要と感じていた	61 (33.7%)	623 (34.9%)	684 (34.8%)
かなり重要だと感じていた	44 (24.3%)	574 (32.2%)	618 (31.5%)
合計	181	1783	1964

$$X^2=9.6(df=4) \quad p=0.048$$

22) 文系・理系に最終的に分かれた時期(表 22)

文系・理系に最終的に分かれた時期について表 22 に示した。男女間で有意差は見られず、男女ともほぼ同じ回答内容であった。

表 22 文系・理系に最終的に分かれた時期

	性別		合計
	男	女	
高校入学時	18 (9.7%)	109 (6.1%)	127 (6.5%)
高校2年進級時	136 (73.5%)	1340 (75.3%)	1476 (75.1%)
高校3年進級時	18 (9.7%)	189 (10.6%)	207 (10.5%)
分かれていない	12 (6.5%)	118 (6.6%)	130 (6.6%)
その他	1 (0.5%)	24 (1.3%)	25 (1.3%)
合計	185	1780	1965

$$X^2=4.4(df=4) \quad p=0.351$$

23) 学校の入試科目を知った上で文系・理系を決めたのかどうか(表 23)

志望校の入試科目を知った上で文系・理系を決めたか否かについて表 23 に示した。男女間で有意差が見られ、決めた理由となった者が女子では 46.3%であったのに対し、男子では 35.4%と低くなっていた。

表 23 入試科目により文系・理系を決めたか

	性別		合計
	男	女	
はい	64 (35.4%)	820 (46.3%)	884 (45.3%)
いいえ	115 (63.5%)	932 (52.6%)	1047 (53.6%)
その他	2 (1.1%)	20 (1.1%)	22 (1.1%)
合計	181	1772	1953

$$X^2=8.0(df=2) \quad p=0.018$$

24) 現在学習している内容は、文系か理系か(表 24)

現在学習している専門の内容は、本質的に理系とを感じるか、文系とを感じるかについて表 24 に示した。男女間で有意な差は認められず、男女とも「理系」と回答した者が最も多く、次いで「どちらとも言えない」と回答した者が多かった。「文系」と回答した者は男女とも 10%未満であった。

表 24 学習している内容は理系か文系か

	性別		合計
	男	女	
理系	94 (51.7%)	839 (47.9%)	933 (48.3%)
文系	17 (9.3%)	153 (8.7%)	170 (8.8%)
どちらとも言えない	68 (37.4%)	743 (42.4%)	811 (41.9%)
その他	3 (1.6%)	17 (1.0%)	20 (1.0%)
合計	182	1752	1934

$$X^2=2.3(df=3) \quad p=0.515$$

25) 所属する学科への適性度(自分の性格)(表 25)

自分の性格が、現在、所属している学科に適しているか否かについて表 25 に示した。男女間で有意な差は認められず、自分の性格が所属している学科の適性に「あてはまる」と回答した者は、男子 36.3%、女子 32.7%に過ぎなかった。

表 25 所属している学科への適性(自分の性格)

	性別		合計
	男	女	
あてはまらない	16 (8.9%)	181 (10.3%)	197 (10.2%)
どちらとも言えない	98 (54.8%)	1000 (57.0%)	1098 (56.8%)
あてはまる	65 (36.3%)	573 (32.7%)	638 (33.0%)
合計	179	1754	1933

$$X^2=1.1(df=2) \quad p=0.576$$

26) 所属する学科への適性度(自分の趣味・関心)(表 26)

自分の趣味・関心が、現在、所属している学科に適しているか否かについて表 26 に示した。男女間で有意な差は認められず、自分の趣味・関心が所属している学科の適性に「あてはまる」と回答した者は、男子 63.8%、女子 65.9%と高くなっていた。

表 26 所属している学科への適性(自分の趣味・関心)

	性別		合計
	男	女	
あてはまらない	10 (5.6%)	121 (6.9%)	131 (6.8%)
どちらとも言えない	55 (30.6%)	479 (27.2%)	534 (27.6%)
あてはまる	115 (63.8%)	1158 (65.9%)	1273 (65.6%)
合計	180	1758	1938

$$X^2=1.2(df=2) \quad p=0.557$$

27) 所属する学科への適性度(高校時代の得意科目)(表 27)

高校時代の得意科目が、現在、所属している学科に適しているか否かについて表 27 に示した。男女間で有意な差は認められず、高校時代の得意科目が所属している学科の適性に「あてはまらない」と回答した者は、男子 33.9%、女子 30.5%と高くなっていた。

表 27 所属している学科への適性(高校時代の得意科目)

	性別		合計
	男	女	
あてはまらない	61 (33.9%)	536 (30.5%)	597 (30.8%)
どちらとも言えない	84 (46.7%)	875 (49.8%)	959 (49.5%)
あてはまる	35 (19.4%)	346 (19.7%)	381 (19.7%)
合計	180	1757	1937

$$X^2=0.9(df=2) \quad p=0.627$$

28) 所属する学科への適性度(希望する職業につくことができる)(表 28)

希望する職業につくことができることが、現在、所属している学科に適しているか否かについて表 28 に示した。男女間で有意差が認められ、希望する職業につくことができることが所属している学科の適性に「あてはまる」と回答した者は、男子 67.8%に比べ、女子 76.9%で高くなっていた。

表 28 所属している学科への適性(希望する職業)

	性別		合計
	男	女	
あてはまらない	15 (8.3%)	87 (5.0%)	102 (5.3%)
どちらとも言えない	43 (23.9%)	317 (18.1%)	360 (18.6%)
あてはまる	122 (67.8%)	1352 (76.9%)	1474 (76.1%)
合計	180	1756	1936

$$X^2=8.4(df=2) \quad p=0.015$$

29) 所属する学科への適性度(自分の求めている生き方ができる)(表 29)

自分の求めている生き方ができることが、現在、所属している学科に適しているか否かについて表 29 に示した。男女間で有意な差は認められず、自分の求めている生き方ができることが所属している学科の適性に「あてはまる」と回答した者は、男子 41.9%、女子 44.1%と男女とも半数に満たなかった。

表 29 所属している学科への適性(求めている生き方)

	性別		合計
	男	女	
あてはまらない	13 (7.3%)	136 (7.7%)	149 (7.7%)
どちらとも言えない	91 (50.8%)	846 (48.2%)	937 (48.4%)
あてはまる	75 (41.9%)	774 (44.1%)	849 (43.9%)
合計	179	1756	1935

$$X^2=0.5(df=2) \quad p=0.794$$

30) 所属する学科への適性度(現在の専門を学んでいることを誇りに思う)(表 30)

現在の専門を学んでいることを誇りに思うことが、現在、所属している学科に適しているか否かについて表 30 に示した。男女間で有意な差は認められなかったが、現在の専門を学んでいるこ

表 30 所属している学科への適性(現在の専門に誇り)

	性別		合計
	男	女	
あてはまらない	16 (8.9%)	119 (6.8%)	135 (7.0%)
どちらとも言えない	68 (37.8%)	546 (31.1%)	614 (31.7%)
あてはまる	96 (53.3%)	1090 (62.1%)	1186 (61.3%)
合計	180	1755	1935

$$X^2=5.4(df=2) \quad p=0.068$$

とを誇りに思っていることが所属している学科の適性に「あてはまる」と回答した者は、男子 53.3%、に対し女子 62.1%と女子で高くなっていた。

31) オープンキャンパスの参加状況(表 31)

現在、所属する学科のオープンキャンパスの参加状況を表 31 に示した。男女間で有意差が見られ、「参加した」と回答した者は、男子が 35.0%であったのに対し、女子では 49.4%と女子で高くなっていた。

表 31 オープンキャンパスの参加状況

	性別		合計
	男	女	
参加しなかった	117 (65.0%)	888 (50.6%)	1005 (52.0%)
参加した	63 (35.0%)	866 (49.4%)	929 (48.0%)
合計	180	1754	1934

$$X^2=12.9(df=1) \quad p=0.000$$

32) 将来希望する進路(表 32)

将来希望する進路についての回答状況を表 32 に示した。男女間で有意差が見られ、「病院等の医療従事者」が男子 78.8%、女子 88.9%とともに最も多かったが割合に差が見られ、次いで多かった「教育・研究者」が男子 11.7%、女子 2.9%と男子が多くなっていた。

表 32 将来希望する進路

	性別		合計
	男	女	
教育・研究者	21 (11.7%)	51 (2.9%)	72 (3.8%)
病院等の医療従事者	141 (78.8%)	1542 (88.9%)	1683 (87.9%)
現在の専門以外	10 (5.6%)	45 (2.6%)	55 (2.9%)
その他	7 (3.9%)	97 (5.6%)	104 (5.4%)
合計	179	1735	1914

$$X^2=41.1(df=3) \quad p=0.000$$

【考察】

看護学生に対する調査結果を男女別にクロス集計を行い、男女の学生の差を検討した。女子学生では、看護が第一志望で、早い時期から志望していた者が多いのに比べ、男子学生では、第一志望でない者が多く、浪人生や私立大学が多く、志望先を決めたのも遅いなど、看護系の学校への進学に対するモチベーションが低いことが窺える。これは、女子学生では、最初から看護を志望しているのに対し、男子では同じ理系であっても最初は理学や工学を志望していたが、希望通りに行かなかった者や、同じ医学系志望であっても本来は医学科を志望していた者が、進学する傾向にあると考えられる。

【結論】

女子学生の大半が看護を第一志望として、早い時期から目指してきたのに比べ、男子学生では他の分野を志望していたが、思い通りにならなかった者が進学しているという状況が明らかになった。今後は、男子学生の意識改革に努める必要があることが明らかになった。

第6章 看護・保健学系高等教育機関の進学地域移動と進学動機

木村拓也 (九州大学)

1. 本章の目的

看護系・保健学系の高等教育機関としての立ち位置を考えるため、本章では、大学ポートレート準備委員会が公表している大学基本情報 (<http://portal.niad.ac.jp/ptrt/table.html>) から看護系・保健学系学部学科の進学地域移動を分析し、その分析区分に従って、本科研の看護系大学生調査で得られた進学動機・志望理由に関する項目について検討する。

2. クラスタ分析による進学地域移動の分析

まず、大学ポートレート準備委員会で公開されている平成24年度の各大学学部における各県ごとの入学者データを用い、自県進学者数、地域圏進学者数(自県進学者を除く)、他地域圏進学者数とそれぞれの割合を算出した¹。但し、大学ポートレート準備委員会で公開されているのは、国公立のみのデータである。ちなみに、地域圏は、北海道、東北、関東、甲信越、北陸、東海、関西、中国、四国、九州の10地域を設定した。また、大学基本情報にあるデータは、学部・学科単位であり、例えば、保健学科など、純粋に看護系のデータになっていないことをお断りしておかなければならない。以下の結果は、正確を期して言えば、看護・保健学系の進学地域移動の分析となる。

そうして得られた、自県進学者割合、地域圏進学者割合(自県進学を除く)、他地域圏進学者割合のデータを元に、クラスタ分析を行って、5つのクラスタを得た。図1~3はその結果である。各クラスタの特徴を述べると以下のとおりである。

クラスタ1：他地域圏からの進学者が多い看護・保健学系学部学科

クラスタ2：自県進学者は少ないが、地域圏内の進学者が多い看護・保健学系学部学科

クラスタ3：自県進学者が多いが、他地域圏からの進学者もそこそこ多い看護・保健学系学部学科

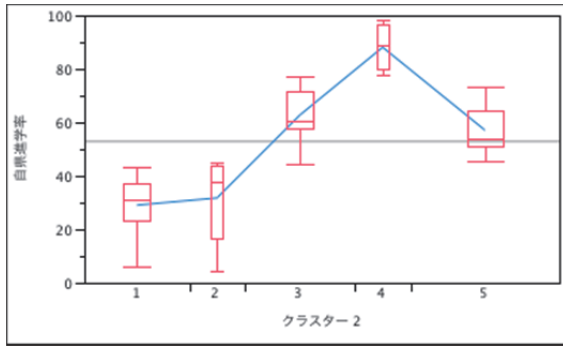
クラスタ4：自県進学者が非常に多い看護・保健学系学部学科

クラスタ5：自県進学者と地域圏内の進学者で入学者の多くを占める看護・保健学系学部学科

次に、このクラスタごとに地域別、設置者別で見たのが、表1である。クラスタ1及び、2は国立大学であり、クラスタ3、4、5については、公立大学の方が多いという特徴がある。上記のように、看護・保健学系高等教育機関には、進学地域移動の分類ができ、クラスタ3が北陸・中国・四国地域、クラスタ4が北海道・愛知・沖縄と、特定の都道府県や地域であることが分かった。このことから、地元進学率が高いと一般には思われている看護・保健学系高等教育機関の進学地域移動にも、立地の影響を受けて分類が可能であることが分かる。

¹ ただし、東京大学、北海道大学、金沢大学のデータは大学基本情報でデータ入力されていないため、分析に組み込まれていない。

図. 1. クラスター別の自県進学率



一元配置の分散分析

あてはめの要約

R2乗	0.795342
自由度調整R2乗	0.785235
誤差の標準偏差(RMSE)	9.774968
応答の平均	52.86184
オブザベーション(または重みの合計)	86

分散分析

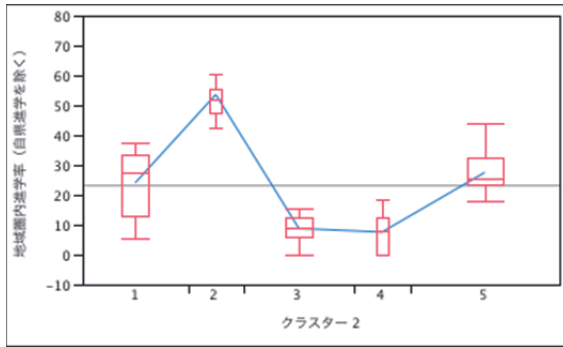
要因	自由度	平方和	平均平方	F値	p値(Prob>F)
クラスター 2	4	30077.436	7519.36	78.6955	<.0001*
誤差	81	7739.549	95.55		
全体(修正済み)	85	37816.985			

各水準の平均

水準	数	平均	標準誤差	下側95%	上側95%
1	19	29.0396	2.2425	24.578	33.502
2	10	31.7408	3.0911	25.590	37.891
3	20	62.7150	2.1857	58.366	67.064
4	10	88.0844	3.0911	81.934	94.235
5	27	57.1042	1.8812	53.361	60.847

平均の標準誤差および信頼区間は、各グループの誤差分散がすべて等しいと仮定したときのものです

図. 2. クラスター別の地域圏内進学率（自県進学者を除く）



一元配置の分散分析

あてはめの要約

R2乗	0.767881
自由度調整R2乗	0.756419
誤差の標準偏差(RMSE)	7.814506
応答の平均	23.10613
オブザベーション(または重みの合計)	86

分散分析

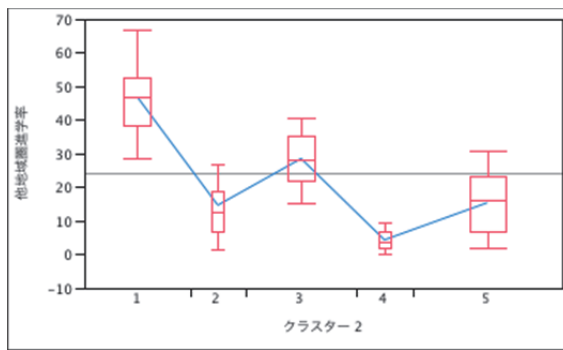
要因	自由度	平方和	平均平方	F値	p値(Prob>F)
クラスター 2	4	16363.335	4090.83	66.9898	<.0001*
誤差	81	4946.387	61.07		
全体(修正済み)	85	21309.722			

各水準の平均

水準	数	平均	標準誤差	下側95%	上側95%
1	19	24.0814	1.7928	20.514	27.648
2	10	53.5983	2.4712	48.681	58.515
3	20	8.7672	1.7474	5.290	12.244
4	10	7.5700	2.4712	2.653	12.484
5	27	27.5019	1.5039	24.510	30.494

平均の標準誤差および信頼区間は、各グループの誤差分散がすべて等しいと仮定したときのものです

図. 3. クラスター別の他地域圏からの進学率（自県進学者を除く）



一元配置の分散分析

あてはめの要約

R2乗	0.729877
自由度調整R2乗	0.716537
誤差の標準偏差(RMSE)	8.836214
応答の平均	24.03203
オブザベーション(または重みの合計)	86

分散分析

要因	自由度	平方和	平均平方	F値	p値(Prob>F)
クラスター 2	4	17088.539	4272.13	54.7158	<.0001*
誤差	81	6324.373	78.08		
全体(修正済み)	85	23412.911			

各水準の平均

水準	数	平均	標準誤差	下側95%	上側95%
1	19	46.8790	2.0272	42.85	50.912
2	10	14.6609	2.7943	9.10	20.221
3	20	28.5178	1.9758	24.59	32.449
4	10	4.3456	2.7943	-1.21	9.905
5	27	15.3938	1.7005	12.01	18.777

平均の標準誤差および信頼区間は、各グループの誤差分散がすべて等しいと仮定したときのものです

表. 1. クラスター別の設置者と設置地域

分類	設置者	北海道	東北	関東	甲信越	北陸	東海	関西	中国	四国	九州	小計	割合
1	国立		1	4	3			2	3	3		16	18.6
	公立			1					1	1		3	3.5
2	国立		2				1	2			4	9	10.5
	公立								1			1	1.2
3	国立	1	1			2	1		1	1		6	7.0
	公立	1		3	3	1		1	3	2		14	16.3
4	国立	1									1	2	2.3
	公立	2	1			1	3				1	8	9.3
5	国立			1			2		1		2	6	7.0
	公立		4	3			2	7			5	21	24.4
小計		5	9	12	6	4	9	12	10	7	13	86	100.0

3. クラスター別の進学動機の分析

次に、本科研で平成22・23年度に実施した「進路決定に関するアンケート」（平成22年度の有効回収数643、回収率78.4%、平成23年度の有効回答数1437、回収率70.2%）のうち、「II-g. 受験を決めた理由」「IV-a. 所属する専攻（学科）への適性度」について、先に進学地域移動を用いて分類したクラスターごとに違いが見られるかを検討したい。

表. 2. 「受験を決めた理由」に関する因子分析結果

	因子				
	I	II	III	IV	共通性
α 係数	.797	.749	.610	.649	
10. 所属する専攻（学科）の教育内容	<u>.721</u>	-.050	.075	-.033	.484
13. 施設・設備が充実しているかどうか	<u>.658</u>	-.107	.024	.221	.488
9. 楽しい学生生活が送れそうかどうか	<u>.619</u>	-.021	.261	-.016	.418
11. 所属する専攻（学科）の教員の研究内容	<u>.591</u>	-.098	.375	-.135	.394
12. 大学や学校の評判, 社会的評価	<u>.566</u>	-.090	.090	.158	.357
3. 専門で学ぶ内容への興味・関心があること	<u>.485</u>	.399	-.243	-.067	.625
2. 将来の仕事に興味・関心があること	<u>.477</u>	.404	-.304	-.032	.670
5. 将来, 就職できそうかどうか	-.190	<u>.786</u>	.152	.075	.580
4. 将来の職業がはっきりしているかどうか	-.002	<u>.730</u>	.039	.006	.531
6. 将来, 見込まれる収入の金額が十分かどうか	-.221	<u>.611</u>	.358	.065	.446
1. 取得できる資格の種類が魅力的であること	.066	<u>.549</u>	-.072	.049	.365
7. 将来, 暮らしたいと思っている地域で暮らせそうかどうか	.106	.226	<u>.568</u>	-.132	.316
19. 入試の地方会場が自宅近くに設けられていたかどうか	.110	-.025	<u>.490</u>	.130	.311
20. 他に受験したところとの併願しやすさ	.162	-.095	<u>.435</u>	.104	.255
8. 大学や学校がある地域や場所が魅力的かどうか	.408	.074	<u>.421</u>	-.070	.318
14. 学費の安さ	.013	.024	-.153	<u>.707</u>	.466
15. 生活費の安さ	.069	-.008	.111	<u>.574</u>	.403
17. 合格可能性の高さ	.042	.166	.084	<u>.372</u>	.241
18. 入試科目の内容	.092	.149	.098	<u>.362</u>	.248
因子寄与	3.20	2.87	1.61	2.03	9.72
因子寄与率(%)	21.21	8.77	7.96	3.72	41.66
因子間相関	—	.397	-.055	.214	
		—	-.097	.292	
			—	.337	
				—	

因子抽出法: 主因子法, 回転法: Kaiser の正規化を伴うプロマックス法

まず、「II-g. 受験を決めた理由」の質問項目を主因子法により因子分析した結果が、表2である。但し、共通性が.200以下で、因子負荷量が.350以下の「16. 自宅から通えるかどうか」を削除してある。得られた因子については、各質問項目の特徴を踏まえ、それぞれ、「大学要因」、「就職要因」、「地域要因」、「負担軽減要因」と名付けた。

次に、「IV-a. 所属する専攻（学科）への適性度」の質問項目を主因子法により因子分析した結果、一因子性を示した。但し、共通性が.200以下で、因子負荷量が.350以下の「4. 高校時代の得意科目を生

かすことができる」を削除した。ちなみに、 α 係数は、.856である。

この結果、各因子の尺度得点を算出し、各調査校を先のクラスターに分類し、クラスターごとに尺度得点の平均値を比較したのが、図3~7である。

図. 4. クラスター別の尺度得点の平均値比較（「大学要因」）

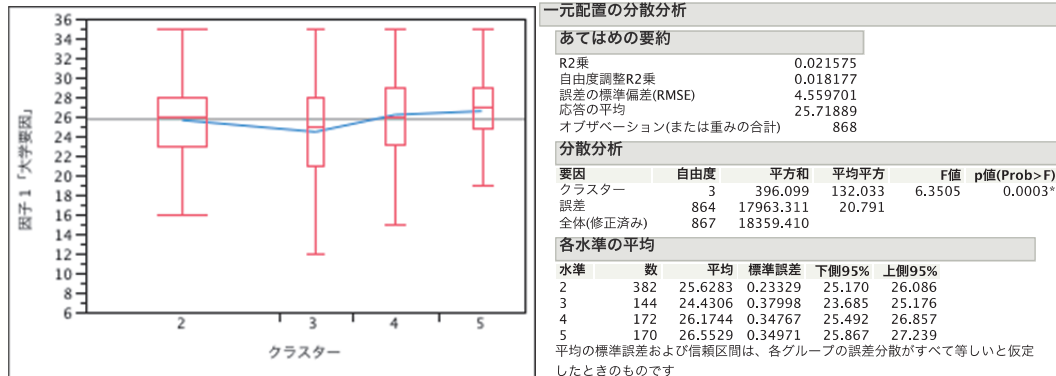


図. 5. クラスター別の尺度得点の平均値比較（「就職要因」）

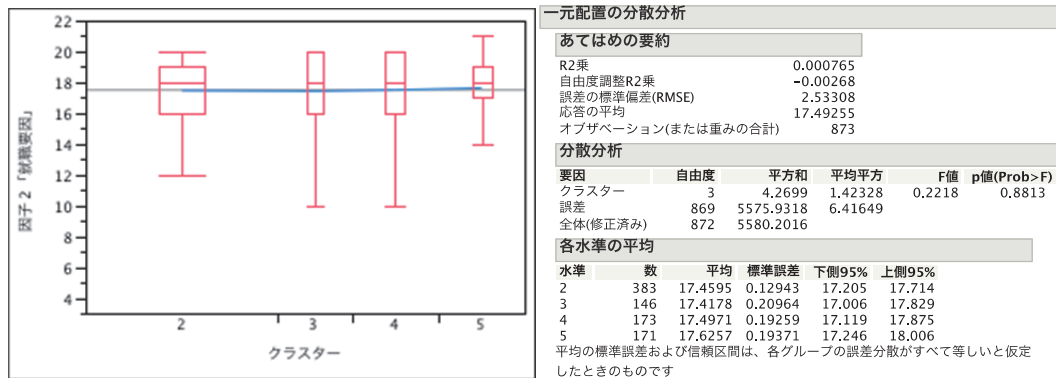


図. 6. クラスター別の尺度得点の平均値比較（「地域要因」）

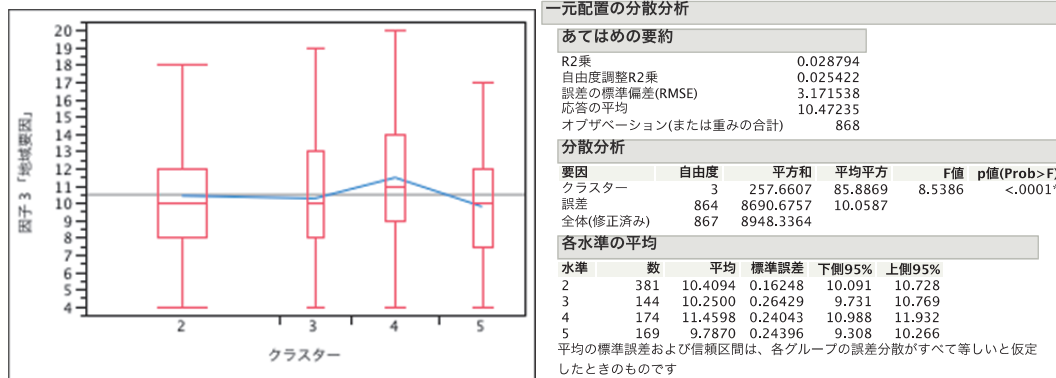


図. 7. クラスター別の尺度得点の平均値比較（「負担軽減要因」）

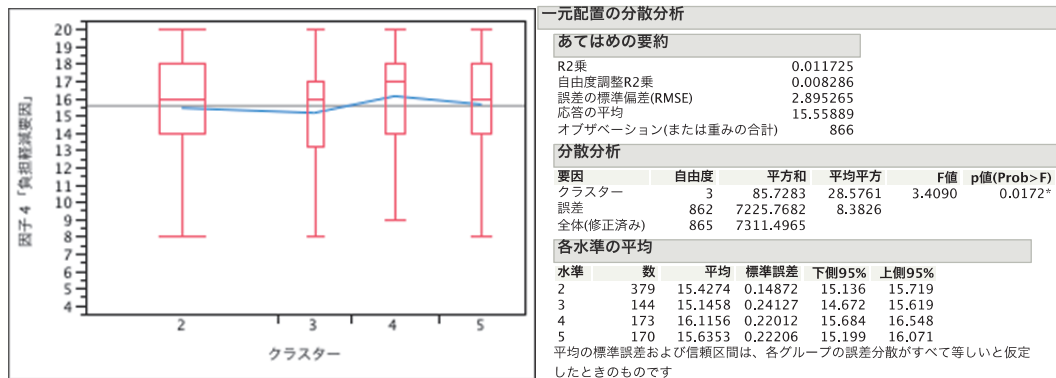
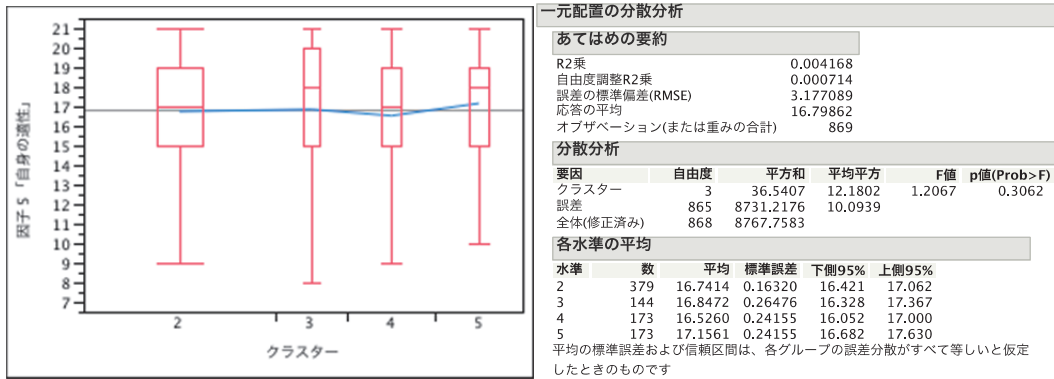


図. 8. クラスター別の尺度得点の平均値比較（「自身の適性」）



これを見ると、まず、「就職要因」や「自身の適性」因子については、各クラスターで差がない。データを示していないが、国公私及び専門学校別で平均値に違いがでないのも、「就職要因」や「自身の適性」因子である。

進学理由の「大学要因」については、クラスター2の平均値が若干低く、進学理由の「地域要因」については、クラスター4の平均値が若干高く、進学理由の「負担軽減要因」については、クラスター4の平均値が若干高い。クラスター4については、「自県進学者が非常に多い」ことから、「地域要因」や「負担軽減要因」が高いのは、ごく当然な結果であるが、クラスター2については、「自県進学者は少ないが、地域圏内の進学者が多い」特徴があるので、進学した大学独自の魅力を感じて、進学した訳ではない。ちなみに、クラスター2については第一志望の入学者の割合が69.1%と、クラスター4の82.7%やクラスター5の80.9%と比べて明らかに低い。第二志望以下の入学者が自県の進学ではなく、地域圏内で移動して入学した影響がでているようである。但し、同じようにクラスター3も第一志望の入学者の割合が68.3%と低い。この違いは、クラスター3の「自県進学者が多いが、他地域圏からの進学者もそこそこ多い」特徴を反映しているものと考えられる。つまり、他地域圏からの進学と地域圏内進学移動では、大学自身の中身を調べて入学しているという進学行動が推測される。

4. 本章のまとめ

看護・保健学系統高等教育機関の進路決定では、各大学においてカリキュラムの相違が見えにくいことから大学の独自性をもって進学動機に繋げさせることが困難である。看護師養成カリキュラムが「保健師助産師看護師学校養成所指定規則」によって決められていることが大きな理由であろう。にも関わらず、進学地域移動が見られたことは興味深い現象である。一方で、学生は自身の適性についてどのクラスターでも設置者・学校種別(図13)でも全く変化がなく明確な進路選択をしていることが伺える。

図. 9. (参考) 設置者・学校種別の尺度得点の平均値比較（「大学要因」）

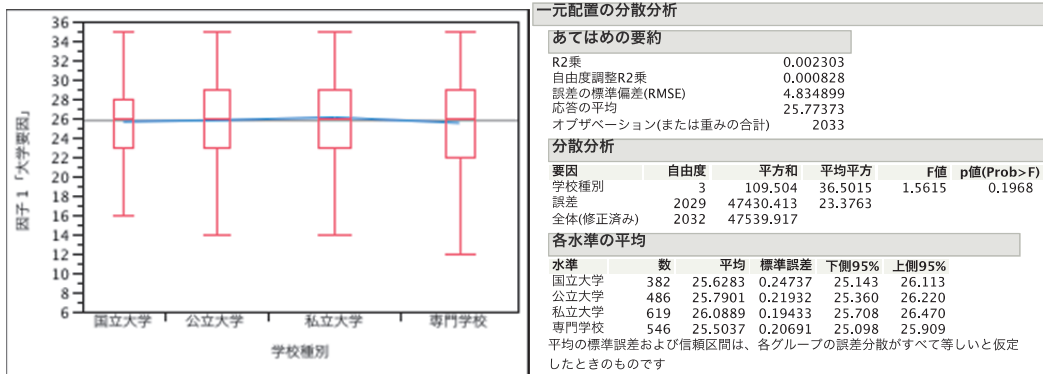


図. 10. (参考) 設置者・学校種別の尺度得点の平均値比較 (「就職要因」)

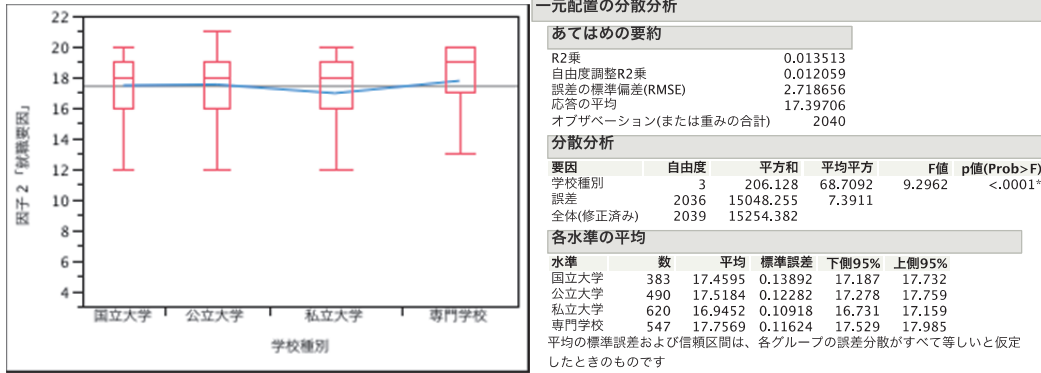


図. 11. (参考) 設置者・学校種別の尺度得点の平均値比較 (「地域要因」)

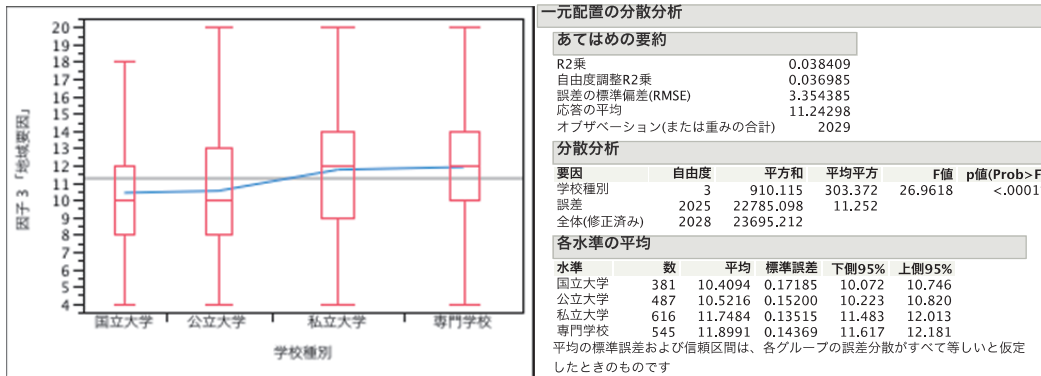


図. 12. (参考) 設置者・学校種別の尺度得点の平均値比較 (「負担軽減要因」)

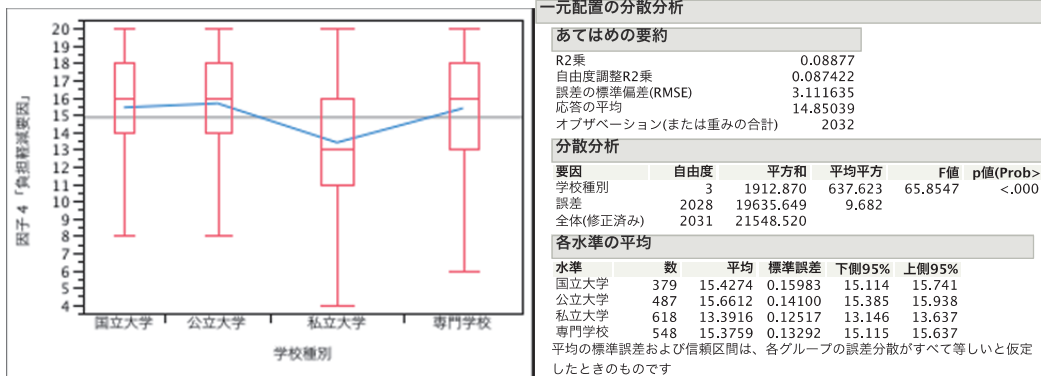
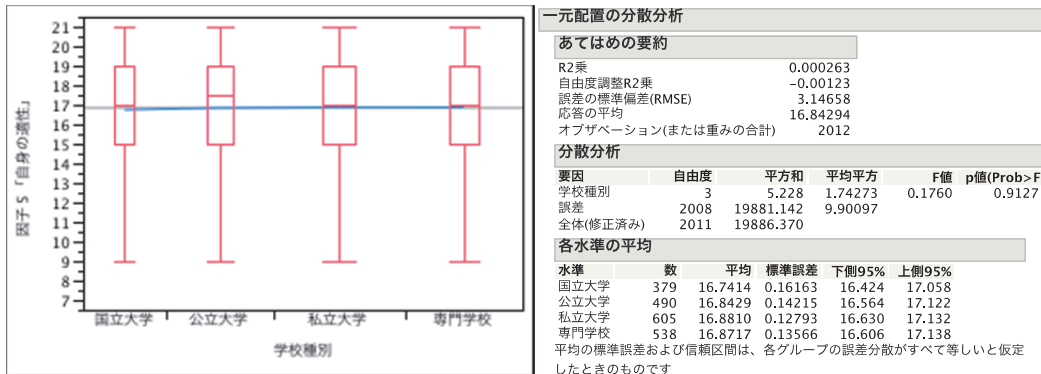


図. 13. (参考) 設置者・学校種別の尺度得点の平均値比較 (「自身の適性」)



第7章 選抜試験・カリキュラムの遡及的分析

小山田信子（東北大学）

テーマに関する考察において、水平軸観点と対をなす垂直・時間軸観点からの根拠とすべく、テーマ及び周辺事項について遡及的分析を担当した。単独論文発表には至らず今後の課題とする。

I. 過去の看護学校入試

看護の大学教育は、平成4年の看護婦等の人材確保法制定以後急速に進んだと言われる（図1）。平成26年度に新設される大学学部等での話題は、看護系の新設ラッシュで、18大学で看護学科が新設されることになる。758大学のうち、看護学科のある大学数は228（看護学科が複数あるため、学科としては234）になり、全大学の3.3に1校の割合が大学での看護を教育することになる。どのような学生を望むのか、大学のアドミッションポリシーをみたすべく選抜試験が行われる。

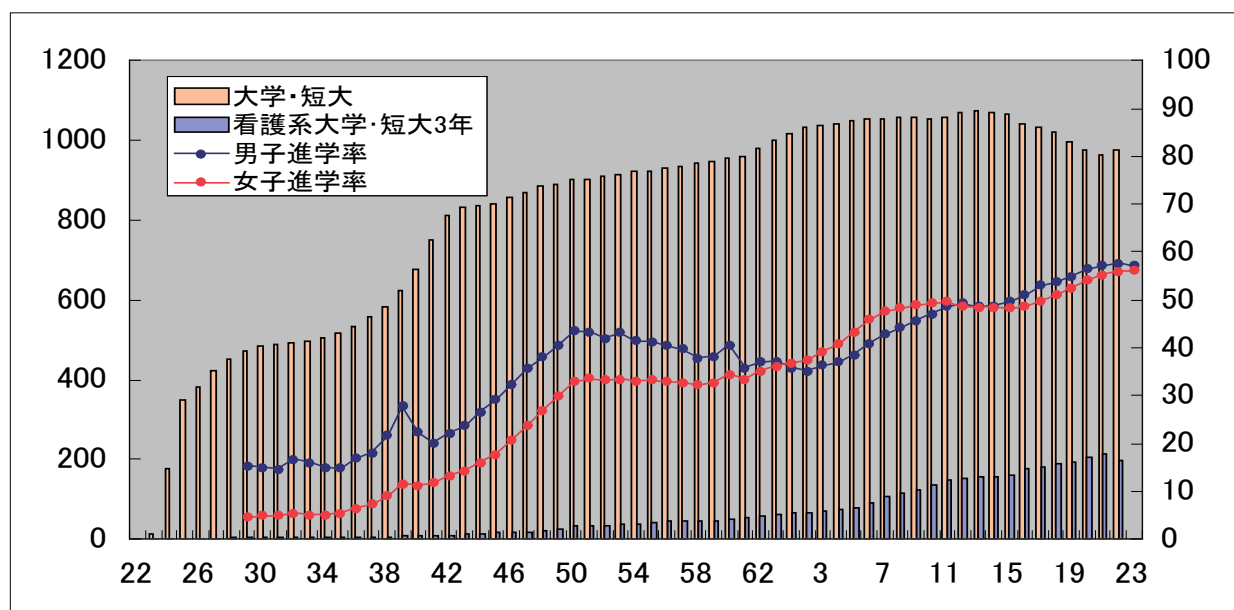


図1 大学・短大数と進学率推移

それまでの看護教育は、主に専門・各種学校で行われてきた（図2）。養成機関では、准看護師養成施設が最多であり、減少傾向はみられるものの3年課程養成所の方が多くなるのは平成13年（3年課程508校1学年23,297人、准看護492校24,573人）である。

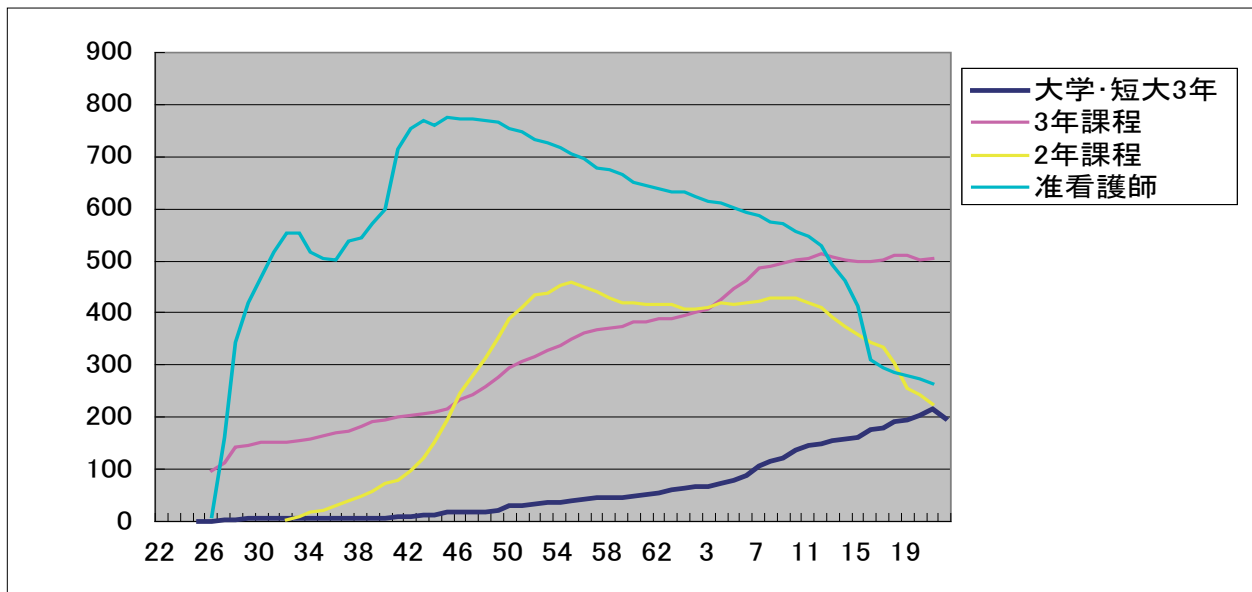


図2 看護師養成所推移

看護専門職業人養成のための大学入試のあり方を検討するに当たり、各種学校時代の3年課程看護学校の入学試験を確認した。

1. 方法

受験雑誌「蛍雪時代」全国短期大学各種学校案内号（旺文社 1966/11/15 発行）から看護学校及び入試科目、授業料、その他を抽出し比較検討した。

2. 結果

看護学校 194 校中内容記載のあった国立 53 校，公立 33 校，私立 49 校，計 135 校について入試科目，入学要件，学費について抽出した。

各種学校時代の看護学校では，国立公立私立ともに入試科目は国語，数学，理科，英語が課されていた。

国立の看護学校では授業料宿舍費食費とも不要で，実習用被服が貸与され，教科書代のみ実費徴収であった。卒業者は義務はないがほとんど附属の病院に就職した。

就職率は 100%と明記されていた。

3. 考察

高校進学率が 80%を超えるのは昭和 45 年で，この時の大学進学率は男性 27.3，女性は一桁の 6.5%であった。国立大学の学費が月額 1,000 円の時期，看護学校では公立が 300～800 円，私立が 200～1,000 円であり，国立は授業料，食費，宿舍費が不要であった。戦後の復興をかけた高度経済成長期といわれるこの時期，一般国民はまだ貧しく，多くは中

学校卒業後就職し、進学を希望した女性の受け皿として看護学校が機能した可能性が考えられた。昭和 40 年代の看護大学 9 校のうち 4 大学は、高校の衛生看護科教員養成のため教育学部に設置された特別教科教員養成課程であった。当時中学卒業者は金の卵と贅辞され、看護師希望者は働きながら専門学校へ通って准看護師免許を取得していた。この状況を改善すべく、最低でも高校卒業以上のレベルにさせるべく、普通教育である高等学校教育のなかで看護の職業教育を担当する教員を養成する課程が 1966 (昭和 41) 年に初めて設置されたのである。この養成課程は平成 15 年 10 月の熊本大学教育学部特別教科 (看護) 教員養成課程が保健学科に統合されたことによりすべて廃止になっている。

II. 明治期の産婆教育のカリキュラム

現代の問題を検討するとき、過去のありようを振り返ることが問題解決の糸口になることがある。

理系にせよ文系にせよどのような系統の試験で看護系大学に入学したとしても、保健師助産師看護師法の規定により、124 単位以上の中に専門教育として最低組み入れなければならない 97 単位以上の専門領域履修単位がある。教育機関による特徴を表すとはいうものの、国家試験という共通の関門が存在するためそれをクリアできる学習内容が前提になる。過去において教育課程はどのように考えられて看護職養成が行われていたのだろうか。

看護職としては明治 32 年に産婆規則、大正 4 年に看護婦規則、昭和 16 年に保健婦規則が制定され全国的にその身分資格の基準が規定された。看護職の中で助産師が早くに統一的規制が行われたが、その教育の始まりは明治 9 年の東京府病院産婆教授所に遡る。当時の産婆の教育は、Bernhard Sigmund Schultze 著『産婆学』第 3 版の訳本「朱氏産婆論」をテキストにドイツ医学に基づいた教育が行われた。私立の産婆養成所としては明治 13 年設立の紅杏塾²⁾が知られている。ドイツ留学をおえた濱田玄達が、明治 23 年 2 月帝国医科大学内に産婆養成所を開設する意見書を帝国大学総長宛て提出している³⁾。意見書には「彼ノ定規ノ試験ヲ経テ其業ニ従事スル所謂新産婆ト称スル者ニモ又真ニ産床ノ取扱法ヲ知り且之ヲ実行スル者殆ント之ナク・・・」とある。新産婆と言われるものも本当に分娩の取扱を理解して実行するものはほとんどいないと断言している。そしてそれまでの産婆養成の問題点として、

1. 養成の方針を誤っている
2. 産婆に必要な産事の実地取扱法を教えず無要な過当高尚の医理を教えている
3. 産科医と産婆の区別を混淆し、卒業するまで 2 年も 3 年も要している

と批判している。

紅杏塾創設の櫻井郁二郎は明治 3 年大学東校に入学し、明治 4 年来日したドイツ軍医ミュレル等からドイツ語原語による講義を受け、数々の厳しい選抜試験をパスし、明治 9 年に東京医学校を卒業した 25 名の一人である。朱氏産婆論を訳した山崎玄脩は櫻井の同期生である⁴⁾。一方濱田は明治 4 年 10 月大学東校に入学し、明治 13 年 7 月東京大学医学部を

卒業、同時に熊本医学校に就職し、明治 17 年私費でドイツへ留学し 21 年帰国している⁵⁾。世界をリードしていたドイツ医学と産科関連領域の産婆養成を実際に見てきた濱田が違和感を覚えた当時の日本の産婆教育とはどのようなものだったのか。東京府病院や紅杏塾以外にどのような産婆教育機関が存在し、どのような教育内容が濱田の問題意識に浮上したのか、当時の新聞や医学雑誌、公文書を手掛かりに解明を試みる。

1. 目的

明治 23 年までの東京における産婆養成所とそのカリキュラムについて史料を発掘し、当時問題があるとされた産婆養成教育課程について明らかにする。

2. 方法

史料から産婆養成に関する文書、記事を抽出し分析する。

史料： 東京府公文書 明治 9 年～明治 27 年 （ 東京都公文書館蔵 ）

医事新聞，東京医事新誌，（ 東北大学図書館医学分館蔵 ）

官報 明治 16 年～明治 23 年 （ 国立国会図書館蔵 ）

倫理的配慮： すべて公開の史料を用いた。公文書の閲覧・活用については東京都公文書館の許可を得た。

3. 結果

3.1.

明治 23 年の濱田の提言に至った東京の産婆養成所としては、東京府病院産婆教授所（校長長谷川泰 以下括弧内は校長とする）、紅杏塾（櫻井郁二郎）、産婆養成所（木庭栄）、私立産婆学校（内河郁）、芝産婆学校（大田松郎）、私立麹町産婆学校（瀧野サエ）、私立芝産婆学校（村松志保子）、私立産婆夜学校（水原漸）、私立産婆学校（石井亀次郎）の 9 施設が確認できた。9 施設中 6 施設で教員は医師と産婆で担っていたことが確認できた。

3.2.

東京都公文書館文書より教育課程が確認できた私立産婆学校（内河郁）と芝産婆学校（大田松郎）の教育内容を把握し、文献からの櫻井郁二郎の紅杏塾、官報からの濱田の医科大学第一医院産科学教室の教育課程と比較する。

3.2.1. 私立産婆学校（内河郁）

解剖生理産婆学をそれぞれ毎週 6 時間とあり、月曜から土曜まで毎日 1 時間ずつあわせて 3 時間の授業が行われることが読み取れた。1 期は解剖・生理・産婆学（正常編）を毎日 1 時間ずつ、2 期になり解剖・生理・産婆学（異常編）、3 期で生理・産婆学（異常編）・実

地演習が1時間ずつのカリキュラムである⁶⁾。全体の過半数を解剖生理学が占めていること、産婆学の内訳は正常編対異常編の比率が1対2であることが私立産婆学校の特徴といえる。

この養成所は教員が3名で校長が内務省産婆であり、教員3名中2名が産婆、1名は医学士である。この養成所の設立趣旨は「専ラ成規ノ開業試験ニ応スヘキ産婆ヲ養成」とある⁷⁾。正規の開業試験、つまり内務省試験に合格することが目標になっている。普通仮名交じり文章を理解できる者という入学要件だけで、専門的基礎知識がどのくらい理解できるか、そのような状況で医学科目の時間が増えていた可能性が考えられる。解剖・生理学は確かに重要であるが、全体の時間に占める割合をみると産婆学校として適切かどうか確かに疑問である。産婆に必要な産事の実地取扱法を教えず無要な過当高尚の医理を教えている、という濱田の疑問を招いた可能性がある。

3.2.2. 芝産婆学校（大田松郎）

芝産婆学校の設立趣旨は「完全ナル産婆ヲ養成シ実地就業ニ當リ挙事応用ナラシメント欲ス」であった。分娩は、無事に産まれて自然分娩と結論されるその経過中にも幾度となく異常に移行する危険がある。芝産婆学校では、妊娠分娩産褥の異常編が平常産編の約2倍に設定されている。異常の経過とその処置の時間が多いということが、経過中の異常に遭遇した時の「挙事応用ナラシメン」に該当するのであればよいが、それは正常経過の十分な理解が前提であろう。当時は正常のお産には産婆が立ち会い医師は関係しないことが多かった⁸⁾。医師は異常産の対処については医学の理論と実体験による知識があり、異常産については自信を持って教えていたに違いない。ただ、産婆に期待される正常な経過になるような関わりについては医師は精通していなかった可能性がある。

異職種医師が教えることの限界だったろう。医師としては良く知っている異常産にウエイトをおいた産婆教育課程であることが、濱田の危機感につながった可能性がある。

3.2.3. 教育機関の比較

櫻井の東京産婆学校（紅杏塾改め）は修学期間としては1年半であるが、課程表から一日2時間1週間に6時間で隔日の授業であり⁹⁾、1か月を4週として科目の合計授業時間を算出したところ、表1のようであった。修学期間としてだけみれば1年半と10か月では差があるものの、実質授業時間をみると東京産婆学校と第一医院附属産婆学校はほぼ同等の教育時間であった。同様に内河の私立産婆学校、大田の芝産婆学校の授業時間を算出すると、総時間がともに1296時間になり、櫻井や濱田の主宰する産婆学校の3倍もの時間をかけていたことが明確になった。この総時間数からみると、内河や大田の産婆学校は濱田の考えとはかけ離れており、濱田の問題意識につながった可能性がある。

次に、各学校の全体に占める科目の割合をみたのが図3である。

表 1 履修時間の比較

産婆学校	櫻井	内河	大田	濱田
	東京産婆学校	産婆学校	芝産婆学校	第一医院
修学期間	1年半	1年半	1年半	10カ月
解剖・生理	180	720	216	60
産婆学	180	144	360	120
異常編	36	288	432	
演習・実地	36	144	288	240
合計時間	432	1296	1296	420

1 か月=4 週として算出

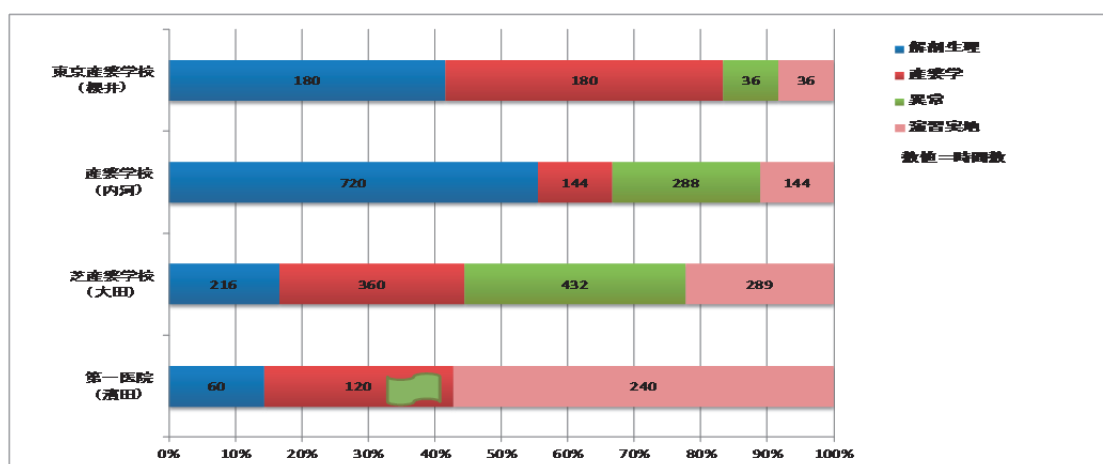


図 3 産婆学校履修科目構成の比率

4 校中第一医院は演習実地の比率が突出している。座学は総時間の半分に満たず、「解剖生理」対「産婆学」対「演習実地」が 1 対 2 対 4 であり、教育総時間として同等の東京産婆学校とは対照的である。

芝産婆学校は総授業時間は多いものの、構成科目の時間配分はほぼ均等である。また解剖生理と異常を合わせた医学的基礎にあたる時間と産婆学理と演習を合わせた産婆学の時間が同等であった。内河の産婆学校は産婆学の占める割合が低い。では帝国大学教授の考えによる第一医院の教育内容が産婆教育として妥当なのかどうか、当時の小学校就学率や女性の立場等々の背景要因をあわせて考慮すべきであろう。いずれにしてもどのような産婆を育てたいのか、産婆学とはそもそもどのようなものにとらえているのかが反映されていると考える。

4. まとめと課題

医師と産婆が産婆の教育にあたっていたが、教育機関の目的によりその教育課程は単一ではなかった。小学校就学率が30%代の明治20年台、産婆学校（内河）の教育課程の危うさは昔の事とばかりも言えない。教育目的により教育課程が考えられ、それを支えるのは学習履歴である。これは現代にも通じる問題である。看護職に限らずどの分野でも高等教育を希望する生徒には偏りのない高等普通教育が受けられる環境を、関係者は準備しなければいけないのではないだろうか。

文献

- 1) 看護行政研究会, 看護六法平成23年版, 新日本法規出版株式会社, p152-154, 2011
- 2) 亀山美知子, 産婆教育, 看護史, メヂカルフレンド, 平成5年, p93-95
- 3) 濱田玄達, 産婆養成所ヲ開クノ意見, 中外医事新報, 245号, 明治23年
- 4) 東京帝国大学, 東京帝国大学五十年史 上冊 1932年, p431-433
- 5) 佐伯理一郎 濱田玄達先生略伝, 中外医事新報 1214号 505-525
- 6) 東京都公文書 616.C8.03 p50
- 7) 東京都公文書 616.C8.03 p42-46
- 8) 櫻井郁二郎, 産婆論, 医事新聞第51号 p6-15
- 9) 柳井貴三, 櫻井郁二郎先生伝 1941 p42, 国会図書館蔵

[出典（Ⅱ．明治期の産婆教育のカリキュラム）

小山田信子（2014）．歴史に学ぶ看護職教育のカリキュラムポリシー——産婆の教育課程から——，日本行動計量学会第42回大会抄録集，100-103，東北大学，2014年9月3日開催]

第Ⅱ部 高校調査

序 章 第Ⅱ部の構成

倉元直樹（東北大学）

第Ⅱ部は表題の通り，本研究プロジェクトにおける「高校調査」に関わる論考を集めたものである。本章以外に4章から構成されている。

第1章「高校調査（質問紙調査）の概要」は，平成25（2013）年度に全国の高等学校，および，中等教育学校の進路指導担当教員を対象として実施した本研究プロジェクトによるアンケート調査における基礎集計をまとめたものである。対象を高校生としなかったのは，「看護系志望の高校生」という母集団を手続き的に定義することが難しいこと，実施に当たって調査対象となる学校に著しく大きな負担がかかること，という二つの条件を勘案したためである。章末に単純集計結果，ならびに，本研究プロジェクトの調査に使用された8ページから成る調査票のサンプルを採録した。

第2章「看護系志望者の適性と大学入試」は，日本行動計量学会第42回大会において，特別セッションとして発表された4件の研究発表における抄録集原稿のうちの3編を再録したものである。なお，4番目の発表である「歴史に学ぶ看護職教育のカリキュラムポリシー」は，第Ⅰ部第7章「選抜試験・カリキュラムの適及的分析」の一部として採録した。内容的には，第3節「高校生における『看護系人気』の背景事情」の一部に第1章の「高校調査（質問紙調査）」の分析が含まれる。なお，発表当時はデータの修正が完了していなかったため，数値が第1章の集計と完全に一致していない部分もあるが，そのまま掲載することとした。

第3章「高校教員からみた看護系進学希望者の特徴」は，主として進学実績から見た高校の分類の観点から第1章の「高校調査（質問紙調査）」のデータについて分析した，オリジナルの論考である。

第4章「看護系志望の高校生に求められる学力・適性に関する高等学校進路指導教員の意識」は「高校調査（質問紙調査）」における「不適応の原因」「看護系を勧める理由」「生徒が考える看護系のイメージ」「教員が考える看護系の特性」の各項目群に対し，因子分析法を用いて尺度化を施した上で分析を加えたオリジナルの論考である。回答結果から回答者の「性別」「年代」といった個人特性に基づく影響の排除を試みている。なお，本章は日本教育心理学会第57回総会（会場：朱鷺メッセ [新潟コンベンションセンター]，2015年8月26日 [水]～28日 [金]）において発表予定の内容に分析結果の表を加えたものである。

第1章 高校調査（質問紙調査）の概要

倉元直樹（東北大学）

1. 概要

本調査は、科学研究費基盤研究(B)「医療の高度化に伴う看護系大学の高大接続問題－看護職志望者の適性と大学入試－」の高校調査（質問紙調査）として、特殊教育諸学校を除く全国の高等学校、中等教育学校の進路指導担当教員を対象に実施したものである。

2. 調査の目的

高等学校の進路指導教員の視点から、看護系大学や専門学校に進学した生徒がどのような学習履歴や特徴を持ち、どのようなプロセスで進路決定をしているのか、また、どのような要因が進路決定に影響を及ぼしているのかについて調査を行った。看護系で学ぶ学生を送り出す側の高校教員の意識を明らかにすることを目的とする。

3. 倫理的配慮

第1部第3章で述べたように、本研究プロジェクトについては東北大学高等教育開発推進センター¹倫理委員会に研究計画を提出し、承認を得た。2013(平成25)年11月25日に本調査票に関して改めて倫理審査の受審を申し出たが、すでに承認された案件として、審査対象外と認定された。

4. 調査票

章末資料のとおり。8ページの調査票、および、回答結果（回答校数、比率）を調査票に記入した資料を掲載した。

5. 調査対象

特別支援学校等を除く全国 5,028 の高等学校、中等教育学校の中から無作為に抽出された 2,000 校を調査対象とした。2014(平成26)年1月中旬～下旬に調査票を送付し、各校の進路指導担当教諭 1 名ずつに回答を求めた。章末資料に示したように、調査票は 8 ページから成る。調査票の回収は郵送方式で行われた。

2014(平成26)年6月23日の時点で 1,319 校から有効回答が得られた（回収率 66.0%）。都道府県別の調査対象校数、抽出校数、返送率、抽出率等は、表 1 に示すとおりである。青森県、愛媛県からの返送率が 90%を超えたが、大阪府、福岡県、東京都といった大都市からの返送率が 5 割に満たなかった。

¹ 当時。現在は東北大学高度教養教育・学生支援機構に引き継がれている。

表 1. 都道府県別返送状況

都道府県	調査対象校数	抽出校数	返送数	抽出率	返送率	返送率順
北海道	297	125	94	42.1%	75.2%	15
青森	74	31	30	41.9%	96.8%	1
岩手	78	39	35	50.0%	89.7%	3
宮城	100	41	34	41.0%	82.9%	8
秋田	56	24	18	42.9%	75.0%	16
山形	63	24	21	38.1%	87.5%	5
福島	107	45	37	42.1%	82.2%	10
茨城	130	63	42	48.5%	66.7%	26
栃木	78	19	12	24.4%	63.2%	35
群馬	85	30	24	35.3%	80.0%	12
埼玉	203	80	51	39.4%	63.8%	34
千葉	191	72	42	37.7%	58.3%	40
東京	443	173	79	39.1%	45.7%	45
神奈川	243	97	59	39.9%	60.8%	38
新潟	111	40	33	36.0%	82.5%	9
富山	51	16	11	31.4%	68.8%	24
石川	56	20	13	35.7%	65.0%	33
福井	36	15	9	41.7%	60.0%	39
山梨	44	19	17	43.2%	89.5%	4
長野	105	43	28	41.0%	65.1%	32
岐阜	83	36	26	43.4%	72.2%	19
静岡	141	57	39	40.4%	68.4%	25
愛知	222	88	58	39.6%	65.9%	30
三重	75	23	15	30.7%	65.2%	31
滋賀	61	23	18	37.7%	78.3%	14
京都	96	36	19	37.5%	52.8%	43
大阪	269	103	41	38.3%	39.8%	47
兵庫	216	89	59	41.2%	66.3%	29
奈良	54	16	8	29.6%	50.0%	44
和歌山	47	20	16	42.6%	80.0%	13
鳥取	31	7	5	22.6%	71.4%	20
島根	46	19	16	41.3%	84.2%	7
岡山	90	37	30	41.1%	81.1%	11
広島	134	57	38	42.5%	66.7%	27
山口	79	28	20	35.4%	71.4%	21
徳島	36	12	7	33.3%	58.3%	41
香川	44	21	15	47.7%	71.4%	22
愛媛	68	21	19	30.9%	90.5%	2
高知	44	15	11	34.1%	73.3%	18
福岡	166	74	33	44.6%	44.6%	46
佐賀	45	18	11	40.0%	61.1%	37
長崎	79	32	27	40.5%	84.4%	6
熊本	80	38	24	47.5%	63.2%	36
大分	60	29	16	48.3%	55.2%	42
宮崎	53	20	15	37.7%	75.0%	17
鹿児島	93	42	28	45.2%	66.7%	28
沖縄	65	23	16	35.4%	69.6%	23
合計	5,028	2,000	1,319	39.5%	66.0%	

6. 結果の概要

6.1. 回答校プロフィール

6.1.1. 学校規模

章末資料の通り。

6.1.2. 進路に関する位置づけ

図 1 の通り、進路多様校が多い。なお、比率は無回答を除いて計算したものである。以下も同様である。

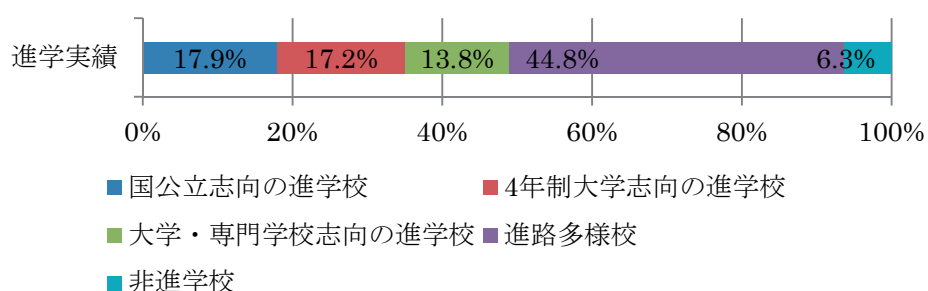


図 1. 進路に関する位置づけの構成比 (%)

6.1.3. 看護系進学希望者数

男子校や工業高校などの専門高校も含め、全ての回答校の中で「ほとんどいない」という回答は 14.2%に過ぎなかった。

なお、「コンスタントにいる」と回答した学校の看護系志望生徒の平均は 13.6 名であった。これ以後、「ほとんどいない」と回答した 185 校を除く 1,134 校を分析の対象とする。

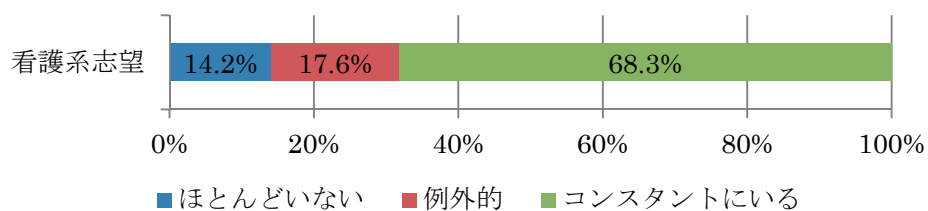


図 2. 看護系進学希望者数の構成比 (%)

6.2. 進学先と入試

6.2.1. 所属するコース・類型

看護系を志望する生徒が所属するコース・類型は「どちらかと言えば理系」「ほとんど理系」を合わせると半数近くに達する。次いで「コース分けがない」という回答が多かった。

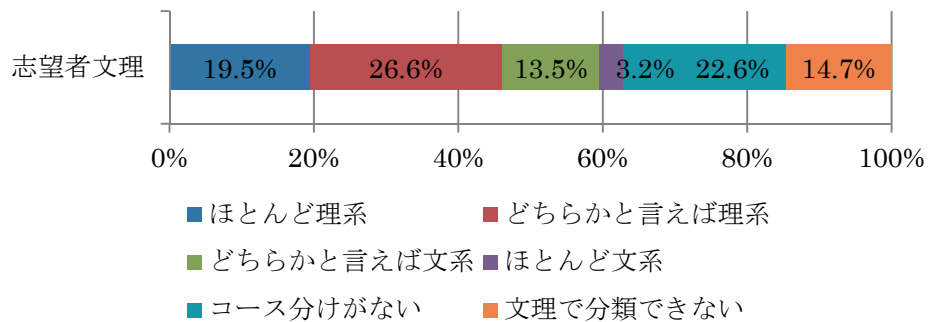


図 3. 看護系を志望する生徒が在籍するコース・類型の構成比 (%)

6.2.2. 男子生徒

女子校も含め、全ての回答校の中で看護系を志望する男子生徒が「ほとんどいない」という高校は4割弱であった。「コンスタントにいる」場合、平均は4.4名程度となっている。

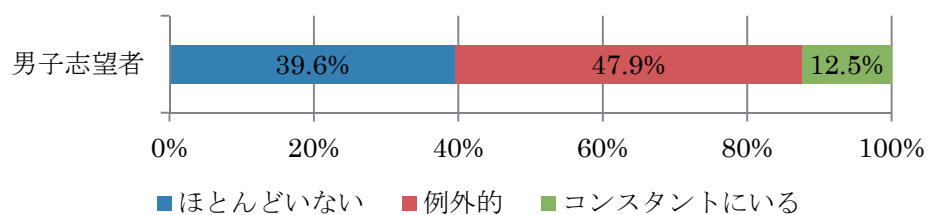


図 4. 看護系を志望する男子生徒の構成比 (%)

6.2.3. 受験する校種

大学も専門学校も受験する比率が4割程度と最も多い。

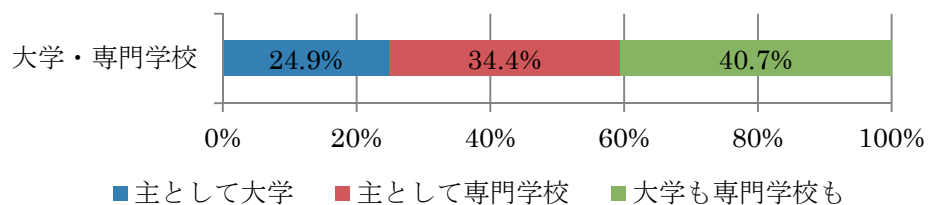


図 5. 受験する校種の構成比 (%)

6.2.4. 受験する校種と地域

「地元の専門学校」が6割強, 「地元の大学」が5割強に上る。地元以外は専門学校, 大

学ともに1割強にとどまっている。なお、この項目については複数回答が可能なので、当該項目の調査対象校数1,314校を分母として比率を算出した。

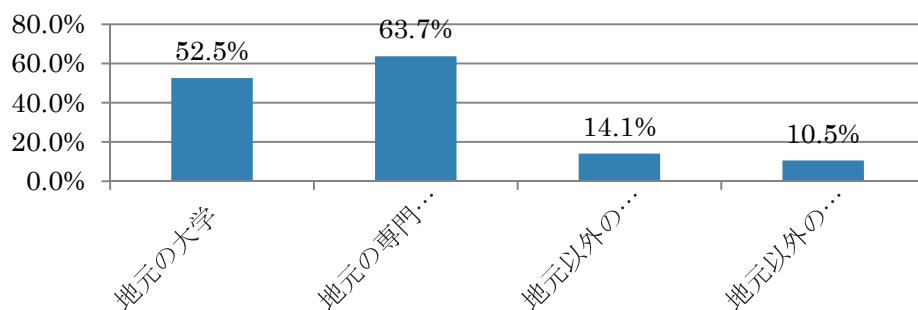


図 6. 受験する校種と地域の比率 (%)

6.2.5. 成績

看護系を志望する生徒の成績は「上位」から「平均より少し上」が典型的なようである。「最上位」も「下位」も例外的である。

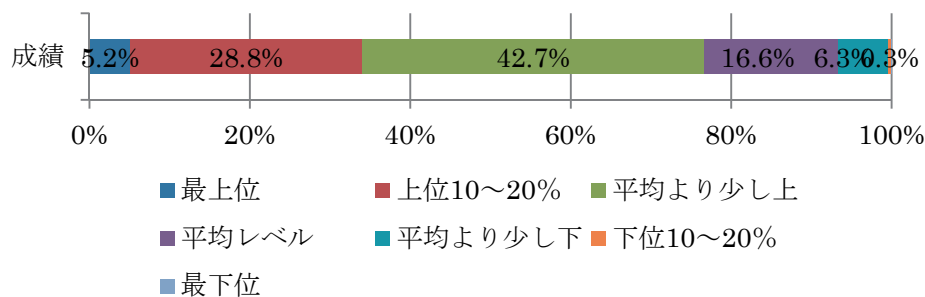


図 7. 看護系を志望する生徒の成績水準の構成比 (%)

6.2.6. 入試区分

推薦入試を受験するケースが約2/3、一般入試が3割程度である。

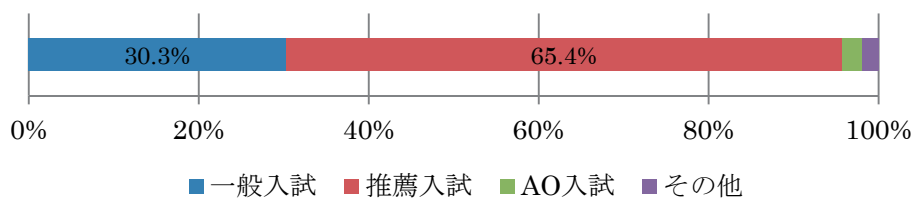


図 8. 看護系を志望する生徒が受験する入試区分の構成比 (%)

6.2.7. 志願を決める時期

志願を決める時期は高校2年生から高校3年生の7月くらいまでというケースが多いようである。高校1年生の22%、高校3年生の後半の10%強を勘案すると、高校時代に志願を決めるケースがほとんどということになる。

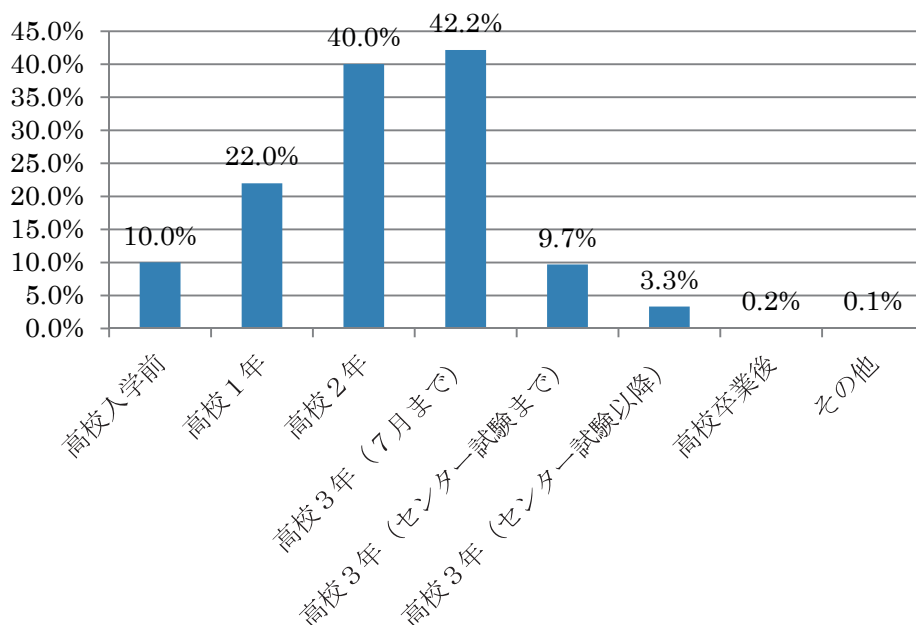


図 8. 志願決定時期 (%)

6.2.8. 志望順位

志望順位はほとんどが「第1志望」である。第2志望以下は例外と言える。

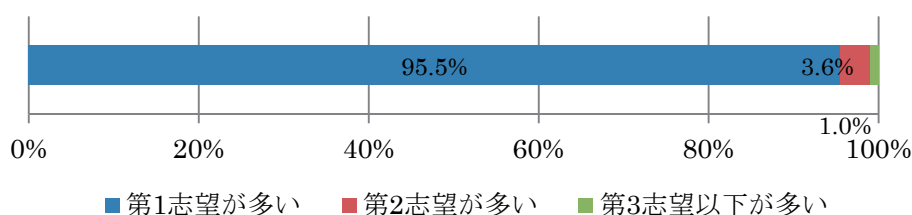


図 9. 志望順位の構成比 (%)

6.2.9. 本来の第1志望分野

第1志望以外の生徒は少ないが、看護系以外の分野に第1志望があった場合には、「看護系以外の医療技術系」の比率が高い。それ以外では「薬学」と「医学」が10%程度であり、関連分野となっている。

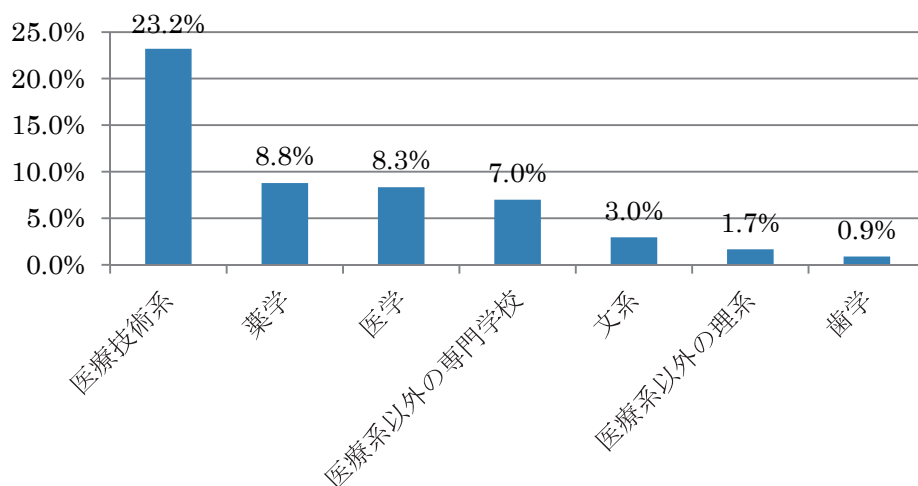


図 9. 本来の第 1 志望分野 (%)

6.2.10. 受験先の決定への影響力

大学調査における同じ項目と比較すると、「本人」が決めたという比率が 10 ポイントほど高い。

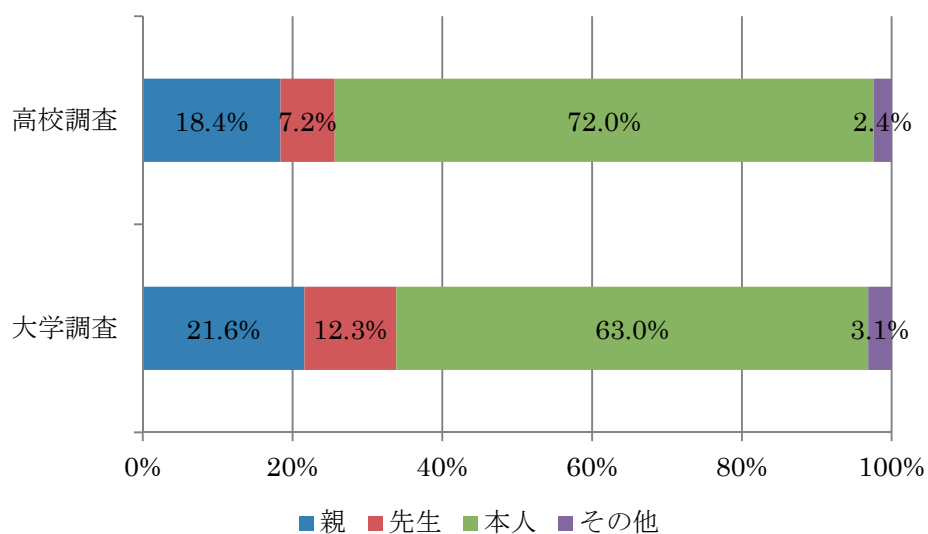


図 10. 最大影響力保持者構成比 (大学調査との比較) (%)

6.2.11. 身内の医療関係者

「どちらとも言えない」が 4 割弱、「どちらかと言えば医療系の家庭が多い」が 5 割弱となっている。

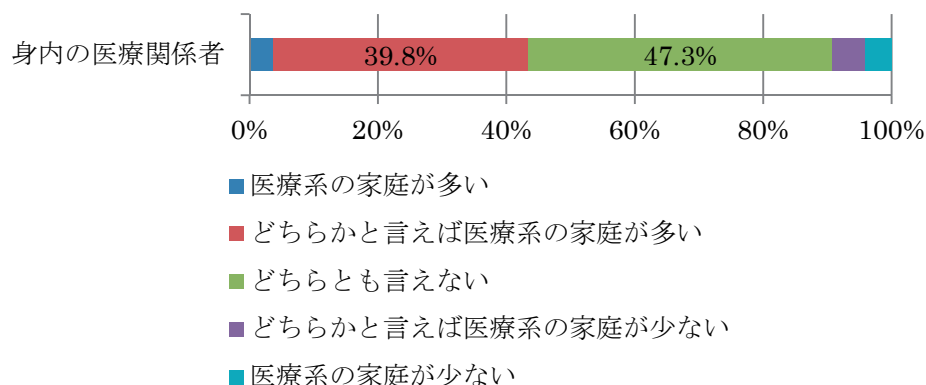


図 11. 身近な医療関係者構成比 (%)

6.3. 看護系への進学の原因・適性

6.3.1. 志願決定理由

表 2. 受験を決めた理由 (大学調査との比較)

項目	高校調査 ('5'の比率)	大学調査 ('5'の比率)	高校調査 (平均値)	大学調査 (平均値)(再掲)
1. 資格 (理由)	64.4%	62.0%	4.45	4.46
2. 仕事関心 (理由)	72.7%	55.0%	4.62	4.40
3. 内容 (理由)	48.2%	47.0%	4.29	4.29
4. 職業明確 (理由)	69.8%	61.3%	4.59	4.47
5. 就職可能 (理由)	56.4%	64.4%	4.36	4.49
6. 収入 (理由)	14.3%	40.1%	3.49	3.98
7. 地域 (理由)	9.9%	16.7%	3.29	3.06
8. 大学立地 (理由)	8.2%	14.5%	3.23	3.29
9. 学生生活 (理由)	5.0%	17.5%	3.10	3.48
10. 教育内容 (理由)	19.5%	17.7%	3.74	3.59
11. 研究内容 (理由)	5.5%	7.9%	3.02	2.83
12. 評判 (理由)	16.7%	14.0%	3.76	3.48
13. 施設 (理由)	28.0%	20.5%	4.02	3.68
14. 学費 (理由)	37.7%	39.4%	4.13	3.85
15. 生活費 (理由)	18.1%	22.6%	3.57	3.31
16. 自宅通学 (理由)	37.3%	33.5%	3.96	3.39
17. 合格可能 (理由)	48.1%	39.7%	4.34	3.87
18. 入試科目 (理由)	31.7%	38.0%	3.81	4.15
19. 地方会場 (理由)	9.7%	3.8%	2.44	2.66
20. 併願 (理由)	8.7%	7.0%	2.46	3.09

「志願を決定した理由」については、「1. 全く重要だと感じていなかった」～「5. かなり重要だと感じていた」という5段階評定の形式でデータの収集を行い、それぞれ「1」～「5」と得点化して分析を行った。表2に生徒が受験を決めた理由の重要性に関する評定結果を示す。同一の項目が大学調査にも含まれていたため、平均値については第I部第3章の数値を再掲する。

おおむねに多様な評価だが、「5」の比率で比較した時、図12に示すように高校教員は「6. 収入の金額が十分」という項目を低く評価していた。逆に、「2. 将来の仕事に興味・関心」という項目を高く評価していた。

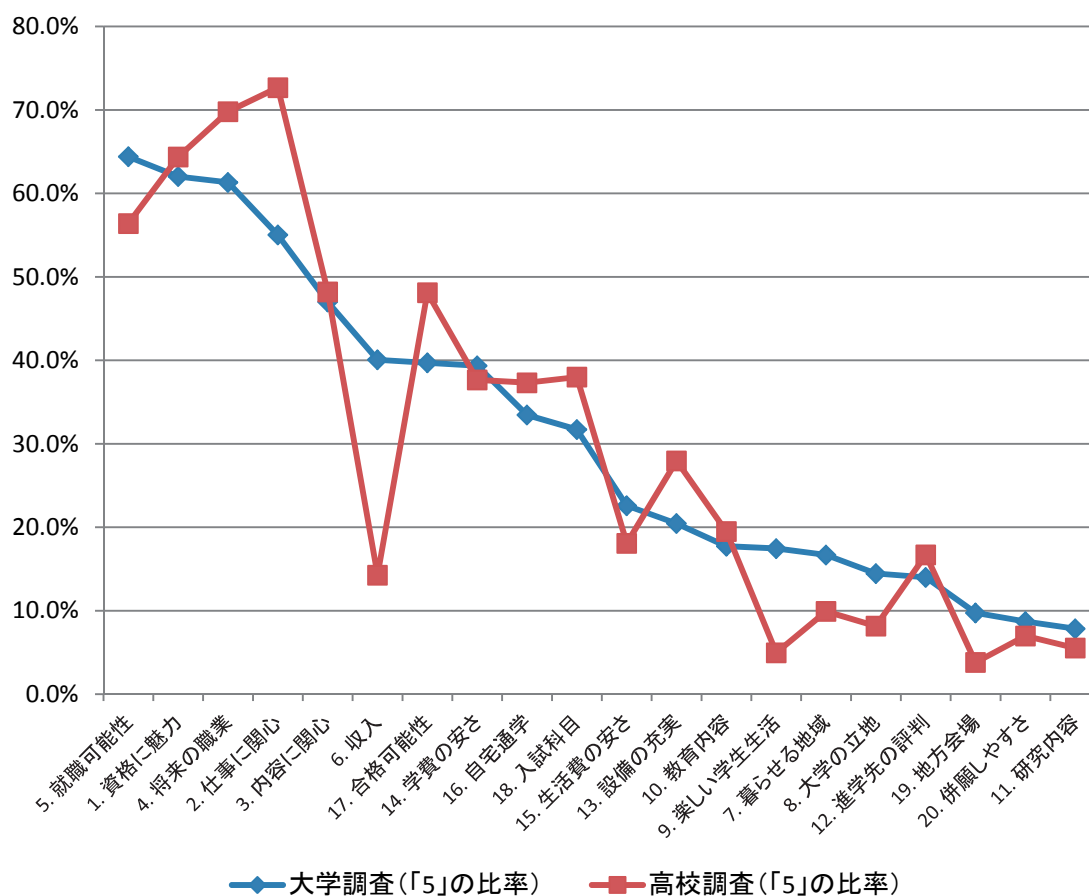


図12. 受験を決めた理由「5」の比率 (大学調査との比較)

6.3.2. 最も心配だった生徒

「進学後が最も心配だった生徒」に対して「1. 全く心配していなかった」～「5. かなり心配していた」という5段階評定の形式でデータの収集を行い、それぞれ「1」～「5」と得点化して分析を行った。表3に「5」の比率と得点化した場合の平均値を項目ごとに示す。図13は「5」の比率を折れ線グラフで表したものである。4分の1近くの回答者が「8. 基礎学力の不足」を懸念し、次いで「7. 臨機応変な対応」に問題を感じていた。

表 3 問題になる可能性が高いと思った項目

項目	「5」の比率	平均値
1. 病人の立場	6.7%	2.63
2. 計算・見積	6.7%	2.70
3. 生活習慣	5.5%	2.42
4. 友人関係	4.0%	2.43
5. 患者の状態	7.4%	2.94
6. 聞く力	6.2%	2.75
7. 臨機応変	14.0%	3.36
8. 基礎学力	23.6%	3.54
9. 経済状況	4.3%	2.61
10. 集団行動	3.1%	2.35
11. 不本意入学	2.1%	1.98
12. 思い込み	5.4%	2.60

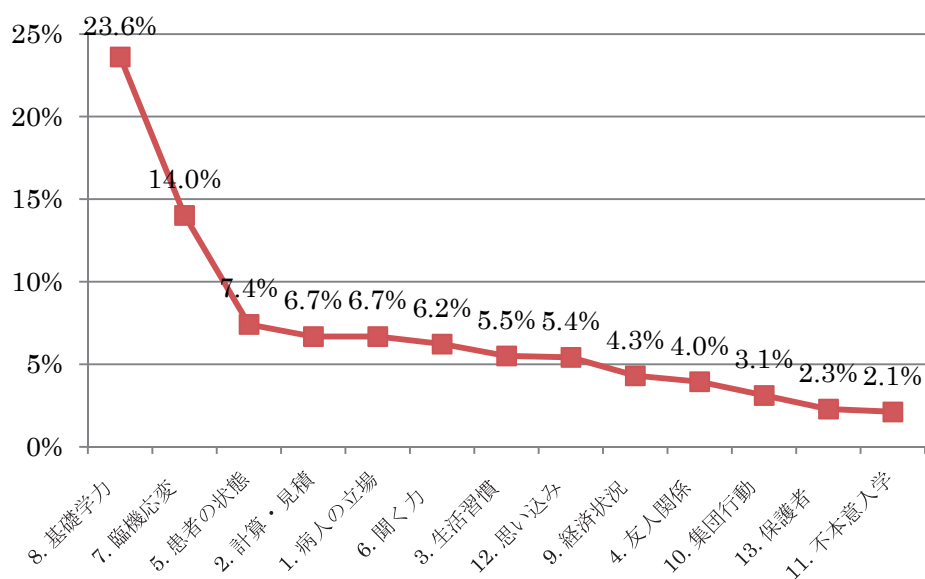


図 13. 問題になる可能性が高いと思った項目「5」の比率

表 4 に心配だった生徒のプロフィールを示す。やや「第 1 志望」ではないケースもやや多いが、「医療関係者以外」の家庭環境が 84.0%、家庭の経済状況が「問題なかった」のが 84.0%、志願を決めたのが「生徒本人」であるケースが 80.1%といった情報を合わせてみると、周囲の圧力で進学先を決めたというよりも、本人が周囲の心配を振り切って進学したケースが多いのではないかと想像できる。

表 4. 心配だった生徒のプロフィール

項目	属性	比率
性別	男子	16.8%
	女子	83.2%
所属コース	理系	31.0%
	文系	28.6%
	その他	40.4%
進学先	国立大学	3.1%
	公立大学	3.8%
	私立大学	22.5%
	専門学校	70.5%
進学後の通学形態	自宅生	68.4%
	自宅外生	31.6%
成績	上位	13.1%
	中位	44.2%
	下位	42.8%
進学した入試区分	一般入試	45.9%
	推薦入試	46.0%
	AO入試	7.0%
	その他	1.2%
志望順位	第1志望	82.6%
	第2志望	9.0%
	第3志望	8.4%
進路決定の実質的主体	保護者	16.3%
	教員	3.3%
	生徒本人	80.1%
	その他	0.4%
家庭背景	医療関係者	16.0%
	医療関係者以外	84.0%
家庭の経済状況	困窮していた	14.2%
	問題なかった	85.8%

6.3.3. 進学を勧める理由

「進学を勧める理由」に対して「1. 全く理由にならない」～「5. 重要な理由になる」という5段階評定の形式でデータの収集を行い、それぞれ「1」～「5」と得点化して分析を行った。表5に「5」の比率と得点化した場合の平均値を項目ごとに示す。図14は「5」の比率を折れ線グラフで表したものである。

「生徒に対して特定分野への進学を勧めてはいない」との回答も多かったが、あえて勧めるとすれば、「10. 社会貢献ができる」、「16. 他人が喜ぶ」、「6. 人の命を救うことができる」といった、周囲に対する貢献を理由に進めることが多いようである。

表 5. 進学を勧める理由

項目	「5」の比率	平均値
1. 経済安定	22.5%	3.67
2. 流行無関係	26.6%	3.85
3. 女性自立	32.0%	3.95
4. 良き伴侶	1.6%	2.18
5. 男女平等	9.5%	3.12
6. 救命	48.0%	4.33
7. 固い資格	37.8%	4.11
8. 高給	10.7%	3.44
9. 自律的	21.3%	3.81
10. 社会貢献	55.1%	4.44
11. 取得困難	9.2%	3.24
12. 女性中心	2.9%	2.78
13. 長く勤務	31.9%	4.02
14. 発展性	15.8%	3.60
15. 専門性	36.6%	4.18
16. 他人が喜ぶ	49.6%	4.35
17. 地元就職	32.3%	3.96
18. 保護者喜ぶ	6.1%	2.93
19. 低学費	7.8%	3.07
20. 合格確実	4.7%	2.61
21. 得意科目	4.0%	2.79
22. 自宅通学	9.0%	3.09
23. 地方会場	2.0%	2.33

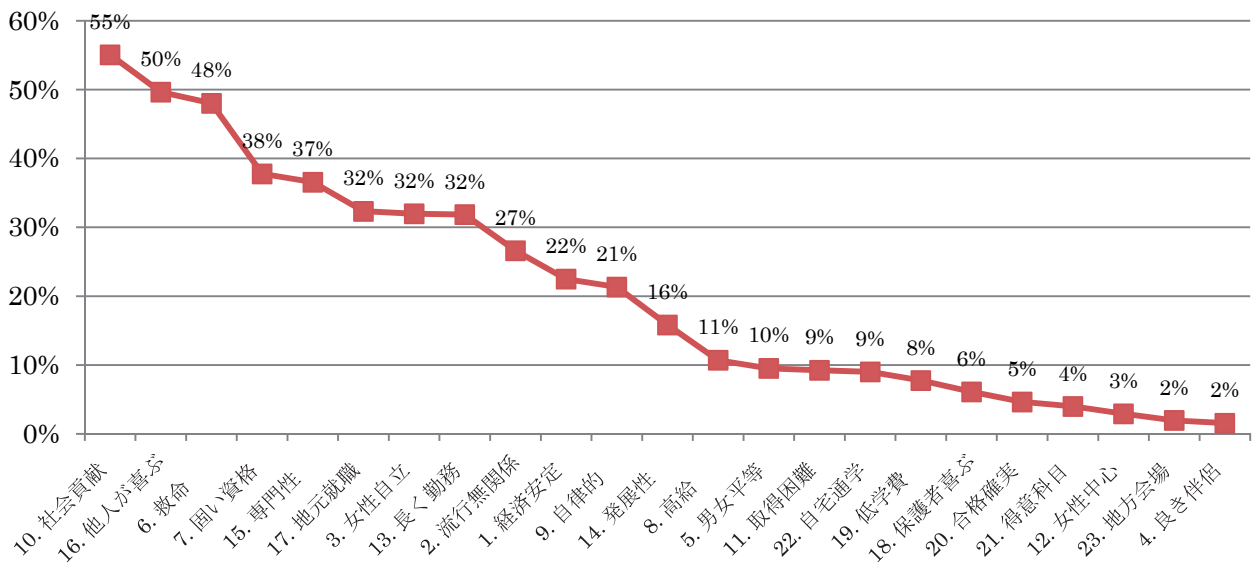


図 14. 進学を勧める理由「5」の比率

6.3.4. 看護系に抱くイメージ

「生徒が看護系専門職に抱くイメージ」に対して「1. 全くそう思っていない」～「5. かなりそう思っている」という5段階評定の形式でデータの収集を行い、それぞれ「1」～「5」と得点化して分析を行った。表6に「5」の比率と得点化した場合の平均値を項目ごとに示す。図15は「5」の比率を折れ線グラフで表したものである。

「生徒何をイメージしているか推し量りようがない」といった主旨の回答も多かったが、あえて勤めるとすれば、勤める理由と同様に「6. 人の命を救うことができる」、「10. 社会貢献ができる」、「16. 他人が喜ぶ」、といった、周囲に対する貢献をイメージしていると考えられることが多いようである。

表6. 生徒が看護系専門職に抱くイメージ

項目	「5」の比率	平均値
1. 経済安定 (イメージ)	36.4%	4.14
2. 流行無関係 (イメージ)	28.3%	3.98
3. 女性自立 (イメージ)	33.3%	4.06
4. 良き伴侶 (イメージ)	1.3%	2.46
5. 男女平等 (イメージ)	7.6%	3.14
6. 救命 (イメージ)	62.6%	4.55
7. 固い資格 (イメージ)	45.2%	4.28
8. 高給 (イメージ)	16.2%	3.63
9. 自律的 (イメージ)	23.6%	3.85
10. 社会貢献 (イメージ)	61.5%	4.54
11. 取得困難 (イメージ)	15.8%	3.56
12. 女性中心 (イメージ)	13.4%	3.34
13. 長く勤務 (イメージ)	36.4%	4.15
14. 発展性 (イメージ)	16.6%	3.62
15. 専門性 (イメージ)	43.3%	4.31
16. 他人が喜ぶ (イメージ)	60.4%	4.54
17. 地元就職 (イメージ)	36.9%	4.06
18. 保護者喜ぶ (イメージ)	16.7%	3.49
19. 責任大 (イメージ)	46.5%	4.28
20. 対人能力 (イメージ)	35.2%	4.05
21. 3K労働 (イメージ)	11.8%	3.40
22. 夜勤 (イメージ)	35.1%	4.00
23. 残業 (イメージ)	20.3%	3.64

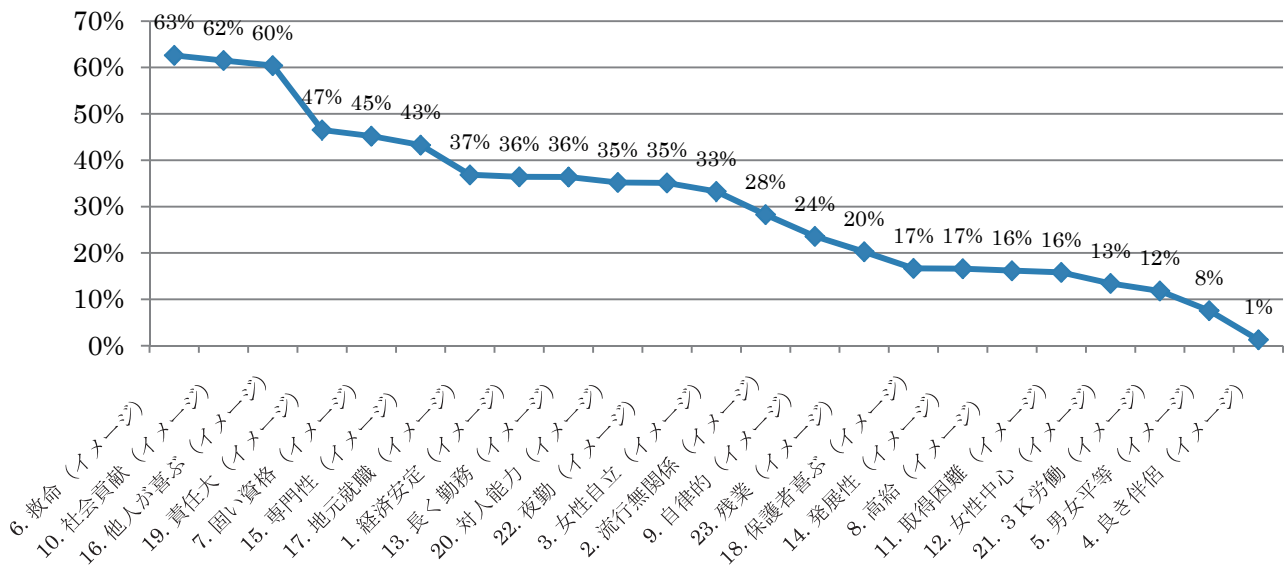


図 15. 生徒が看護系専門職に抱くイメージ「5」の比率

6.3.5. 看護系の適性

他分野の進路と比較してどのような生徒が看護系分野への進学に向いているかを尋ねた。各項目につき、「1. 全く向いていると思わない」～「5. かなり向いていると思う」という 5 段階評定の形式でデータの収集を行い、それぞれ「1」～「5」と得点化して分析を行った。表 7 に「5」の比率と得点化した場合の平均値を項目ごとに示す。項目数が 40 項目と多いので、図 16-1 は「5」の比率で上位 20 項目、図 16-2 は「5」の比率で下位 20 項目に分け、それぞれを折れ線グラフで表したものである。

上位から見てみると、「31. 他人の役に立つ仕事をしたい」、「30. 責任感がある」、「16. 苦労を厭わない」、「3. コミュニケーション能力が高い」、「15. 協調性がある」、「26. 情緒が安定している」、「9. 忍耐強い」、「29. 誠実」、「33. 体力がある」といった項目の「5」の比率が 50%を超えている。

逆に、「1. 家庭の経済力」、「36. 保護者の希望」、「5. 保護者が医師」、「37. 目上に敏感」、「35. 発想力がある」、「22. 興味を追求できる」、「27. 身近に医療関係者がいる」、「2. 保護者の関心が強い」、「6. 保護者が看護師」、「38. 幼い頃から憧れている」といった項目の「5」の比率が低い。

表 7. 看護系の適性

項目	「5」の比率	平均値
1. 家庭の経済力	3.25	6.4%
2. 保護者の関心	3.61	12.1%
3. コミュニケーション能力	4.43	52.7%
4. 集中力	4.32	45.6%
5. 保護者が医師	3.33	9.3%
6. 保護者が看護師	3.54	13.1%
7. リーダーシップ	3.86	19.9%
8. 愛想が良い	4.01	27.1%
9. 忍耐強い	4.44	51.7%
10. 学力水準	4.11	30.8%
11. 優しい	4.35	47.8%
12. 規則正しい	4.35	47.8%
13. 記憶力	3.87	21.3%
14. 吸収力	4.07	30.2%
15. 協調性	4.46	52.5%
16. 苦勞を厭わない	4.46	54.4%
17. 計画性	3.99	25.2%
18. 堅実さ	4.36	48.6%
19. 口が堅い	4.03	33.5%
20. 向上心	4.25	39.4%
21. 自発性	4.24	40.1%
22. 興味を追求	3.44	10.2%
23. 手先が器用	3.80	19.4%
24. 従順性	3.70	15.8%
25. 柔軟性	4.07	29.4%
26. 情緒の安定	4.43	52.1%
27. 身近に医療関係者	3.44	10.8%
28. 正義感	3.99	27.3%
29. 誠実	4.43	51.4%
30. 責任感	4.55	61.0%
31. 役に立ちたい	4.57	62.7%
32. 辛抱強さ	4.31	44.3%
33. 体力	4.40	50.2%
34. 探究心	3.72	15.3%
35. 発想力	3.51	9.9%
36. 保護者の希望	3.18	6.9%
37. 目上に敏感	3.52	9.6%
38. 幼い頃から憧れ	3.54	13.9%
39. 要領の良さ	3.99	25.5%
40. 臨機応変	4.22	39.8%

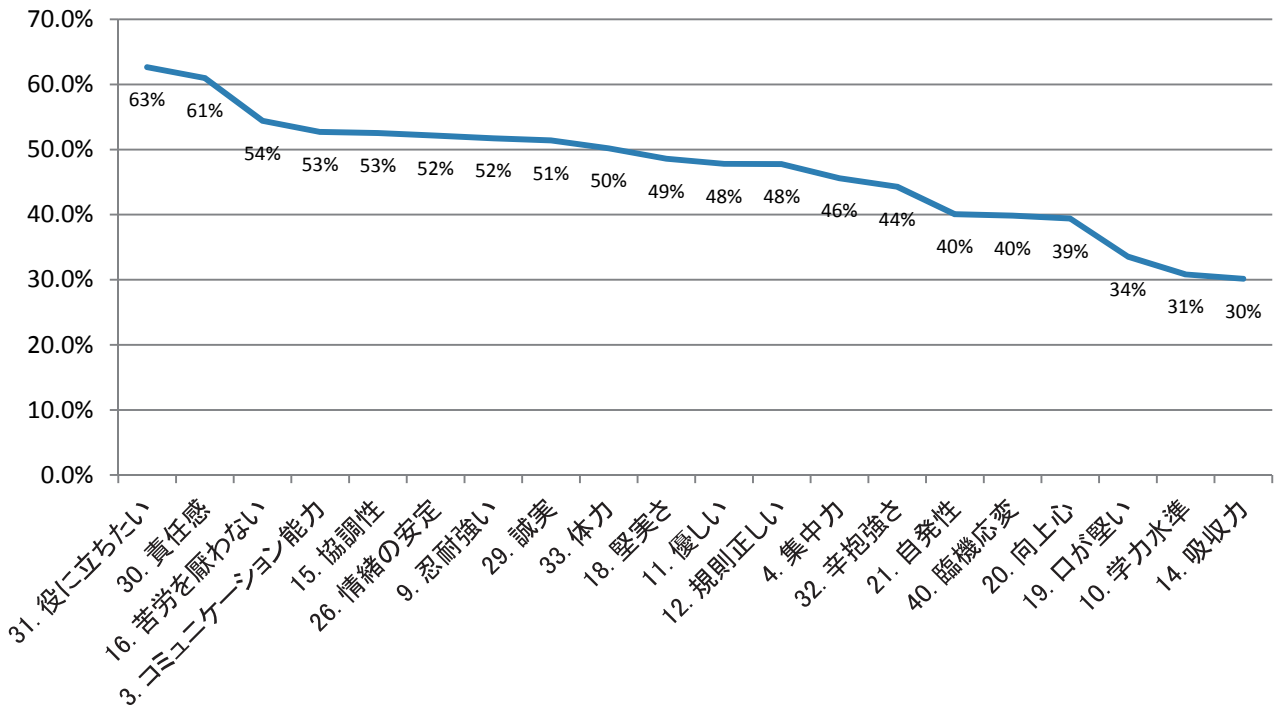


図 16-1. 看護系の適性（上位 20 項目）

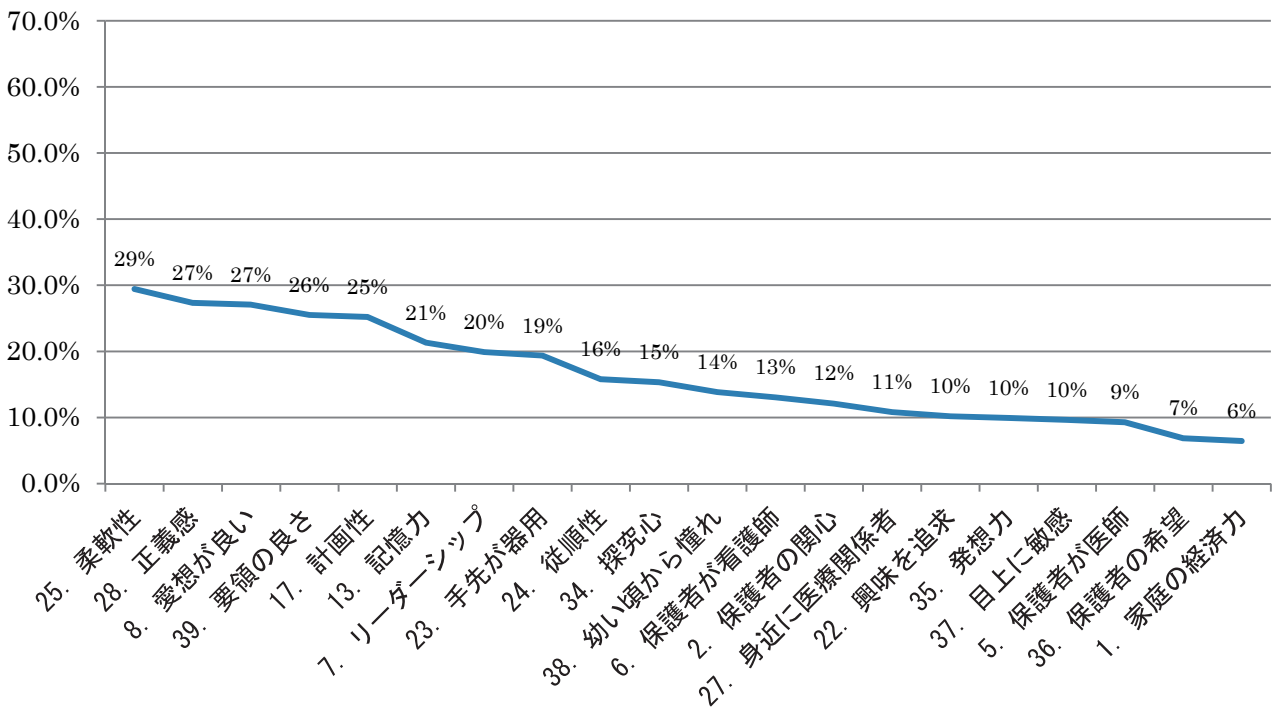


図 16-2. 看護系の適性（下位 20 項目）

6.4. 高校時代の学習履歴

6.4.1. 受験勉強の程度

看護系の生徒が受験勉強をする程度について、「1. 開講していない」、「2. 選択・履修しない」、「3. 履修するが受験勉強はしない」、「4. 受験勉強する」という4つの選択肢から典型的なケースについて一つ選んでもらった。設問の仕方にかかなりの無理があることから、「英語以外の外国語」について4.1%の高校で「4. 受験勉強する」の選択肢が選ばれるなど、にわかには信じがたい結果となった。また、大学調査の際には高等学校学習指導要領の内容が特定できる時期であったが、高校調査を実施した時期にはすでに新しい指導要領が実施されており、科目名の特定が難しくなった。したがって、比較にどの程度意味があるか難しいところだが、大学調査と高校調査を対比した結果を表8と図17に示す。なお、地理歴史各科目に関しては、大学調査の数値は「B」科目を用いた。また、「数学」はそれぞれ「I」「II」「III」を用いた。理科は「I」科目と「II」科目をそれぞれ「文系範囲」「理系範囲」と読み替えている。英語は「英語I」の数値を用いた。

「国語（現代文）」、「数学I・A」、「英語」を受験勉強しているという認識は、大学調査と高校調査で共通である。大きく違ったのが「国語（古典）」と「数学II・B」で、高校教員が思うほどには看護学生は受験勉強をしていなかったようである。

表 8. 受験勉強する比率

科目	大学調査（再掲）	高校調査
国語（現代文）	86.2%	85.1%
国語（古典）	70.9%	37.0%
世界史	7.6%	13.8%
日本史	16.2%	15.8%
地理	25.3%	19.1%
現代社会	23.7%	14.6%
政治・経済	13.3%	13.0%
数学I・A	87.8%	87.0%
数学II・B	70.5%	52.1%
数学III・C	12.9%	7.6%
物理（文系範囲）	11.2%	6.0%
物理（理系範囲）	7.4%	11.7%
化学（文系範囲）	51.2%	34.8%
化学（理系範囲）	32.0%	42.3%
生物（文系範囲）	71.3%	62.6%
生物（理系範囲）	40.5%	57.5%
地学（文系範囲）	1.7%	3.2%
地学（理系範囲）	1.4%	1.6%
英語	87.8%	84.9%

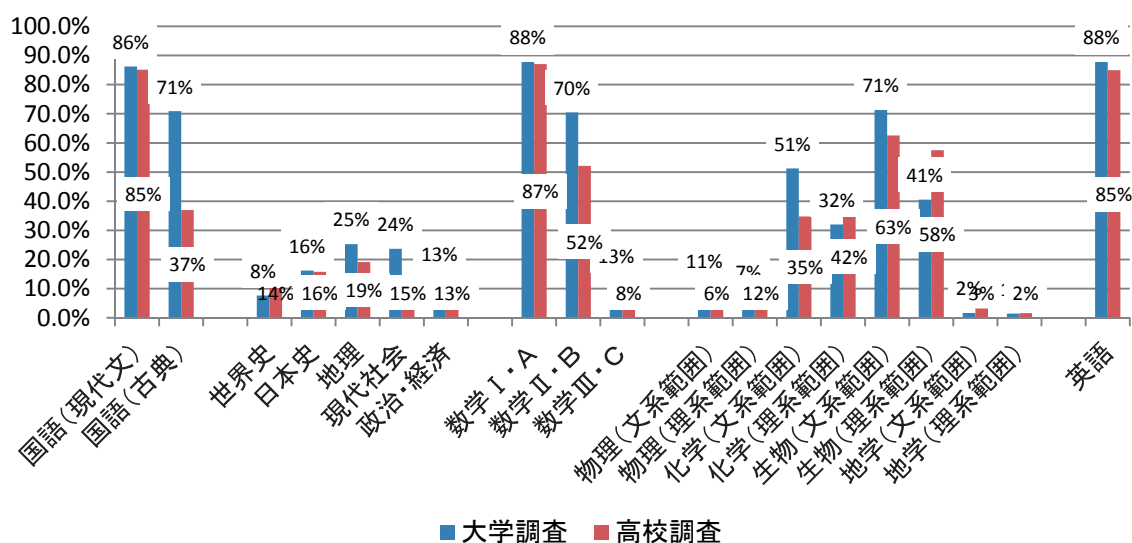


図 17. 受験勉強経験率

6.4.2. 看護は「理系」か「文系」か

大学調査では、「あなたが学んでいる専門の内容は、本質的に『理系』だと感じますか？あるいは『文系』だと感じますか？」という尋ね方をしているが、高校調査では「現在の入試制度はさておき、将来、看護職に就く生徒は高校時代には、本来、**理系**で学んでおくべきだと感じますか？**文系**で学んでおくべきだと感じますか？」という表現で尋ねた項目である。原理的に直接的な比較が可能かどうかは問題だが、図 18 に示すように、結果的に極めて似たような構成比となった。

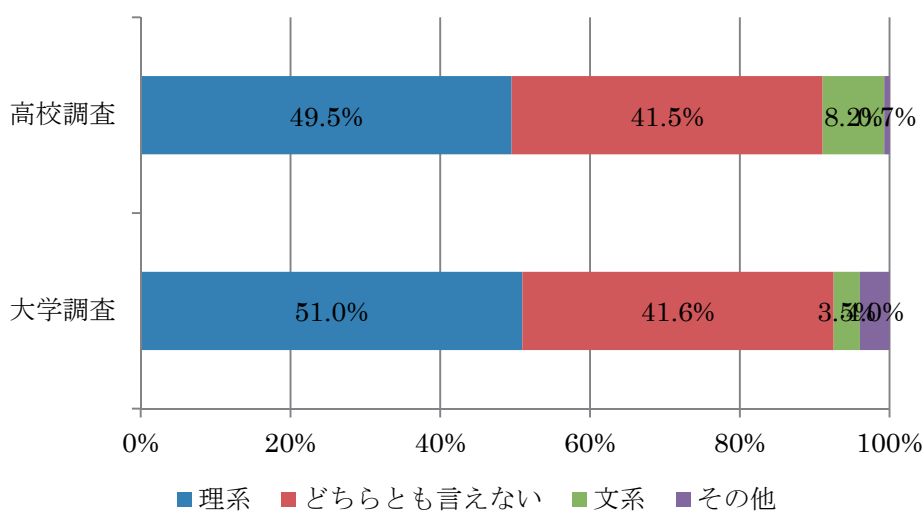


図 18. 看護は「理系」か「文系」か構成比 (%)

6.5. その他

6.5.1. オープンキャンパス

ほとんどが「参加を促す」し、参加した場合には「決め手になる」あるいは「参考になる」という回答であった。オープンキャンパス参加の目的は図 20 に示すとおりである。「5. かなり目的になる」の比率である。

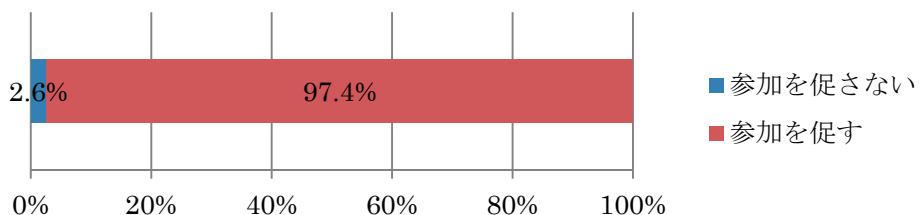


図 19-1. オープンキャンパスへの参加を促すか否か

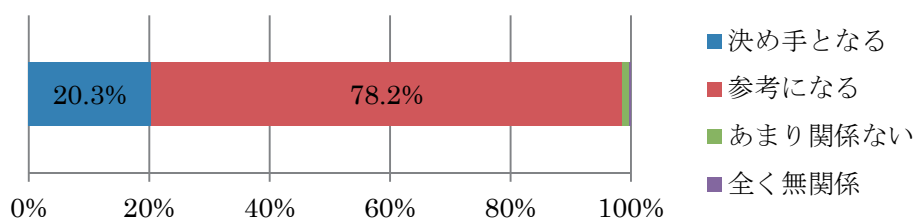


図 19-2. オープンキャンパスへの影響度（参加した場合）の構成比

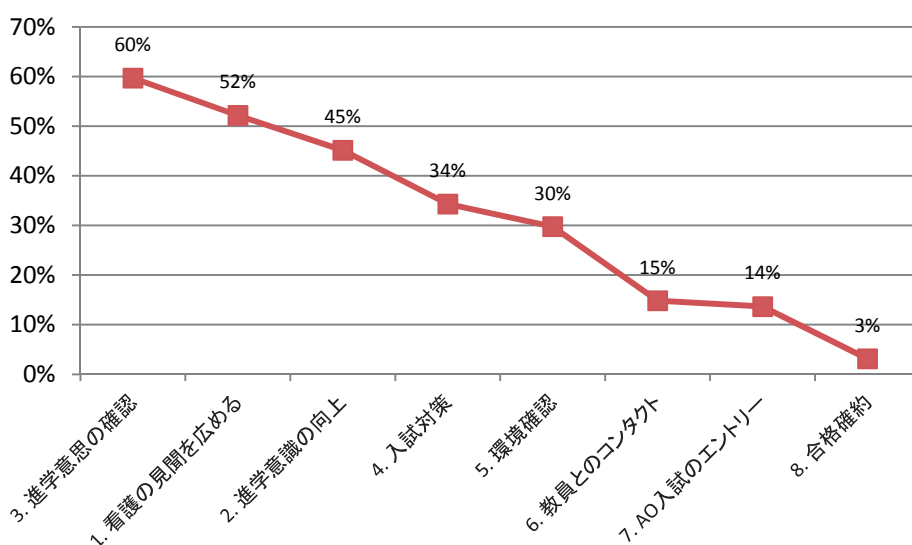


図 20. オープンキャンパスの目的「5」の比率

6.5.2. 回答者属性

本調査に回答した教員の属性は図 21, 図 22 に示すとおりである。

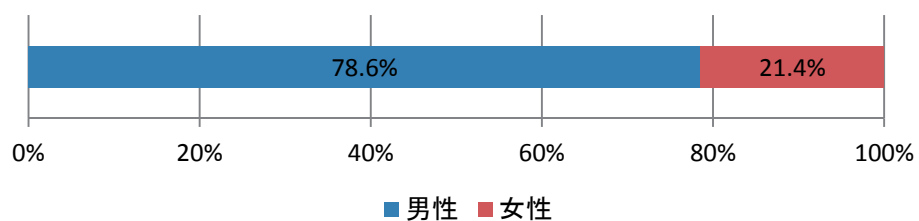


図 21. 回答者の性別構成比 (%)

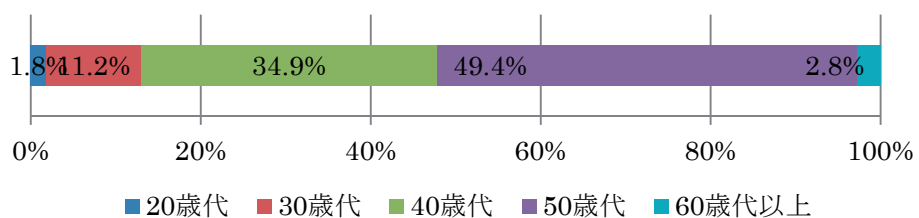


図 21. 回答者の年齢構成比 (%)

平成 25 年度 看護系への進学を志望する高校生に関するアンケート（回答）

科学研究費基盤研究(B)「医療の高度化に伴う看護系大学の高大接続問題 ―看護職志望者の適性と大学入試―
研究代表者 倉元 直樹 (東北大学)

この調査は**高等学校の進路指導担当教員を対象としたもの**です。進路に詳しい先生が、現在の所属校の生徒に関して**ご自身のお考え**でお答えください。看護師等の医療技術者や医療科学者を養成する分野への進学を志す高校生、あるいは、進学する高校生がどのような意識で進路を決めるのか、また、どのような要因に配慮して進路指導が行われているのかを明らかにすることを目的としています。今後の入試や教育の改善に役立つ基礎資料として活用するため、是非、ご協力ください。**調査票は全部で 8 ページ**です。

結果は統計的に処理されますので、**学校名が公表されることはありません**。その他、ご迷惑をお掛けすることは一切ありませんので、率直にお答えください。なお、答えにくい質問にはお答えいただかなくとも結構です。

I. 貴校について

- a. 貴校の学校名を記入してください。 _____
- b. 学年毎のクラス数をコース別に記入してください。文理分けがない場合は「その他」に一括して記入してください。中等教育学校の場合、高校相当の学年でお答えください。
- 1 年生 文系 平均 3.9 クラス 理系 平均 2.3 クラス その他(内訳 _____)
- 2 年生 文系 平均 3.8 クラス 理系 平均 3.0 クラス その他(内訳 _____)
- 3 年生 文系 平均 3.9 クラス 理系 平均 3.2 クラス その他(内訳 _____)
- c. 学年、コース毎の男女別人数を記入してください。10 名単位の概数でも結構です。(以下、平均人数)
- 1 年生 文系：男子 56.4 人 女子 96.8 人 理系：男子 68.8 人 女子 32.3 人 その他：男子 114.7 人 女子 109.3 人
- 2 年生 文系：男子 62.0 人 女子 87.2 人 理系：男子 69.6 人 女子 42.7 人 その他：男子 89.7 人 女子 81.1 人
- 3 年生 文系：男子 63.9 人 女子 86.7 人 理系：男子 66.4 人 女子 39.4 人 その他：男子 83.7 人 女子 76.5 人
- d. 進路に関する貴校の位置づけは以下のどれに近いでしょうか。**あてはまるところに一つだけ** ○を付けてください。
- | | |
|-------------------------|---------------|
| 1. 生徒の多くが国公立大学を目指す進学校 | 233 校 (17.9%) |
| 2. 生徒の多くが 4 年制大学を目指す進学校 | 224 校 (17.2%) |
| 3. 生徒の多くが大学・専門学校を目指す進学校 | 180 校 (13.8%) |
| 4. 進学志望・就職志望が混じる進路多様校 | 583 校 (44.8%) |
| 5. 生徒の多くが進学を目指さない非進学校 | 82 校 (6.3%) |
- e. 最終的に他の分野に進む生徒も含め、貴校には**看護系大学や看護系専門学校を志望する生徒**はいますか？**あてはまるところに一つだけ** ○を付けてください。
- | | |
|---------------------------------|---------------|
| 1. ほとんどいない → 質問はこれで終了です。 | 185 校 (14.2%) |
| 2. 例外的 (毎年 2～3 名程度以下) | 230 校 (17.6%) |
| 3. コンスタントにいる (毎年 平均 13.6 名程度) | 892 校 (68.3%) |

II. 進学先と入試

- a. **看護系大学や看護系専門学校を志望する生徒は**、文系、理系のどちらが多いでしょうか。 **あてはまるところに一つだけ** ○を付けてください。

1. ほとんど理系	219校 (19.5%)
2. どちらかと言えば理系	299校 (26.6%)
3. どちらかと言えば文系	152校 (13.5%)
4. ほとんど文系	36校 (3.2%)
5. コース分けがない	254校 (22.6%)
6. 文理で分類できない	165校 (14.7%)

- b. **男子生徒**で看護系大学や看護系専門学校を志望する生徒はいますか？ **あてはまるところに一つだけ** ○を付けてください。

1. ほとんどいない	423校 (39.6%)
2. 例外的 (毎年2～3名程度以下)	511校 (47.9%)
3. コンスタントにいる (毎年 平均4.4名程度)	134校 (12.6%)

- c. 看護系大学や看護系専門学校を志望する生徒が受験するのは主として大学ですか？ 専門学校ですか？ **あてはまるところに一つだけ** ○を付けてください。

1. 主として大学	280校 (24.9%)
2. 主として専門学校	387校 (34.4%)
3. 大学も専門学校も受験する	457校 (40.7%)

- d. 毎年、比較的多くの生徒が受験する看護系大学や看護系専門学校があるとすれば、どのようなところでしょうか。 **あてはまるところにいくつでも** ○を付けてください。可能であれば、具体的に名称を記入してください (複数回答可)。

1. 地元の大学	693校 (61.2%)
2. 地域の専門学校	840校 (74.2%)
3. 地元以外の大学	186校 (16.4%)
4. 地元以外の専門学校	139校 (12.3%)

- e. 看護系大学や看護系専門学校を志望する生徒の学業成績は、貴校の中ではおしなべてどの程度の水準でしょうか？ **典型的なケース**について、 **あてはまるところに一つだけ** ○を付けてください。

1. 最上位レベル	57校 (5.2%)
2. 上位10～20%程度	319校 (28.8%)
3. 平均より少し上	473校 (42.7%)
4. 平均レベル	184校 (16.6%)
5. 平均より少し下	70校 (6.3%)
6. 下位10～20%程度	3校 (0.3%)
7. 最下位レベル	1校 (0.1%)

f. 多くの生徒が第一志望で受験する看護系大学や看護系専門学校の入試の区分はどれですか？ **あてはまるところに一つだけ** ○を付けてください。

1. 一般入試	336校 (30.3%)
2. 推薦入試	726校 (65.4%)
3. AO入試	27校 (2.4%)
4. その他	21校 (1.9%)

g. 看護系大学や看護系専門学校への進学を志望する生徒が受験校を決める時期はいつ頃が多いですか？ **あてはまるところにいくつでも** ○を付けてください。

1. 高校入学前	132校 (11.7%)
2. 高校1年	290校 (25.6%)
3. 高校2年	528校 (46.6%)
4. 高校3年の4～7月	556校 (49.1%)
5. 高校3年の8月以降センター試験以前	128校 (11.3%)
6. 高校3年のセンター試験以降	44校 (3.9%)
7. 高校卒業後	2校 (0.2%)
8. その他	1校 (0.1%)

h. 看護系大学や看護系専門学校へ**実際に進学する生徒**は、看護系の進路が第1志望である場合が多いですか？ **あてはまるところに一つだけ** ○を付けてください。

1. 第1志望が多い	1,076校 (95.5%)
2. 第2志望が多い	40校 (3.6%)
3. 第3志望以下が多い	11校 (1.0%)

i. **看護系以外の進路を第1志望**としながら、**実際には看護系大学や看護系専門学校へ進学する生徒**の場合、第1志望としていた進路には何か傾向がありますか？ そのような生徒が第1志望とすることが多い分野について、**あてはまるところにいくつでも** ○を付けてください。

1. 医学	110校 (9.7%)
2. 歯学	12校 (1.1%)
3. 薬学	116校 (10.3%)
4. 看護系以外の医療技術系	306校 (27.0%)
5. 医歯薬系以外の理系分野	22校 (1.9%)
6. 文系分野	39校 (3.5%)
7. 専門学校における医療技術系以外の資格系分野	54校 (4.8%)

j. 看護系大学や看護系専門学校を志望する生徒の受験先の決定に際して最も影響力が大きいのは、下記のうちのどれですか？ **典型的なケース**について、**あてはまるところに一つだけ** ○を付けてください。

1. 保護者の意見	206校 (18.4%)
2. 教員の意見	81校 (7.2%)
3. 生徒本人の意見	807校 (72.0%)
4. その他	27校 (2.4%)

k. 看護系大学や看護系専門学校を志望する生徒の家庭の保護者や親せきなどの身内には、医師や看護師など医療系の職種に就いている方が多いでしょうか？ **あてはまるところに一つだけ** ○を付けてください。

- | | |
|-----------------------|--------------|
| 1. 医療系の家庭が多い | 41校 (3.7%) |
| 2. どちらかと言えば医療系の家庭が多い | 448校 (39.8%) |
| 3. どちらとも言えない | 532校 (47.3%) |
| 4. どちらかと言えば医療系の家庭は少ない | 58校 (5.2%) |
| 5. 医療系の家庭は少ない | 46校 (4.1%) |

III. 看護系への進学の原因・適性

a. **看護系大学や看護系専門学校へ実際に進学した生徒**の場合、進学先への受験を決めた理由として、以下の様な点はどの程度重要だと感じていたでしょうか？ **典型的なケース**について、それぞれ **あてはまるところに一つだけ** ○を付けてください。

- | | | |
|-------------------|--------------------|--------------|
| 1. 全く重要だと感じていなかった | 2. あまり重要だと感じていなかった | 3. どちらとも言えない |
| 4. 少しは重要だと感じていた | 5. かなり重要だと感じていた | |

	1	2	3	4	5	回答不能
1. 取得できる資格の種類が魅力的であること	— + — + — + —	<input type="checkbox"/>				
1. 14校 (1.3%)	2. 36校 (3.3%)	3. 96校 (8.8%)	4. 242校 (22.2%)	5. 702校 (64.4%)		
2. 将来の仕事に興味・関心があること	— + — + — + —	<input type="checkbox"/>				
1. 13校 (1.2%)	2. 17校 (1.5%)	3. 47校 (4.3%)	4. 225校 (20.3%)	5. 804校 (72.7%)		
3. 専門で学ぶ内容への興味・関心があること	— + — + — + —	<input type="checkbox"/>				
1. 10校 (0.9%)	2. 18校 (1.7%)	3. 147校 (13.5%)	4. 390校 (35.7%)	5. 527校 (48.3%)		
4. 将来の職業がはっきりしているかどうか	— + — + — + —	<input type="checkbox"/>				
1. 18校 (1.6%)	2. 12校 (1.1%)	3. 42校 (3.8%)	4. 259校 (23.6%)	5. 766校 (69.8%)		
5. 将来、就職できそうかどうか	— + — + — + —	<input type="checkbox"/>				
1. 14校 (1.3%)	2. 33校 (3.0%)	3. 116校 (10.5%)	4. 318校 (28.8%)	5. 623校 (56.4%)		
6. 将来、見込まれる収入の金額が十分かどうか	— + — + — + —	<input type="checkbox"/>				
1. 13校 (1.2%)	2. 112校 (10.3%)	3. 445校 (40.9%)	4. 362校 (33.3%)	5. 155校 (14.3%)		
7. 将来、暮らしたいと思っている地域で暮らせそうかどうか	— + — + — + —	<input type="checkbox"/>				
1. 29校 (2.7%)	2. 158校 (14.5%)	3. 481校 (44.2%)	4. 313校 (28.7%)	5. 108校 (9.9%)		
8. 大学や学校がある地域や場所が魅力的かどうか	— + — + — + —	<input type="checkbox"/>				
1. 37校 (3.4%)	2. 174校 (15.9%)	3. 469校 (43.0%)	4. 323校 (29.6%)	5. 89校 (8.2%)		
9. 楽しい学生生活が送れそうかどうか	— + — + — + —	<input type="checkbox"/>				
1. 37校 (3.4%)	2. 210校 (19.3%)	3. 499校 (45.9%)	4. 288校 (26.5%)	5. 54校 (5.0%)		
10. 所属する専攻(学科)の教育内容	— + — + — + —	<input type="checkbox"/>				
1. 14校 (1.3%)	2. 81校 (7.4%)	3. 296校 (27.1%)	4. 490校 (44.8%)	5. 213校 (19.5%)		

11. 所属する専攻(学科)の教員の研究内容 | — + — + — + — |
1. 72校(6.6%) 2. 213校(19.6%) 3. 483校(44.5%) 4. 257校(23.7%) 5. 60校(5.5%)
12. 大学や学校の評判, 社会的評価 | — + — + — + — |
1. 14校(1.3%) 2. 63校(5.7%) 3. 275校(25.1%) 4. 562校(51.2%) 5. 183校(16.7%)
13. 施設・設備が充実しているかどうか | — + — + — + — |
1. 8校(0.7%) 2. 41校(3.7%) 3. 174校(15.8%) 4. 569校(51.8%) 5. 307校(27.9%)
14. 学費の安さ | — + — + — + — |
1. 5校(0.5%) 2. 33校(3.0%) 3. 197校(17.8%) 4. 454校(41.1%) 5. 417校(37.7%)
15. 生活費の安さ | — + — + — + — |
1. 24校(2.2%) 2. 76校(7.0%) 3. 444校(40.9%) 4. 344校(31.7%) 5. 197校(18.2%)
16. 自宅から通えるかどうか | — + — + — + — |
1. 52校(4.7%) 2. 65校(5.9%) 3. 172校(15.6%) 4. 404校(36.6%) 5. 412校(37.3%)
17. 合格可能性の高さ | — + — + — + — |
1. 9校(0.8%) 2. 16校(1.4%) 3. 103校(9.3%) 4. 447校(40.3%) 5. 534校(48.2%)
18. 入試科目の内容 | — + — + — + — |
1. 9校(0.8%) 2. 31校(2.8%) 3. 166校(15.1%) 4. 476校(43.2%) 5. 419校(38.1%)
19. 入試の地方会場が自宅近くに設けられていたかどうか | — + — + — + — |
1. 150校(14.3%) 2. 265校(25.2%) 3. 462校(44.0%) 4. 133校(12.7%) 5. 40校(3.8%)
20. 他に受験したところとの併願しやすさ | — + — + — + — |
1. 91校(8.5%) 2. 185校(17.2%) 3. 406校(37.8%) 4. 318校(29.6%) 5. 75校(7.0%)

b. 貴校から看護系大学や看護系専門学校へ実際に進学した生徒のうち、進学後が最も心配だった生徒一人を思い浮かべてください。その生徒が進学先で不適応を起こすとすれば、具体的にどのようなことが問題になる可能性が高いと思っていましたか？ それぞれ あてはまるところに一つだけ ○を付けてください。

1. 全く心配していなかった 2. あまり心配していなかった 3. どちらとも言えない
4. 少しは心配していた 5. かなり心配していた

1. 病人の立場で考えられないために実習先で問題を起こす | 1 2 3 4 5 |
1. 219校(20.1%) 2. 351校(32.1%) 3. 214校(19.6%) 4. 235校(21.5%) 5. 73校(6.7%)
2. 薬の量などの計算や見積もりができない | — + — + — + — |
1. 202校(18.5%) 2. 321校(29.4%) 3. 240校(22.0%) 4. 256校(23.4%) 5. 73校(6.7%)
3. 時間を守るなど、基本的な生活習慣が確立できない | — + — + — + — |
1. 264校(24.2%) 2. 400校(36.7%) 3. 184校(16.9%) 4. 181校(16.6%) 5. 60校(5.5%)
4. 大学や専門学校の友人関係で問題を起こす | — + — + — + — |
1. 242校(22.2%) 2. 391校(35.9%) 3. 242校(22.2%) 4. 171校(15.7%) 5. 43校(4.0%)

5. 多様な症状やカルテの記述から患者の状態が見抜けない …………… | —+—+—+—+— |
 1. 128 校(11.7%) 2. 261 校(23.9%) 3. 331 校(30.3%) 4. 290 校(26.6%) 5. 81 校 (7.4%)
6. 聞く力が不足しており、口頭での指示が理解できない …………… | —+—+—+—+— |
 1. 171 校(15.7%) 2. 319 校(29.2%) 3. 281 校(25.7%) 4. 253 校(23.2%) 5. 68 校 (6.2%)
7. 臨機応変な予測力、対応力に欠ける …………… | —+—+—+—+— |
 1. 79 校 (7.2%) 2. 185 校(17.0%) 3. 242 校(22.2%) 4. 432 校(39.6%) 5. 153 校(14.0%)
8. 基礎学力の不足で授業についていけない …………… | —+—+—+—+— |
 1. 94 校 (8.6%) 2. 150 校(13.7%) 3. 179 校(16.3%) 4. 415 校(37.8%) 5. 259 校(23.6%)
9. 経済状況が苦しく、学費が続かない …………… | —+—+—+—+— |
 1. 201 校(18.4%) 2. 312 校(28.6%) 3. 337 校(30.9%) 4. 194 校(17.8%) 5. 47 校 (4.3%)
10. 集団行動ができない …………… | —+—+—+—+— |
 1. 265 校(24.3%) 2. 386 校(35.4%) 3. 270 校(24.8%) 4. 135 校(12.4%) 5. 34 校 (3.1%)
11. 不本意入学のため、学習意欲がわからない …………… | —+—+—+—+— |
 1. 441 校(40.6%) 2. 348 校(32.0%) 3. 200 校(18.4%) 4. 75 校 (6.9%) 5. 23 校 (2.1%)
12. 過度の思い込みのため、現実が本人の期待と大きく異なる …………… | —+—+—+—+— |
 1. 217 校(19.9%) 2. 315 校(28.9%) 3. 305 校(28.0%) 4. 193 校(17.7%) 5. 59 校 (5.4%)
13. 保護者が学校に過度に干渉する …………… | —+—+—+—+— |
 1. 419 校(38.4%) 2. 344 校(31.5%) 3. 247 校(22.6%) 4. 57 校 (5.2%) 5. 25 校 (2.3%)

c. 前ページの質問で、思い浮かべた**最も心配だった生徒**は、どのようなプロフィールを持っていましたか？
 以下の各項目について、それぞれ **あてはまるところに一つだけ** ○を付けてください。

性別	1. 男子	182 校 (16.8%)
	2. 女子	900 校 (83.2%)
所属コース	1. 理系	334 校 (31.0%)
	2. 文系	308 校 (28.6%)
	3. その他	435 校 (40.4%)
進学先	1. 国立大学	33 校 (3.1%)
	2. 公立大学	41 校 (3.8%)
	3. 私立大学	242 校 (22.5%)
	4. 専門学校	760 校 (70.6%)
進学後の通学形態	1. 自宅生	733 校 (68.4%)
	2. 自宅外生	338 校 (31.6%)

成績（看護系への進学者としては、）	1. 上位	141校（13.1%）
	2. 中位	476校（44.2%）
	3. 下位	461校（42.8%）
進学した入試区分	1. 一般入試	493校（45.9%）
	2. 推薦入試	494校（46.0%）
	3. AO入試	75校（7.0%）
	4. その他	13校（1.2%）
志望順位（看護系への進学は）	1. 第1志望	890校（82.6%）
	2. 第2志望	97校（9.0%）
	3. 第3志望以下	90校（8.4%）
進路決定の実質的主体	1. 保護者	175校（16.3%）
	2. 教員	35校（3.3%）
	3. 生徒本人	860校（80.1%）
	4. その他	4校（0.4%）
家庭背景	1. 医療関係者	169校（16.0%）
	2. 医療関係者以外	886校（84.0%）
家庭の経済状況	1. 困窮していた	150校（14.2%）
	2. 問題なかった	904校（85.8%）

d. 一般的に、生徒に看護系大学や看護系専門学校への進学を勧めるとすれば、どのような理由が考えられますか？それぞれ **あてはまる場所に一つだけ** ○を付けてください。

- | | | |
|--------------|---------------|--------------|
| 1. 全く理由にならない | 2. あまり理由にならない | 3. どちらとも言えない |
| 4. 少しは理由になる | 5. 重要な理由になる | |

	1	2	3	4	5	回答不能
1. 将来、経済的に安定した生活ができること ……………	— + — + — + —					□
1. 31校（2.8%） 2. 138校（12.5%） 3. 243校（22.0%）	4. 443校（40.2%）	5. 248校（22.5%）				
2. 職種が時代や流行に左右されないこと ……………	— + — + — + —					□
1. 23校（2.1%） 2. 86校（7.8%） 3. 216校（19.6%）	4. 486校（44.0%）	5. 294校（26.6%）				
3. 女性が経済的に自立できること ……………	— + — + — + —					□
1. 24校（2.2%） 2. 71校（6.5%） 3. 187校（17.0%）	4. 465校（42.4%）	5. 351校（32.0%）				
4. 女性が良き伴侶を見つけられること ……………	— + — + — + —					□
1. 334校（30.7%） 2. 300校（27.6%） 3. 398校（36.6%）	4. 38校（3.5%）	5. 17校（1.6%）				

5. 職場で男女差別がないこと | — + — + — + — |
1. 74校 (6.8%) 2. 189校(17.3%) 3. 466校(42.7%) 4. 259校(23.7%) 5. 104校 (9.5%)
6. 人の命を救うことができること | — + — + — + — |
1. 14校 (1.3%) 2. 13校 (1.2%) 3. 98校 (8.8%) 4. 451校(40.7%) 5. 532校(48.0%)
7. 固い資格であること | — + — + — + — |
1. 16校 (1.5%) 2. 41校 (3.7%) 3. 171校(15.5%) 4. 459校(41.6%) 5. 417校(37.8%)
8. 給料が高いこと | — + — + — + — |
1. 27校 (2.5%) 2. 97校 (8.8%) 3. 466校(42.3%) 4. 395校(35.8%) 5. 118校(10.7%)
9. 自律的な仕事であること | — + — + — + — |
1. 14校 (1.3%) 2. 47校 (4.3%) 3. 309校(28.2%) 4. 493校(44.9%) 5. 234校(21.3%)
10. 社会に貢献できること | — + — + — + — |
1. 12校 (1.1%) 2. 11校 (1.0%) 3. 70校 (6.3%) 4. 406校(36.6%) 5. 611校(55.1%)
11. 取得困難な資格であること | — + — + — + — |
1. 52校 (4.7%) 2. 142校(12.9%) 3. 501校(45.4%) 4. 307校(27.8%) 5. 102校 (9.2%)
12. 女性中心の職場であること | — + — + — + — |
1. 108校 (9.9%) 2. 238校(21.8%) 3. 565校(51.7%) 4. 150校(13.7%) 5. 32校 (2.9%)
13. 将来、長く勤められること | — + — + — + — |
1. 16校 (1.5%) 2. 51校 (4.6%) 3. 180校(16.3%) 4. 504校(45.7%) 5. 351校(31.9%)
14. 将来的に発展性があること | — + — + — + — |
1. 16校 (1.5%) 2. 62校 (5.6%) 3. 439校(40.0%) 4. 408校(37.1%) 5. 174校(15.8%)
15. 専門性が高いこと | — + — + — + — |
1. 14校 (1.3%) 2. 16校 (1.5%) 3. 129校(11.7%) 4. 542校(49.1%) 5. 404校(36.6%)
16. 他人に喜ばれる仕事であること | — + — + — + — |
1. 14校 (1.3%) 2. 12校 (1.1%) 3. 98校 (8.8%) 4. 434校(39.2%) 5. 550校(49.7%)
17. 地元就職があること | — + — + — + — |
1. 23校 (2.1%) 2. 50校 (4.5%) 3. 235校(21.3%) 4. 437校(39.7%) 5. 356校(32.3%)
18. 保護者や親せきが喜ぶ職種であること | — + — + — + — |
1. 111校(10.1%) 2. 190校(17.3%) 3. 525校(47.9%) 4. 203校(18.5%) 5. 67校 (6.1%)
19. 学費が安いこと | — + — + — + — |
1. 68校 (6.2%) 2. 183校(16.7%) 3. 529校(48.3%) 4. 231校(21.1%) 5. 85校 (7.8%)
20. 確実に合格できること | — + — + — + — |
1. 199校(18.1%) 2. 260校(23.7%) 3. 458校(41.8%) 4. 129校(11.8%) 5. 51校 (4.7%)

21. 入試で得意科目を生かせること | — + — + — + — |
1. 121校(11.0%) 2. 249校(22.6%) 3. 517校(47.0%) 4. 170校(15.4%) 5. 44校(4.0%)
22. 自宅から通えること | — + — + — + — |
1. 108校(9.8%) 2. 171校(15.6%) 3. 430校(39.1%) 4. 292校(26.6%) 5. 99校(9.0%)
23. 入試の地方会場が近くに設けられること | — + — + — + — |
1. 284校(26.5%) 2. 256校(23.9%) 3. 442校(41.2%) 4. 68校(6.4%) 5. 21校(2.0%)
- e. 看護系大学や看護系専門学校に進学する生徒が看護師などの看護専門職に抱くイメージは以下のうちのどのようなものでしょうか？**典型的なケース**について、それぞれ **あてはまるところに一つだけ** を付けてください。
1. 全くそう思っていない 2. あまりそう思っていない 3. どちらとも言えない
4. 少しはそう思っている 5. かなりそう思っている
- | | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 回答不能 |
|--|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|------|
| 1. 経済的に安定している — + — + — + — <input type="checkbox"/> | 1. 10校(0.9%) | 2. 26校(2.4%) | 3. 162校(14.7%) | 4. 504校(45.7%) | 5. 402校(36.4%) | |
| 2. 時代や流行に左右されない — + — + — + — <input type="checkbox"/> | 1. 15校(1.4%) | 2. 39校(3.6%) | 3. 213校(19.4%) | 4. 522校(47.5%) | 5. 311校(28.3%) | |
| 3. 女性が経済的に自立できる — + — + — + — <input type="checkbox"/> | 1. 17校(1.6%) | 2. 31校(2.8%) | 3. 183校(16.7%) | 4. 501校(45.7%) | 5. 365校(33.3%) | |
| 4. 女性が良き伴侶を見つけられる — + — + — + — <input type="checkbox"/> | 1. 193校(17.8%) | 2. 309校(28.5%) | 3. 489校(45.2%) | 4. 78校(7.2%) | 5. 14校(1.3%) | |
| 5. 職場で男女差別がない — + — + — + — <input type="checkbox"/> | 1. 56校(5.2%) | 2. 167校(15.5%) | 3. 510校(47.2%) | 4. 266校(24.6%) | 5. 82校(7.6%) | |
| 6. 人の命を救うことができる — + — + — + — <input type="checkbox"/> | 1. 6校(0.5%) | 2. 4校(0.4%) | 3. 59校(5.3%) | 4. 346校(31.2%) | 5. 695校(62.6%) | |
| 7. 固い資格である — + — + — + — <input type="checkbox"/> | 1. 6校(0.5%) | 2. 17校(1.5%) | 3. 137校(12.4%) | 4. 444校(40.3%) | 5. 498校(45.2%) | |
| 8. 給料が高い — + — + — + — <input type="checkbox"/> | 1. 16校(1.5%) | 2. 55校(5.0%) | 3. 428校(38.9%) | 4. 423校(38.5%) | 5. 178校(16.2%) | |
| 9. 自律的な仕事である — + — + — + — <input type="checkbox"/> | 1. 12校(1.1%) | 2. 45校(4.1%) | 3. 296校(26.9%) | 4. 489校(44.4%) | 5. 260校(23.6%) | |
| 10. 社会に貢献できる — + — + — + — <input type="checkbox"/> | 1. 4校(0.4%) | 2. 7校(0.6%) | 3. 53校(4.8%) | 4. 363校(32.7%) | 5. 682校(61.5%) | |
| 11. 取得困難な資格である — + — + — + — <input type="checkbox"/> | 1. 22校(2.0%) | 2. 89校(8.1%) | 3. 416校(37.8%) | 4. 399校(36.3%) | 5. 174校(15.8%) | |

12. 女性中心の職場である | — + — + — + — |
1. 43校 (3.9%) 2. 130校(11.9%) 3. 476校(43.5%) 4. 298校(27.2%) 5. 147校(13.4%)
13. 将来, 長く勤められる | — + — + — + — |
1. 6校 (0.5%) 2. 28校 (2.5%) 3. 167校(15.1%) 4. 502校(45.4%) 5. 402校(36.4%)
14. 将来的に発展性がある | — + — + — + — |
1. 12校 (1.1%) 2. 52校 (4.7%) 3. 462校(42.2%) 4. 388校(35.4%) 5. 182校(16.6%)
15. 専門性が高い | — + — + — + — |
1. 4校 (0.4%) 2. 7校 (0.6%) 3. 112校(10.1%) 4. 504校(45.6%) 5. 478校(43.3%)
16. 他人に喜ばれる仕事である | — + — + — + — |
1. 5校 (0.4%) 2. 3校 (0.5%) 3. 51校 (4.6%) 4. 380校(34.3%) 5. 670校(60.4%)
17. 地元就職がある | — + — + — + — |
1. 13校 (1.2%) 2. 34校 (3.1%) 3. 235校(21.4%) 4. 412校(37.5%) 5. 405校(36.9%)
18. 保護者や親せきが喜ぶ職種である | — + — + — + — |
1. 35校 (3.2%) 2. 99校 (9.0%) 3. 441校(40.2%) 4. 340校(31.0%) 5. 183校(16.7%)
19. 責任が重い仕事である | — + — + — + — |
1. 6校 (0.5%) 2. 27校 (2.4%) 3. 134校(12.1%) 4. 424校(38.4%) 5. 514校(46.5%)
20. 対人能力が問われる | — + — + — + — |
1. 9校 (0.8%) 2. 53校 (4.8%) 3. 197校(17.9%) 4. 455校(41.3%) 5. 388校(35.2%)
21. 3K労働 (きつい・きたない・きけん) である | — + — + — + — |
1. 29校 (2.6%) 2. 159校(14.4%) 3. 381校(34.6%) 4. 402校(36.5%) 5. 130校(11.8%)
22. 夜勤がある | — + — + — + — |
1. 18校 (1.6%) 2. 67校 (6.1%) 3. 204校(18.5%) 4. 428校(38.7%) 5. 388校(35.1%)
23. 残業が多い | — + — + — + — |
1. 30校 (2.7%) 2. 94校 (8.6%) 3. 334校(30.5%) 4. 415校(37.9%) 5. 222校(20.3%)

f. 以下のうち, 他分野の進路と比較して, どのような生徒が特に看護系大学や看護系専門学校の進学へ向いていると感じますか? 以下に挙げた特性について, それぞれ **あてはまる場所に一つだけ** を付けてください。

1. 全く向いていると思わない 2. あまり向いていると思わない 3. どちらとも言えない
 4. 少しは向いていると思う 5. かなり向いていると思う

1. 家庭に学費を賄う経済力がある | 1 2 3 4 5 |
 1. 28校 (2.5%) 2. 61校 (5.5%) 3. 694校(62.8%) 4. 251校(22.7%) 5. 71校 (6.4%)

2. 保護者が医療関連分野への関心が強い | — + — + — + — |

1.	16校 (1.4%)	2.	34校 (3.1%)	3.	449校(40.5%)	4.	475校(42.9%)	5.	134校(12.1%)
3.	コミュニケーション能力が高い								
1.	2校 (0.2%)	2.	6校 (0.5%)	3.	86校 (7.7%)	4.	432校(38.9%)	5.	585校(52.7%)
4.	集中力がある								
1.	3校 (0.3%)	2.	6校 (0.5%)	3.	125校(11.2%)	4.	472校(42.4%)	5.	507校(45.6%)
5.	保護者が医師で医療現場の実情を知っている								
1.	41校 (3.7%)	2.	84校 (7.6%)	3.	559校(50.3%)	4.	325校(29.2%)	5.	103校 (9.3%)
6.	保護者が看護師で医療現場の実情を知っている								
1.	33校 (3.0%)	2.	59校 (5.3%)	3.	441校(39.7%)	4.	434校(39.0%)	5.	145校(13.0%)
7.	リーダーシップがある								
1.	3校 (0.3%)	2.	22校 (2.0%)	3.	320校(28.8%)	4.	546校(49.1%)	5.	221校(19.9%)
8.	愛想が良い								
1.	4校 (0.4%)	2.	22校 (2.0%)	3.	230校(20.7%)	4.	554校(49.9%)	5.	300校(27.0%)
9.	何事にも忍耐強い								
1.	3校 (0.3%)	2.	3校 (0.3%)	3.	76校 (6.8%)	4.	455校(40.8%)	5.	577校(51.8%)
10.	学力的に高い水準に達している								
1.	2校 (0.2%)	2.	9校 (0.8%)	3.	196校(17.6%)	4.	562校(50.6%)	5.	342校(30.8%)
11.	気持ちが優しい								
1.	2校 (0.2%)	2.	7校 (0.6%)	3.	125校(11.3%)	4.	445校(40.1%)	5.	531校(47.8%)
12.	規則正しい生活ができる								
1.	4校 (0.4%)	2.	8校 (0.7%)	3.	113校(10.2%)	4.	455校(41.0%)	5.	531校(47.8%)
13.	記憶力がすぐれている								
1.	4校 (0.4%)	2.	22校 (2.0%)	3.	327校(29.4%)	4.	523校(47.0%)	5.	237校(21.3%)
14.	吸収力がある								
1.	3校 (0.3%)	2.	11校 (1.0%)	3.	225校(20.2%)	4.	538校(48.4%)	5.	335校(30.1%)
15.	協調性がある								
1.	2校 (0.2%)	2.	6校 (0.5%)	3.	57校 (5.1%)	4.	464校(41.7%)	5.	584校(52.5%)
16.	苦勞をいとわない								
1.	3校 (0.3%)	2.	5校 (0.5%)	3.	70校 (6.3%)	4.	429校(38.5%)	5.	606校(54.5%)
17.	計画性がある								
1.	1校 (0.1%)	2.	11校 (1.0%)	3.	262校(23.6%)	4.	558校(50.2%)	5.	280校(25.2%)
18.	堅実でミスが少ない								
1.	2校 (0.2%)	2.	6校 (0.5%)	3.	119校(10.7%)	4.	444校(40.0%)	5.	539校(48.6%)

19. 口が堅い	1. 2校 (0.2%)	2. 17校 (1.5%)	3. 300校(27.0%)	4. 419校(37.8%)	5. 372校(33.5%)
20. 向上心がある	1. 4校 (0.4%)	2. 6校 (0.5%)	3. 133校(12.0%)	4. 531校(47.7%)	5. 439校(39.4%)
21. 自発的に行動できる	1. 4校 (0.4%)	2. 4校 (0.4%)	3. 159校(14.3%)	4. 500校(45.0%)	5. 445校(40.0%)
22. 自分の興味をとことん追求できる	1. 14校 (1.3%)	2. 72校 (6.5%)	3. 546校(49.2%)	4. 365校(32.9%)	5. 113校(10.2%)
23. 手先が器用	1. 6校 (0.5%)	2. 33校 (3.0%)	3. 350校(31.6%)	4. 504校(45.5%)	5. 214校(19.3%)
24. 従順に指示に従うことができる	1. 7校 (0.6%)	2. 44校 (4.0%)	3. 396校(35.6%)	4. 489校(44.0%)	5. 175校(15.8%)
25. 柔軟性がある	1. 3校 (0.3%)	2. 12校 (1.1%)	3. 213校(19.2%)	4. 555校(50.1%)	5. 326校(29.4%)
26. 情緒が安定している	1. 5校 (0.5%)	2. 5校 (0.5%)	3. 76校 (6.9%)	4. 444校(40.1%)	5. 578校(52.2%)
27. 身近に医療関係者がいて医療現場の実情を知っている	1. 27校 (2.4%)	2. 73校 (6.6%)	3. 512校(46.1%)	4. 379校(34.1%)	5. 120校(10.8%)
28. 正義感が強い	1. 8校 (0.7%)	2. 13校 (1.2%)	3. 264校(23.8%)	4. 522校(47.0%)	5. 303校(27.3%)
29. 誠実である	1. 5校 (0.5%)	2. 3校 (0.3%)	3. 73校 (6.6%)	4. 461校(41.4%)	5. 572校(51.4%)
30. 責任感がある	1. 5校 (0.5%)	2. 2校 (0.2%)	3. 52校 (4.7%)	4. 374校(33.7%)	5. 678校(61.0%)
31. 他人の役に立つ仕事をしたいと思っている	1. 3校 (0.3%)	2. 2校 (0.2%)	3. 54校 (4.9%)	4. 356校(32.0%)	5. 697校(62.7%)
32. 他人の話を辛抱強く聞くことができる	1. 4校 (0.4%)	2. 5校 (0.5%)	3. 123校(11.1%)	4. 487校(43.8%)	5. 493校(44.3%)
33. 体力がある	1. 2校 (0.2%)	2. 8校 (0.7%)	3. 96校 (8.6%)	4. 448校(40.3%)	5. 557校(50.1%)
34. 探究心が旺盛である	1. 6校 (0.5%)	2. 25校 (2.3%)	3. 415校(37.4%)	4. 495校(44.5%)	5. 170校(15.3%)

35. 発想力がある		—	+	—	+	—	+	—	
1.	7校 (0.6%)	2.	54校 (4.9%)	3.	522校(47.0%)	4.	417校(37.6%)	5.	110校 (9.9%)	
36. 保護者が看護系の進路を強く望んでいる		—	+	—	+	—	+	—	
1.	40校 (3.6%)	2.	135校(12.2%)	3.	593校(53.4%)	4.	267校(24.0%)	5.	76校 (6.8%)	
37. 目上の人々の意図を敏感に察知できる		—	+	—	+	—	+	—	
1.	7校 (0.6%)	2.	57校 (5.1%)	3.	504校(45.3%)	4.	437校(39.3%)	5.	107校 (9.6%)	
38. 幼いころから看護職に憧れている		—	+	—	+	—	+	—	
1.	20校 (1.8%)	2.	72校 (6.5%)	3.	460校(41.3%)	4.	407校(36.6%)	5.	154校(13.8%)	
39. 要領が良く、てきぱきしている		—	+	—	+	—	+	—	
1.	5校 (0.5%)	2.	20校 (1.8%)	3.	238校(21.4%)	4.	565校(50.9%)	5.	283校(25.5%)	
40. 臨機応変な判断力がある		—	+	—	+	—	+	—	
1.	9校 (0.8%)	2.	12校 (1.1%)	3.	147校(13.2%)	4.	502校(45.1%)	5.	443校(39.8%)	

IV. 高校時代の学習履歴

a. 以下に示す教科・科目について、看護系大学や看護系専門学校を受験する生徒はどの程度勉強するでしょうか？**典型的なケース**について、それぞれ **あてはまるところに一つだけ** ○を付けてください。

1. 開講していない 2. 選択・履修しない 3. 履修するが受験勉強はしない 4. 受験勉強する

		1	2	3	4	その他(具体的に)					
(国語)	1. 国語(現代文)		—	+	—	+	—		()
	1.	4校 (0.4%)	2.	5校 (0.5%)	3.	154校(14.1%)	4.	933校(85.1%)			
	2. 国語(古典)		—	+	—	+	—		()
	1.	50校 (4.6%)	2.	116校(10.7%)	3.	518校(47.7%)	4.	401校(37.0%)			
(地歴)	1. 世界史		—	+	—	+	—		()
	1.	23校 (2.2%)	2.	84校 (8.0%)	3.	802校(76.1%)	4.	145校(13.8%)			
	2. 日本史		—	+	—	+	—		()
	1.	70校 (6.7%)	2.	151校(14.3%)	3.	665校(63.2%)	4.	167校(15.9%)			
	3. 地理		—	+	—	+	—		()
	1.	127校(12.0%)	2.	158校(15.0%)	3.	570校(54.0%)	4.	201校(19.0%)			
(公民)	1. 現代社会		—	+	—	+	—		()
	1.	51校 (4.8%)	2.	61校 (5.8%)	3.	795校(74.9%)	4.	154校(14.5%)			
	2. 倫理, 政治・経済		—	+	—	+	—		()
	1.	169校(16.1%)	2.	218校(20.7%)	3.	532校(50.5%)	4.	134校(12.7%)			

(数学)	1. 数学Ⅰ・A	— + — + —	()
	1.	2校 (0.2%)	2. 5校 (0.5%)	3. 130校(11.9%)	4. 952校(87.4%)
	2. 数学Ⅱ・B	— + — + —	()
	1.	40校 (3.7%)	2. 75校 (6.9%)	3. 402校(37.1%)	4. 566校(52.3%)
	3. 数学Ⅲ・C (理系範囲)	— + — + —	()
	1.	215校(20.3%)	2. 432校(40.8%)	3. 338校(31.9%)	4. 75校 (7.1%)
(理科)	1. 物理 (文系範囲)	— + — + —	()
	1.	291校(27.8%)	2. 390校(37.2%)	3. 304校(29.0%)	4. 63校 (6.0%)
	2. 物理 (理系範囲)	— + — + —	()
	1.	203校(19.4%)	2. 484校(46.1%)	3. 240校(22.9%)	4. 122校(11.6%)
	3. 化学 (文系範囲)	— + — + —	()
	1.	132校(12.6%)	2. 131校(12.5%)	3. 421校(40.1%)	4. 366校(34.9%)
	4. 化学 (理系範囲)	— + — + —	()
	1.	157校(14.9%)	2. 172校(16.3%)	3. 284校(26.9%)	4. 443校(42.0%)
	5. 生物 (文系範囲)	— + — + —	()
	1.	46校 (4.3%)	2. 77校 (7.3%)	3. 271校(25.5%)	4. 667校(62.9%)
	6. 生物 (理系範囲)	— + — + —	()
	1.	152校(14.3%)	2. 122校(11.4%)	3. 181校(17.0%)	4. 611校(57.3%)
	7. 地学 (文系範囲)	— + — + —	()
	1.	636校(60.5%)	2. 245校(23.3%)	3. 138校(13.1%)	4. 33校 (3.1%)
	8. 地学 (理系範囲)	— + — + —	()
	1.	709校(67.1%)	2. 242校(22.9%)	3. 89校 (8.4%)	4. 16校 (1.5%)
(外国語)	1. 英語	— + — + —	()
	1.	7校 (0.6%)	2. 2校 (0.2%)	3. 154校(14.2%)	4. 920校(85.0%)
	2. 英語以外の外国語	— + — + —	()
	1.	843校(79.7%)	2. 123校(11.6%)	3. 49校 (4.6%)	4. 43校 (4.1%)

- b. 看護系大学や看護系専門学校を志望する生徒が十分に学んでいない教科・科目で、本来ならばしっかり学ばせておきたい教科・科目があれば、**いくつでも**挙げてください。

- c. 現在の入試制度はさておき、将来、看護職に就く生徒は高校時代には、本来、**理系**で学んでおくべきだと感じますか？**文系**で学んでおくべきだと感じますか？**あてはまるところに一つだけ**○を付けてください。

1. 理系	570校 (51.0%)
2. 文系	38校 (3.4%)
3. どちらとも言えない	464校 (41.5%)
4. その他	45校 (4.0%)

V. その他

- a. 貴校では、生徒が志望している大学や専門学校のオープンキャンパスへの参加を促しますか？また、参加した場合、オープンキャンパスは生徒の受験先の決定にはどの程度のインパクトがありますか？カッコ内の選択肢に **一つだけ** ○をつけてください。

1. 参加を促さない	29校 (2.6%)
2. 参加を促す	1,072校 (97.4%)
1. 決め手となる	215校 (20.3%)
2. 参考になる	828校 (78.2%)
3. あまり関係ない	13校 (1.2%)
4. 全く無関係	3校 (0.3%)

- b. オープンキャンパスへの参加を促すとすれば、どのような目的ですか。それぞれ **あてはまるところに一つだけ** ○を付けてください。

- | | | |
|--------------|---------------|--------------|
| 1. 全く目的にならない | 2. あまり目的にならない | 3. どちらとも言えない |
| 4. 少しは目的になる | 5. かなり目的になる | |

	1	2	3	4	5
1. 看護に関する見聞を広める		—+	—+	—+	—
1. 6校 (0.5%)	2. 29校 (2.6%)	3. 72校 (6.5%)	4. 420校(38.1%)	5. 575校(52.2%)	
2. 生徒の一般的な進学意識の向上		—+	—+	—+	—
1. 7校 (0.6%)	2. 22校 (2.0%)	3. 110校(10.0%)	4. 466校(42.3%)	5. 498校(45.2%)	
3. 当該大学・学校への志望の意思の確認		—+	—+	—+	—
1. 5校 (0.5%)	2. 9校 (0.8%)	3. 61校 (5.5%)	4. 369校(33.5%)	5. 658校(59.7%)	
4. 面接・志願理由書・小論文等の入試対策		—+	—+	—+	—
1. 13校 (1.2%)	2. 37校 (3.4%)	3. 193校(17.5%)	4. 480校(43.6%)	5. 378校(34.3%)	
5. 環境・インフラ等の確認		—+	—+	—+	—
1. 7校 (0.6%)	2. 42校 (3.8%)	3. 192校(17.4%)	4. 533校(48.4%)	5. 328校(29.8%)	
6. 大学や専門学校の教員とのコンタクト		—+	—+	—+	—
1. 21校 (1.9%)	2. 86校 (7.8%)	3. 345校(31.4%)	4. 484校(44.0%)	5. 163校(14.8%)	
7. AO入試のエントリー		—+	—+	—+	—
1. 128校(11.7%)	2. 154校(14.0%)	3. 366校(33.3%)	4. 301校(27.4%)	5. 150校(13.7%)	

8. 合格確約をもらう | ———+———+———+——— |
1. 438 校(40.2%) 2. 224 校(20.6%) 3. 334 校(30.7%) 4. 59 校 (5.4%) 5. 34 校 (3.1%)

c. ここまでご記入いただいた先生ご自身のことをお知らせください。

性別	1. 男性	818 名 (78.6%)
	2. 女性	223 名 (21.4%)
年齢	1. 20 歳代	20 名 (1.8%)
	2. 30 歳代	124 名(11.2%)
	3. 40 歳代	387 名(34.9%)
	4. 50 歳代	548 名(49.4%)
	5. 60 歳代以上	31 名 (2.8%)

最後に、このアンケートについて感じたことがあれば、ご自由にお書きください。

ご協力ありがとうございました。

平成 25 年度 看護系への進学を志望する高校生に関するアンケート

科学研究費基盤研究(B)「医療の高度化に伴う看護系大学の高大接続問題 ―看護職志望者の適性と大学入試―」
研究代表者 倉元 直樹 (東北大学)

この調査は**高等学校の進路指導担当教員を対象としたもの**です。進路に詳しい先生が、現在の所属校の生徒に関して**ご自身のお考え**でお答えください。看護師等の医療技術者や医療科学者を養成する分野への進学を志す高校生、あるいは、進学する高校生がどのような意識で進路を決めるのか、また、どのような要因に配慮して進路指導が行われているのかを明らかにすることを目的としています。今後の入試や教育の改善に役立つ基礎資料として活用するため、是非、ご協力ください。**調査票は全部で 8 ページ**です。

結果は統計的に処理されますので、**学校名が公表されることはありません**。その他、ご迷惑をお掛けすることは一切ありませんので、率直にお答えください。なお、答えにくい質問にはお答えいただかなくとも結構です。

I. 貴校について

- a. 貴校の学校名を記入してください。 _____
- b. 学年毎のクラス数をコース別に記入してください。文理分けがない場合は「その他」に一括して記入してください。中等教育学校の場合、高校相当の学年でお答えください。
- 1 年生 文系 _____ クラス 理系 _____ クラス その他(内訳 _____)
- 2 年生 文系 _____ クラス 理系 _____ クラス その他(内訳 _____)
- 3 年生 文系 _____ クラス 理系 _____ クラス その他(内訳 _____)
- c. 学年、コース毎の男女別人数を記入してください。10 名単位の概数でも結構です。
- 1 年生 文系:男子 _____ 人 女子 _____ 人 理系:男子 _____ 人 女子 _____ 人 その他:男子 _____ 人 女子 _____ 人
- 2 年生 文系:男子 _____ 人 女子 _____ 人 理系:男子 _____ 人 女子 _____ 人 その他:男子 _____ 人 女子 _____ 人
- 3 年生 文系:男子 _____ 人 女子 _____ 人 理系:男子 _____ 人 女子 _____ 人 その他:男子 _____ 人 女子 _____ 人
- d. 進路に関する貴校の位置づけは以下のどれに近いでしょうか。**あてはまるところに一つだけ** ○を付けてください。
1. 生徒の多くが国公立大学を目指す進学校
 2. 生徒の多くが4年制大学を目指す進学校
 3. 生徒の多くが大学・専門学校を目指す進学校
 4. 進学志望・就職志望が混じる進路多様校
 5. 生徒の多くが進学を目指さない非進学校
- e. 最終的に他の分野に進む生徒も含め、貴校には**看護系大学や看護系専門学校を志望する生徒**はいますか?
あてはまるところに一つだけ ○を付けてください。
1. ほとんどいない → **質問はこれで終了です。ご協力ありがとうございました。**
 2. 例外的(毎年2~3名程度以下)
 3. コンスタントにいる(毎年 _____ 名程度)

II. 進学先と入試

- a. **看護系大学や看護系専門学校を志望する生徒**は、文系、理系のどちらが多いでしょうか。**あてはまるところに一つだけ** ○を付けてください。
1. ほとんど理系
 2. どちらかと言えば理系
 3. どちらかと言えば文系
 4. ほとんど文系
 5. コース分けがない
 6. 文理で分類できない(具体的に _____)

- b. **男子生徒**で看護系大学や看護系専門学校を志望する生徒はいますか？ あてはまるところに一つだけ ○を付けてください。
1. ほとんどいない 2. 例外的（毎年2～3名程度以下） 3. コンスタントにいる（毎年 名程度）
- c. 看護系大学や看護系専門学校を志望する生徒が受験するのは主として大学ですか？ 専門学校ですか？ あてはまるところに一つだけ ○を付けてください。
1. 主として大学 2. 主として専門学校 3. 大学も専門学校も受験する
- d. 毎年、比較的多くの生徒が受験する看護系大学や看護系専門学校があるとすれば、どのようなところでしょうか。 あてはまるところにいくつでも ○を付けてください。可能であれば、具体的に名称を記入してください（複数回答可）。
1. 地元の大学 2. 地元の専門学校 3. 地元以外の大学 4. 地元以外の専門学校
-
- e. 看護系大学や看護系専門学校を志望する生徒の学業成績は、貴校の中ではおしなべてどの程度の水準でしょうか？ 典型的なケースについて、 あてはまるところに一つだけ ○を付けてください。
1. 最上位レベル 2. 上位10～20%程度 3. 平均より少し上 4. 平均レベル
5. 平均より少し下 6. 下位10～20%程度 7. 最下位レベル
- f. 多くの生徒が第一志望で受験する看護系大学や看護系専門学校の入試の区分はどれですか？ あてはまるところに一つだけ ○を付けてください。
1. 一般入試 2. 推薦入試 3. AO入試 4. その他（具体的に_____）
- g. 看護系大学や看護系専門学校への進学を志望する生徒が受験校を決める時期はいつ頃が多いですか？ あてはまるところにいくつでも ○を付けてください。
1. 高校入学前 2. 高校1年 3. 高校2年 4. 高校3年の4～7月
5. 高校3年の8月以降センター試験以前 6. 高校3年のセンター試験以降
7. 高校卒業後 8. その他（_____）
- h. 看護系大学や看護系専門学校へ**実際に進学する生徒**は、看護系の進路が第1志望である場合が多いですか？ あてはまるところに一つだけ ○を付けてください。
1. 第1志望が多い 2. 第2志望が多い 3. 第3志望以下が多い
- i. **看護系以外の進路を第1志望**としながら、**実際には看護系大学や看護系専門学校へ進学する生徒**の場合、第1志望としていた進路には何か傾向がありますか？ そのような生徒が第1志望とすることが多い分野について、 あてはまるところにいくつでも ○を付けてください。
1. 医学 2. 歯学 3. 薬学 4. 看護系以外の医療技術系（具体的に_____）
5. 医歯薬系以外の理系分野（具体的に_____） 6. 文系分野（具体的に_____）
7. 専門学校における医療技術系以外の資格系分野（具体的に_____）
- j. 看護系大学や看護系専門学校を志望する生徒の受験先の決定に際して最も影響力が大きいのは、下記のうちのどれですか？ 典型的なケースについて、 あてはまるところに一つだけ ○を付けてください。
1. 保護者の意見 2. 教員の意見 3. 生徒本人の意見 4. その他（_____）
- k. 看護系大学や看護系専門学校を志望する生徒の家庭の保護者や親せきなどの身内には、医師や看護師など医療系の職種に就いている方が多いでしょうか？ あてはまるところに一つだけ ○を付けてください。
1. 医療系の家庭が多い 2. どちらかと言えば医療系の家庭が多い 3. どちらとも言えない
4. どちらかと言えば医療系の家庭は少ない 5. 医療系の家庭は少ない

III. 看護系への進学理由・適性

a. **看護系大学や看護系専門学校へ実際に進学した生徒**の場合、進学先への受験を決めた理由として、以下のような点はどの程度重要だと感じていたでしょうか？**典型的なケース**について、それぞれ **あてはまるところに一つだけ** ○を付けてください。

1. 全く重要だと感じていなかった 2. あまり重要だと感じていなかった 3. どちらとも言えない
4. 少しは重要だと感じていた 5. かなり重要だと感じていた

	1	2	3	4	5	回答不能	
1. 取得できる資格の種類が魅力的であること	—	+	—	+	—	+	□
2. 将来の仕事に興味・関心があること	—	+	—	+	—	+	□
3. 専門で学ぶ内容への興味・関心があること	—	+	—	+	—	+	□
4. 将来の職業がはっきりしているかどうか	—	+	—	+	—	+	□
5. 将来、就職できそうかどうか	—	+	—	+	—	+	□
6. 将来、見込まれる収入の金額が十分かどうか	—	+	—	+	—	+	□
7. 将来、暮らしたいと思っている地域で暮らせそうかどうか	—	+	—	+	—	+	□
8. 大学や学校がある地域や場所が魅力的かどうか	—	+	—	+	—	+	□
9. 楽しい学生生活が送れそうかどうか	—	+	—	+	—	+	□
10. 所属する専攻(学科)の教育内容	—	+	—	+	—	+	□
11. 所属する専攻(学科)の教員の研究内容	—	+	—	+	—	+	□
12. 大学や学校の評判, 社会的評価	—	+	—	+	—	+	□
13. 施設・設備が充実しているかどうか	—	+	—	+	—	+	□
14. 学費の安さ	—	+	—	+	—	+	□
15. 生活費の安さ	—	+	—	+	—	+	□
16. 自宅から通えるかどうか	—	+	—	+	—	+	□
17. 合格可能性の高さ	—	+	—	+	—	+	□
18. 入試科目の内容	—	+	—	+	—	+	□
19. 入試の会場が自宅近くに設けられていたかどうか	—	+	—	+	—	+	□
20. 他に受験したところとの併願しやすさ	—	+	—	+	—	+	□

b. **貴校から看護系大学や看護系専門学校へ実際に進学した生徒**のうち、**進学後が最も心配だった生徒一人**を思い浮かべてください。その生徒が進学先で不適応を起こすとすれば、具体的にどのようなことが問題になる可能性が高いかと思っていましたか？ それぞれ **あてはまるところに一つだけ** ○を付けてください。

1. 全く心配していなかった 2. あまり心配していなかった 3. どちらとも言えない
4. 少しは心配していた 5. かなり心配していた

	1	2	3	4	5	
1. 病人の立場で考えられないために実習先で問題を起こす	—	+	—	+	—	+
2. 薬の量などの計算や見積もりができない	—	+	—	+	—	+
3. 時間を守るなど、基本的な生活習慣が確立できない	—	+	—	+	—	+
4. 大学や専門学校の友人関係で問題を起こす	—	+	—	+	—	+
5. 多様な症状やカルテの記述から患者の状態が見抜けない	—	+	—	+	—	+
6. 聞く力が不足しており、口頭での指示が理解できない	—	+	—	+	—	+
7. 臨機応変な予測力, 対応力に欠ける	—	+	—	+	—	+
8. 基礎学力の不足で授業についていけない	—	+	—	+	—	+
9. 経済状況が苦しく, 学費が続かない	—	+	—	+	—	+
10. 集団行動ができない	—	+	—	+	—	+
11. 不本意入学のため, 学習意欲がわからない	—	+	—	+	—	+
12. 過度の思い込みのため, 現実が本人の期待と大きく異なる	—	+	—	+	—	+
13. 保護者が学校に過度に干渉する	—	+	—	+	—	+

c. 前ページの質問で、思い浮かべた**最も心配だった生徒**は、どのようなプロフィールを持っていましたか？
以下の各項目について、それぞれ **あてはまるところに一つだけ** ○を付けてください。

- | | | | | |
|-------------------|-----------|------------|-----------|--------------------------------|
| 性別 | 1. 男子 | 2. 女子 | | |
| 所属コース | 1. 理系 | 2. 文系 | 3. その他 | |
| 進学先 | 1. 国立大学 | 2. 公立大学 | 3. 私立大学 | 4. 専門学校 |
| 進学後の通学形態 | 1. 自宅生 | 2. 自宅外生 | | |
| 成績（看護系への進学者としては、） | 1. 上位 | 2. 中位 | 3. 下位 | |
| 進学した入試区分 | 1. 一般入試 | 2. 推薦入試 | 3. AO入試 | 4. その他（ ） |
| 志望順位（看護系への進学は） | 1. 第1志望 | 2. 第2志望 | 3. 第3志望以下 | |
| 進路決定の実質的主体 | 1. 保護者 | 2. 教員 | 3. 生徒本人 | 4. その他（ ） |
| 家庭背景 | 1. 医療関係者 | 2. 医療関係者以外 | | |
| 家庭の経済状況 | 1. 困窮していた | 2. 問題なかった | | |

d. 一般的に、生徒に看護系大学や看護系専門学校への進学を勧めるとすれば、どのような理由が考えられますか？それぞれ **あてはまるところに一つだけ** ○を付けてください。

- | | | |
|--------------|---------------|--------------|
| 1. 全く理由にならない | 2. あまり理由にならない | 3. どちらとも言えない |
| 4. 少しは理由になる | 5. 重要な理由になる | |

	1	2	3	4	5	回答不能
1. 将来、経済的に安定した生活ができること	— + — + — + —					□
2. 職種が時代や流行に左右されないこと	— + — + — + —					□
3. 女性が経済的に自立できること	— + — + — + —					□
4. 女性が良き伴侶を見つけられること	— + — + — + —					□
5. 職場で男女差別がないこと	— + — + — + —					□
6. 人の命を救うことができること	— + — + — + —					□
7. 固い資格であること	— + — + — + —					□
8. 給料が高いこと	— + — + — + —					□
9. 自律的な仕事であること	— + — + — + —					□
10. 社会に貢献できること	— + — + — + —					□
11. 取得困難な資格であること	— + — + — + —					□
12. 女性中心の職場であること	— + — + — + —					□
13. 将来、長く勤められること	— + — + — + —					□
14. 将来的に発展性があること	— + — + — + —					□
15. 専門性が高いこと	— + — + — + —					□
16. 他人に喜ばれる仕事であること	— + — + — + —					□
17. 地元就職があること	— + — + — + —					□
18. 保護者や親せきが喜ぶ職種であること	— + — + — + —					□
19. 学費が安いこと	— + — + — + —					□
20. 確実に合格できること	— + — + — + —					□
21. 入試で得意科目を生かせること	— + — + — + —					□
22. 自宅から通えること	— + — + — + —					□
23. 入試の地方会場が近くに設けられること	— + — + — + —					□

e. 看護系大学や看護系専門学校に進学する生徒が看護師などの看護専門職に抱くイメージは以下のうちのどのようなものでしょうか？**典型的なケース**について、それぞれ **あてはまるところに一つだけ** ○を付けてください。

1. 全くそう思っていない 2. あまりそう思っていない 3. どちらとも言えない
4. 少しはそう思っている 5. かなりそう思っている

	1	2	3	4	5	回答不能		
1. 経済的に安定している	—	+	—	+	—	+	—	<input type="checkbox"/>
2. 時代や流行に左右されない	—	+	—	+	—	+	—	<input type="checkbox"/>
3. 女性が経済的に自立できる	—	+	—	+	—	+	—	<input type="checkbox"/>
4. 女性が良き伴侶を見つけられる	—	+	—	+	—	+	—	<input type="checkbox"/>
5. 職場で男女差別がない	—	+	—	+	—	+	—	<input type="checkbox"/>
6. 人の命を救うことができる	—	+	—	+	—	+	—	<input type="checkbox"/>
7. 固い資格である	—	+	—	+	—	+	—	<input type="checkbox"/>
8. 給料が高い	—	+	—	+	—	+	—	<input type="checkbox"/>
9. 自律的な仕事である	—	+	—	+	—	+	—	<input type="checkbox"/>
10. 社会に貢献できる	—	+	—	+	—	+	—	<input type="checkbox"/>
11. 取得困難な資格である	—	+	—	+	—	+	—	<input type="checkbox"/>
12. 女性中心の職場である	—	+	—	+	—	+	—	<input type="checkbox"/>
13. 将来、長く勤められる	—	+	—	+	—	+	—	<input type="checkbox"/>
14. 将来的に発展性がある	—	+	—	+	—	+	—	<input type="checkbox"/>
15. 専門性が高い	—	+	—	+	—	+	—	<input type="checkbox"/>
16. 他人に喜ばれる仕事である	—	+	—	+	—	+	—	<input type="checkbox"/>
17. 地元に就職がある	—	+	—	+	—	+	—	<input type="checkbox"/>
18. 保護者や親せきが喜ぶ職種である	—	+	—	+	—	+	—	<input type="checkbox"/>
19. 責任が重い仕事である	—	+	—	+	—	+	—	<input type="checkbox"/>
20. 対人能力が問われる	—	+	—	+	—	+	—	<input type="checkbox"/>
21. 3K労働（きつい・きたない・きけん）である	—	+	—	+	—	+	—	<input type="checkbox"/>
22. 夜勤がある	—	+	—	+	—	+	—	<input type="checkbox"/>
23. 残業が多い	—	+	—	+	—	+	—	<input type="checkbox"/>

f. 以下のうち、他分野の進路と比較して、どのような生徒が特に看護系大学や看護系専門学校の進学へ向いていると感じますか？以下に挙げた特性について、それぞれ **あてはまるところに一つだけ** ○を付けてください。

1. 全く向いていると思わない 2. あまり向いていると思わない 3. どちらとも言えない
4. 少しは向いていると思う 5. かなり向いていると思う

	1	2	3	4	5
1. 家庭に学費を賄う経済力がある	—	+	—	—	—
2. 保護者が医療関連分野への関心が強い	—	+	—	—	—
3. コミュニケーション能力が高い	—	+	—	—	—
4. 集中力がある	—	+	—	—	—
5. 保護者が医師で医療現場の実情を知っている	—	+	—	—	—
6. 保護者が看護師で医療現場の実情を知っている	—	+	—	—	—
7. リーダーシップがある	—	+	—	—	—
8. 愛想が良い	—	+	—	—	—
9. 何事にも忍耐強い	—	+	—	—	—
10. 学力的に高い水準に達している	—	+	—	—	—
11. 気持ちが優しい	—	+	—	—	—
12. 規則正しい生活ができる	—	+	—	—	—
13. 記憶力がすぐれている	—	+	—	—	—
14. 吸収力がある	—	+	—	—	—
15. 協調性がある	—	+	—	—	—
16. 苦勞をいとわない	—	+	—	—	—
17. 計画性がある	—	+	—	—	—
18. 堅実でミスが少ない	—	+	—	—	—
19. 口が堅い	—	+	—	—	—
20. 向上心がある	—	+	—	—	—
21. 自発的に行動できる	—	+	—	—	—
22. 自分の興味をとことん追求できる	—	+	—	—	—
23. 手先が器用	—	+	—	—	—
24. 従順に指示に従うことができる	—	+	—	—	—
25. 柔軟性がある	—	+	—	—	—
26. 情緒が安定している	—	+	—	—	—
27. 身近に医療関係者がいて医療現場の実情を知っている	—	+	—	—	—
28. 正義感が強い	—	+	—	—	—
29. 誠実である	—	+	—	—	—
30. 責任感がある	—	+	—	—	—
31. 他人の役に立つ仕事をしたいと思っている	—	+	—	—	—
32. 他人の話を辛抱強く聞くことができる	—	+	—	—	—
33. 体力がある	—	+	—	—	—
34. 探究心が旺盛である	—	+	—	—	—
35. 発想力がある	—	+	—	—	—
36. 保護者が看護系の進路を強く望んでいる	—	+	—	—	—
37. 目上の人の意図を敏感に察知できる	—	+	—	—	—
38. 幼いころから看護職に憧れている	—	+	—	—	—
39. 要領が良く、てきぱきしている	—	+	—	—	—
40. 臨機応変な判断力がある	—	+	—	—	—

IV. 高校時代の学習履歴

a. 以下に示す教科・科目について、看護系大学や看護系専門学校を受験する生徒はどの程度勉強するでしょうか？**典型的なケース**について、それぞれ **あてはまるところに一つだけ** ○を付けてください。

1. 開講していない 2. 選択・履修しない 3. 履修するが受験勉強はしない 4. 受験勉強する

		1	2	3	4	その他（具体的に）
(国語)	1. 国語（現代文）	—+—+—				()
	2. 国語（古典）	—+—+—				()
(地歴)	1. 世界史	—+—+—				()
	2. 日本史	—+—+—				()
	3. 地理	—+—+—				()
(公民)	1. 現代社会	—+—+—				()
	2. 倫理, 政治・経済	—+—+—				()
(数学)	1. 数学Ⅰ・A	—+—+—				()
	2. 数学Ⅱ・B	—+—+—				()
	3. 数学Ⅲ・C（理系範囲）	—+—+—				()
(理科)	1. 物理（文系範囲）	—+—+—				()
	2. 物理（理系範囲）	—+—+—				()
	3. 化学（文系範囲）	—+—+—				()
	4. 化学（理系範囲）	—+—+—				()
	5. 生物（文系範囲）	—+—+—				()
	6. 生物（理系範囲）	—+—+—				()
	7. 地学（文系範囲）	—+—+—				()
	8. 地学（理系範囲）	—+—+—				()
(外国語)	1. 英語	—+—+—				()
	2. 英語以外の外国語	—+—+—				()

b. 看護系大学や看護系専門学校を志望する生徒が十分に学んでいない教科・科目で、本来ならばしっかり学ばせておきたい教科・科目があれば、**いくつでも**挙げてください。

c. 現在の入試制度はさておき、将来、看護職に就く生徒は高校時代には、本来、**理系**で学んでおくべきだと感じますか？**文系**で学んでおくべきだと感じますか？**あてはまるところに一つだけ**○を付けてください。

1. 理系 2. 文系 3. どちらとも言えない 4. その他（具体的に _____）

V. その他

a. 貴校では、生徒が志望している大学や専門学校のオープンキャンパスへの参加を促しますか？また、参加した場合、オープンキャンパスは生徒の受験先の決定にはどの程度のインパクトがありますか？カッコ内の選択肢に **一つだけ** ○をつけてください。

1. 参加を促さない
 2. 参加を促す (1. 決め手となる 2. 参考になる 3. あまり関係ない 4. 全く無関係)

b. オープンキャンパスへの参加を促すとすれば、どのような目的ですか。それぞれ **あてはまるところに一つだけ** ○を付けてください。

1. 全く目的にならない 2. あまり目的にならない 3. どちらとも言えない
 4. 少しは目的になる 5. かなり目的になる

	1	2	3	4	5
1. 看護に関する見聞を広める	— + — + — + —				
2. 生徒の一般的な進学意識の向上	— + — + — + —				
3. 当該大学・学校への志望の意思の確認	— + — + — + —				
4. 面接・志願理由書・小論文等の入試対策	— + — + — + —				
5. 環境・インフラ等の確認	— + — + — + —				
6. 大学や専門学校の教員とのコンタクト	— + — + — + —				
7. AO 入試のエントリー	— + — + — + —				
8. 合格確約をもらう	— + — + — + —				

c. ここまでご記入いただいた先生ご自身のことをお知らせください。

- 性別 1. 男性 2. 女性
 年齢 1. 20 歳代 2. 30 歳代 3. 40 歳代 4. 50 歳代 5. 60 歳代以上

最後に、このアンケートについて感じたことがあれば、ご自由にお書きください。

ご協力ありがとうございました。

第2章 看護系志望者の適性と大学入試

西川浩昭（静岡県立大学）・倉元直樹（東北大学）・
奥裕美（聖路加国際大学）・小山田信子（東北大学）

本章は、日本行動計量学会第42回大会（会場：東北大学川内北キャンパス講義棟C棟，東北大学百周年記念会館・萩ホール，2014年9月2日〔火〕～5日〔金〕）において，9月3日（水）13:00～15:00に第1会場「C101教室：特別セッション オーガナイザー・司会者：西川浩昭（静岡県立大学）」の中で発表された4件の研究発表における抄録集原稿4編のうちの3編を再録したものである。なお，4番目の発表「歴史に学ぶ看護職教育のカリキュラムポリシー」は，第I部第7章「選抜試験・カリキュラムの遡及的分析」の一部として本報告書に採録されている。

また，第2節「高校生における『看護系人気』の背景事情」は，本研究プロジェクトの高校調査（質問紙）においてデータクリーニングを完全に終える前の集計速報値を用いたものであり，第1章で記載された内容と数値がやや異なる。

第1節 企画主旨

西川浩昭（静岡県立大学）

18歳人口が減少している中、看護系大学の志望者は増加し、それに伴って看護系大学の数も増加している。その様な状況下で、各大学は少しでも優秀な学生を得ようと努力している。本セッションでは、看護系大学への進学の実状を明らかにすると共に、過去の進学状況を調べることにより、看護に適した学生を入学させる方法を検討する。

第2節 看護学部新入生の進路決定について

西川浩昭（静岡県立大学）

1. はじめに

学問領域の多様化に伴い、様々な学部が設けられている。現存する様々な学部のうち、大半の学部は、在籍している学部とは無関係な分野でさえも、不利になることを覚悟すれば、就職の際に自分の希望する分野を選び直すことが出来るが、医療系の学部は入学した時点で将来の仕事が決まっているという特徴があり、進路を変更する場合には退学して、別の学部に入り直さなければならないという欠点がある。にもかかわらず、近年の就職難の影響から医療系の人気は強く、中でも難易度があまり高くなく、売り手市場でもある看護系の大学の人気は高い状況を維持している。しかし、看護という仕事は、人を相手にするだけでなく、人命に関わるため安易な考えで選択するものではないことは言うまでもない。そうした点を鑑み、本研究では看護学部に入学者を対象として、看護学部進学を考えた時期、進学を決めた時点などの進路決定に関する調査を実施しているためその結果を報告する。さらに、今回、募集定員の増加が行われたので、そのことに伴う、意識、進路決定過程の変化についても検討したので併せて報告する。

2. 対象と方法

対象は、平成 23 年から 26 年に S 大学看護学部に入学者で、配布回収法により実施した質問紙調査に参加した者である。なお、社会人入学、編入学により入学した者は除いた。調査は無記名で行い、回答の有無およびその内容が不利益を与えないことを説明し、調査票の提出を以て同意が得られたもの

とした。

年次別の対象数は表 1 に示す通りである。

表1 調査年次別対象数

入学年次	23年	24年	25年	26年
回答者数	57	54	55	118

3. 結果と考察

S 大学看護学部進学を考え始めた時期についての調査結果を表 2 に示した。「高校 1 年」が最も多く、それに「高校 2 年」が続き、併せて過半数の者が高校 2 年までに考え始めていることが判った。その反面、「大学入試センター試験後」という者も 25 年度 9.1%、26 年度には 14.4%存在し、定員増加に伴い、進路決定を遅くする傾向が見られている。

S 大学看護学部進学を決めた時期についての調査結果を表 3 に示した。25 年までは、「高校 3 年の 1 学期」という回答が最も多くなっていたが、26 年度では「大学入試センター試験後」という回答が最も多くなり、大学入試センター試験の出来具合が大きく影響していることが明らかにされた。他方、「高校 1 年次」という者も常に 15%程度見られ、初志貫徹型の存在が明らかになった。

S 大学看護学部受験を決める上で影響を受けた人についての調査結果を表 4 に示した。すべての年次で「家族・親戚」が最も多く、「高校の先生」は 30%程度であった。また、常に 4 分

の 1 程度は「いない」と回答していた。

表 2 S 大学看護学部受験を考え始めた時期

	高校 1 年	高校 2 年	高 3・1 学期	高 3 夏	高 3・2 学期	センター前	センター後	その他
23 年	24	20	3	2	3	1	2	2
	42.1%	35.1%	5.3%	3.5%	5.3%	1.8%	3.5%	3.5%
24 年	23	13	4	7	1	1	3	2
	42.6%	24.1%	7.4%	13.0%	1.9%	1.9%	5.6%	3.7%
25 年	25	12	3	6	2	1	5	1
	45.5%	21.8%	5.5%	10.9%	3.6%	1.8%	9.1%	1.8%
26 年	44	21	14	10	6	4	17	2
	37.3%	17.8%	11.9%	8.5%	5.1%	3.4%	14.4%	1.7%

表 3 S 大学看護学部受験を決めた時期

	高校 1 年	高校 2 年	高 3・1 学期	高 3 夏	高 3・2 学期	センター前	センター後	その他
23 年	10	11	11	5	8	1	9	2
	17.5%	19.3%	19.3%	8.8%	14.0%	1.8%	15.8%	3.5%
24 年	7	5	12	7	3	3	15	2
	13.0%	9.3%	22.2%	13.0%	5.6%	5.6%	27.8%	3.7%
25 年	7	9	13	7	6	1	11	1
	12.7%	16.4%	23.6%	12.7%	10.9%	1.8%	20.0%	1.8%
26 年	18	10	20	11	10	7	40	2
	15.3%	8.5%	16.9%	9.3%	8.5%	5.9%	33.9%	1.7%

表 4 S 大学看護学部受験を決める上で、影響を受けた人

	家族・親戚	友人・先輩	高校の先生	いない	その他
23 年	35	13	18	13	1
	61.4%	22.8%	31.6%	22.8%	1.8%
24 年	27	15	15	18	0
	50.0%	27.8%	27.8%	33.3%	0.0%
25 年	28	15	17	15	0
	50.9%	27.3%	30.9%	27.3%	0.0%
26 年	55	23	36	32	4
	46.6%	19.5%	30.5%	27.1%	3.4%

第3節 高校生における「看護系人気」の背景事情

——アドミッションポリシーと学習履歴の断層——

倉元直樹（東北大学）

1 はじめに

わが国における医療系の養成課程の制度設計には職種によって大きな特徴の違いがある。例えば、医師免許は大学の医学部医学科6年間の課程を経て国家試験に合格することによって得られるが、それ以外のバイパスルートはない。それに対して、看護師、保健師、助産師といった看護専門職の養成には、極めて複雑な複線経路が取られている。井本（2009）は「近代的な医療制度の創始以来、看護師の供給は需要者である病院や医師によってなされてきた」と述べている。しかし、この伝統的な看護師養成の考え方は急速に変わりつつある。具体的には日本社会の高学歴化の中で、かつては希少だった四年制大学による看護師養成が、近年、大きな割合を占めるようになってきたのである。このことを看護師養成の「四大化」と呼ぶこととする。四大化の大きなきっかけとなったのが1992（平成4）年に制定された「看護師等の人材確保の促進に関する法律」である。看護系大学は同法の制定直後から急増した。当時はわずか14校を数えるのみだった看護系大学は、2011（平成23）年時点では200校に達している（倉元・吉沢・小山田，2012）。

四大化は必然的に看護系志望者の進路選択を大学入試の枠組みに組み入れることとなった。ところが、現在の後期中等教育と大学入試の制度に照らし合わせて鑑みたとき、看護系志望者の進路選択には問題が山積している。現在の普通高校のカリキュラムは文系と理系の履修内容の乖離が大きい（例えば、荒井，2012）が、看護系大学の入試は多種多様である。2008（平成20）年度までに開設された167大学に対する調査¹によれば、最も募集人員の多い区分の入試科目について「理系型」が12大学、「文系型」が45大学、「文系+理系」が12大学、「個別学科なし（理系）」が12大学、「個別学科なし（文系）」が20大学、分類不能が4大学と、大学によって千差万別の入試科目を課していることが分かった（金澤・倉元・小山田・吉沢，2010）。さらに、入試形態と大学の属性に関する多重対応分析の結果からは「どのような入試科目を課すのかということについて、大学の属性や学力レベルに応じて、棲み分けが生じている（金澤・倉元・小山田・吉沢，2011）」状況であることも見出された。看護系専門職を目指す高校生は、必然的に高校卒業時点での自分の学力の将来予測を勘案しながら志望校を定め、その上で履修科目やコース選択を行わなければならないことになっている。

一方で、昨今の厳しい経済状況を反映して、いったん別の道を選択したのちに看護系の職を目指す者もあり、その割合は年々増大する傾向にあるという事実もある。中学校卒業を基礎資格とする准看護師養成所においては、短大以上の学歴を持つ入学者の割合が1999（平成11）年度では9.8%であったが、2008（平成20）年度には15.3%を占めるに至っている。また、3年制の看護師養成専門学校でも10.9%を占めているが、看護系大学においては1.3%程度に止まっ

¹ 入学後に学科が分かれる東京大学を除く。

ている（以上，日本看護協会出版会，2009より算出）。したがって，少なくとも現状では，大学入試という観点から志願者の学習履歴を分析するには高大接続の観点が最も重要となることには疑いない。

2 問題と目的

本研究は，高校の進路指導担当教諭に対する質問紙調査と看護系大学，および，専門学校の学生に対する質問紙調査から，看護系の進路を志望者の学習履歴や適性，動機等についての特徴の抽出を試みる。本稿では前者を「調査1」，後者を「調査2」と呼ぶ。なお，調査時期としては「調査2」の方が先に実施されており，既に一部の調査結果に基づく発表も行われている（倉元・小山田・吉沢，2012；倉元・鈴木・小山田・小松・吉沢，2012）。

3 方法

3.1 調査1

「調査1」では特別支援学校等を除く全国5,028の高等学校，中等教育学校の中から無作為に抽出された2,000校を調査対象とした。2014（平成26）年1月中旬～下旬に調査票を送付し，各校の進路指導担当教諭1名ずつに回答を求めたものである。調査票は8ページから成るが，本稿で分析の対象としたのは冒頭の1ページ目の質問項目「最終的に他の分野に進む生徒も含め，貴校には看護系大学や看護系専門学校を志望する生徒はいますか？」という1項目のみである。

調査票の回収は郵送方式で行われた。2014（平成26）年6月9日の時点で1,318校から有効回答が得られた（回収率65.9%）。

3.2 調査2

「調査2」では，看護系国公立11大学，専門学校7校の学生に「進路決定に関するアンケート」を実施した。その結果，2,080名の調査対象者から回答を得た（回収率72.5%）。調査時期は2010（平成22）年7月～2012（平成24）年4月である。本調査は東北大学医学系研究科および高等教育開発推進センター倫理審査委員会の承認の下，文書または口頭で趣旨を説明して匿名を条件に実施し，回答をもって調査への同意とした。回収には郵送や回収箱を用いており，対象者の自由意思を尊重する手続きが担保された。

4 結果

4.1 調査1

回答を寄せた1,318校のうち，看護系の志望者が「ほとんどいない」という選択肢を選んだ学校はわずかに177校（13.4%）に止まった。逆に言えば，専門高校，通信制高校や小規模校も含め，高等学校の86.6%は看護系の志望者を抱えていることになる。

4.2 調査2

4.2.1 学習履歴

高校時代に学んでいたコースは、「普通科（理系）」が 60.5%、「理数科」が 2.6%、「普通科（文系）」が 27.4%、「総合学科」が 4.5%、「その他」が 5.0%であった。設置者別にみると、理系出身者の比率は国立大学では 90.5%に達していたのに対し、公立大学では 58.1%、私立大学では 52.3%、看護学校では 58.5%と、国立かそれ以外かで大きく比率が違っていた。

4.4.2 文理分けと志願時期

コースが「文系」「理系」に分かれたのは、「高校入学時」が 5.9%、「高校 2 年生」が 76.9%、「高校 3 年生」が 10.0%、「その他」が 7.2%であった。文理に分かれた時点で大学入試に関する知識がなかった者が 52.2%であった。文理分け以前に現在の所属への志願を決めた者は 29.3%に過ぎなかった。

4.4.3 受験勉強した科目²

受験勉強した科目は経験者が多い順に「数学 I」87.8%、「英語 I」87.8%、「国語（現代文）」86.2%、「数学 A」86.0%、「英語 II」82.5% の順となっていて、ここまでの 8 割を超える。以下、2/3 以上が受験勉強を経験しているのは「生物 I」71.3%、「国語（古典）」70.9%、「数学 II」70.5%、「数学 B」68.2%、「リーディング」67.4%となっており、理系範囲の理科は入っていない（図 1 参照）。

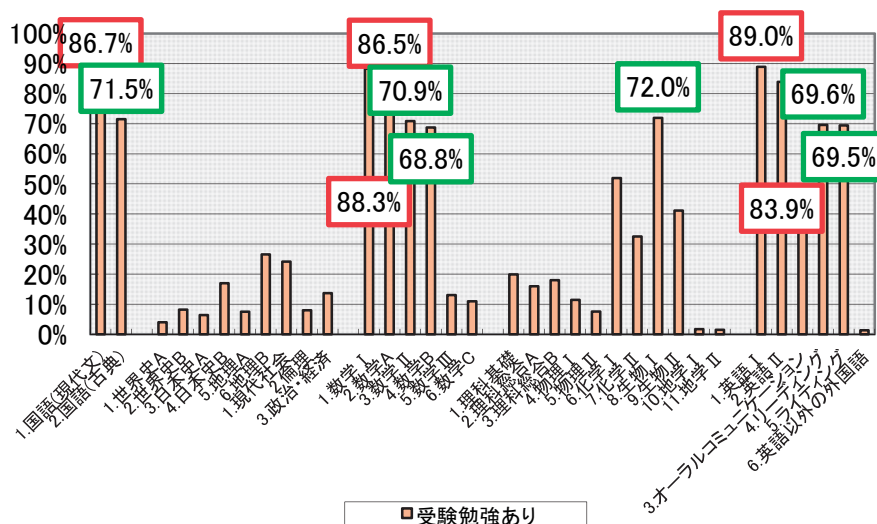


図 1. 受験勉強の経験がある者の比率

4.4.4 看護は理系か文系か

看護は本質的に「理系」と感じる者が 49.4%、「文系」と感じる者が 8.5%、「どちらとも言

² 科目名は 1999 (平成 11) 年度告示, 2003 (平成 15) 年度実施, すなわち, いわゆる「旧課程」に基づく。

えない」と感じる者が 42.1%であった。

4.4.5 志願への影響力

受験先の決定に際して最も影響力が大きかったのは「親の意見」が 21.1%、「先生の意見」が 12.3%、「自分の意見」が 63.2%、「その他」が 3.5%であった。

5. まとめと課題

調査 2 の結果から、学習履歴の面では高校時代は回答者の 2/3 が理系で学んでいたのに対し、「理系型入試」を課している大学は 12%のみである。この時点で高校時代に何を求めるかというアドミッションポリシーの体現としての入試科目との間に齟齬がある。

さらに、調査 1 の結果からは高校生の進学先としての看護系の人気は、現在、極めて高いと言える。その動機の解明が今後の課題である。就職難のイメージの下、手堅い資格としての魅力が看護系人気を支えているのではないかと、という推測が成り立つが、学生本人は大半が「自分の意見」としてそれを決めたと考えている。今後、高校教員の見方との整合性を分析してみたい。

文献

荒井克弘 (2012). 「学習指導要領 vs. 大学入試—その葛藤の軌跡といま」東北大学高等教育開発推進センター編『高等学校学習指導要領 VS 大学入試』東北大学出版会, 7-37.

井本佳宏 (2009). 「看護師 —その自給自足的養成体制のゆくえ—」橋本鉦市編著『専門職養成の日本的構造』玉川大学出版部, 84-103.

金澤悠介・倉元直樹・小山田信子・吉沢豊予子 (2010). 看護系大学の量的拡大に伴う大学入試設計の問題 —実情把握のための基礎分析—, 東北大学高等教育開発推進センター紀要, 第 5 号, 15-27.

金澤悠介・倉元直樹・小山田信子・吉沢豊予子 (2011). 看護系大学の入試構造に見る高大接続問題, 大学入試研究ジャーナル, No.21, 49-57.

倉元直樹・小山田信子・吉沢豊予子 (2012). 看護系大学生の進路選択と履修経験に関する予備調査, 東北大学高等教育開発推進センター紀要, 第 7 号, 69-76.

倉元直樹・鈴木幸子・小山田信子・小松恵・吉沢豊予子 (2012). 看護系学生の知的基盤——大規模学生調査から見えてくるもの——, 日本看護学教育学会誌日本看護学教育学会第 22 回学術集会講演集, 243.

日本看護教育出版会 (2009). 平成 20 年看護関係統計資料集, 日本看護協会出版会

付記

本研究は日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 (B) 「医療の高度化に伴う看護系大学の高大接続問題 —看護職志望者の適性と大学入試—(研究代表者 倉元直樹)」に基づく研究成果の一部である。

第4節 大卒・社会人経験者に対する看護基礎教育を考える

奥裕美（聖路加国際大学）

1 はじめに

医師・歯科医師や薬剤師とは異なり、将来の看護職を育成する教育課程は様々である。看護職となるものが受けるべき教育を規定する、保健師助産師看護師学校養成所指定規則における看護師学校養成所としては、看護系大学・短大、看護師養成所（3年課程）、高等学校5年一貫課程があるほか、准看護師養成所として、2年課程の准看護師養成所、高等学校衛生看護科があり、准看護師免許の取得後に看護師となることを目指す進学コースも設置されている。

看護師養成課程、准看護師養成課程への主な入学者は、高等学校や中学校を卒業してすぐに入学するいわゆる新卒者である。しかし、中にはいったん他の学問を学び、看護以外の職業に就くなどしたのちに看護職となることを希望して看護師・准看護師養成課程に入学してくるものもある。2010年度、看護師学校養成所（3年課程）に入学した学生の10.2%が大卒者、短期大学を卒業した経験をもつものと合わせるとその数は14.4%であり、この割合は増加傾向にある。また、特筆すべきは准看護師養成課程への入学者であり、同じく2010年度の入学者に占める大卒者の割合は9.0%、短大卒と合わせると18.9%となる（日本看護協会出版会、2012）。なお、准看護師養成課程への入学要件は中学校卒業以上である。

これには社会経済の低迷や、少子高齢社会における看護職に対する需要の高まりも影響していると考えられ、看護師・准看護師養成課程における大学・短大卒業生、社会人経験者の割合は今後も増加する可能性がある。社会保障と税の一体改革においては、医療介護サービス提供体制の強化を図るためのマンパワーの増強として、2025年に約200万人（現状150万人に対し50万人の増）の看護職員の確保が必要との試算が示されている。また、2013年6月以降、社会保障制度改革国民会議、社会保障審議会医療部会等の論議を踏まえ、新たな看護職員の確保対策の一つとして、大卒社会人経験者等を対象とした「新規養成促進」が提案されている。

看護学以外の学問的基盤や経験を持つ人材が看護職を志望するようになることは、幅広い人間性が求められる看護学の分野での活躍が期待されるとともに、彼らが持っている個性を生かすことは、性別・人種・キャリアなど様々な背景と価値観を持つ人々の特徴を最大限に生かすことにより組織が発展することができるというダイバシティ・マネジメントの視点から見ても、大変有効である。さらに、彼らの多くが成人学習者であることを踏まえると、教育する側にもその特性を踏まえた教授方法を選択し教育を行うことが望まれている。しかしわが国において看護基礎教育機関に通う学士号を持った学生や、社会人経験を持った学生の特性や教育実態についての報告は少なく、どのような教育体制を整えることが彼らの能力を看護において生かすことにつながるのかについて、十分に検討することができていない。また、多様な背景を持つ彼らの適性を判断する看護基礎教育機関への入学要件および入学試験のありかたについても同様に検討が必要である。

2 目的

看護以外の分野での学士号を持った上で、看護基礎教育を受ける学生の特徴と彼らの基礎教育機関での体験について基礎的情報を得ることを目的として研究を行った。なお本研究は聖路加看護大学博士論文として実施したものであり、研究の一部は学会等で発表している(奥, 2013)。

3 方法

「看護学生の看護基礎教育機関選択に関する調査用紙を用いて、アンケート調査を実施した。調査用紙は無記名であり、①あなたについて(属性)、②現在通う教育機関を選択した経緯について、③看護学を学ぶという体験について、④看護に対する考えとキャリアについての4部で構成した。本稿ではこのうち①および、②の一部の分析結果を報告する。

調査の対象は、日本国内の看護系大学、看護師養成所(3年課程)、准看護師養成所(2年課程)に在学中の看護学生とした。学士号を持つ学生と、それ以外の看護学生の双方からデータを収集し、両者のデータを比較することによって学士号を持つ看護学生に特徴的な傾向を探索した。

調査用紙は匿名であり、文書にて研究の主旨を説明し、調査用紙の回収をもって調査への同意とした。回収には郵送法を用い、対象者の自由意思の尊重を保証した。聖路加看護大学研究倫理審査委員会の承認を受けて実施した(承認番号12-001)。

4 結果

全国の124の看護基礎教育機関(大学40, 看護師養成所46, 准看護師養成所38)に研究への参加を依頼し、承諾の得られた39校(大学13, 看護師養成所16, 准看護師養成所10)の代表者に対し、1255通の調査票を送付し、606通を回収した(回収率48.3%)。うち576通を有効回答として分析を行った。

4.1 研究対象者の属性

4.1.1 性別

男性86人(14.9%)、女性479人(83.2%)であった。学士号の有無別に比較すると、「学士号あり群」では男子学生の割合が20.4%(56人)であり、「学士号なし群」における男子学生の割合(10.0%)に比べて高かった。教育機関別では、准看護師養成所において男子学生の割合が37.0%と特に高かった。

4.1.2 年齢

20 歳代が最も多く 264 人 (45.8%), 次いで 30 歳代 174 人 (30.2%), 10 歳代が 93 人 (16.1%) であった。50 歳代以上の者は 1 名であった。学士号の有無別では, 双方とも最も多いのは 20 歳代であるが (「学士号あり群」 48.0%, 「学士号なし群」 43.9%) 「学士号あり群」では次いで 30 歳代が多く 43.3% (21 人), 「学士号なし群」では 10 歳代 (30.9%, 93 人) が多かった。最も年齢が高かったのは, 「学士号あり群」の 50 歳代以上 (1 名, 0.4%) であった。「学士号なし群」でも, 30 歳代, 40 歳代のものが 23.9% (72 人) あった。

4.1.3 社会人経験の有無

社会人 (就業) 経験があるものは 334 人 (58.0%), ないものは 240 人 (41.7%) で, 働いたことのある者の方が多かった。「学士号あり群」では働いたことがあるものが 78.9% (217 人) を占めた。「学士号なし群」でも 38.9% (117 人) が働いたことがあった。教育機関別にみると, 准看護師養成所において, 働いたことがあるものの割合が多かった。

4.1.4 学士号を持つ学生の大学での専攻領域

「学士号あり群」に対して, 大学での専攻領域について回答を求めた。元も多かったのは社会科学 95 人 (34.5%), 次に人文科学 86 人 (31.3%) であった。看護学も含まれる保健領域を専攻していたものは 3 人 (1.1%) であった。

4.2 現在通う教育機関を選択した経緯

4.2.1 看護を学ぶことを決めた時期

「学士号あり群」では 1 年前以内と回答した者が最も多く, 45.5% (125 人) を占めた。次いで 1 年前が 72 人 (26.2%), 2~3 年前が 56 人 (20.4%) であった。5 年以上前というものも 12 人 (4.4%) あった。学士号の有無によって看護を学ぶことを決めてから受験までの期間の長さに違いがあるかどうかを比較したところ, 「学士号なし群」においても「1 年前以内」の回答が最も多かった (80 人, 26.6%)。ただしその傾向は「学士号あり群」の方が顕著であり, 統計的にも有意 ($t(559) = 7.20, p = 0.00$) な差があった。

4.2.2 複数校受験の有無と受験校数

「学士号あり群」において現在通っている教育機関を受験した年に, 他の教育機関の入学試験を受けたものは 133 人 (48.4%) 受けなかったものは 137 人 (49.8%) であった。「学士号なし群」においても, 他校を受験したものと受験しない者の割合は拮抗しており, 他校は受験していないものの割合が高かった。「学士号なし」群の方が, より受験していないものの割合が高い傾向があ

ったが、統計的な有意な差はなかった ($\chi^2=0.34$, $df=1$, $p=0.56$)。

「学士号あり群」で他校を受験したものの平均受験校数は2.02校、最大で10校であった。「学士号なし群」では、平均2.45校、最大受験校数は「学士号あり群」と同じく10校であった。平均受験校数は「学士号なし群」の方があり群よりも多く、統計的にも有意 ($t(264)=2.47$, $p=0.01$) な差があった。

4.2.3 併願校の種別

「学士号あり群」が複数校を受験する際、最も多く選択されていたのは看護師養成所で105人(78.9%)受験していた。次に多かったのは看護系大学で31人(23.3%)であった。その他については4件の自由記載があり、3件が「医学部医学科」、1件が「医療系専門学校」であった。

4.2.4 高校生の頃の得意科目

「学士号あり群」において得意だという回答が最も多かった科目は国語(120人, 43.6%)であった。次いで、英語・外国語(108人, 39.3%)、体育(72人, 26.2%)の順であった。最も得意であるという回答が少なかった科目は、物理(11人, 4.0%)であった。「学士号なし群」でも同様に国語が得意だったと回答した割合が最も高く(37.2%)、物理が得意だったと回答した割合が最も低かった(学士号なし 1.3%)。

英語外国語、倫理社会、政治経済、歴史、地理、物理、化学の7科目で、「学士号あり群」のほうがなし群よりも得意だったと回答する傾向があり、英語外国語($\chi^2=15.05$, $df=1$, $p=0.00$)、政治経済($\chi^2=5.31$, $df=1$, $p=0.02$)、歴史($\chi^2=4.95$, $df=1$, $p=0.03$)、物理($\chi^2=4.04$, $df=1$, $p=0.04$)では、その差は有意であった。また、数学($\chi^2=11.45$, $df=1$, $p=0.00$)、生物($\chi^2=6.22$, $df=1$, $p=0.01$)、保健($\chi^2=4.36$, $df=1$, $p=0.04$)、体育($\chi^2=4.74$, $df=1$, $p=0.03$)、家庭($\chi^2=25.90$, $df=1$, $p=0.00$)の5科目では「学士号なし群」のほうが得意であったと回答し、その差は有意であった。

5 今後の課題

ここまでの結果から、学士号を持つ学生は持たない学生とは異なる年齢、性別、教育・学習における背景を持っていることがわかった。また、教育機関の選択や受験を決める時期にも異なる特徴があった。18歳人口が減少するなか、大卒社会人経験者等を対象とした看護職の新規養成促進は不可避であるとされ、彼らの就学を支援する政策が推進されている。彼らは近い将来の日本の医療を支える人材であり、学生の多様性をふまえた看護教育の方策を考えて行かなければならない。

文献

井部俊子・奥裕美(2013)．これからの病院と看護教育のあり方，病院，72(5)、346-350

井部俊子（2014）．社会保障と税の一体改革に向けた新たな看護職確保対策に関する研究報告書，
平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金事業厚生労働科学特別研究事業奥裕美（2013）．学士号を持つ看護学生が看護教育機関を選択した要因.聖路加看護学会誌, 16（3）, 28-37.
奥裕美・井部俊子・柳井晴夫（2013）．学士号を持つ看護学生の学習経験に教育機関の種別が与える影響, 聖路加看護学会学術大会講演集第 18 回, 43. 奥裕美（2013）．他分野の学士号を持つ看護学生の特性と学習に関する研究, 2012 年度聖路加看護大学大学院博士論文
日本看護協会出版会（2012）．平成 23 年看護関係統計資料集, 日本看護協会出版会

第3章 高校教員からみた看護系進学希望者の特徴

西郡大（佐賀大学）

1. 目的

本稿では、全国の高等学校、中等学校の進路指導教諭を対象に実施したアンケート調査をもとに、進学校、非進学校、進路多様校など高校の性格の違いによって、高校教員からみた看護系分野への進学希望者像にどのような特徴があるのかを分析した。

2. 調査の概要

特別支援学校等を除く全国 5,028 の高等学校、中等教育学校の中から無作為に抽出された 2,000 校を調査対象とした。2014（平成 26）年 1 月中旬～下旬に調査票を送付し、各校の進路指導担当教諭 1 名ずつに回答を求めたものである。調査票は 8 ページから構成される。調査票の回収は郵送方式で行われ、2014（平成 26）年 6 月 23 日の時点で 1,319 校から有効回答が得られた（回収率 66.0%）。本稿では、同データを分析に用いた。

3. 結果

3. 1 回答校の分類と看護系進学希望者の実態

回答者が所属する高校の進路に関する位置づけを表 1 に示す。最も回答が多かったのは「進学志望・就職志望が混じる進路多様校」（44.2%）であったが、多様な高校からバランスよく回答を得ることができた。なお、本稿では、進路に関する各高校の位置づけに関する分類を示すために、A～E というコードによって識別する。次に、各高校の分類別に、看護系大学や看護系専門学校を志望する生徒についてみたところ、A～C の高校は、「コンスタントにいる」とするケースが多い一方で、就職者が多く含まれる高校においては、看護系への進学希望者は相対的に少ない傾向がみられた。

表 1. 進路に関する各高校の位置づけ

進路に関する各高校の位置づけ	分類	回答数	割合 (%)
生徒の多くが国公立大学を目指す進学校	A	233	17.7
生徒の多くが 4 年制大学を目指す進学校	B	224	17.0
生徒の多くが大学・専門学校を目指す進学校	C	180	13.6
進学志望・就職志望が混じる進路多様校	D	583	44.2
生徒の多くが進学を目指さない非進学校	E	82	6.2
無回答	-	17	1.3

表 2. 各高校における看護系大学や看護系専門学校の志望者

分類	ほとんどいない	例外的(毎年 2-3 名程度)	コンスタントにいる
A	19 (8.2%)	12 (5.2%)	200 (85.8%)
B	18 (8.0%)	14 (6.3%)	188 (83.9%)
C	8 (4.4%)	13 (7.2%)	157 (87.2%)
D	85 (14.6%)	171 (29.3%)	324 (55.6%)
E	51 (62.2%)	19 (23.2%)	12 (14.6%)

無回答は集計から除外。()内は各分類高校ごとの割合

3. 2 高校の分類別にみる看護系志望者の特徴

3. 2. 1 受験先をどのように考えるか

A と B の進学を中心に考える高校は、「主として大学」。D と E の多様校及び非進学校では、「主として専門学校」と明確に分かれた。両者の性質を含む C は「大学も専門学校も受験」が多数を占めている。以上のことから、同じ看護系志望者といっても志望者が所属する高校の性格によって受験先が明確に異なる傾向があることが示された(図 1)。

一方、受験先として考える地域では、大学か専門学校かは違うものの、どの高校においても地元にある大学や専門学校を受験先として考える傾向がみられた(図 2)。

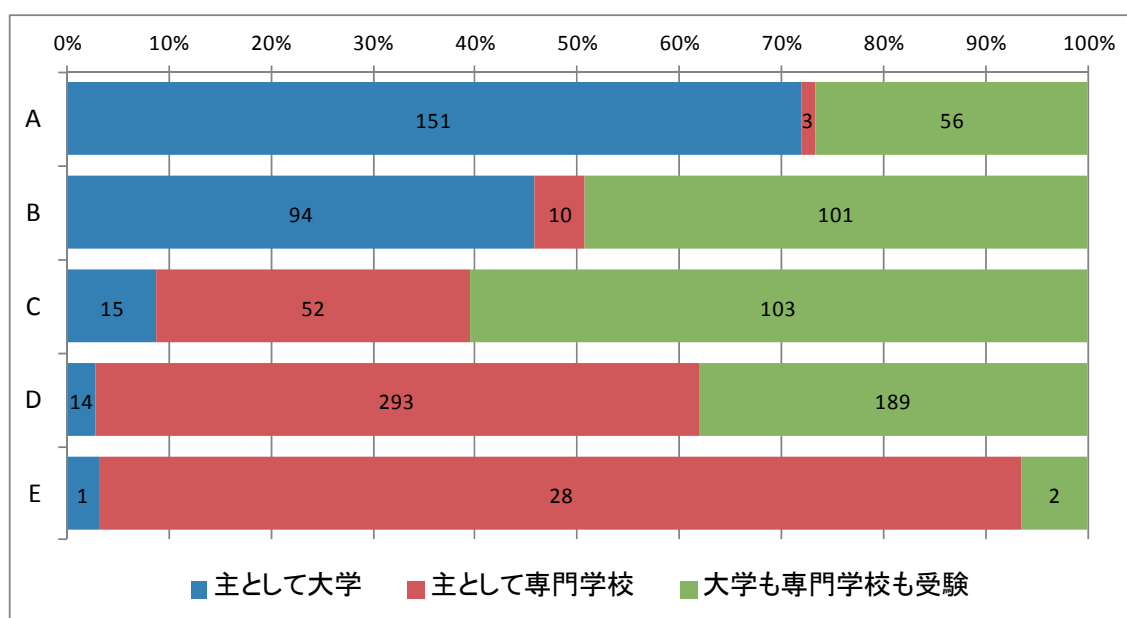


図 1. 受験先として考えているもの

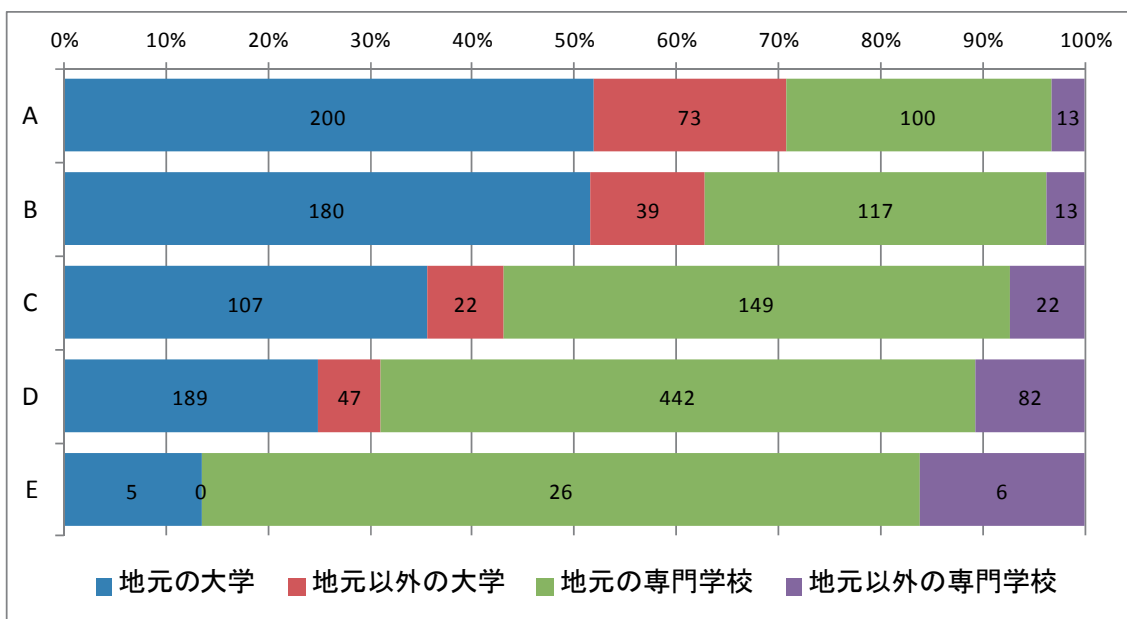


図2. 受験先として考えている地域

3. 2. 2 看護系進学希望者の学力層

C, D, E と進学者が少ない高校になるほど、学業成績は最上位から上位レベルの生徒が看護系を志望する傾向がみられる。また、高校の違いを問わず、看護系進学希望者には下位から最下位レベルの生徒は少ないようである（図3）。

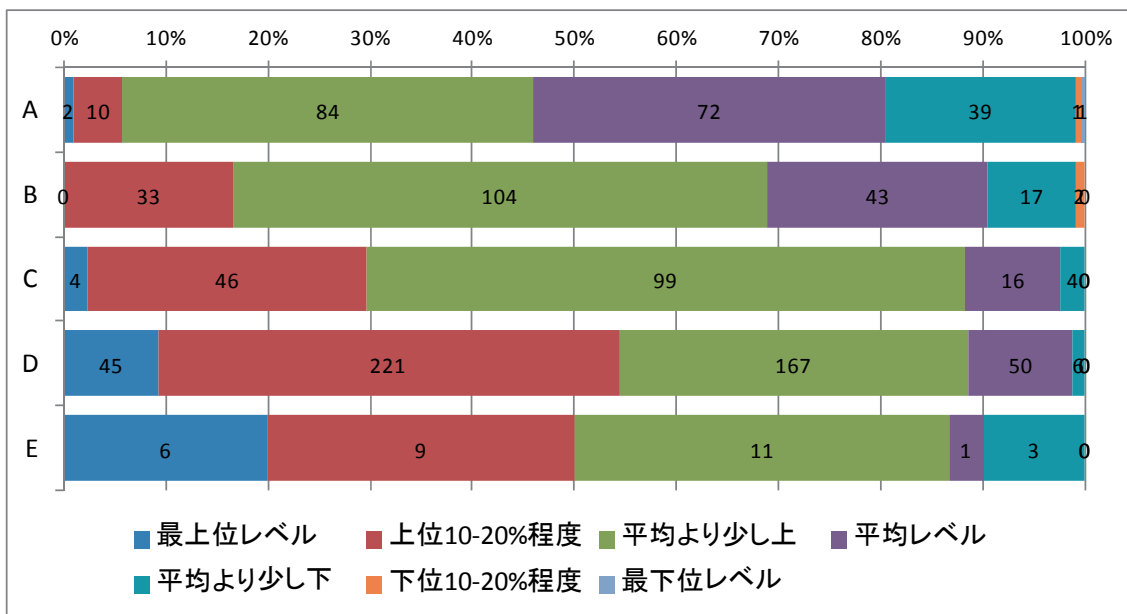


図3. 看護系志望者の学力層（学業成績）

3. 2. 3 看護系志望者の受験行動

どの高校でも多くの生徒が「第一希望」として看護系を進学希望先として考えている。ただし、国公立大学等を目指す進学校になるにつれ、第2志望や第3志望も含まれており、他の高校よりも幅広い進路選択がなされている(図4)。

受験する入試区分では、C、D、Eにおいては推薦入試が多いのに対して、Aでは一般入試が主であり、高校によって受験指導における大きな違いが確認された(図5)。

受験時期では、どの高校においても受験校決定の時期が早いものの、Aにおいてのみ「高校3年の8月以降センター試験以前」の割合が相対的に高く、一般入試を想定する受験生が多いがゆえの傾向として読み取れる(図6)。

受験先決定において影響を受ける人の意見では、高校の違いに関わらず一番多いのは「生徒本人の意見」であり、看護系志望者には主体的な進路選択をする生徒が多い傾向がみられる。一方、「保護者の意見」がA~Dにおいて20%前後あることから、保護者の意見も一定の影響力が確認される。Eでは「教員の意見」が1件もみられなかった(図7)。

生徒の身内における医療関係者の有無においては、「医療系の家庭が多い」というのは高校の分類による違いがみられないものの、「どちらかと言えば医療系の家庭が多い」まで含めると、A~Dの高校では40~50%程度を占めることが確認された。Eでは、「どちらかと言えば医療系の家庭は少ない」と「医療系は少ない」で20%強を占めており、相対的に保護者に医療系が少ないことが示された(図8)。

進学先へ受験を決めた理由について、「全く重要だと感じていなかった(1点)」「あまり重要だと感じていなかった(2点)」「どちらとも言えない(3点)」「少しは重要だと感じていた(4点)」「かなり重要だと感じていた(5点)」と得点を付与し、各項目に対する回答者の平均点を高校分類別に示した(図9)。国公立大学等を目指す進学校になるにつれ平均点が高くなる項目は、「取得できる資格の種類が魅力的であること」「所属する専攻(学科)の教育内容」「所属する専攻(学科)の教員の研究内容」「大学や学校の評判、社会的評価」「施設・設備が充実しているかどうか」「入試の地方会場が自宅の近くにあるかどうか」「他に受験したところの併願のしやすさ」であった。一方、DやEの高校で平均点が高い項目は、「将来、見込まれる収入の金額が十分かどうか」「将来、暮らしたいと思っている地域で暮らせるかどうか(Eのみ)」「大学や学校がある地域や場所が魅力的かどうか(Eのみ)」「生活費の安さ」などが該当する。

看護師などの看護専門職について生徒たちが抱くイメージについて、上記同様に各項目の回答に点数を付与し回答者の平均点を高校別にみたところ(図10)、「給料が高い」でA、BよりC、D、Eにおいて平均点が高く、「取得困難な資格」では、非進学校になるにつれて平均点が高くなる傾向がみられた。また、「3K(きつい・きたない・きけん)である」「夜勤がある」「残業が多い」など労働環境に関するネガティブなイメージはEにおいて平均点が高かった。

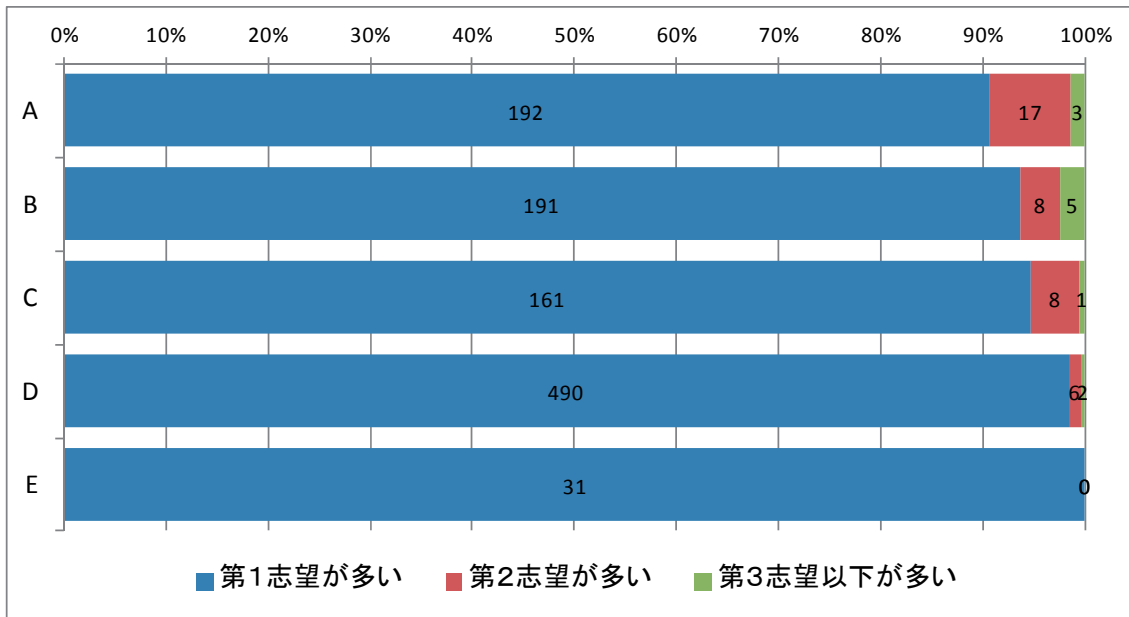


図4. 看護系進路に対する志望意欲

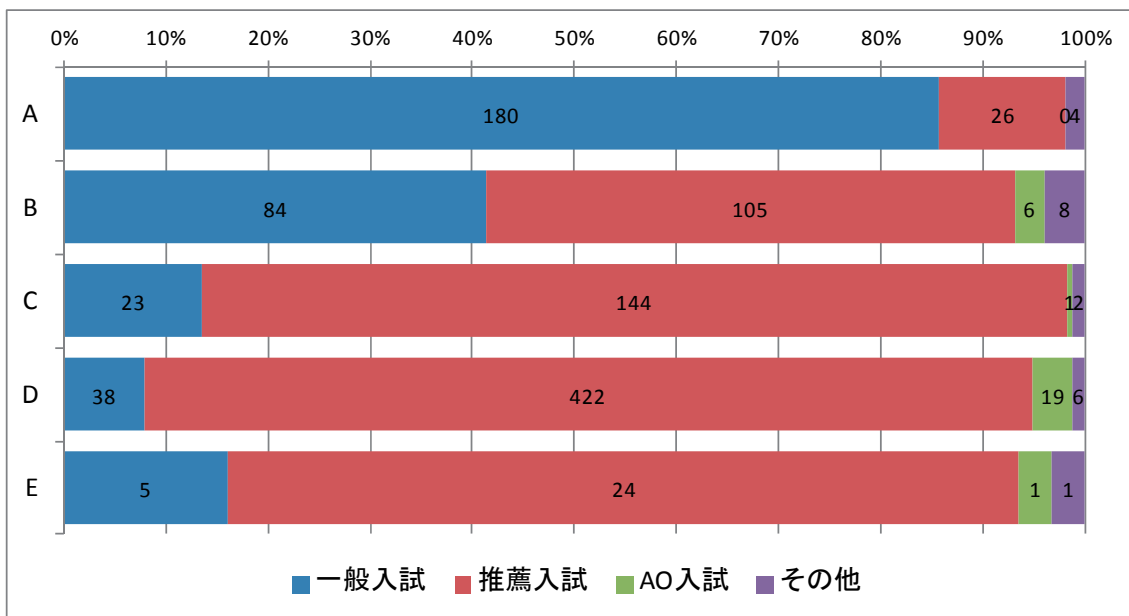


図5. どのような入試区分で受験するか

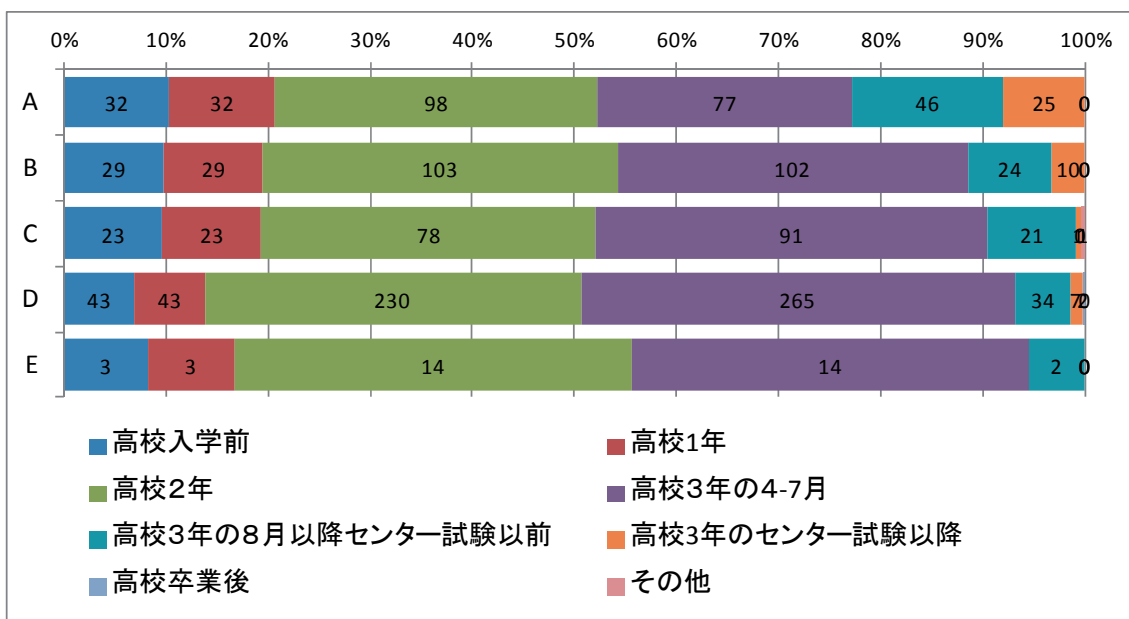


図6. 受験校を決定する時期

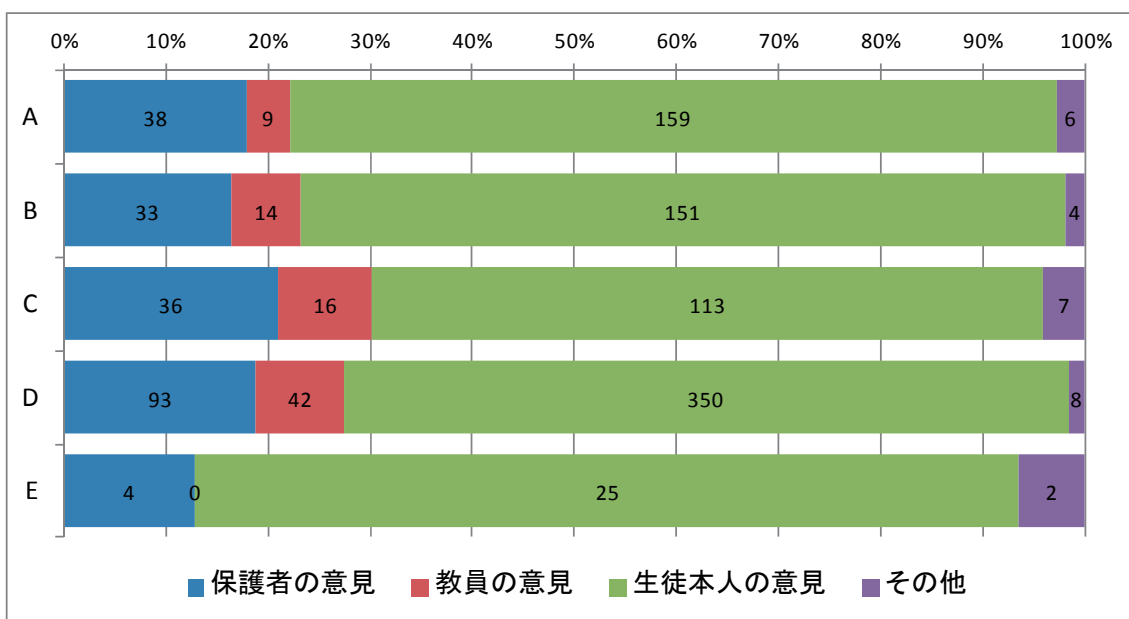


図7. 受験先決定に影響する人の意見

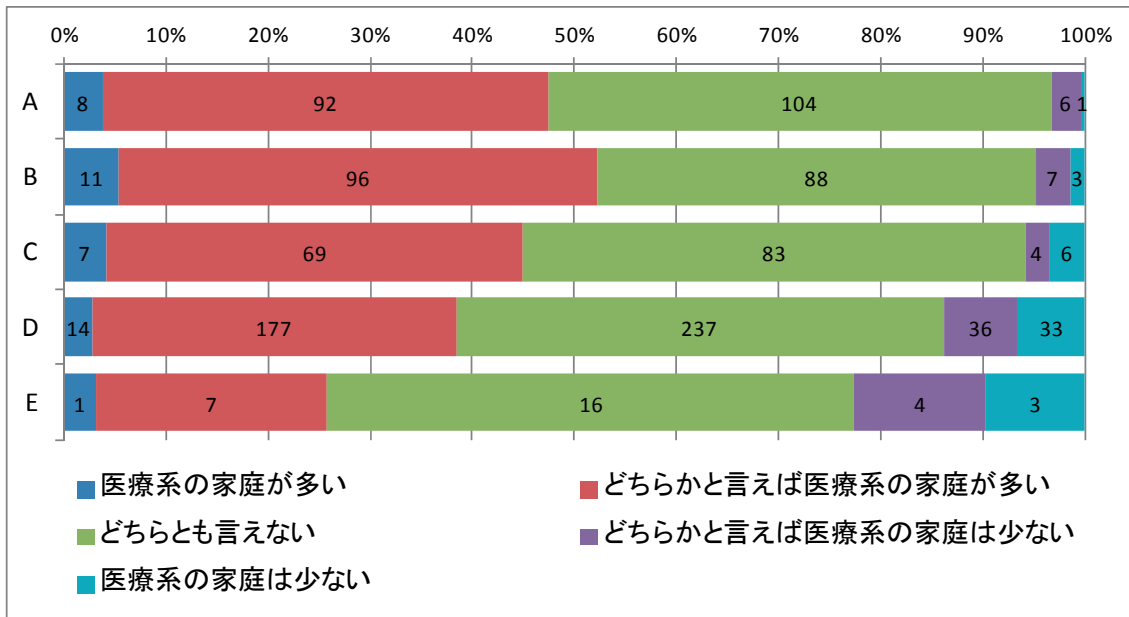


図8. 生徒の身内における医療関係者の有無

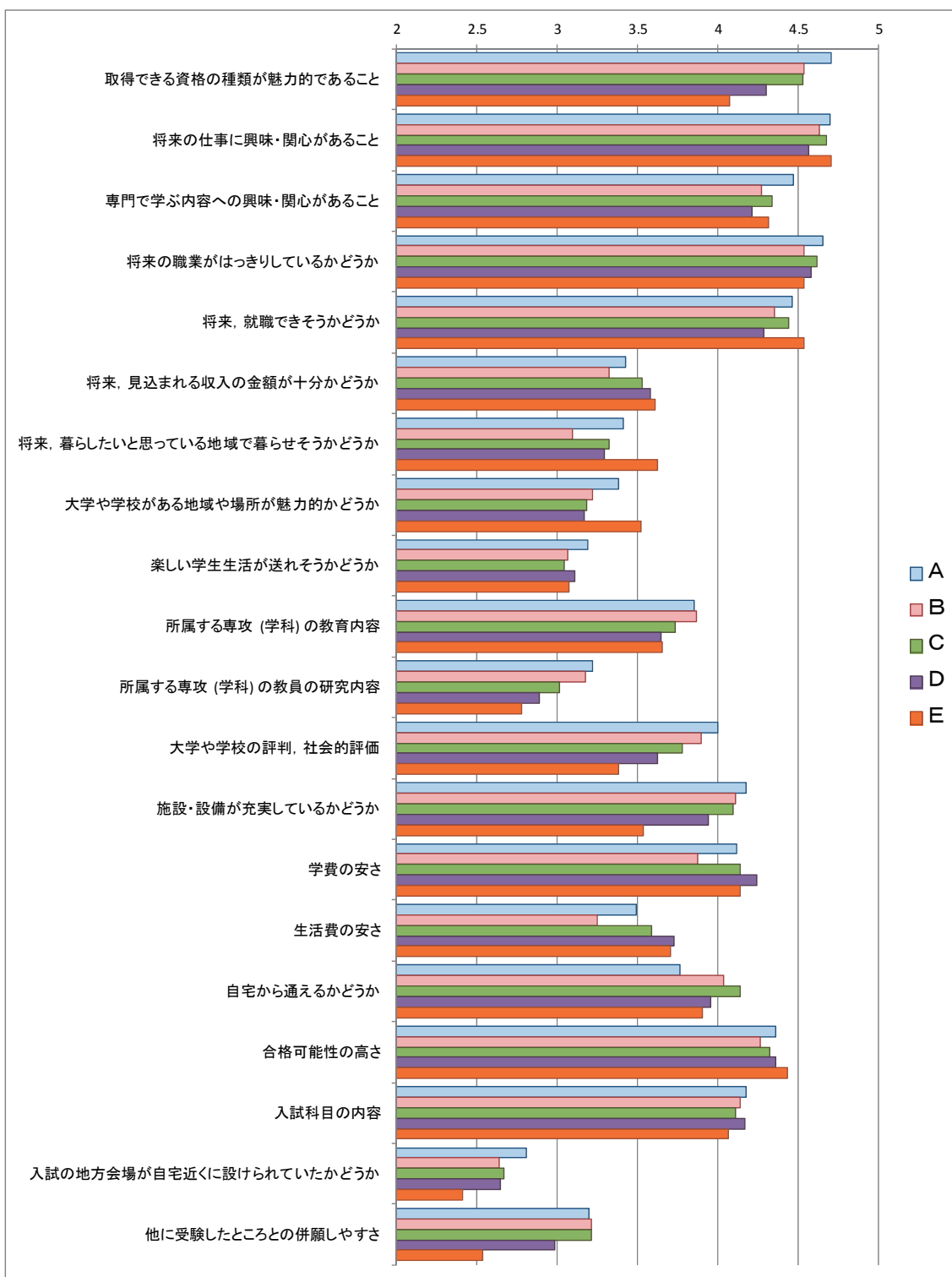


図9. 生徒たちが進学先への受験を決めた理由

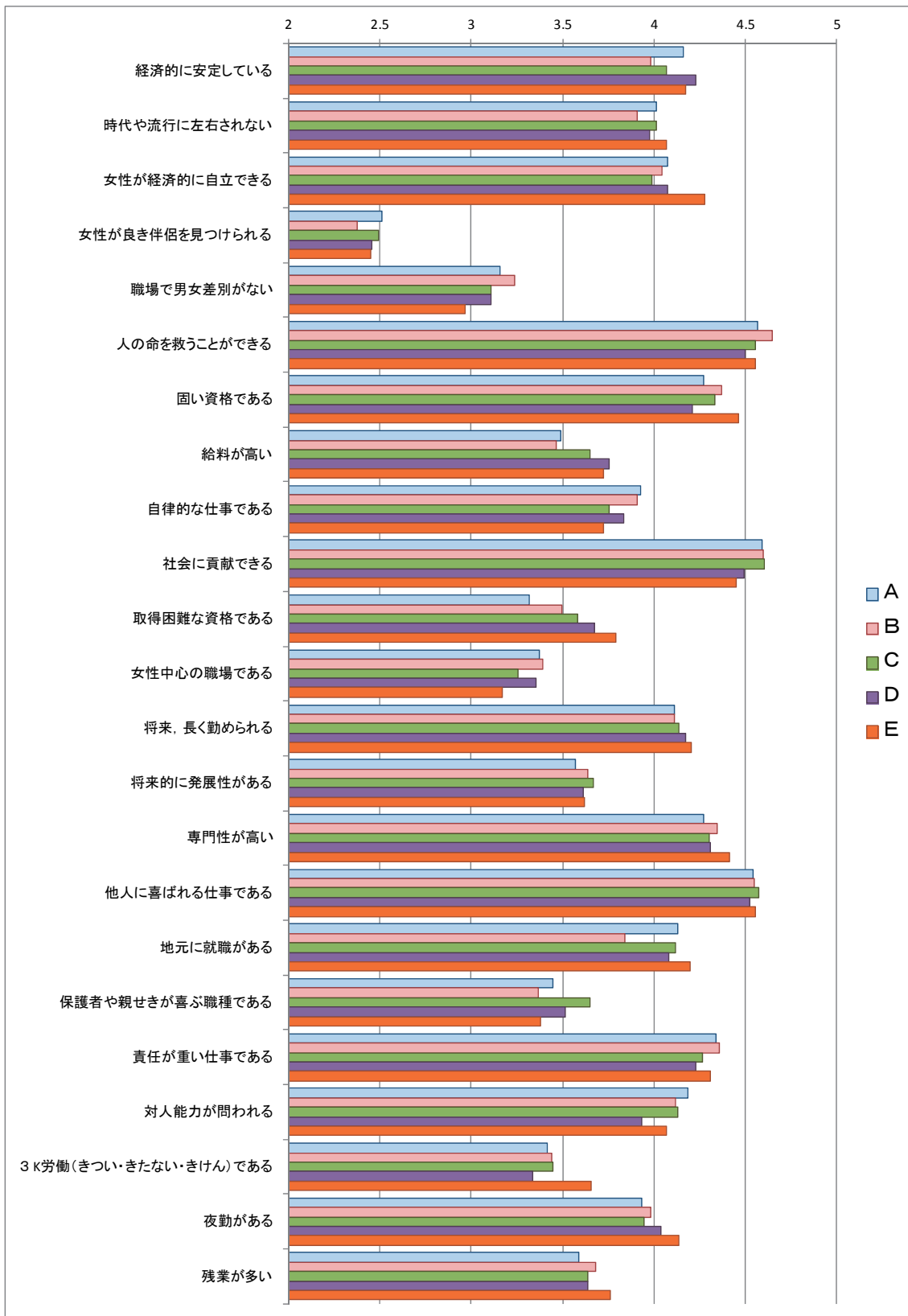


図10. 生徒たちが看護専門職に抱くイメージ

3. 2. 4 各高校における教員の進学指導

生徒に看護系の進路を勧める理由を尋ねた項目について、「全く理由にならない（1点）」「あまり理由にならない（2点）」「どちらとも言えない（3点）」「少し理由になる（4点）」「重要な理由になる（5点）」と得点を付与し、各項目に対する回答者の平均点を高校の分類別に示した（図11）。国公立大学等を目指す進学校になるにつれ平均点が高くなる項目は少なく、「入試で得意科目を活かせること」「入試の会場が近くに設けられること」など入試に関する項目が中心である一方で、非進学校になるにつれて平均点が高くなる項目は、「将来、経済的に安定した生活ができること」「職種が時代や流行に左右されないこと」「給料が高いこと」「取得困難な資格であること」「将来、長く勤められること」など、将来の生活に関心を寄せた理由が中心であった。また、Eにおいて特に平均が高い項目として、「女性が経済的に自立できること」「職場で男女差別がないこと」「女性中心の職場であること」「固い資格であること」「将来的に発展性があること」「他人に喜ばれる仕事であること」「地元就職があること」などが挙げられる。

次に、どのような生徒が看護系分野に進学することが向いていると感じているかを尋ねた項目について、「全く向いていると思わない（1点）」「あまり向いていると思わない（2点）」「どちらとも言えない（3点）」「少しは向いていると思う（4点）」「かなり向いていると思う（5点）」と得点を付与し、各項目に対する回答者の平均点を高校の分類別に示した（図12）。国公立大学等を目指す進学校になるにつれ平均点が高くなる項目は、「コミュニケーション能力が高い」「リーダーシップがある」「何事にも忍耐強い」「協調性がある」「他人の話を辛抱強く聞くことができる」などであった。逆に、非進学校になるにつれて平均点が高くなる項目は、「家庭に学費を賄う経済力がある」「従順に指示に従うことができる」などであった。

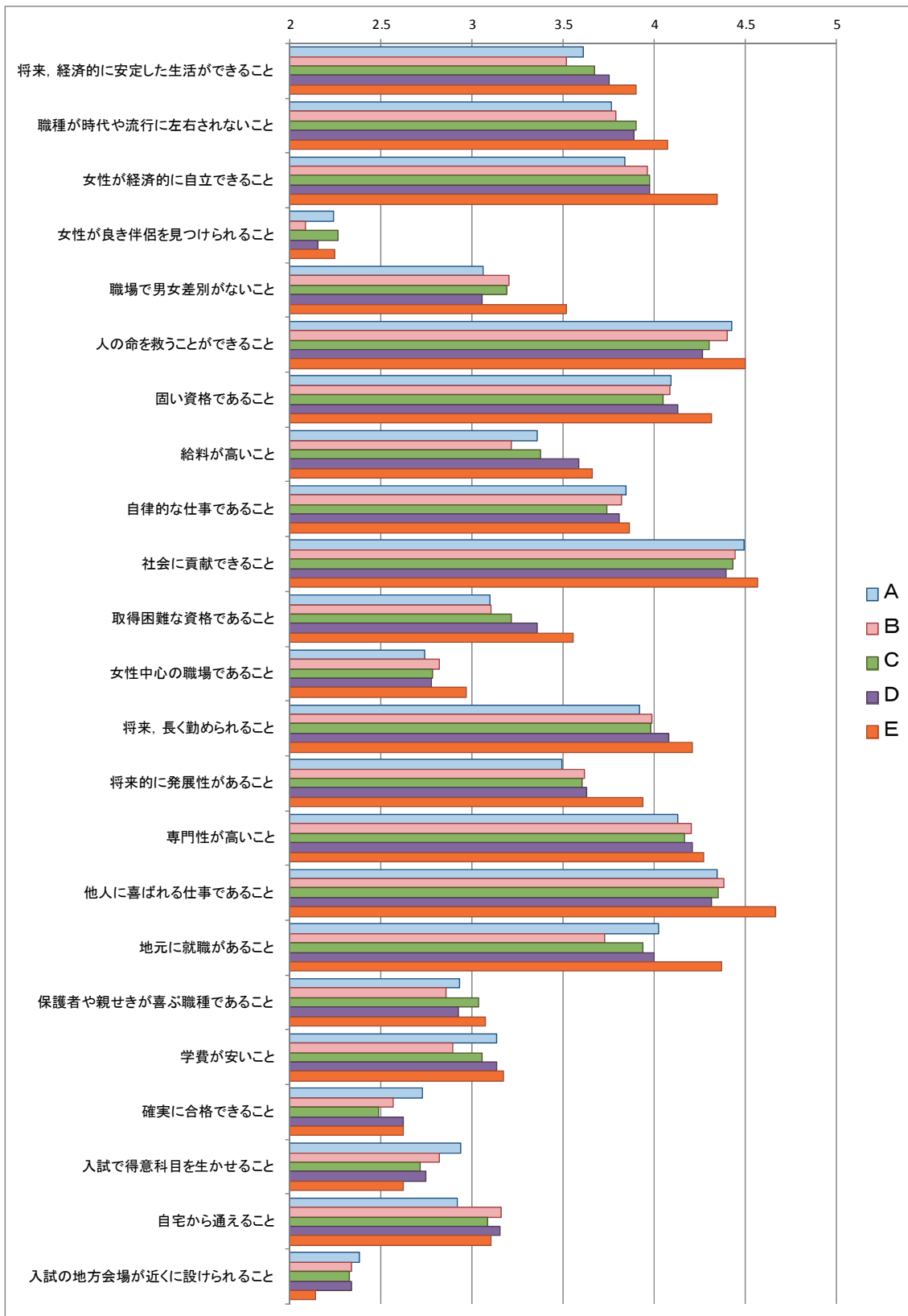


図 1 1. 看護系分野に進学を勧める理由

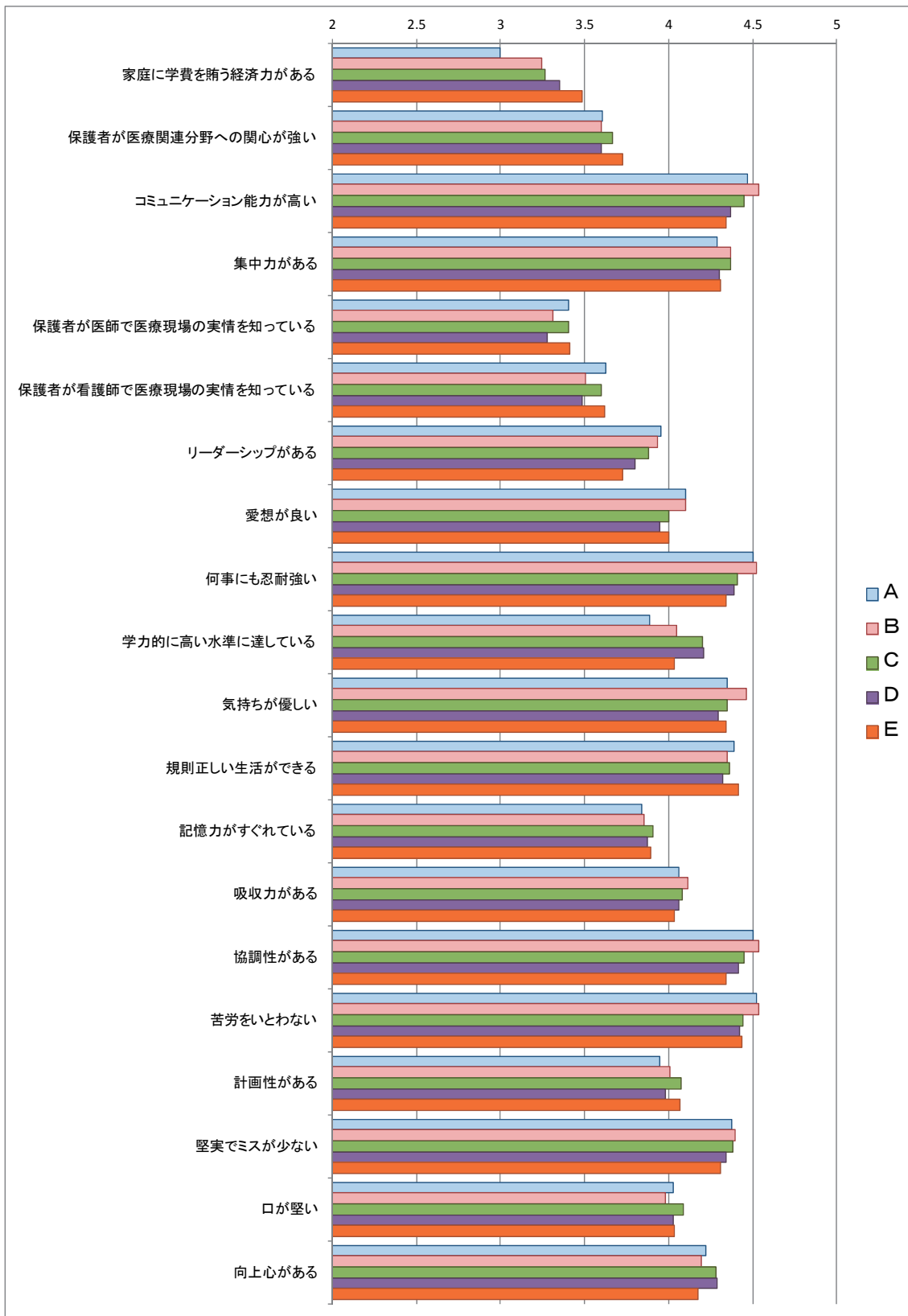


図 1 2. 看護系分野への進学が向いていると考えられる生徒像

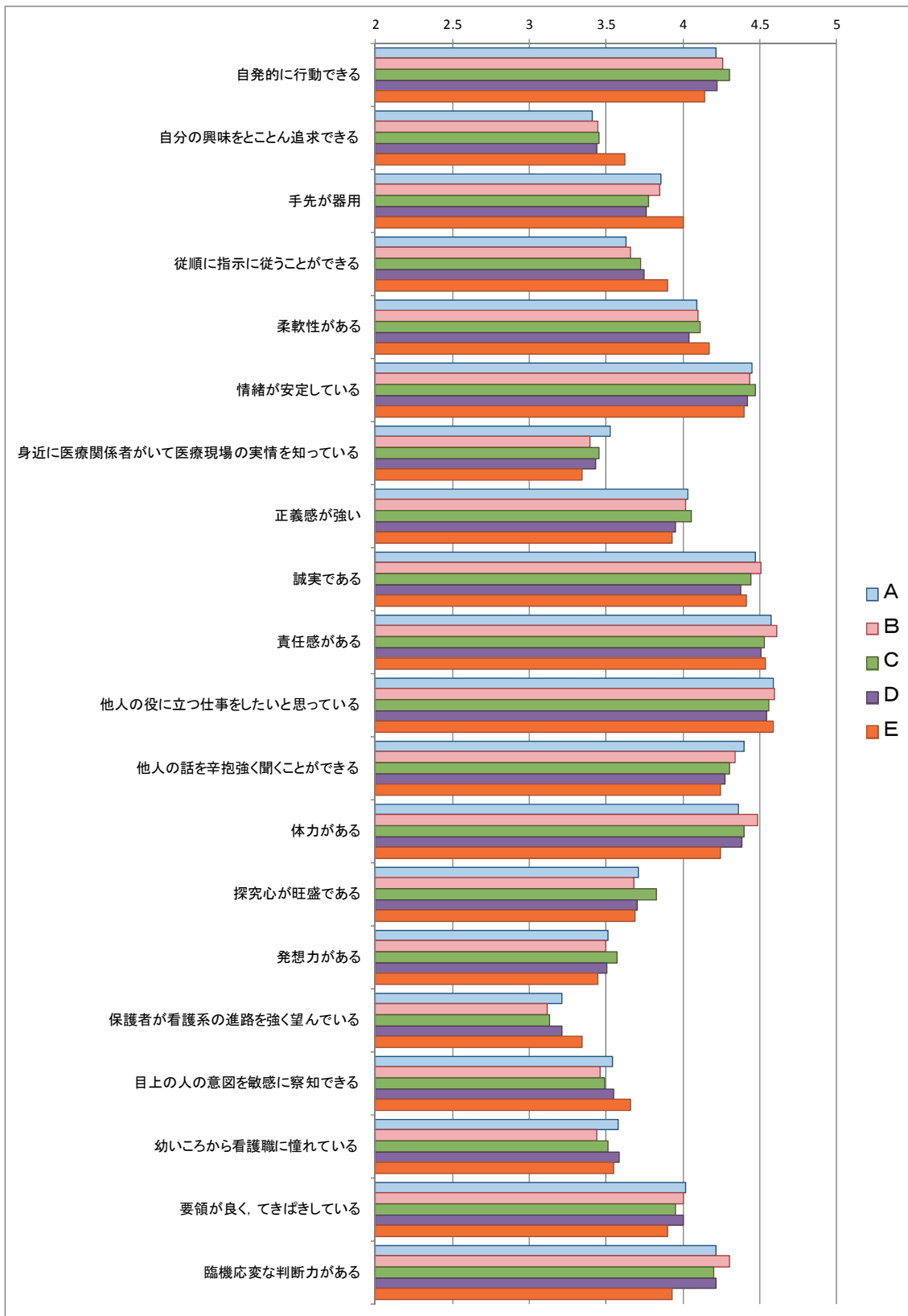


図 1 2. 看護系分野への進学が向いていると考えられる生徒像 (つづき)

4. まとめ

本稿では、高校で進路指導に関わる教員を対象としたアンケート調査を通し、看護師等の医療技術者や医療科学者を養成する分野への進学を志す高校生像について、進路における各高校の位置づけ（進学校、進路多様校、非進学校等の分類）を考慮した分析を行った。

その結果、「(A) 生徒の多くが国公立を目指す進学校」「(B) 生徒の多くが4年制大学を目指す進学校」「(C) 生徒の多くが大学・専門学校を目指す進学校」「(D) 進学志望・就職志望が混じる進路多様校」「(E) 生徒の多くが進学を目指さない非進学校」といった高校の性格の違いによって、看護系分野を目指す生徒の特徴が大きく異なることが示された。以下に、分析によって得られた特徴を整理する。

(分析によって得られた看護系進学希望者像)

- ① 高校分類によって、「主として大学」と「主として専門学校」と別れるものの、両者とも、「地元志向であること」「第一志望と考える割合が多いこと」「生徒本人の意見で受験先を決定する傾向があること」は共通している。
- ② 看護系への進学希望者の学力層では、DとEの高校において成績上位者層が進学を希望する傾向がみられる。
- ③ 入試区分では、AとBにおいて一般入試で受験する割合が高いものの、C、D、Eでは、推薦入試での受験が中心である。
- ④ 看護系で取得できる資格に対する認識は、非進学校になるにつれて取得が難しい資格であると認識されている。
- ⑤ 生徒を指導する教員が看護系分野への進学に向いていると感じる部分は、進学率が高くなるにつれて「コミュニケーション能力が高い」「リーダーシップがある」「何事にも忍耐強い」などの個人の性格やスキルの部分を挙げているのに対し、非進学校では、「家庭に学費を賄う経済力がある」などの経済的な要因を重視する傾向がみられる。

以上のように、進路に関する高校の位置づけによって、看護系分野への進学を希望する高校生像は多岐にわたることが示された。本調査は、高校教員から見た生徒像であり、生徒の意識を直接的に尋ねたものではないが、他の生徒と比較しながら多くの生徒を指導してきた教師による意見から得られた実態という点では貴重なデータだと言える。

こうした実態は、看護系分野の大学や専門学校が、どのように入学者を受入れることが適切なのかを検討するための材料となるだけでなく、高校におけるキャリア教育においても、各高校の性格に応じた適切な情報を提供するための視点となるだろう。本稿で示した全体像の把握をきっかけに、他の要因等を考慮したより詳細な分析が期待される。

第4章 看護系志望の高校生に求められる学力・適性に関する

高等学校進路指導教員の意識

倉元直樹（東北大学）

1. 問題と目的

1992年に制定された通称「人材確保法」をきっかけに、看護専門職業人の養成が急速に四大化している。必然的に看護系志望者の進路選択は大学入試の文脈に依存する状況となっている。金澤他（2011）は看護系大学の入試科目が多様化している状況を示した。倉元他（2011）、倉元他（2012）では、2,000名を超える看護系大学と専門学校の学生を対象とした調査から、設置者と学校種によって高校時代の履修履歴が多様であること、受験の理由によって入学後の適応度に違いが見られることを示した。以上の研究結果を受け、本研究では、送り出し側の高校進路指導教員に質問紙調査を行い、その意識を探ることとする。

2. 方法

特別支援学校等を除く全国 5,028 の高等学校、中等教育学校の中から無作為に抽出された 2,000 校を調査対象とした。2014 年 1 月に 8 ページから成る調査票を送付し、郵送方式で回収した。

1,319 校から回答が得られた（回収率 66.0%）。

3. 結果と考察

男子校や専門高校も含め、看護系を希望する生徒が「ほとんどいない」という回答は 14.2% に過ぎなかった。それらを除く 1,134 校からの回答を以下の分析対象とした。

3.1. 尺度化

不適応の原因（13 項目）、看護系を勧める理由（23 項目）、生徒が抱く看護のイメージ（23 項目）、教員が考える看護系の適性（40 項目）」について主因子法、プロマックス回転で因子分析を行い、14 尺度に項目をまとめた。結果の概要を Table.1 に示す。左から因子名、項目数、 α 信頼性係数である。因子間相関は.13～.62 であった。

Table.1 因子分析結果概要

不適応の原因 (3 因子)			イメージ (4 因子)		
対人配慮	4	.83	働き甲斐	5	.82
理解力	5	.86	生活安定	6	.81
環境/意欲	4	.72	労働条件	4	.81
勧める理由 (4 因子)			女性向き	3	.61
生活安定	6	.85	適性 (3 因子)		
働き甲斐	6	.82	総合	24	.96
受験	5	.76	利発	5	.81
女性向き	4	.70	環境	6	.82

3.2. 回答者の要因

回答者のプロフィール（性別，年齢）が結果に影響するか否かを調べた。回答者属性は全体で男性 818 名（79%），女性 223 名（21%），30 代以下 144 名（13%），40 代（35%），50 代以上（52%）であった。14 の尺度に対して行った 2 元配置の分散分析結果概要を Table.2 に示す。研究目的に鑑みると，回答者の属性は誤差要因なので，以後，除去して分析を試みることにした。左から尺度名，性別の効果，年齢の効果（有意に値が大きかった属性）を示す。なお，交互作用は見られなかった。

Table.2 分散分析結果概要

不適応の原因			イメージ		
対人配慮	—	—	働き甲斐	女	—
理解力	女	—	生活安定	女	40～
環境/意欲	男	—	労働条件	—	—
勧める理由			女性向き	—	40～
生活安定	女	50～	適性		
働き甲斐	女	40～	総合	女	—
受験	—	—	利発	女	—
女性向き	—	50～	環境	—	—

3.3. 進学実績の効果

調査対象校は該当する質問項目による回答から「国公立志向の進学校」～「非進学校」の 5 カテゴリーに分類された。「進路多様校」が 45%，それ以外は 6～18%であった。

看護志望者は「理系」「文系」のいずれで学ぶべきかという設問には、全体の50%が「理系」、42%が「どちらとも言えない」と回答した。男性回答者では進学実績によって有意な差 ($\chi^2[4]=25.3$, 「国公立志向」が「理系」72%, それ以外が33~59%)が見られたが、女性回答者では違いがなかった(29~55%)。14の尺度については、「不適応の原因」のうち「理解力」のみ進学実績に乏しい高校がより「心配」という結果であった。

全体に回答者個人の要因で結果が影響を受けた。

付記

本研究は、東北大学高等教育開発推進センター（当時）倫理委員会の承認を受けた。また、科学研究費補助金（課題番号22390405）の補助を受けた。計算は京都大学学術情報メディアセンターが提供するSASを利用した。

資料

Table A1. 高校教員が考える不適応の原因

	対人配慮 (第1因子)	理解力 (第2因子)	環境・意欲 (第3因子)	共通性
7. 病人の立場で考えられないために実習先で問題を起こす	0.613	0.071	-0.055	0.639
8. 大学や専門学校の友人関係で問題を起こす	0.562	-0.028	0.063	0.543
6. 集団行動ができない	0.513	-0.067	0.255	0.628
12. 時間を守るなど、基本的な生活習慣が確立できない	0.431	0.127	0.085	0.465
1. 基礎学力の不足で授業についていけない	-0.199	0.689	0.110	0.516
2. 薬の量などの計算や見積もりができない	0.123	0.584	0.036	0.599
3. 多様な症状やカルテの記述から患者の状態が見抜けない	0.260	0.577	-0.093	0.726
5. 聞く力が不足しており、口頭での指示が理解できない	0.326	0.467	0.025	0.701
4. 臨機応変な予測力、対応力に欠ける	0.275	0.424	-0.061	0.502
13. 保護者が過度に学校に干渉する	0.075	-0.005	0.673	0.646
10. 不本意入学のため、学習意欲がわからない	0.212	-0.098	0.509	0.503
9. 経済状況が苦しく、学費が続かない	-0.152	0.283	0.426	0.279
11. 過度の思い込みのため、現実が本人の期待と大きく異なる現実が本人の期待と大きく異なる	0.245	0.072	0.383	0.449
α 信頼性係数	0.834	0.860	0.721	
因子間相関				
第1因子		0.494	0.453	
第2因子			0.166	

Table A2. 高校教員が看護系を勧める理由

	生活安定 (第1因子)	働き甲斐 (第2因子)	受験 (第3因子)	女性向き (第4因子)	共通性
5. 将来、経済的に安定した生活ができること	0.723	-0.175	0.035	-0.057	0.633
9. 職種が時代や流行に左右されないこと	0.614	-0.001	0.000	-0.045	0.569
17. 女性が経済的に自立できること	0.574	0.046	-0.068	0.056	0.592
6. 給料が高いこと	0.455	0.003	-0.001	0.099	0.415
2. 将来、長く勤められること	0.409	0.260	-0.011	-0.019	0.500
1. 固い資格であること	0.405	0.222	-0.011	0.019	0.473
10. 社会に貢献できること	-0.068	0.721	-0.053	-0.019	0.620
13. 他人に喜ばれる仕事であること	-0.023	0.694	-0.006	-0.040	0.607
11. 人の命を救うことができること	-0.064	0.635	0.029	-0.008	0.491
18. 専門性が高いこと	0.143	0.505	0.026	-0.032	0.473
19. 自律的な仕事であること	0.141	0.386	0.004	0.089	0.368
3. 将来的に発展性があること	0.221	0.345	0.062	0.071	0.428
21. 確実に合格できること	0.003	-0.053	0.691	0.008	0.630
22. 入試で得意科目を生かせること	-0.029	0.061	0.690	-0.073	0.567
24. 入試の地方会場が近くに設けられること	-0.111	-0.048	0.465	0.199	0.418
20. 学費が安いこと	0.143	0.016	0.395	-0.013	0.280
23. 自宅から通えること	0.056	0.064	0.394	0.035	0.273
14. 女性中心の職場であること	-0.013	0.006	0.012	0.556	0.480
16. 女性が良き伴侶を見つけられること	-0.031	-0.110	0.052	0.539	0.445
15. 職場で男女差別がないこと	0.153	0.128	-0.038	0.366	0.385
8. 保護者や親せきが喜ぶ職種であること	0.124	0.005	0.188	0.305	0.371
4. 取得困難な資格であること	0.135	0.171	0.016	0.280	0.322
7. 地元で就職があること	0.276	0.227	0.121	-0.014	0.330

α 信頼性係数 0.851 0.823 0.764 0.699

因子間相関

第1因子	0.504	0.276	0.460
第2因子		0.125	0.244
第3因子			0.484

Table A3. 看護系に進学する生徒が看護系に抱くイメージ

	働き甲斐 (第1因子)	生活安定 (第2因子)	労働条件 (第3因子)	女性向き (第4因子)	共通性
10. 社会に貢献できる	0.678	-0.020	-0.010	-0.118	0.587
11. 人の命を救うことができる	0.650	-0.019	-0.049	-0.020	0.556
13. 他人に喜ばれる仕事である	0.649	0.034	-0.017	-0.099	0.583
20. 責任が重い仕事である	0.464	-0.070	0.230	0.064	0.457
18. 専門性が高い	0.453	0.105	-0.012	0.087	0.434
5. 将来、経済的に安定した生活ができる	-0.068	0.757	-0.019	-0.172	0.687
9. 職種が時代や流行に左右されない	0.024	0.518	0.018	0.043	0.472
17. 女性が経済的に自立できる	0.034	0.455	0.007	0.177	0.505
6. 給料が高い	-0.067	0.439	-0.024	0.104	0.326
2. 将来、長く勤められる	0.169	0.345	0.021	0.107	0.402
1. 固い資格である	0.269	0.328	0.016	0.000	0.405
24. 残業が多い	-0.046	-0.005	0.781	0.004	0.708
23. 夜勤がある	0.019	0.081	0.768	-0.083	0.712
22. 3K労働(きつい・きたない・きけん)である	-0.022	-0.044	0.622	0.073	0.487
21. 対人能力が問われる	0.288	-0.031	0.362	0.040	0.376
15. 男女差別がない	0.034	0.041	-0.057	0.525	0.411
16. 女性が良き伴侶を見つけられる	-0.205	-0.019	0.022	0.525	0.344
14. 女性中心の職場である	0.033	0.042	0.091	0.437	0.359
3. 将来的に発展性がある	0.211	0.170	-0.066	0.290	0.373
8. 保護者や親せきが喜ぶ職種である	0.014	0.194	0.071	0.241	0.237
19. 自律的な仕事である	0.244	0.121	-0.081	0.238	0.293
4. 取得困難な資格である	0.186	0.087	0.082	0.198	0.235
7. 地元就職がある	0.141	0.205	0.103	0.072	0.214

α 信頼性係数 0.815 0.811 0.807 0.614

因子間相関

第1因子	0.491	0.332	0.322
第2因子		0.175	0.465
第3因子			0.328

Table A4. 高校教員が考える看護系の適性

	総合 (第1因子)	利発 (第2因子)	環境 (第3因子)	共通性
18. 協調性がある	0.670	-0.036	-0.042	0.655
26. 何事にも忍耐強い	0.670	-0.085	-0.005	0.618
30. 責任感がある	0.660	-0.047	-0.019	0.638
22. 苦勞をいとわない	0.655	-0.070	0.006	0.610
29. 誠実である	0.631	-0.021	0.018	0.622
12. コミュニケーション能力が高い	0.587	-0.056	-0.013	0.491
24. 情緒が安定している	0.574	0.009	-0.024	0.534
8. 堅実でミスが少ない	0.573	0.038	-0.029	0.568
40. 集中力がある	0.571	0.039	-0.043	0.560
7. 規則正しい生活ができる	0.562	0.014	-0.004	0.524
11. 体力がある	0.539	0.019	-0.043	0.479
13. 他人の話を辛抱強く聞くことができる	0.521	0.084	-0.008	0.537
25. 気持ちが良い	0.507	0.019	0.035	0.447
21. 他人の役に立つ仕事をしたいと思っている	0.463	-0.016	0.082	0.359
36. 吸収力がある	0.435	0.229	-0.024	0.589
37. 臨機応変な判断力がある	0.422	0.103	0.033	0.406
15. 愛想が良い	0.403	0.051	0.125	0.361
33. 記憶力がすぐれている	0.369	0.281	0.029	0.582
23. 自発的に行動できる	0.363	0.296	-0.090	0.549
19. 口が堅い	0.362	0.255	-0.028	0.500
10. 要領が良く、てきぱきしている	0.359	0.130	0.090	0.370
27. 柔軟性がある	0.355	0.297	-0.007	0.567
32. 学力的に高い水準に達している	0.333	0.175	-0.004	0.350
14. リーダーシップがある	0.310	0.179	0.133	0.386
35. 発想力がある	0.015	0.580	0.009	0.596
39. 探究心が旺盛である	0.038	0.574	-0.030	0.595
38. 自分の興味をとことん追求できる	-0.079	0.546	0.021	0.440
17. 目上の人の意図を敏感に察知できる	0.060	0.352	0.233	0.398
9. 手先が器用	0.217	0.310	0.091	0.423
3. 保護者が看護師で医療現場の実情を知っている	0.051	-0.052	0.788	0.678
1. 身近に医療関係者がいて医療現場の実情を知っている	0.071	-0.048	0.733	0.600
4. 保護者が開業医で医療現場の実情を知っている	-0.018	0.001	0.717	0.563
5. 保護者自身が医療関連分野への関心が強い	0.044	-0.017	0.548	0.340
2. 保護者が看護系の進路を強く望んでいる	-0.137	0.115	0.526	0.338
20. 幼いころから看護職に憧れている	-0.054	0.162	0.395	0.247
34. 計画性がある	0.363	0.323	-0.065	0.603
31. 向上心がある	0.346	0.331	-0.077	0.585
28. 正義感が強い	0.290	0.214	0.146	0.415
16. 従順に指示に従うことができる	0.190	0.232	0.149	0.311
6. 家庭に学費を賄う経済力がある	0.087	0.025	0.288	0.129

α 信頼性係数 0.956 0.810 0.820

因子間相関

第 1 因子	0.616	0.210
第 2 因子		0.310

Table B1. 対人配慮（不適応の原因）に関する分散分析表

要因	自由度	平方和	平均平方	F	p
性別	1	2.69	2.69	0.20	0.66
年代	2	76.50	38.25	2.81	0.06
性別×年代	2	30.65	15.33	1.13	0.32
残差	981	13332.23	13.59		
合計	986	13439.85			

Table B2. 理解力（不適応の原因）に関する分散分析表

要因	自由度	平方和	平均平方	F	p
性別	1	139.70	139.70	6.37	0.01*
年代	2	67.24	33.62	1.53	0.22
性別×年代	2	21.65	10.83	0.49	0.61
残差	984	21565.67	21.92		
合計	989	21803.72			

*: $p < .05$, 男性 < 女性

Table B3. 環境・意欲（不適応の原因）に関する分散分析表

要因	自由度	平方和	平均平方	F	p
性別	1	71.34	71.34	7.25	0.01*
年代	2	3.70	1.85	0.19	0.83
性別×年代	2	0.92	0.46	0.05	0.95
残差	980	9643.19	9.84		
合計	985	9723.26			

*: $p < .05$, 男性 > 女性

Table B4. 生活安定（勧める理由）に関する分散分析表

要因	自由度	平方和	平均平方	F	p
性別	1	729.26	729.26	41.36	0.00*
年代	2	168.09	84.04	4.77	0.01**
性別×年代	2	23.66	11.83	0.67	0.51
残差	978	17245.97	17.63		
合計	983	18119.90			

*: $p < .001$, 男性 < 女性**: $p < .05$, 30歳代以下 < 50歳代以上

Table B5. 働き甲斐（勧める理由）に関する分散分析表

要因	自由度	平方和	平均平方	F	p
性別	1	354.05	354.05	29.00	0.00*
年代	2	212.75	106.37	8.71	0.00**
性別×年代	2	24.43	12.21	1.00	0.37
残差	982	11990.73	12.21		
合計	987	12561.32			

*: $p < .001$, 男性 < 女性**: $p < .0001$, 30歳代以下 < 40歳代, 50歳代以上

Table B6. 受験（勧める理由）に関する分散分析表

要因	自由度	平方和	平均平方	F	p
性別	1	1.23	1.23	0.09	0.76
年代	2	48.12	24.06	1.81	0.16
性別×年代	2	7.81	3.90	0.29	0.75
残差	953	12651.96	13.28		
合計	958	12708.16			

Table B7. 女性向き（勤める理由）に関する分散分析表

要因	自由度	平方和	平均平方	F	p
性別	1	13.97	13.97	1.79	0.18
年代	2	73.84	36.92	4.72	0.01**
性別×年代	2	70.18	35.09	4.49	0.01*
残差	974	7610.60	7.81		
合計	979	77771.85			

*: $p < .05$, 多重比較の結果, 有意差なし

** : $p < .05$, 30歳代以下 < 40歳代, 50歳代以上

Table B8. 働き甲斐（イメージ）に関する分散分析表

要因	自由度	平方和	平均平方	F	p
性別	1	237.05	237.05	34.91	0.00*
年代	2	37.15	18.58	2.74	0.07
性別×年代	2	4.98	2.49	0.37	0.69
残差	996	6763.36	6.79		
合計	1001	7027.01			

*: $p < .05$, 男性 < 女性

Table B9. 生活安定（イメージ）に関する分散分析表

要因	自由度	平方和	平均平方	F	p
性別	1	820.75	820.75	69.50	0.00*
年代	2	120.84	60.42	5.12	0.01**
性別×年代	2	46.80	23.40	1.98	0.14
残差	983	11609.07	11.81		
合計	988	12571.06			

*: $p < .001$, 男性 < 女性

** : $p < .01$, 30歳代以下 < 40歳代, 50歳代以上

Table B10. 労働条件（イメージ）に関する分散分析表

要因	自由度	平方和	平均平方	F	p
性別	1	8.74	8.74	0.93	0.33
年代	2	37.34	18.67	1.99	0.14
性別×年代	2	0.35	0.18	0.02	0.98
残差	985	9234.63	9.38		
合計	990	9278.89			

Table B11. 女性向き（イメージ）に関する分散分析表

要因	自由度	平方和	平均平方	F	p
性別	1	0.66	0.66	0.14	0.70
年代	2	50.37	25.19	5.49	0.00*
性別×年代	2	14.08	7.04	1.53	0.22
残差	967	4436.94	4.59		
合計	972	4502.59			

**： p < .01, 30歳代以下 < 40歳代, 50歳代以上

Table B12. 総合（適性）に関する分散分析表

要因	自由度	平方和	平均平	F	p
性別	1	4169.62	4169.62	29.12	0.00*
年代	2	426.57	213.29	1.49	0.23
性別×年代	2	332.15	166.07	1.16	0.31
残差	982	140632.81	143.21		
合計	987	145350.26			

*: p < .001, 男性 < 女性

Table B13. 利発（適性）に関する分散分析表

要因	自由度	平方和	平均平方	F	p
性別	1	103.17	103.17	12.01	0.00*
年代	2	40.39	20.19	2.35	0.10
性別×年代	2	20.73	10.36	1.21	0.30
残差	999	8580.67	8.59		
合計	1004	8750.98			

*: $p < .001$, 男性 < 女性

Table B14. 環境（適性）に関する分散分析表

要因	自由度	平方和	平均平方	F	p
性別	1	5.61	5.61	0.39	0.53
年代	2	13.23	6.62	0.46	0.63
性別×年代	2	33.07	16.53	1.15	0.32
残差	1002	14398.66	14.37		
合計	1007	14452.00			

Table C1. 対人配慮（不適応の原因）に関する分散分析表

要因	自由度	平方和	平均平方	F	p
進学実績	4	63.367	15.84	1.13	0.34
残差	1059	14807.50	13.98		
合計	1063	14870.87			

Table C2. 理解力（不適應の原因）に関する分散分析表

要因	自由度	平方和	平均平方	F	p
進学実績	4	1504.83	376.21	18.54	0.00*
性別	1	79.64	79.64	3.92	0.05
進学実績×性別	4	184.95	46.24	2.28	0.06
残差	969	19665.58	20.29		
合計	978	21537.06			

*: $p < .001$,

国公立大学志向の進学校 < 4年制大学志向の進学校, 大学・専門学校志向の進学校
進路多様校, 非進学校

4年制大学志向の進学校 < 大学・専門学校志向の進学校, 進路多様校

Table C3. 環境・意欲（不適應の原因）に関する分散分析表

要因	自由度	平方和	平均平方	F	p
進学実績	4	37.67	9.42	0.96	0.43
性別	1	88.79	88.79	9.04	0.00
進学実績×性別	4	49.74	12.44	1.27	0.28
残差	965	9475.13	9.82		
合計	974	9639.75			

Table C4. 生活安定（勤める理由）に関する分散分析表

要因	自由度	平方和	平均平方	F	p
進学実績	4	132.27	33.07	1.87	0.11
性別	1	693.62	693.62	39.15	0.00
年代	2	182.52	91.26	5.15	0.01
進学実績×性別	4	30.83	7.71	0.44	0.78
進学実績×年代	8	94.79	11.85	0.67	0.72
性別×年代	2	23.57	11.78	0.67	0.51
進学実績×性別×年代	8	126.80	15.85	0.89	0.52
残差	943	16707.07	17.72		
合計	972	17970.99			

Table C5. 働き甲斐（勧める理由）に関する分散分析表

要因	自由度	平方和	平均平方	F	p
進学実績	4	39.84	9.96	0.80	0.52
性別	1	324.80	324.80	26.21	0.00
年代	2	212.91	106.45	8.59	0.00
進学実績×性別	4	27.89	6.97	0.56	0.69
進学実績×年代	8	83.86	10.48	0.85	0.56
性別×年代	2	31.32	15.66	1.26	0.28
進学実績×性別×年代	8	49.30	6.16	0.50	0.86
残差	947	11737.21	12.39		
合計	976	12501.79			

Table C6. 受験（勧める理由）に関する分散分析表

要因	自由度	平方和	平均平方	F	p
進学実績	4	28.84	7.21	0.54	0.71
残差	1032	13741.82	13.32		
合計	1036	13770.66			

Table C7. 女性向き（勧める理由）に関する分散分析表

要因	自由度	平方和	平均平方	F	p
進学実績	4	43.20	10.80	1.40	0.23
年代	2	93.66	46.83	6.06	0.00
進学実績×年代	8	103.87	12.98	1.68	0.10
残差	1016	7850.84	7.73		
合計	1030	8089.44			

Table C8. 働き甲斐（イメージ）に関する分散分析表

要因	自由度	平方和	平均平方	F	p
進学実績	4	18.19	4.55	0.66	0.62
性別	1	224.90	224.90	32.86	0.00
進学実績×性別	4	28.97	7.24	1.06	0.38
残差	981	6713.75	6.84		
合計	990	6979.67			

Table C9. 生活安定（イメージ）に関する分散分析表

要因	自由度	平方和	平均平方	F	p
進学実績	4	72.36	18.09	1.52	0.19
性別	1	818.16	818.16	68.95	0.00
年代	2	138.37	69.19	5.83	0.00
進学実績×性別	4	58.33	14.58	1.23	0.30
進学実績×年代	8	68.70	8.59	0.72	0.67
性別×年代	2	18.51	9.25	0.78	0.46
進学実績×性別×年代	8	74.27	9.28	0.78	0.62
残差	948	11248.62	11.87		
合計	977	12484.51			

Table C10. 労働条件（イメージ）に関する分散分析表

要因	自由度	平方和	平均平方	F	p
進学実績	4	21.69	5.42	0.59	0.67
残差	1062	9819.16	9.25		
合計	1066	9840.85			

Table C11. 女性向き（イメージ）に関する分散分析表

要因	自由度	平方和	平均平方	F	p
進学実績	4	8.06	2.02	0.45	0.77
年代	2	50.84	25.42	5.66	0.00
進学実績×年代	8	48.17	6.02	1.34	0.22
残差	1008	4528.87	4.50		
合計	1022	4636.87			

Table C12. 総合（適性）に関する分散分析表

要因	自由度	平方和	平均平方	F	p
進学実績	4	732.36	183.09	1.27	0.28
性別	1	4356.53	4356.53	30.25	0.00
進学実績×性別	4	606.47	151.62	1.05	0.38
残差	969	139547.85	144.01		
合計	978	144978.01			

Table C13. 利発（適性）に関する分散分析表

要因	自由度	平方和	平均平方	F	p
進学実績	4	17.28	4.32	0.50	0.74
性別	1	115.39	115.39	13.26	0.00
進学実績×性別	4	21.12	5.28	0.61	0.66
残差	984	8564.78	8.70		
合計	993	8713.09			

Table C14. 利発（環境）に関する分散分析表

要因	自由度	平方和	平均平方	F	p
進学実績	4	43.32	10.83	0.76	0.55
残差	1080	15367.59	14.23		
合計	1084	15410.91			

Table C15. 看護は「理系」か「文系」かに関するクロス集計表（男性教員）¹

	1	2	3	4	5	合計
1. 理系	120	82	56	155	6	419
3. どちらとも言えない	46	57	52	147	12	314
合計	166	139	108	302	18	733

1: 国公立志向の進学校, 2: 4年生大学志向の進学校, 3: 大学・専門学校志向の進学校
4: 進路多様校, 5: 非進学校

$\chi^2[4]=25.3, P < .001$

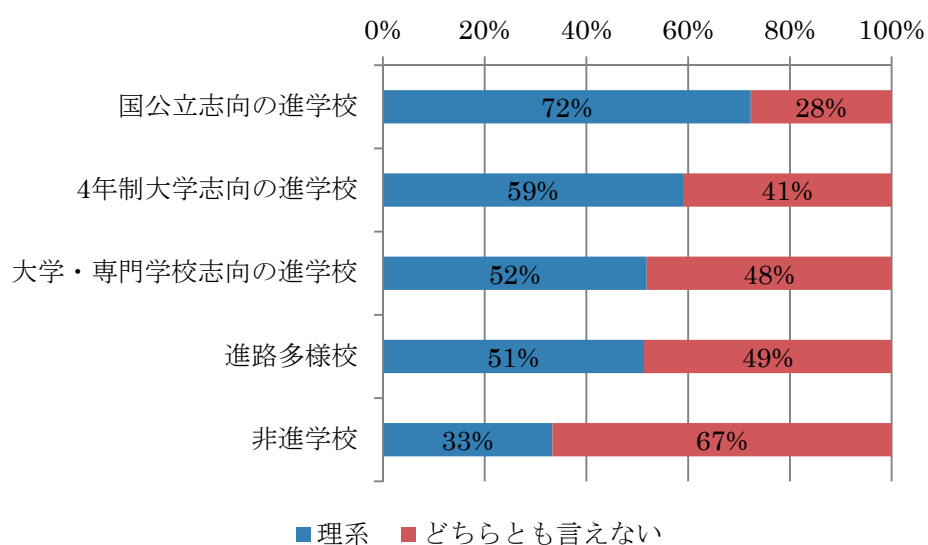


Figure C1. 看護は「理系」²か「文系」かに関する構成比（男性教員）

¹ 「理系」「どちらとも言えない」以外は削除。

² 「理系」「どちらとも言えない」以外は削除。

Table C15-2. 看護は「理系」か「文系」かに関するクロス集計表（女性教員）³

	1	2	3	4	5	合計
1. 理系	12	21	16	44	2	95
3. どちらとも言えない	10	17	14	55	5	101
合計	22	38	30	99	7	196

1: 国公立志向の進学校, 2: 4年生大学志向の進学校, 3: 大学・専門学校志向の進学校
4: 進路多様校, 5: 非進学校

$\chi^2[4]=3.1, P > .05$

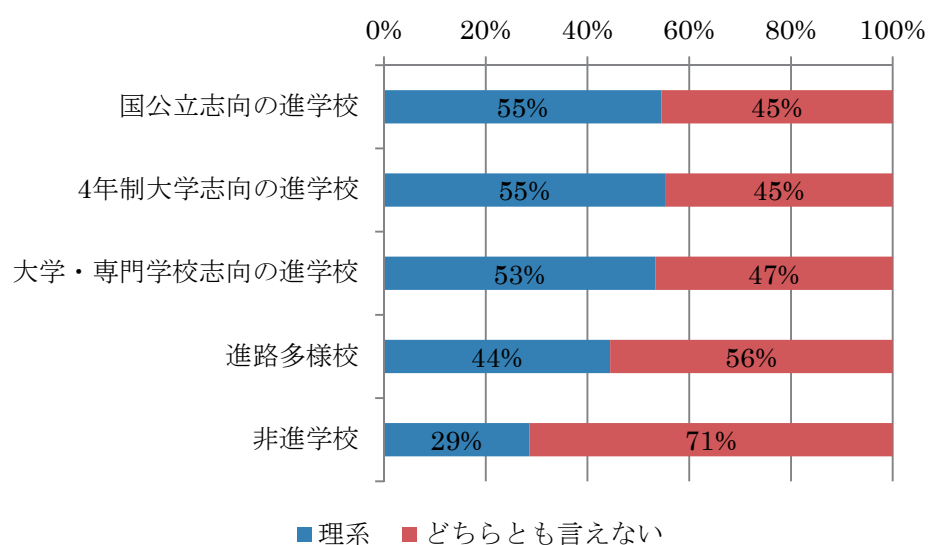


Figure C2. 看護は「理系」か「文系」かに関する構成比（女性教員）⁴

³ 「理系」「どちらとも言えない」以外は削除。

⁴ 「理系」「どちらとも言えない」以外は削除。

第Ⅲ部 海外調査

台湾大学における看護教育カリキュラムと入試について

吉沢豊予子・倉元直樹（東北大学）

平成 22 (2010) 年 12 月 21 日 (火) に国立台湾大学医学部看護学科（國立臺灣大學醫學院護理學系所: Department of Nursing, College of Medicine, National Taiwan University, 臺北市仁愛路一段一號護理學系所）を訪問し，入手した資料を翻訳したものである。

なお，原資料は中間報告書に掲載されている。

台湾大学看護学士クラスの教育目標

- 理論知識応用を主要とし、学生の思考及び問題解決能力を強化し、卒業生に看護の専門業務を気に入ってもらい、且つ看護業務を堪能する事を希望します。

2010/12/20

1

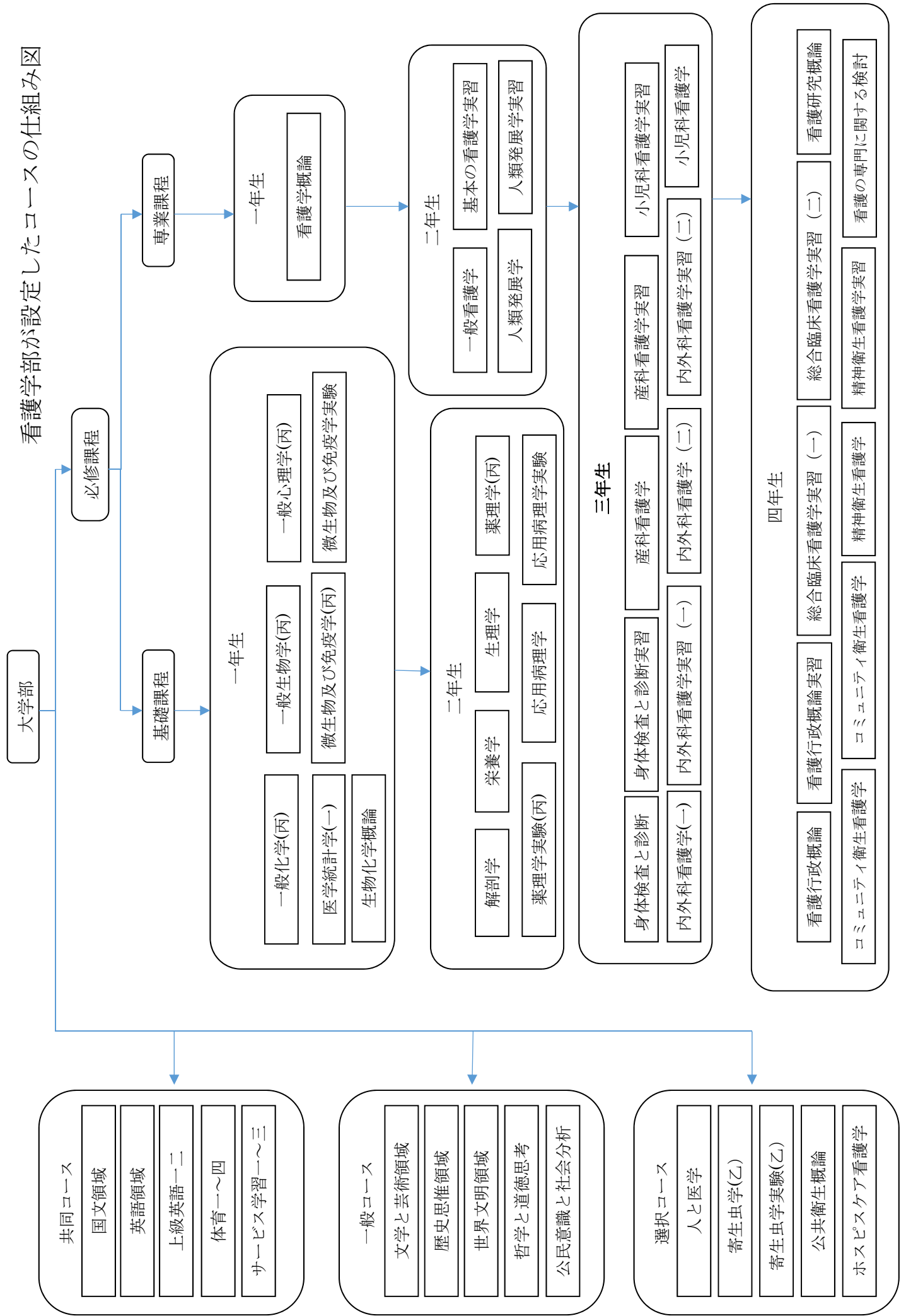
学士クラスの卒業生の核心能力

- 専門技能面－批判性思考の能力
- 専門技能面－一般臨床看護技能
- 専門技能面－基礎生物医学科学
- 専門技能面－コミュニケーションと連携
- 専門人文素質面－関心と愛
- 専門人文素質面－倫理素養
- 専門人文素質面－職務に対する責任感
- 自己成長－終身学習

2010/12/20

2

看護学部が設定したコースの仕組み図



国立台湾大学看護学部必修科目表 (99 学年度以後の入学生に適用)

【一年生】

	授業科目	単位
前学期	国文領域の科目 (上)	3
	英文領域の科目 (上)	3
	看護学概論	2
	一般生物学 (丙)	3
	一般化学 (丙)	3
	生物統計学 (一)	3
	体育 (一)	1
	サービス学習 (一)	0
	合計 (体育の単位を含めていない)	17
	後学期	国文領域の科目 (下)
英文領域の科目 (下)		3
生物化学概論		2
微生物学と免疫学 (丙)		2
微生物学と便益学実験 (丙)		2
一般心理学		3
体育 (二)		1
合計 (体育の単位を含めていない)		15
総計 (体育の単位を含めていない)	32	

【二年生】

	授業科目	単位	
前学期	生理学	4	
	解剖学	3	
	栄養学	2	
	人類発展学	2	
	人類発展学の実習	2	
	サービス学習 (二)	0	
	体育 (三)	1	
	合計 (体育の単位を含めていない)	13	
	後学期	基本看護学	2
		基本看護学の実習	2
薬理学		3	
薬理学実験		1	
応用病理学		2	
応用病理学実験		1	
体育 (四)		1	
合計 (体育の単位を含めていない)		11	
総計 (体育の単位を含めていない)	24		

【三年生】

授業科目	単位
身体検査と診断	1
身体検査と診断の実習	1
産科の看護学	3
産科看護学の実習	3
内外科看護学 (一)	3
内外科看護学実習 (一)	3
サービス学習 (三)	0
合計	14
小児科看護学	3
小児科看護学実習	3
内外科看護学 (二)	3
内外科看護学実習 (二)	3
合計	12
総計	26

【四年生】

授業科目	単位
精神衛生看護学	3
精神衛生看護学実習	3
看護研究概論	2
看護行政概論	2
看護行政概論実習	3
総合臨床看護学実習 (一)	3
合計	16
看護専門問題の検討	1
コミュニティ衛生看護学	3
コミュニティ衛生看護学実習	3
総合臨床看護学実習 (二)	3
合計	10
総計	26

一、共同必修科目 12 単位 (国文 6、外国語 6 を含む)。

二、サービス学習クラス (一) (二) (三) は必修科目であるが、0 単位です。

三、体育は 4 単位が必修であるが、卒業の合計単位数内に計上しません。

四、卒業履修最低単位数 (128) = 共同必修単位 (12) + 一般教育単位 (18) + 学部必修単位 (96) + 履修する選択単位 (2)。

2010年台湾大学(国立)看護学部の入学選考		学科の能力測定の選出方法						選考合計成績の得点計算方法及び合計成績に占める比率				選考成績が同点である際の順番
		第一段階			第二段階			指定項目	検定	選考成績の占める比率		
		科目	検定	選出倍率	得点計算方法	選考成績の占める比率	審査資料					
学校推薦個人申請	学部番号	001261	国文	--	*1.00		審査資料		--	10%	一、面接	
	募集員数	1	英語	平均値	*1.25				--	40%	二、学科能力試験の成績	
	性別要求	無	数学	--	*1.00	50%					三、審査資料	
	選考予定人数	3	社会	--	*1.00							
	離島増額員数	無	自然	平均値	*1.00							
	指定項目 選考費用	1500	合計	--	--							
	学部番号	001262	国文	--	--	*1.00	審査資料		--	10%	一、面接	
	募集員数	9	英語	平均値	*1.25				--	40%	二、学科能力試験の成績	
	性別要求	無	数学	--	*1.00	50%					三、審査資料	
	選考予定人数	27	社会	--	--	*1.00						
	原住民プラス人数	無	自然	平均値	*1.00							
	指定項目 選考費用	1500	合計	--	--	--						
指定項目 選考通知の郵送	2010.3.25	指定項目内容 項目：1. 歴年の成績表 2. 自伝 3. 読書計画。 説明：審査資料は1式2部。										
応募資料を受取るの締切(消印を準拠)	2010.3.29	1. 面接時間：4月10日午前8:30より。 2. 面接場所：台北市中正区徐州路1号4F、台湾大学看護学部館(二)(中華芸芸館4F)。 3. 面接の関連資料は電話で問い合わせ或は本学部のサイト/最新公告にて検索してください。										
指定項目の選考日付	2010.4.10	説明										
結果を発表	2010.4.19	備考										
選考合計成績の再確認の締切(消印を準拠)	2010.4.22	1. 連絡電話：(02) 23123456 内線 88431 或は 62228 (メッセージ)。2. 本学部のサイトの： http://www.mc.ntu.edu.tw/department/nurse/ 3. 本学部の「学校推薦」は1名の候補、「個人申請」は5名の候補を取り入れます。但し、応募員数が不足している際は候補生を取り入れません。4. 視覚、言語、聴力、行動、精神にひどい障害及び色の識別異常を有する者は慎重に考慮すべきです。5. 第一段階の選別を通った者は3月25日9:00より http://reg.aca.ntu.edu.tw/99app.asp へ本校の関連規定を閲覧し、且つ関連対応に協力して下さい。										

学校推薦：推薦条件	
一、具体条件：	二、在学の成績：要求項目に点数を記載しない場合は、%で推薦するのみです。 英語30%化学30%
部活（無）	
参加	
試合（無）	
成果	
学生（無）	
幹部	三、特別条件： 視覚、言語、聴力、行動、精神にひどい障害及び色の識別異常を有する者は慎重に考慮すべきです。

大学指定科目試験

一、試験の目標

指定科目試験は大学が人材を選ぶために設計したもので、試験の目標は学生が把握すべき学科の知識及び資料に対する読解、判断等能力、推理、分析等の思考能力、表現力及び学科知識に対する応用能力を測定するためです。大学の人材選びの命題且つ高校の授業を考慮した上、指定科目試験の測定目標は下記の四項目であることを纏めます：

1. 学生の重要学科の知識に対する了解度を測定。
2. 学生の資料に対する読解、判断、推理、分析等能力を測定。
3. 学生の表現の能力を測定。
4. 学生の学科知識に対する応用能力を測定。

二、試験の時間

各科目の試験時間は80分です。将来は実際の需要に合わせて、適切な調整があるかもしれません。

三、試験科目と範囲

原則上、指定科目試験は九五課綱（訳注：教育部が民国95年【2006年】に実施する一般高校の授業綱要）に従い、出題します。各科目の測定範囲は必修科目と選択科目の授業を含むことができます。民国98年【2009年】より各学科の試験範囲は表一の通りです（各科目の試験内容の細目は各科目の試験説明を参照してください）。

表一、指定科目試験の各学科の試験範囲

試験科目	授業コース
国文	高1の必修科目(国文)、高2の必修科目(国文)、高3の必修科目(国文)
英語	高1の必修科目(英語)、高2の必修科目(英語)、高3の必修科目(英語)
数学(甲)	高1必修科目(数学)、高2必修科目(数学)、高3選択科目(数学Ⅰ)、選択科目(数学Ⅱ)
物理	高1基礎物理、高2必修科目(物理)、高3選択科目(物理)
化学	高1基礎化学、高2必修科目(化学)、高3選択科目(化学)
生物	高1基礎生物、高2必修科目(生物)、高3選択科目(生物)

四、種類

指定科目試験の種類が：選択問題(一個選択、複数個選択)、書き込み問題及び非選択問題を取り入れることができます。各類型の問題の比重は各科目の需要により組み合わせます。中に資料性、整合性の問題、或は記述問題、計算、作図等異なる回答方式を設計する事ができます(各試験科目の試験題目例を参照)。各科目試験の仕組みと種類の配置は民国97年【2008年】9月が公表した参考用の試験用紙を参照してください。

五、「一綱多本(注：1つのガイドラインで多くの教科書)」の命題方式

高校の教材が民間に編集作業を開放してから、各バージョンの試験科目教科書が多くなり、即ち「一綱多本」です。「一綱多本」の元で、各科目の命題はコース綱要に並べている主要概念を原則とし、各科目の試験目標に従い試験用紙を設計します。

台湾大学看護博士前期クラスの教育目標

- 専門領域の学術理論の探求と応用を主要とし、臨床専門の看護及びリードする人材を育成します。

2010/12/20

ページ末の文字

1

博士前期の卒業生の核心能力

- 専門領域のステップアップの看護学術理論を応用できます。
- ステップアップの看護臨床実務問題を発見及び改善をします。
- ステップアップの看護臨床実務を執行します。
- 専門領域を発展する初歩の看護研究能力を有します。
- 専門を跨っているコミュニケーションと連携の能力。
- 国際の視点を有し、リードする潜在能力を有します。

2010/12/20

ページ末の文字

2

台湾大学看護博士前期クラスが育成したい人材（1/2）

- 臨床上級看護師（Clinical Nurse Specialist, CNS）

特定専門領域内に問題がひどく/複雑な病人に対し、深い看護ケアを提供でき、実証の資料を運用し、臨床技能とチームコミュニケーションとを連携し、病人/家庭の需要に符合する高品質の看護ケアを提供します。

- 個人/家庭、群体とコミュニティを各事例レベルに対し、学理/実証をベースとしている予想評価、企画、介入、評価を経た品質ある看護を提供。

2010/12/20

ページ末の文字

3

台湾大学看護博士前期クラスが育成したい人材（2/2）

- 専門看護師（Nurse Practitioner, NP）

実証研究及び関連の医療看護理論と技能を応用し、急性期の病人及び該当家族の健康ケアニーズを処理する事ができ、実証研究能力を有し、全体の医療看護品質を持続的に高められます。

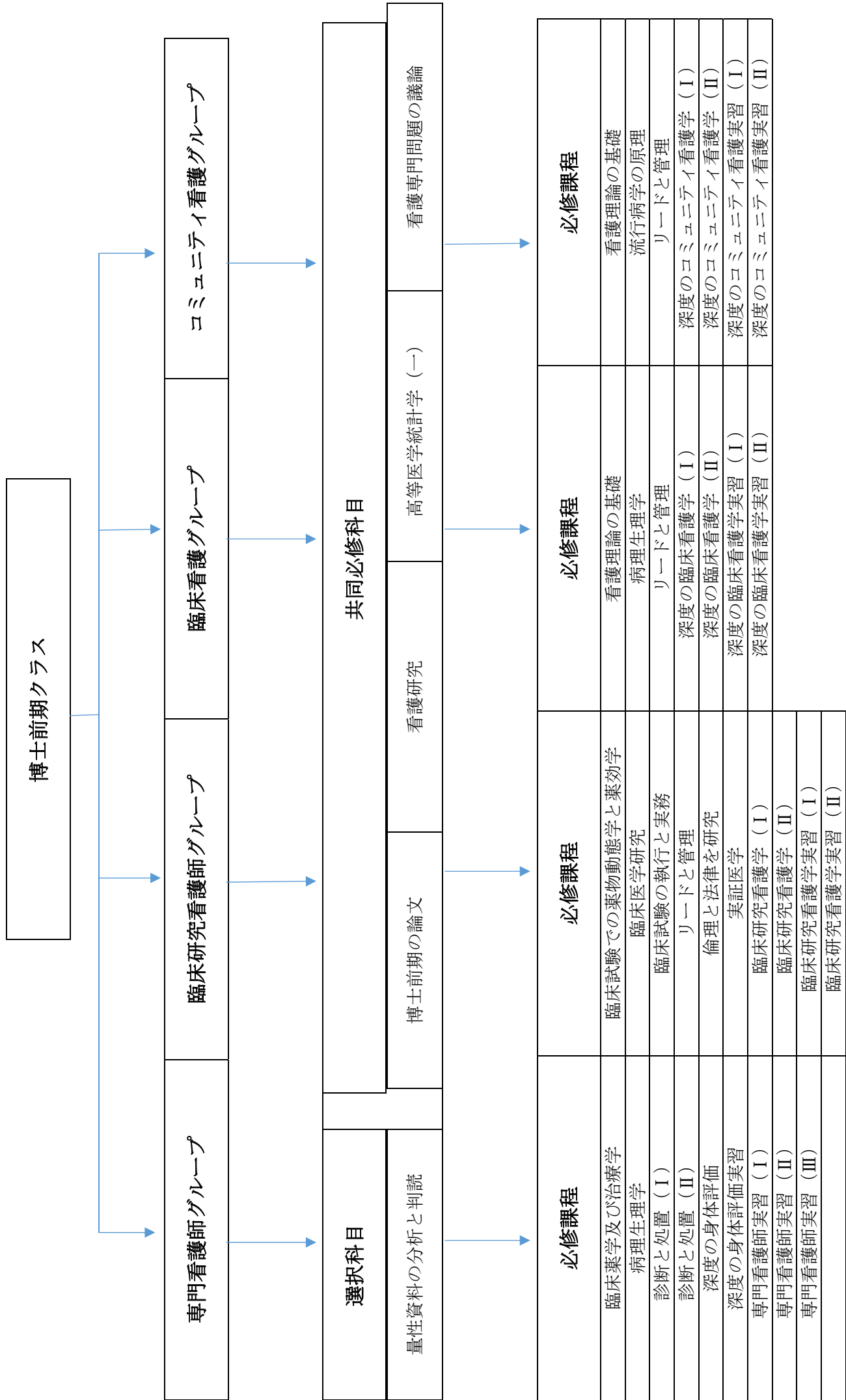
- 臨床研究看護師（Clinical Research Nurse, CRN）

「被験者」を中心に、「家庭」をケアの単位としている看護ケア理念を有し、受験者の安全と保護を徹底して、受験者の最大の福祉を図ります。

2010/12/20

ページ末の文字

4



研究科	看護学博士前期コース		
専攻	甲グループ（専門看護師グループ）		
グループ番号	4130		
身分別	一般学生		
募集員数	2		
申込み資格の規定	<p>1. 学士の学位を取得し、看護師証書を有する者であり、看護師証書を取得してから申込み時までに2年（含む）以上の教学病院の臨床看護仕事を有する者。</p> <p>2. 専門学校卒業である同等の学力に符合する者（二年、五年制専門学校の場合は、卒業してから3年；三年生専門学校の場合は、卒業してから2年）、且つ看護師の証書を有し、申込み時までに5年（含む）以上の看護業務の経験を有し、看護業務の病院は上記になります。</p>		
申込み時に提出する資料	<p>1. 申込用紙1部。</p> <p>2. 推薦状1部。（フォーマットは本研究科のサイトよりダウンロード）</p> <p>3. 勤務年数の証明書原本1部。</p> <p>4. 学位証書のコピー本1部。</p> <p>5. 看護師証書コピー本1部。</p> <p>6. 看護の最高学歴の成績表原本1部。</p> <p>7. 看護経験1部。（看護業務内に一番困難な問題、処理方法と結果を記述してください。）</p> <p>8. 代表する著作或は審査に有利な資料を1部ずつ。</p>		
試験項目	審査	審査方法	提出された資料に対し、審査します。
		合計成績に占める比率	20%
	筆記試験	参加する資格	受験生全員。
		筆記試験の科目	看護学（甲）（内外科の看護学、産科看護学、小児科看護学、精神科看護学を含む） （筆記試験する際に加重採点の1科目を選ぶことができる）
		筆記試験の日付と場所	時間：10月26日（月曜日）午前10時より。 場所：台北市徐州路2-1号台湾大学看護学部館一3F。
		合計成績に占める比率	40%
	面接	参加する資格	審査及び筆記試験の合計成績のランキングは上位4名。
		面接の日付と場所	時間：11月2日（月曜日）午前8時30分より。 場所：台北市徐州路2-1号台湾大学看護学部館一。
		合計成績に占める比率	40%
その他の規定	<p>1. 面接への参加資格リスト及び個人の面接時間表は面接する前に本学部のサイト或はブログより検索してください。個別に連絡通知しません。公表された時間内に面接を受けない場合は、権利を放棄と見なします。 サイト：http://www.mc.ntu.edu.tw/nurse/main.php?Page=A1。</p> <p>2. 本研究科が研究期間にて全職の勤務をしている受験者が入学後の各学期の履修単位の上限を定めています。</p>		
合格発表	第2回目の合格発表に公表		
連絡電話	(02)23123456 内線 88435		

研究科	看護学博士前期コース		
専攻	乙グループ（臨床研究看護師グループ）		
グループ番号	4140		
身分別	一般学生		
募集員数	2		
申込み資格の規定	<p>1. 学士の学位を取得し、看護師証書を有する者であり、看護師証書を取得してから申込み時までが1年（含む）以上（もし本年度の卒業生の場合は、大学卒業後から本研究科への入学までに看護師証書を取得、且つ6か月以上の勤務経験が必要）の教学病院の臨床看護仕事を有する者。</p> <p>2. 専門学校卒業である同等の学力に符合する者（二年、五年制専門学校の場合は、卒業してから3年；三年生専門学校の場合は、卒業してから2年）、且つ看護師の証書を有し、申込み時まで合計4年（含む）以上の看護業務の経験を有し、看護業務の病院は上記になります。</p>		
申込み時に提出する資料	<p>1. 申込用紙1部。</p> <p>2. 推薦状1部。（フォーマットは本研究科のサイトよりダウンロード）</p> <p>3. 勤務年数の証明書原本1部。</p> <p>4. 学位証書のコピー本1部。</p> <p>5. 看護師証書コピー本1部。</p> <p>6. 看護の最高学歴の成績表原本1部。</p> <p>7. 看護経験1部。（看護業務内に一番困難な問題、処理方法と結果を記述してください。）</p> <p>8. 代表する著作或は審査に有利な資料を1部ずつ。</p>		
試験項目	審査	審査方法	提出された資料に対し、審査します。
		合計成績に占める比率	20%
	筆記試験	参加する資格	受験生全員。
		筆記試験の科目	看護学（乙）（臨床研究に関する知識及び看護学を含む）
		筆記試験の日付と場所	時間：10月26日（月曜日）午前10時より。 場所：台北市徐州路2-1号台湾大学看護学部館一3F。
		合計成績に占める比率	40%
	面接	参加する資格	審査及び筆記試験の合計成績のランキングは上位4名。
		面接の日付と場所	時間：11月2日（月曜日）午前8時30分より。 場所：台北市徐州路2-1号台湾大学看護学部館一。
		合計成績に占める比率	40%
その他の規定	<p>1. 面接への参加資格リスト及び個人の面接時間表は面接する前に本学部のサイト或はブログより検索してください。個別に連絡通知はしません。公表された時間内に面接を受けない場合は、権利を放棄と見なします。 サイト：http://www.mc.ntu.edu.tw/nurse/main.php?Page=A1。</p> <p>2. 本研究科は研究期間にて全職の勤務をしている受験者における入学後の各学期の履修単位の上限を定めています。</p>		
合格発表	第2回目の合格発表に公表		
連絡電話	(02)23123456 内線 88435		

研究科	看護学博士前期コース		
専攻	丙グループ（臨床看護グループ）		
グループ番号	4150		
身分別	一般学生		
募集員数	6		
申込み資格の規定	<p>1. 学士の学位を取得し、看護師証書を有する者であり、看護師証書を取得してから申込み時までが1年（含む）以上（もし本年度の卒業生の場合は、大学卒業後から本研究科への入学までに看護師証書を取得、且つ6か月以上の勤務経験が必要）の教学病院の臨床看護仕事を有する者。</p> <p>2. 専門学校卒業である同等の学力に符合する者（二年、五年制専門学校の場合は、卒業してから3年；三年生専門学校の場合は、卒業してから2年）、且つ看護師の証書を有し、申込み時まで合計4年（含む）以上の看護業務の経験を有し、看護業務の病院は上記になります。</p>		
申込み時に提出する資料	<p>1. 申込用紙1部。</p> <p>2. 推薦状1部。（フォーマットは本研究科のサイトよりダウンロード）</p> <p>3. 勤務年数の証明書原本1部。</p> <p>4. 学位証書のコピー本1部。</p> <p>5. 看護師証書コピー本1部。</p> <p>6. 看護の最高学歴の成績表原本1部。</p> <p>7. 看護経験1部。（看護業務内に一番困難な問題、処理方法と結果を記述してください。）</p> <p>8. 代表する著作或は審査に有利な資料を1部ずつ。</p>		
試験項目	審査	審査方法	提出された資料に対し、審査します。
		合計成績に占める比率	20%
	筆記試験	参加する資格	受験生全員。
		筆記試験の科目	看護学（甲）（内外科の看護学、産科看護学、小児科看護学、精神科看護学を含む） （筆記試験する際に加重採点の1科目を選ぶことができる）
		筆記試験の日付と場所	時間：10月26日（月曜日）午前10時より。 場所：台北市徐州路2-1号台湾大学看護学部館一3F。
		合計成績に占める比率	40%
	面接	参加する資格	審査及び筆記試験の合計成績のランキングは上位12名。
		面接の日付と場所	時間：11月2日（月曜日）午前8時30分より。 場所：台北市徐州路2-1号台湾大学看護学部館一。
		合計成績に占める比率	40%
その他の規定	<p>1. 面接への参加資格リスト及び個人の面接時間表は面接する前に本学部のサイト或はブログより検索してください。個別に連絡通知はしません。公表された時間内に面接を受けない場合は、権利を放棄と見なします。 サイト：http://www.mc.ntu.edu.tw/nurse/main.php?Page=A1。</p> <p>2. 本研究科は研究期間にて全職の勤務をしている受験者における入学後の各学期の履修単位の上限を定めています。</p>		
合格発表	第2回目の合格発表に公表		
連絡電話	(02)23123456 内線 88435		

研究科	看護学博士前期コース		
専攻	丁グループ（専門看護師グループ）		
グループ番号	4160		
身分別	一般学生		
募集員数	2		
申込み資格の規定	<p>1. 学士の学位を取得し、看護師証書を有する者であり、看護師証書を取得してから申込み時までが1年（含む）以上（もし本年度の卒業生の場合は、大学卒業後から本研究科への入学までに看護師証書を取得、且つ6か月以上の勤務経験が必要）の教学病院の臨床看護仕事を有する者。</p> <p>2. 専門学校卒業である同等の学力に符合する者（二年、五年制専門学校の場合は、卒業してから3年；三年生専門学校の場合は、卒業してから2年）、且つ看護師の証書を有し、申込み時まで合計4年（含む）以上の看護業務の経験を有し、看護業務の病院は上記になります。</p>		
申込み時に提出する資料	<p>1. 申込用紙1部。</p> <p>2. 推薦状1部。（フォーマットは本研究科のサイトよりダウンロード）</p> <p>3. 勤務年数の証明書原本1部。</p> <p>4. 学位証書のコピー本1部。</p> <p>5. 看護師証書コピー本1部。</p> <p>6. 看護の最高学歴の成績表原本1部。</p> <p>7. 看護経験1部。（看護業務内に一番困難な問題、処理方法と結果を記述してください。）</p> <p>8. 代表する著作或は審査に有利な資料を1部ずつ。</p>		
試験項目	審査	審査方法	提出された資料に対し、審査します。
		合計成績に占める比率	20%
	筆記試験	参加する資格	受験生全員。
		筆記試験の科目	コミュニティ看護学
		筆記試験の日付と場所	時間：10月26日（月曜日）午前10時より。 場所：台北市徐州路2-1号台湾大学看護学部館一3F。
		合計成績に占める比率	40%
	面接	参加する資格	審査及び筆記試験の合計成績のランキングは上位4名。
面接の日付と場所		時間：11月2日（月曜日）午前8時30分より。 場所：台北市徐州路2-1号台湾大学看護学部館一。	
	合計成績に占める比率	40%	
その他の規定	<p>1. 面接への参加資格リスト及び個人の面接時間表は面接する前に本学部のサイト或はブログより検索してください。個別に連絡通知はしません。公表された時間内に面接を受けない場合は、権利を放棄と見なします。 サイト：http://www.mc.ntu.edu.tw/nurse/main.php?Page=A1。</p> <p>2. 本研究科は研究期間にて全職の勤務をしている受験者における入学後の各学期の履修単位の上限を定めています。</p>		
合格発表	第2回目の合格発表に公表		
連絡電話	(02)23123456 内線 88435		

研究科	医学検査及び生物技術研究科		看護学博士前期コース
専攻			甲グループ（専門看護師グループ）
グループ番号	411		412
身分別	在職学生		一般学生
募集員数	正式採用：1 補欠：1		正式採用：3 補欠：2
申込み資格の規定	<p>1. 学士の学位を取得し、或は同等の学力で博士前期コースを申し込む資格を符合してから3年を満了(2010年9月1日まで)、且つ、臨床検査技師のライセンスを取得した者であり、且つ同一の公立、私立の病院にて医事検査の勤務或は院学技術が供奉で教職の業務を連続2年の勤務を満了した者。</p> <p>2. 申込み時は「現職の機関が在職での研究を同意した証明書」を提出する必要があります。(証明書内に「本機構が在職での研究を同意します」という文面が必要です)</p>		<p>1. 学士の学位を取得し、看護師証書を有する者であり、看護師証書を取得してから申込み時までは2年(含む)以上の教学病院の臨床看護仕事を有する者。</p> <p>2. 専門学校卒業である同等の学力に符合する者(二年、五年制専門学校の場合は、卒業してから3年；三年生専門学校の場合は、卒業してから2年)、且つ看護師の証書を有し、申込み時まで5年(含む)以上の看護業務の経験を有し、看護業務の病院は上記になります。</p>
試験項目	筆記試験	科目名称	<p>1. 英語(B)</p> <p>2. 生理学</p> <p>3. 臨床看護学(甲)(内外科看護学、産科看護学、小児科看護学、精神科看護学を含む)(筆記試験する際に、加重採点の1科目を選ぶことができる)</p>
	面接	参加資格	筆記科目の合計成績(英語Aを含めてない)のランキングが上記2名以内の者。
		日付場所	<p>日付：3月23日(火曜日)午前9:00より。</p> <p>場所：台北市常德街1号台湾大病院の旧跡の検査ビル5階506教室</p>
		得点の比率	<p>試験の合計成績(英語Aを含めてない)に占める割合は30%</p> <p>試験の合計成績に占める割合は30%</p>
試験科目の点数の規定	英語Aの成績は試験の合計点数内に計上しないが、英語Aの成績が30点を達していない場合は、合格しません。		生理学の成績が30点を達していない場合は、合格しません。
加重採点の科目及び%			筆記試験の日付と場所
その他の規定	<p>1. 申込資料を入力する際に、身分別及び選考科目を注意してください。</p> <p>2. 本研究科の在職学生は全部の時間で研究する必要があります。もし、全部の時間をかけない場合は、申し込まないでください。</p> <p>3. 面接の時間と場所を個別に通知しません。</p>		<p>1. 申込資料を入力する際に、専攻別を注意してください。</p> <p>2. 「教学病院の勤務証明書」の病院は衛生署2007年～2009年度の病院評価で合格と判定された病院でなければならない。勤務年数は2010年9月1日までの計上で大丈夫です。</p> <p>3. 面接リスト及び各グループの面接時間と場所は本研究科のサイト或はブロ</p>

		<p>グにて検索してください、個別の通知はしません。</p> <p>4. 面接当日は看護の最高学歴の歴年の成績表の原本3部を提出してください。提出しない場合は、成績に影響します。</p> <p>5. 本研究科は研究期間に全職に勤務する受験生において入学後の各学期の履修単位の上限を定めています。</p>
連絡電話	(02) 23562799	(02) 2312-3456 内線 88435

研究科	看護学博士前期コース		看護学博士前期コース	
専攻	乙グループ（臨床研究看護師グループ）		丙グループ（臨床看護グループ）	
グループ番号	413		414	
身分別	一般学生		一般学生	
募集員数	正式採用：2 補欠：2		正式採用：6 補欠：2	
申込み資格の規定	<p>1. 学士の学位を取得し、看護師証書を有する者であり、看護師証書を取得してから申込み時までは1年（含む）以上の教学病院の臨床看護仕事を有する者、臨床試験或は研究に関する勤務、コミュニティ衛生看護の勤務或は看護学校に看護教学の看護教師の勤務経験を有する必要があります。</p> <p>2. 専門学校卒業である同等の学力に符合する者（二年、五年制専門学校の場合は、卒業してから3年；三年生専門学校の場合は、卒業してから2年）、且つ看護師の証書を有し、申込み時までに合計4年（含む）以上の教学病院の臨床看護業務、臨床試験或は研究に関する勤務経験を有します。</p>		<p>1. 学士の学位を取得し、看護師証書を有する者であり、看護師証書を取得してから申込み時までは1年（含む）以上の教学病院の臨床看護仕事を有する者、コミュニティ衛生看護の勤務或は看護学校に看護教学の看護教師の勤務経験を有する必要があります。</p> <p>2. 専門学校卒業である同等の学力に符合する者（二年、五年制専門学校の場合は、卒業してから3年；三年生専門学校の場合は、卒業してから2年）、且つ看護師の証書を有し、申込み時までに合計4年（含む）以上の看護業務の経験を有し、看護業務の病院は上記になりません。</p>	
試験項目	筆記試験	科目名称	<p>1. 英語 B</p> <p>2. 生理学</p> <p>3. 臨床看護学乙（臨床研究に関する知識及び看護学を含む）</p>	<p>1. 英語 B</p> <p>2. 生理学</p> <p>3. 臨床看護学甲（内外科看護学、産科看護学、小児看護学、精神科看護学を含む）（筆記試験する際に加重採点の1目を選ぶことができる）</p>
	面接	参加資格	審査及び筆記試験の合計成績のランキングは上位4名。（試験科目の点数の規定に従い処理します）	審査及び筆記試験の合計成績のランキングは上位12名。（試験科目の点数の規定に従い処理します）
		日付場所	時間：3月2日（月曜日）午前8:30時より。 場所：台北市徐州路2-1号看護学部館一。	時間：3月2日（月曜日）午前8:30時より。 場所：台北市徐州路2-1号看護学部館一。
		得点比率	試験合計成績の30%を占めています。	試験合計成績の30%を占めています。
試験科目の点数の規定	<p>1. 臨床看護学乙の成績を加重しても60点に達していない場合は、合格しません。</p> <p>2. 生理学の成績が30点に達していない場合は、合格しません。</p> <p>3. 筆記試験科目「臨床看護学乙」の原始成績及び面接の原始成績の合計点数が130点を達していない場合は、合格しません。</p>		<p>1. 臨床看護学乙の成績を加重しても60点に達していない場合は、合格しません。</p> <p>2. 生理学の成績が30点に達していない場合は、合格しません。</p> <p>3. 筆記試験科目「臨床看護学乙」の原始成績及び面接の原始成績の合計点数が130点を達していない場合は、合格しません。</p>	
加重採点の科目及び%	臨床看護学乙の成績が20%を加重採点します。		臨床看護学甲の成績が20%を加重採点します。	
その他の規定	<p>1. 申込資料を入力する際に、専攻別を注意してください。</p> <p>2. 「教学病院の勤務証明書」の病院は衛生署2007年～2009年度の病院評価で合格と判定された病院でなければなりません。勤務年数は2010年9月1日までの計上が大丈夫です。</p>		<p>1. 申込資料を入力する際に、専攻別を注意してください。</p> <p>2. 「教学病院の勤務証明書」の病院は衛生署2007年～2009年度の病院評価で合格と判定された病院でなければなりません。勤務年数は2010年9月1日まで</p>	

	<p>3. 面接リスト及び各グループの面接時間と場所は本研究科のサイト或はブログにて検索してください、個別の通知はしません。</p> <p>4. 面接当日は看護の最高学歴の歴年の成績表の原本3部を提出してください。提出しない場合は、成績に影響します。</p> <p>5. 本研究科は研究期間に全職に勤務する受験生において入学後の各学期の履修単位の上限を定めています。</p>	<p>の計上で大丈夫です。</p> <p>3. 面接リスト及び各グループの面接時間と場所は本研究科のサイト或はブログにて検索してください、個別の通知はしません。</p> <p>4. 面接当日は看護の最高学歴の歴年の成績表の原本3部を提出してください。提出しない場合は、成績に影響します。</p> <p>5. 本研究科は研究期間に全職に勤務する受験生において入学後の各学期の履修単位の上限を定めています。</p>
連絡電話	(02)23123456 内線 88435	(02)23123456 内線 88435

研究科	看護学博士前期コース		物理治療学博士前期コース
専攻	丁グループ（専門看護師グループ）		
グループ番号	415		416
身分別	一般学生		一般学生
募集員数	正式採用：4 補欠：2		正式採用：7 補欠：4
申込み資格の規定	<p>1. 学士の学位を取得し、看護師証書を有する者であり、看護師証書を取得してから申込み時までが1年（含む）以上の教学病院の臨床看護仕事を有する者、コミュニティ衛生看護の勤務或は看護学校に看護教学の看護教師の勤務経験を有する必要があります。</p> <p>2. 専門学校卒業である同等の学力に符合する者（二年、五年制専門学校の場合は、卒業してから3年；三年生専門学校の場合は、卒業してから2年）、且つ看護師の証書を有し、申込み時までに合計4年（含む）以上の看護業務の経験を有し、看護業務の病院は上記になります。</p>		
試験項目	筆記試験	科目名称	<p>1. 英語 A</p> <p>2. 英語科学論文の閲読試験</p> <p>3. 骨科物理治療学、神経物理治療学、省に物理治療学、呼吸循環物理治療学、心理学、筋力の動き及び生物力学、応用生理学（7科目より1科目を選び）</p>
	面接	参加資格	筆記試験の合計成績のランキングは上位8名以内。（試験科目の点数の規定に従い処理します）
		日付場所	<p>時間：3月22日（月曜日）午前8時30分より。</p> <p>場所：台北市徐州路2-1号看護学部館一。</p>
		得点の比率	合計成績の30%を占めています。
試験科目の点数の規定	<p>1. コミュニティ看護学の成績を加重しても60点に達してない場合は、合格しません。</p> <p>2. 生理学の成績が30点に達してない場合は、合格しません。</p> <p>3. 筆記試験科目「コミュニティ看護学」の原始成績及び面接の原始成績の合計点数を130点を達してない場合は、合格しません。</p>		<p>1. 英文科学論文閲読試験及び選択科目（7科目より1を選び）の任意の一科目の成績が50点に達してない場合は、合格しません。</p> <p>2. 英語Aの成績は試験合計成績に計上しないが、英語Aの成績が本校の受験生の上位75%の成績に達しない場合は、合格しません。</p> <p>3. 面接の原始成績が60点に達しない場合は、合格しません。</p>
加重採点の科目及び%	コミュニティ看護学の成績が20%を加重採点します。		
その他の規定	<p>1. 申込資料を入力する際に、専攻別を注意してください。</p> <p>2. 「教学病院の勤務証明書」の病院は衛生署2007年～2009年度の病院評価で合格と判定された病院でなければならないです。勤務年数は2010年9月1日</p>		<p>1. 本学部は下記の四専攻があり：骨科、心肺、小児或は神経。受験生が申込み学部グループを記入した後、「専攻領域をメモ」欄に記入してください。</p> <p>2. 申込資料を入力する際に、選考科</p>

	<p>までの計上が大丈夫です。</p> <p>3. 面接リスト及び各グループの面接時間と場所は本研究科のサイト或はブログにて検索してください、個別の通知をしません。</p> <p>4. 面接当日は看護の最高学歴の歴年の成績表の原本3部を提出してください。提出しない場合は、成績に影響します。</p> <p>5. 本研究科は研究期間に全職に勤務する受験生において入学後の各学期の履修単位の上限を定めています。</p>	<p>目、及び本学部の選考科目の最新掲示情報を注意してください。</p> <p>3. 面接3日前に本学部のサイトにリンクし、面接順番を検索してください。面接の資格を符合する者はオンラインにて個人の資料表及び自伝(1000文字内に限る)を記入してください。</p> <p>4. 本学部のサイト： http://www.pt.ntu.edu.tw/。</p>
連絡電話	(02) 23123456 内線 88435	(02) 33668123

国立台湾大学医学院看護学部 2010 学年度博士前期コースの入学試験
面接評価表

グループ別： _____ 受験生氏名： _____ 受験番号： _____

項目	%	採点
本領域と関連する基礎学識 (教育の学識、臨床の学識、専門法律法規)	30	
基本研究能力 (研究の方向、理解、分析、総合、応用)	20	
性向動機 (潜在能力、動機、創造力、コミュニケーション能力)	50	
合計	100	

面接官の署名：

面接日付： 年 月 日

国立台湾大学医学院看護学部 2010 学年度博士前期コースの入学試験

資料審査評価表

グループ別： _____ 受験生氏名： _____ 受験番号： _____

審査項目	%	審査意見	採点
学歴、経歴、在学の成績	30		
看護の経験（看護勤務中に遭遇した一番困難な問題、処理方法と結果）	40		
代表する著作 或は 審査に有利な資料	30		
合計	100		

面接官の署名：

面接日付： 年 月 日

国立台湾大学医学院看護学部 2010 学年度博士前期コースの入学試験
面接評価表

グループ別： _____ 受験生氏名： _____ 受験番号： _____

項目	%	採点
本領域と関連する基礎学識 (教育の学識、臨床の学識、専門法律法規)	30	
基本研究能力 (研究の方向、理解、分析、総合、応用)	20	
性向動機 (潜在能力、動機、創造力、コミュニケーション能力)	50	
合計	100	

面接官の署名：

面接日付： 年 月 日

2010 学年度博士前期コースの選考募集する学部グループの採用状況一覧表 2009. 11. 20 P I

応募番号	学部	グループ別	応募者数	募集員数	審査の優先採用	優先採用の最低点数	面接での採用	合計採用人数	最低採用の点数	採用の説明	採用率	補欠人数
412	看護学部	甲グループ(専門看護師グループ)	15	2				2	74.83		13.33%	
413	看護学部	乙グループ(臨床研究看護師グループ)	19	2				2	84.43		10.53%	
414	看護学部	丙グループ(臨床看護グループ)	27	6				6	71.93		22.22%	
415	看護学部	丁グループ(コミュニケーション看護グループ)	6	2				2	79.70		33.33%	

2010 学年度

P.1 2010.04.09

応募番号	学部	グループ別	応募者数		募集員数		採用人数		採用状況		採用の最低点数		採用率		補欠人数		本校の最低ランク
			一般	在職	一般	在職	一般	在職	一般	在職	一般	在職	一般	在職	一般	在職	
4140	看護学部	乙グループ (臨床 研究看護 師グループ)	32		3		3				202.05		9.38%		2		120
4150	看護学部	丙グループ (臨床 看護グループ)	17		2		2				209.16		11.76%		1		120
4160	看護学部	丁グループ (コミュニ ティ看護 グループ)	86		6		6				205.68		6.98%		2		120
応募番号	学部	グループ別	12		4		4				207.48		33.33%		2		120

表 3-4・2009 学年度前学期の看護学の大学院の新入生の人数統計表

学制別	入学方法	人数						採用率 (%)注 4	入学率 (%)注 5	実際の 新入生 の人数 の合計
		募集員 数	申請人 数	面接人 数	採用人 数	登録人 数	入学人 数			
博士 前期 コース	選考入 学	16	62	32	15	15	12	93.75%	80%	23
	試験入 学	11	128	22	11	11	11	100%	100%	
博士 後期 コース	試験入 学	7	32	21	7	7	7	100%	100%	7

国立台湾大学看護学大学院博士前期コースの必修科目表
(2010 学年度の入学生に適用)

APN (深度の看護) Program	NP (専門看護師) 5名	CRN (臨床研究看護師) 5名	CNS (深度臨床看護師)
Graduate core 8 単位	看護研究 (3)、医学統計学 (二) (3) 看護専門問題セミナー Seminar in nursing professionalism(2)		
Clinical core	Pharmacotherapy 薬物治療学 (3) Pathophysiology 病理生理学 (2) Diagnosis & Management 診断と処置 (I) (II) (2, 2) Advanced physical assessment 深度身体評価 (2) Advanced physical assessment practicum 深度身体評価実習 (2) NP Clinical practicum 専門看護師実習 (I) (II) (III) (3, 4, 3) Thesis 博士前期コースの論文 (6) <u>必修単位 37</u>	Pharmacokinetics/pharmacodynamic 臨床試験中の薬動と薬効学 (1) Clinical medical research 臨床医学研究 (1) Practice of clinical trial research 臨床試験の執行と実務 (2) Leadership & Management リードと管理 (2) Research ethics and law 倫理と法律の研究 (2) (他のグループは選択単位で履修可) Evidence-based medicine 実証医学 (2) Advanced nursing in clinical research 臨床研究看護学 (I) (II) (2, 2) Practicum in clinical research 臨床研究看護実習 (I) (II) (3, 3) Thesis 博士前期コースの論文 (6) <u>必修単位 34</u>	臨床看護グループ:12名 看護理論基礎 (2) Pathophysiology 病理生理学 (2) Advanced clinical nursing 深度臨床看護学 (I) (II) (2, 2) Leadership & management リードと管理 (2) Advanced clinical nursing practicum 深度臨床看護実習 (I) (II) (3, Thesis 博士前期コースの論文 (6) <u>必修単位 30</u> <u>コミュニティ看護グループ: 4名</u> 看護理論基礎 (2) Advanced community health nursing 深度コミュニティ看護学 (I) (II) (2, 2) Epidemiology 流行病学原理 (2) Leadership & Management リードと管理 (2) Advanced community health nursing practicum 深度コミュニティ看護実習 (I) (II) (3, Thesis 博士前期コースの論文 (6) <u>必修単位 30</u>

付 記

研究打合せ記録

1. 平成 22 年度

第 1 回 東北大学関係者等研究打合せ

日時：平成 22 年 4 月 5 日 16:00～18:00，場所：東北大学医学部保健学科中会議室

出席者：倉元，吉沢，小山田，小松

第 1 回 全体研究打合せ

日時：平成 22 年 5 月 22 日 14:00～，場所：東北大学医学部保健学科大会議室

出席者：倉元，柳井，吉沢，小山田，西川，木村，西郡，鈴木，金澤，小松，奥

第 2 回 東北大学関係者等研究打合せ

日時：平成 22 年 7 月 20 日 14:00～17:00，場所：東北大学医学部保健学科中会議室

出席者：倉元，吉沢，小山田，小松

第 3 回 東北大学関係者等研究打合せ

日時：平成 22 年 8 月 20 日 13:30～12:00，場所：東北大学医学部保健学科中会議室

出席者：倉元，吉沢，小山田，金澤，小松

第 4 回 東北大学関係者等研究打合せ

日時：平成 22 年 10 月 12 日 17:30～18:50，場所：東北大学医学部保健学科中会議室

出席者：倉元，吉沢，小松

第 5 回 東北大学関係者等研究打合せ

日時：平成 23 年 1 月 18 日 10:30～12:10，場所：東北大学医学部保健学科中会議室

出席者：倉元，吉沢，小山田

2. 平成 23 年度

第 6 回 東北大学関係者等研究打合せ

日時：平成 22 年 4 月 23 日 13:00～16:10，場所：東北大学医学部保健学科中会議室

出席者：倉元，吉沢，小山田

第 2 回 全体研究打合せ

日時：平成 23 年 5 月 21 日 15:30～18:00，場所：聖路加看護大学 1 号館大会議室

出席者：倉元，柳井，吉沢，小山田，西川，鈴木，金澤

第 3 回 全体研究打合せ

日時：平成 23 年 8 月 23 日 12:00～15:00，場所：聖路加看護大学 6 号館 603 会議室

出席者：倉元，柳井，小山田，西川，鈴木，金澤，小松，奥

第 4 回 全体研究打合せ

日時：平成 23 年 11 月 5 日 12:00～15:00，場所：東北大学医学部保健学科中会議室

出席者：倉元，柳井，吉沢，小山田，西川，小松，奥

第7回 東北大学関係者等研究打合せ

日時：平成24年2月7日 15:30～17:00，場所：東北大学医学部保健学科中会議室

出席者：倉元，吉沢，小山田

3. 平成24年度

第8回 東北大学関係者等研究打合せ

日時：平成24年4月18日 19:30～，場所：東北大学医学部保健学科小会議室

出席者：倉元，吉沢，小山田，小松

第9回 東北大学関係者等研究打合せ

日時：平成25年1月8日 18:30～，場所：東北大学医学部保健学科中会議室

出席者：倉元，吉沢，小山田，小松

第10回 東北大学関係者等研究打合せ

日時：平成25年3月18日 18:00～，場所：東北大学医学部保健学科中会議室

出席者：倉元，吉沢，小山田，小松

4. 平成25年度

第11回 東北大学関係者等研究打合せ

日時：平成25年5月13日 18:00～，場所：東北大学医学部保健学科中会議室

出席者：倉元，吉沢，小山田

第12回 東北大学関係者等研究打合せ

日時：平成25年7月25日 18:00～，場所：東北大学医学部保健学科中会議室

出席者：倉元，吉沢，小山田

第13回 東北大学関係者等研究打合せ

日時：平成25年10月22日 18:00～20:30，場所：東北大学医学部保健学科中会議室

出席者：倉元，吉沢，小山田，小松

5. 平成26年度

第5回 全体研究打合せ

日時：平成26年10月5日 11:00～14:00，場所：東北大学医学部保健学科中会議室

出席者：倉元，吉沢，小山田，西川，西郡，木村，小松

海外調査記録（公式訪問）

1. 台湾

訪問先：国立台湾大学医学部看護学科（國立臺灣大學醫學院護理學系所: Department of Nursing, College of Medicine, National Taiwan University, 臺北市仁愛路一段一號護理學系所）

日時：平成 22 (2010) 年 12 月 21 日

訪問者：倉元直樹（東北大学）

対応者：張媚副教授，高碧霞助理教授

2. ドイツ

訪問先：ミュンヘン大学併設バイエルン州立助産師専門学校，イエーナ大学，イエーナ大学附属図書館，ドイツ看護協会

調査期間：平成 24 (2012) 年 3 月 10 日～3 月 17 日

訪問者：小山田信子（東北大学），

小松恵（独立行政法人国立病院機構仙台医療センター）

研究成果発表記録

1. 研究論文 (学会誌)

金澤悠介・倉元直樹・小山田信子・吉沢豊予子 (2011). 看護系大学の入試構造に見る高大接続問題, 大学入試研究ジャーナル, No.21, 49-57, 2011年3月.

倉元直樹・小山田信子・吉沢豊予子 (2012). 看護系大学生の進路選択と履修経験に関する予備調査, 東北大学高等教育開発推進センター紀要, 第7号, 69-76, 2012年3月.

2. 研究発表

金澤悠介・倉元直樹・小山田信子・吉沢豊予子 (2010). 看護系大学の入試構造に見る高大接続問題 —アドミッションポリシーと進路選択における意思決定—, 企画セッション 大学入試センター・個別大学アドミッションセンター連携プロジェクト —大学入試学の展開—, 全国大学入学者選抜研究連絡協議会第5回大会研究発表予稿集 (取扱注意), 45-50, 独立行政法人大学入試センター・北九州市立大学 (北九州国際会議場), 2010年6月8-9日開催.

小山田信子・吉沢豊予子・金澤悠介・倉元直樹 (2010). 高校生の進路から見た看護系大学の類型, 日本看護学教育学会第20回学術集会講演集, 219, 大阪国際会議場 (グランキューブ大阪), 2010年7月31日-8月1日開催.

倉元直樹・金澤悠介・小松恵・小山田信子・吉沢豊予子 (2010). 看護系志望の高校生に求められる学力・適性に関する研究 (2), 日本教育心理学会第52回総会発表論文集, 727, 早稲田大学, 2010年8月27-29日開催.

倉元直樹・小松恵・小山田信子・吉沢豊予子 (2011). 看護系志望の高校生に求められる学力・適性に関する研究 (3), 日本教育心理学会第53回総会発表論文集, 548, 北翔大学 (かでの2・7), 2011年7月24-26日開催.

倉元直樹・小山田信子・小松恵・吉沢豊予子 (2011). 危機に立つ看護教育? —看護系志望者は何を学んでくるのか—, 日本看護学教育学会第21回学術集会講演集, 124, 大宮ソニックシティ, 2011年8月30-31日開催.

倉元直樹・鈴木幸子・小山田信子・小松恵・吉沢豊予子 (2012). 看護系学生の知的基盤—大規模学生調査から見えてくるもの—, 日本看護学教育学会誌日本看護学教育学会第22回学術集会講演集, 243, 熊本県立劇場, 2012年8月4-5日開催.

3. シンポジウム, 企画セッション等

代表: 吉沢豊予子, 話題提供者: 吉沢豊予子, 倉元直樹, 金澤悠介, 小山田信子, 西川浩昭, 柳井晴夫 (2011). 看護学教育における質保証の基盤 —看護専門職業人養成を支える「高大接続」の在り方を考える—, 日本看護学教育学会第21回学術集会講演集, 106, 大宮ソニックシティ, 2011年8月30-31日開催.

代表：吉沢豊予子，話題提供者：西郡大，小山田信子，西川浩昭，山本直樹，倉元直樹（2012）.
高校における看護系志望受験生の育成とリクルート，日本看護学教育学会誌日本看護学教育学会第22回学術集会講演集，153，熊本県立劇場，2012年8月4-5日開催.

企画者：西川浩昭，講演者：西川浩昭，倉元直樹，奥裕美，小山田信子（2014）. 特別セッション企画「看護職志望者の適性と大学入試」，日本行動計量学会第42回大会発表論文集，92-95，東北大学，2014年9月3-5日開催.

4. 中間報告書

倉元直樹編（2013）. 医療の高度化に伴う看護系大学の高大接続問題——看護職志望者の適性と大学入試——，平成22～26年度 日本学術振興会科学研究費補助金 基盤研究（B），研究課題番号 22390405，研究代表者 倉元直樹，中間報告書，2013年3月.

5. 資料

交流セッション1: 看護学教育における質保証の基盤

-看護専門職業人養成を支える「高大接続」の在り方を考える-

日時: 2011年8月30日(火) 13:00-14:30

会場: ソニックスティブル 6階会議室601

学力・適性?
教育制度?

「看護教育の工夫」だけでは?
「学生の質」は改善でいいのか?



柳井晴夫先生

聖路加看護大学(特任)教授(大学院担当)
大学入試センター名誉教授

統計学の泰斗,
適性研究・大学入試研究の
エキスパート, 柳井教授と
入試について語りましょう!

交流セッション1:「看護学教育における質保証の基盤」プログラム

司会: **吉沢豊予子(東北大学)**

話題提供:

1. 教育政策と高校生の学習実態 **倉元直樹(東北大学)**
2. 看護系大学における入試の実態 —入試科目の観点から—
金澤悠介(立教大学)
3. 看護専門学校・看護短大における入試 **西川浩昭(静岡県立大学)**
4. 歴史的視点から見る看護学校の入試 **小山田信子(東北大学)**
5. 看護系大学生に必要な能力・適性 **柳井晴夫(聖路加看護大学)**



学生対象の質問紙調査にご協力ください!

連絡先: 倉元直樹 (mtkuramt@m.tohoku.ac.jp)

日本学術振興会科学研究費基盤研究(B)

「医療の高度化に伴う看護系大学の高大接続問題—看護職志望者の適性と大学入試—」
(研究代表者 倉元直樹)

関連発表:「危機に立つ看護教育?—看護系志望者は何を学んでくるのか—」
8/31(水) 11:30-12:30 セッション10「カリキュラム」 6階会議室604

編集担当：東北大学高度教養教育・学生支援機構 准教授 倉元直樹

平成 22～26 年度 日本学術振興会科学研究費補助金 基盤研究（B）
（課題番号 22390405）

医療の高度化に伴う看護系大学の高大接続問題
—看護職志望者の適性と大学入試—

研究成果報告書

発行：2015 年 3 月

研究代表者：倉元直樹

〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内 28 東北大学入試センター

Tel: 022-795-4814

Email: ntkuramt@m.tohoku.ac.jp

印刷所： 笹氣出版印刷株式会社